

あの日、届けられなかった想いを、あなたに

## あの日、届けられなかった想いを、あなたに

その日、赤薔薇の花束が届いた。

それを見た瞬間、あの赤いマタドール衣装に仮面を着けた男の派手派手しい姿が浮かんだ。もう条件反射だ。

なんだかよく分からない理由で花を送りつけてくる男だ。もういい加減こっちの神経も麻痺してしまっている。ついでに母さんまで慣れっこになっているみたいで、スケート仲間には花屋がいるからの一言で納得してしまった。むしろ期待しているようにも見える。

花束にはカードが添えられていた。

〈The love I have for you runs deeper than the sea and wider than the miles when we are apart.

Happy birthday, my little Langa!!〉

そっか、俺、誕生日だったんだ。カードがなければ気が付かなかった。

帰宅した母さんから「お誕生日おめでとう」と財布をプレゼントされ、いつもより少し贅沢な夕食とケーキでささやかなお祝いをした。

カナダでは、初等教育に入ったあたりで友達を招待しての誕生日パーティを開催することが多い。誕生日が真冬だったりすると、インドアジムを借りたりする。

一度だけ、そんなパーティを両親が開いてくれたことがあった。でも、俺は馴染めなかった。父さんと母さんと俺だけの方がリラックスできた。

それから毎年誕生日が来るたびに、父さんと母さんがお祝いをしてくれた。毎年、毎年、それはもう永遠に繰り返されると疑いもしなかった。

子供だったんだ。永遠なんてどこにもないのに。

父さんが死んで、祝ってくれる人は母さんひとりになって、初めてそのことを思い知る。

それにしても、愛抱夢はなぜ俺の誕生日を知っているんだろう？ 俺は誰にも、曆にすら自分の誕生日を教えた記憶はない。

「俺、誕生日なんだ。お前らプレゼントよこせよな」などとおちゃらけて宣伝するやつ以外、男子高校生は友人に誕生日アピールしたりしないし、他人の誕生日にいちいち興味も持たない。

いや、もしかすると気にしていないの俺だけなのか？

そういえば、暦の誕生日って何月何日なんだろう？ 俺、親友の誕生日すら知らない。聞いたことあるかもしれないけれど覚えていない。今度ちゃんと教えてもらってスケジューラーに入れておいたほうがいいのかもしれない。

カナダに居た頃は友達と呼べる友達はいなかった。

でも、こっちに来て暦と友達になった。多分初めての友人だ。そして、それをきっかけに、歳が離れているから友達と言っていないのかどうか分からないけれど、ミヤ、シャドウ、チェリー、ジョーたちと親しくなつて、暦以外の世界もぐっと広がった。

おかげで初めて気付かされたことがたくさんある。

俺、どこか普通感覚とずれていたんだ。今更変えられないけど。一応、愛抱夢にお礼のメッセージを入れた。

ついでに「愛抱夢の誕生日っていつ？」と質問してみた。

即、折り返しでスマホの呼出音が鳴った。

「やあ、ランガ君。僕の誕生日は、五月月一日だけど、どうして知リたかつたの？」

「いつも俺ばかり貰っているし、何か返せたらと思って。母さんからもそう言われた。高いものは無理だけど」

「なんだ、そんなことか。もう君からは、一生分のプレゼントを僕は貰っているんだよ。

一生かけても返せないほどの。返すことは無理だけど、君への贈り物は感謝の気持ち、君への愛という僕の自己満足なんだ。気にしないでほしい」

「俺、何もあげていない。言っていること、よく分からない。何か別の意味あるの？ 日

本語難しい」

「ははは、言葉通りで他意はないよ。迷惑だったら他を考えるからそう言ってくれていい。迷惑かい？」

「迷惑じゃない」

「安心したよ。でも、どうしても何か返したいというのなら、今度一度会って欲しい」

「？ Sで会っているよ？」

「Sじゃないところでだ。ふたりだけでね」

「どうして？」

「世界を広げるためだよ。君にとつてもスケート以外のことを知ることは必要だよ。僕もスケート以外の君をもっと知りたい」

「そうなんだ。Sでないのなら、どこで会うの？」

「それはこれから考えるよ。どうかな？」

「いいよ」

「それと、僕の誕生日前に予行演習つてことで、一度会ってくれないかな」

「予行演習？」

「口実だよ。あと三ヶ月近くは待ちきれない。僕の誕生日前に一度会いたいってことだよ」

「誕生日は？」

「もちろん、そっちが本番だよ」

「わかった」

「嬉しいよ。また連絡する。I love you」

通話が切れてから、妙な既視感に囚われる。

そうだ、あの日のことだ。

これから外出しようとする父さんから少しばかり説教された。大したことではない。特に反発していたわけではなかったが、受けた言葉の意味を少し考え込んでしまい、ずつと無言になっていた。

「大丈夫だよ。お前はいつでも父さんの誇りだ。I love you」

そう締めくくり、微笑みながら俺をきつくハグしてから父さんは家を出た。

俺は黙り込んだまま一言も返せず大きな背中を見送った。単純に言葉を発するタイミングを失ってしまったのだ。

それが、父さんとの最後のやりとりになってしまった。

「I love you too」

いつもなら、そう言葉にしていたのに。

その想いは、もう届けることはできない。

あの日、届けられなかった想いを、あなたに

そんな心残りや喪失感とともにあの抱きしめられたときの優しいぬくもりが蘇る。ちりちりとした胸の痛みを伴って。

ああ、俺はいつも失ってから気が付くんだ。

スマホをもう一度取り出した。

もう、後悔したくない。

あの日、父さんに伝えられなかった言葉を。想いを。

あなたに。

《了》

## 慰撫

パシッ。

定規が振り下ろされる。

パシッ。

音の数だけ、手首から前腕の内側に、何本もの赤い筋が刻まれていった。

「私たちは愛之介さんが憎くてこんなことをしているわけじゃないのよ」

「あなたを愛しているからこうするの」

これは、呪いの言葉だ。

この痛みは、この傷は、愛の証なのだと。

幼い愛之介はそう自分自身に言い聞かせた。

「ありがとうございます。愛してくださいありがとうございます」

愛之介は感謝の言葉を口にした。

父や伯母たちの前では決して涙は流さなかった。涙を見せれば罰を受ける。愛が分から

ない子だと。

だから泣くときはひとりだった。

涙を見せたことがあるのはただひとり。忠だけ。

「うっ！」

手首の激痛に目を見開いた。嫌な夢。酷い寝汗だ。

愛之介は、荒い息を整えながら、手首に恐る恐る触れてみる。疼く感じは残っているが痛みはないようだ。

あのトーナメントが終わってから、同じような悪夢で飛び起きることが何度かあった。すっかり忘れていた痛みの記憶。疼くことはあっても痛むことなどなかったのに。なぜ今頃になって。

忌々しい。睡眠が浅くなって職務に支障が出たらどうしてくれる。

「大丈夫？」

掛けられた声に恐る恐る首を回した。ベッドのかたわらに立つ人影。何度か瞬きをして

夢や幻覚ではないことを確認する。

「ランガくん？」

幽霊でもなさそうだ。だが、なぜ彼がここにいる？

体を起こしながら、寝起きの混乱した頭で思考をめぐらす。

思い出した。

彼に書類の英訳の手伝いという臨時アルバイトを、また急遽頼んでいたのだ。時間もなかつたこともあり、三日ほど、どうせなら泊まり込みで集中して片付けて欲しいと。伯母たちには、アメリカ留学していたときの知り合いだと紹介している。旅行したカナダで世話になった一家の息子が、今沖縄に住んでいるのだという説明に、彼女らは疑問を持つていない。

日本語より英語の方が意思疎通がスムーズだと理由をつけ、自分や忠以外の誰かがいるときの会話は英語で行うことにしている。それならうつかり「愛抱夢」呼びされても、ボロは出ない。

それより、ランガが愛之介の寝室に今こうしている現実だ。

彼にはゲストルームをあてがっている。もちろん、わざわざこの部屋まで訪ねてきてくれることは嬉しいし大歓迎だ。

いやいや、そういうことではない。

「どうして君が僕の部屋にいる？」

「目が覚めた。胸が変にドキドキして」ランガは胸に手を当てた。「なんか、嫌な感じで部屋を出たら声が聞こえて。ドアの前でどうしようか悩んでいたらスネークが」

「忠が？」

「うん、これを渡されて様子を見てきてつて頼まれた」

はい、とランガはペットボトルの水を差し出した。

何を考えているんだ、忠。

愛之介は受け取ったボトルのキャップをひねり、ごくごくと水を喉に流し込んだ。

サイドテーブルにボトルを置き「とりあえず、座つて」とランガをベッドに座らせた。

声が聞こえたということは、うなされていたことがバレているということか。もしこれがランガでなく忠だったら、その記憶がなくなるまでぶん殴っていたかもしれない。

ランガを自分の代わりに差し出した忠の判断は、己の身を守るという意味でも極めて正しい。

さて、どうしたものか。どうはぐらかすか。

しばし沈黙する愛之介に、ランガが口を開いた。

「その腕、どうかしたの？」

はつとして、左手首の内側をさすっていた指を離した。無意識だった。

「昔、怪我をしてね。治ったくせに触るのが癖になった。だからなんでもない」

「嘘。さつきうなされていたとき、そこ握りしめていた。覚えていないの？」

そんな醜態を晒していたのか。ランガは鈍感なようでいて、ごくたまに妙なところで鋭い。しかも、見て見ぬふりをするなどという氣遣いができるほど器用でもない。

「やれやれ、君には誤魔化せなさそうだ。でも今は話せないかな」

「俺が子供だから？」

「いや、そういうことじゃない。ただ僕の中でもまだ整理がついていないだけだよ。そのうち話せるようになったらね」

「わかった。別に説明して欲しかったわけじゃない」

ランガは、素直に引き下がった。

「いい子だ」

「ただ、愛抱夢が……」

そこまで言ってランガは言葉に詰まった。

「ん？」

「泣いていた」

「僕がかい？」

何を言っているのだろう。起きたとき目元が涙で濡れているような痕跡はなかった。流石にそんなみつももない真似していたらすぐに気が付く。それでもって、さっさと取り繕っている。そのくらいの芸当は朝飯前だ。

「だから、俺、目が覚めたんだ」

その順番だと、前後関係が滅茶苦茶だ。混乱しているのか。

「それは夢だよ。僕は大人だからね。もうずっと泣いていない。泣き方なんて忘れてしまったくらいだ」

そうだ。あれ以来泣いてなんていない。あの日、ボードを燃やされたあの瞬間から、世

界は現実味の乏しいものになった。

スケートの中でたどり着ける、あの素晴らしい世界だけがリアルだった。  
このくだらない世界で泣く理由なんてあるものか。

不意にカーテンの隙間から光が差し込んだ。月の位置が動いたのだろう。その光を受けたランガの頬がきらりと光る。

指を伸ばして彼の頬に触れれば濡れている。

「泣いているのは君の方じゃないか」

ランガは困惑した様子で、頬を指で拭い、手の甲で目をゴシゴシと擦った。

「あれ？ おかしいな。どうしたんだろう。俺」

目から溢れた涙が、ポロポロとこぼれ落ちていく様子を、愛之介は呆然と見つめる。  
ランガの頭を抱き寄せ、自分の胸に押しつけた。

「本当だよ。俺、聞こえたんだ。愛抱夢の声」

くぐもった声。胸にかかる吐息がこそばゆい。

「そうか」とだけ言ってティッシュを渡し、絹糸のような髪を撫で唇を寄せた。

追求してこの少年を困らせるのは無粋というものだ。このまま彼が落ち着いてくれるのを待とう。

髪は雪のよう。誰が言ったのか。自然と周りから呼ばれるようになったSネームスノー。雪の国から来た彼をよく表している。彼の中性的な美貌からスノーホワイト、白雪姫と茶化す輩もいる。

ランガが白雪姫だというのなら、棺のボードを用意した自分の策略は失敗して然るべきだ。白雪姫は棺の中で息を吹き返してしまうのだから。

でも、今はそんな自分の間抜けさに感謝したい。

警戒する様子もなく、無防備に体を預けている少年に、愛おしさが込み上げてくる。

あれから、何度か一緒に滑った。

ランガとのスケートは不思議だった。滑るたびに、愛抱夢の心を覆い隠していた何重にもなった薄衣が一枚一枚剥がされて行く。そんな感じがした。

肩肘を張らなくていい。強がらなくていい。

辛いのに大丈夫だと虚勢を張って、余裕ぶって空疎な笑顔を作らなくてもいい。  
大嫌いな相手に愛想笑いをする必要もない。

神道家に縛られ、押し付けられる期待から自由でいられる。

この少年がこうして側にいてくれれば、こんなにも楽に息ができる。

スケート以外の退屈な俗世ですら輝いて見えるのだ。

それは、ランガがたつたひとりのかけがいの無い存在だと愛之介に思わせるに十分だった。

まだ幸せだったころの記憶が静かに揺り起こされる。

忠と一緒にスケートを始めたとき、心より笑顔になれた。ジョーやチェリーたちと毎晩のように滑った。大人が顔をしかめるようなお祭り騒ぎは最高に興奮した。

そんな楽しさ全てを否定して固執した世界に、この子連れて行こうとした。

ランガはそのことを知っていながら、愛抱夢を拒絶しなかった。ただ、その孤独な魂に寄り添おうとした。

あの決勝戦、子供の純粋さと残酷さは、物事のコアを容赦無く突きつけてくる。丸裸にされた心。全てを曝け出してふたりは全身全霊で激しくぶつかり合った。

今更、ここで取り繕って何になると愛之介は思う。

かつこ悪いだと？　それがどうした。ランガの前で強がる必要なんて何もないのだ。それでも、彼に涙を見せることは絶対に拒否する。

それは、大人の愛之介が、まだ子供のランガに見せる最後に残された意地なのだ。

愛之介の腕の中でランガが身じろいだ。

「ごめんなさい。俺、何やっているんだろう。なんだか急に胸が締め付けられて、涙が止まらなくなった。愛抱夢には、かえって迷惑をかけた」

「迷惑じゃないよ」

ランガが愛之介の左手首にそつと触れた。

「痛むのは左だけ？」

「え？」

指摘されて初めて意識する。叩かれたのは両腕だった。でも、確かに最近、痛みが蘇るのは左だけだ。

右手首をそつと押さえてみる。思い出すのは、あのひりつく痛みとは違う。この感覚は圧痛。それも心地よさを伴った。

そうか。

あのとき、あの世界でひとり深く絶望する愛抱夢の右手首をランガは強く掴み、俗世に引き戻した。右手首にランガの指の感触が強く刻まれているのだ。

胸の中におとなしく収まっている少年に視線を戻す。もぞもぞと頭を持ち上げた彼がじつと見上げてくる。

明るい光の中では鮮やかなブルーの虹彩が、薄闇の中では色を失くしている。それでも仄かな光をキラキラと反射させる瞳はとても美しい。

「前は右の方も痛かった。でも君が治してくれた。左の手首も君が治してくれるんだろ？」

ランガは難しそうな顔をした。

「そうやって、またはぐらかす。俺、何もしていないし何もできない」  
拗ねたような物言いだ。

「理解できないのは君が子供だからだ。そのうち、わかるさ」

「またそれ」ランガは不満そうに口を尖らせた。

「さてと、ランガくんのおかげで今度こそいい夢が見られそうだ。遅くまですまなかつたね」

ランガが、あつ、と声をあげた。

「いけない。スネークをドアのところにずっと待たせたままだった」

「何？ 忠は部屋の前で待っているのか？」

「うん。俺が部屋を出るまで待っていてくれるって」

あいつめ。もしランガを一晚引き留めていたら、朝までドアの前で立ちんぼするつもりだったのか。するだろうな、あいつなら。忠犬もそこまでいくと腹立たしい。

ゆつくりと離れていくランガの体温が名残惜しくて、思わず手を伸ばした。

立ち上がろうとする彼の腕を愛之介は掴んだ。

「ランガくん」

「何？」

愛之介は口元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「あ、いや。忠に伝えてくれ。明日のスタートは一時間遅らせると。君も、一時間ほど起床時間をずらしてくれて構わない」

「わかった」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

パタンとドアが閉まる。

もう少しでおやすみのキスを要求するところだった。

今の彼なら他愛もなく応じてくれただろうが、まあいい。急いては事を仕損じる。焦りは禁物だ。

さて、今度こそよい夢を見られそうだ。

愛之介は再び横になると目を閉じる。すぐに深い眠りに落ちていった。

「以上が、本日の予定になりますが」

愛之介の前で、スラスラとスケジュールを読み上げる秘書はポーカーフェイスを決め込んでいる。

食えない犬だ。

「ランガくんはどうしている？」と仏頂面を崩さず訊いてみる。

「そろそろ朝食を食べ終わるころかと思います」

「昨晚のことだが、お前はずっとドアの前で待っていたのか？」

「はい。そのような約束でしたから」

ものすごく悩む。こいつに訊くのはとても抵抗あるのだが、仕方ないと覚悟を決める。

「僕の部屋を出た彼はどういう様子だった？」

忠は、愛之介から目を逸らし、ふっと視線を宙に飛ばした。

なんだ、そのわざとらしい仕草は。

「泣き腫らした目。私にはそのように見えました。彼、泣いていたようですね」

「誤解だ、忠。僕は何もしていない」少々焦って否定する。

「存じています。愛之介様が彼を泣かすようなことをするなど、あり得ないことですか」

「なんで、泣かれたのかさっぱりだ」

忠は、ふうーとやや大袈裟な声とともに息を吐いた。そんなこともわからないのですか？　と言いたげな目で愛之介を見た。

「あくまでも私の憶測、私見ですが、お話してもよろしいでしょうか」

「言ってみろ」

「本当は思いつきり泣きたいのに泣けない、やたらプライドが高くて意地っ張りでバカでねじ曲がった可哀想な大人、の代わりに彼は泣いていたのではないでしようか」

それは、僕のことか？　他はともかく、さりげなく「バカ」を紛れさせたな。

忠はさらに続ける。

「赤毛くんもそうですが、彼らの真っ直ぐで単細胞なところは、我々大人には眩しすぎま

す。ときには毒になることすら。では、私は午後の準備がありますので失礼します。それと、あと五分もしたらランガくんがこちらに来るはずになっています」

主人に反論の余地を与えず一方的に話終えた秘書は、部屋を後にした。

奴め、一生僕の犬だと言つてやつてからむしろ図々しくなっていないか？

首輪を外してやることもやぶさかでは無い。しかし有能過ぎて替えはきかない。忠がいなくなれば、Sの運営も成り立たないだろう。癪に障るが。

ドアをノックする音に愛之介は顔を上げた。

「入っていいですか？」

いつもと変わらないランガの声にホッと胸を撫で下ろす。

「入るなさい」

少し緊張した面持ちで入ってきたランガと目が合う。まだ少し目が腫れているようだ。

「おはようございます」

「おはよう。よく眠れたかい？」

つくりものではない、にこやかな笑顔で朝の挨拶を返した。

「はい」

彼の花びらのような唇が綻び、小さな笑みがこぼれ落ちていく様に、しばし見とれる。

かつて彼が赤毛の少年と一緒に屈託なく笑い合っていた姿を思い出す。あのときの笑顔は彼の親友のものだった。

それでいいと今では思っている。

目の前にいるこの少年の優しい微笑みは、自分だけのものなのだから。

《了》

## 薔薇の下で

「そういえば、俺、愛抱夢の顔知らない」

夜中のSで滑ったあと、唐突にランガは言った。

「決勝戦のとき仮面は外れていたのだから、僕の素顔見ているはずだが」

「暗かったし。明るいところでは見ていないから昼間会ったらわからないかも」

「そんなに、僕の素顔に興味あるのかな？」

ランガは少し首を傾げ何か考えているようだった。頼むから悩まないでほしい。

「どうだろう。えーと、暦もミヤもジョーもチェリーも化粧落としたシャドウですらS以外の顔と本名知っているのに、愛抱夢って何者なのか知らないなと少し気になっただけ。祝勝会のときも最後まで仮面外さなかったし」

昼間、僕に会いたいのかい？ と訊きそうになって、やめた。

悪気なく「どっちでもいい」とか「別に」などと言われそうでそうなれば立ち直るのに時間がかかりそうだ。

「では、明るいときにふたりで会おうか。君にだけ特別に表の僕の顔を見せるよ。他の皆には内緒だね。僕にも社会的立場があつて色々広げてしまうと面倒なんだよ。とりあえず君とふたりだけで会おう。あとは様子見ということにして。よし決まりだ。ああ君と昼間会えるなんて夢のようだよ」

考える時間など与えるものか、とばかりに早口で捲し立てた。ここは強引に押し切るが吉だ。

ランガは目をパチクリさせたが、断る理由も見つからなかったのだろう。「うん、わかった」と色よい返事をくれた。

さて、ランガとの初デートプランを立案しないといけないのだが、愛抱夢こと愛之介は困っていた。

那覇近郊でデートなんてことをすれば、どこで知り合いにばったり出くわすかなんてわからない。S 関係者に会うのも避けたいが、それ以上に議員繋がりを知り合いに目撃されてしまうと面倒だ。

週刊誌絡みだったりすれば、もっと大騒ぎになる。

未成年の男子高校生とふたりきりで仲睦まじくなんて目撃されてみる。それこそ人気若手政治家の裏の顔、みたいなスキャンダルを提供するみたいなものだ。

よそよそしく振る舞えばいいって？ そんなことできるわけないだろ！ ベタバタしてしまう自信はある。

「淫行疑惑！？人気若手政治家が連れ歩く謎の美少年」などという俗っぽい見出しが愛之介の脳裏に浮かぶ。

もちろん、手を出していない以上ただの名誉毀損にしかならないのだから、記事本文では否定されるだろう。が、中吊り広告で拡散されるだろう煽り見出しだけで火消しが面倒だし、多少のダメージは免れない。

ということでは、デート場所は不本意ではあるが神道家の屋敷にする。それが一番安全だ。

その日は、事情をよく理解している忠にランガの送迎をやらせることにした。

伯母どもがいない日時を選んで日程調整をする。使用人たちには適当に作り話をでっち上げれば問題ない。頭の硬い連中ばかりだ。ランガが美しい容貌の持ち主とはいえ所詮男

なのだから、好奇の目を向けることはないだろう。

食事は、花を鑑賞しながらのガーデンランチにすればいい。

大袈裟にならない簡単に食べられる、それでも食材にこだわったメニュー考えてもらおう。好き嫌いはないようだが、好物だと聞いているプーティンは忘れずに用意しないといけない。でも、プーティンは時間をおくとヘナヘナになるのだから提供するタイミングが大切だったな。

忠による事前調査によるとかなりの大食漢という話だ。量も多め用意させる必要がある。

よし、だんだん盛り上がってきた。

思わず鼻歌を歌ってしまうほど、愛之介はご機嫌だった。

当日、時間通り忠はランガを連れて戻ってきた。

車を降り、落ち着かなさそうにキョロキョロとあたりを見回すランガは、お馴染みの白シャツにジーンズという装いだ。あまりファッションに興味はないらしいのだが、この白

シャツというシンプルさが彼の美貌をむしろ引き立てている。

それでも、もう少し親しくなったらそれなりにおしゃれな服をプレゼントできればと思う。

「ようこそランガくん」

と、両腕を広げ歓迎の気持ちを体全体で表現した。

「こんにちは。ここ愛抱夢の家なの？」

「そうだよ」

「へえー。すごく大きいんだね。庭も、植物園みたいだ」

「庭は後で案内しよう。お腹空いただろう？ ランチは用意できている。使用人が腕を振るってくれたからね」

前情報通り、ランガはとにかくよく食べる。

なんでも、美味しいと言って食べてくれるが美味しい以外の感想は言わない。というか語彙が少ないだけなのかもしれない。食レポは無理そうだ。

デザートを終えて、庭を少し歩こうかという話になる。

さりげなく手を取り肩を抱いてエスコートするが、ランガに嫌がる様子は見られない。かといって、嬉しがつている感じもしないが。好意を持って受け入れてくれているのか超鈍感なのか悩むところだ。後者のような気がしないでもないが半分くらいは前者であるのだと信じた。

愛之介にとつても久々に散策する庭だ。隅々まで手入れは行き届いている。神道家の庭師は優秀だと感心する。ランガはカナダではあまり見たことのない珍しい花が多いと言う。それなりに楽しんでいるようで愛之介は胸を撫で下ろした。

ふと足を止めランガは言った。

「愛抱夢の服、アロハ？ Sのときとは違うね」

流石の僕でもTPOくらいわきまえている。マタドール衣装なんてS以外で着られるか。

「これは、かりゆしだよ。沖縄では正装にもなるんだけどね」

ランガはうーんと、首を捻っている。

「ねえ、愛抱夢は俺に表の顔を見せてくれるって言ったよね。Sと違う服を着ているけど、サングラスをかけっぱなしなのは、なぜ？ それじゃ仮面つけているのと変わらない。名前も教えてもらっていないし」

「そうだね。それはこれからだよ」そう言つて、ランガの繋いだ手を引いて最終ゴールを目指した。

最後に誘導したのは、アーチを並べて作つた蔓薔薇のトンネルだ。

見事に咲き誇る薔薇のトンネルの中へランガを誘う。

目をキラキラさせてランガは頭上の薔薇を見上げた。木漏れ日が放射状の光となつてランガの顔を点々と照らしていた。天使の梯子のミニチュアだ。

「わあ、すごいね。薔薇はカナダにあるのと変わらないんだ」

「高温多湿の亜熱帯気候である沖縄だと薔薇を綺麗に咲かせるのは難しいそうだ。ここには腕のいい庭師がいるからね」

「すごい人なんだね」

楽しそうにしているランガを見ると幸せな気分になれる。

トンネルの中央あたりに辿り着いた愛之介は、ランガの両肩を掴んで、真正面で向き合った。

「さて、この辺りでいいかな。まず僕の本名は神道愛之介だ。名刺を渡しておこうか」

「シンドウアイノスケ？ 神道がファミリネームだね」

名刺をチラリとだけ見て、ランガは言った。所属組織や職業、肩書きには興味ないらしい。まあ、その方がいい。

「さて、サングラスを外すよ」

「でも、どうしてここぞ？」

「SUB ROSA」

「何、それ」

「ラテン語。英語なら〈under the rose〉」

「それ、聞いたことがある」

「薔薇の下での秘密は守られなければいけない。ここで言ったことも聞いたことも見たことも知ったことも、そして起こったことも他言無用。外で話してはいけない、という意味だよ」

「約束するよ」

愛之介はサングラスを徐に外した。

「これでいいかな。ランガくん」

ランガは真剣な面持ちで顔を近づけてきた。こうじつと見つめられると、なんというかこそばゆい。

「覚えた。これで昼間出会ってもすぐに愛抱夢って気がつくと思う」

「S以外で愛抱夢呼びは勘弁してくれないかな」

「神道さんと呼べばいい？ それとも愛之介さん？」

「愛之介でいいよ」

「わかった」

「ひとつ君にお願いがある」

「何？」

「今ここで、君を抱きしめキスをしたい」

愛之介を見つめたままランガの表情が固まった。

何度か瞬きをして「ハグは別にいいけど。キスは……するところによる」と言つた。

「唇はどうかかな？」

「それは、まだ」

まあ、当然の反応だ。まだ待つことは、近いうちに受け入れてくれるかもしれないと期待しておこうか。

「冗談だよ。では、どこならいいのかな？」

「唇以外なら」

「どこでもいいの？」

「いいよ」

おいおい。

ランガの言っている唇以外は、額や髪や頬や手あたりまでなのだろう。彼の性的な想像力はその程度の子供だ。

ここで、愛之介が悪い大人の狡猾さを発揮させれば、首筋や耳などの性感帯を刺激したり、シャツをたくしあげて乳首に口づけることも可能だ。さらにエスカレートすればギンズを引き下ろして下半身の至る所にキスすることもできるのだ。

ちよつと想像しただけでゾクゾクするのだが、流石にそんなことをして泣かれても困る。もつとも自分以外の大人につけ入れられる可能性を考えると頭が痛い。それは今後の課題だ。

愛之介はランガの両肩を掴み胸の中へと引き寄せた。そのまま彼の雪のような髪に唇を落としてから額に口づけた。ランガの腕が愛之介の背中におずおずとまわされたことを感じ、包み込むように優しく、そしてきつく抱きしめた。

## そしてラブホで遊ぶ

「ラブホが何かって？ お前なあ、それくらいググれよ」と暦は言った。

「ググるって？」ランガは首を傾げた。

「そこからかよ。あー、もう。検索するってことだよ」

「やってみる」

スマホを使ってランガは検索窓に「ラブホ」と打ち込んだ。

「ねえ暦、なんかこの辺のホテルがいっぱい出てくるけど。ホテルのこと？」

「間違っていねえけど。ホテルと言ってもラブホテルのことだよ」

「ラブホテルって？」

「えーい、もうめんどくさいな。ウィキ俺が読み上げてやるから。それで理解しろよ。俺は読んでいただけだからな。これ以上その質問もう受けつけないぞ」

「わかった」

「読むぞ。『ラブホテルとは、しゅにカップルのせいこういにできしたせつびをもつへやを、たんじかん（きゅうけい）もしくはしゅくはくでりようできるしせつ。りやくしてへラブホ』ともよぶ」

「わからない単語あるんだけど。〈せーこーい〉って何？ 日本語難しい」

「……質問は受けつけねーって言っただろ。気になるのならググれ。もうこの話は終わりで終わり！」

「暦、顔赤い」

「う、うるさい」

## §

「整理すると、君はラブホが何か知りたかった。ラブホはラブホテルのこと。そこまできつたけれどラブホテルの説明に出てきた〈性行為〉という言葉の意味がわからなかったってことだね」

久しぶりに顔を出したSで愛抱夢こと愛之介はランガから少々厄介な質問を受けた。

「へせーこーい」で検索しても何も出てこないんだ。暦はもうこの話するなって不機嫌になるし」

赤毛の親友にこれ以上質問することもできず途方に暮れていたというわけか。

「へせ、い、こ、う、い」で、検索した？」一音ずつ区切つて強調しながら質問する。

ランガは一瞬目を見開いて、数秒してから「あ、そっか」と頷いた。

「やはりね。それでは何もわからないだろうな。でも、どうして僕に？ ジョーやチェ

リーでも問題ないんじゃないかな。ジョーなんて僕よりもよほど詳しいと思うよ」

「説明してもらつてもまた難しい日本語が出てくるかもしれないし。愛抱夢なら英語で説明してくれるかなつて」

「そういうことか」

「日本語まだわからないところがあつて」

「君は日常会話には支障ないみたいだけど日本語はどうやって覚えたの？」

「家で母さんと話すときはなるべく日本語にしようと言われて。父さんとも半分くらいは日本語で話していた。母さんの母国の言葉も喋れた方がいいから。ただ、読み書きはあまりやつてこなかったから今勉強している」

母親との会話から吸収した日本語なら性的だったり罵詈雑言的な単語は登場しないのは当然か。

「なるほどね。でも、なんでラブホが知リたかつたのかい？」

「暦がスネークを『ラブホの』って言っていたから」

「え？」

「一緒にラブホに入つたらしい。スネークとぶつかつて、なんかの話合いとか交渉つだつて。何もなかつたからと暦は何度も言っていたけど」

「忠と赤毛くんがか？」

「そうだよ」

聞いていないぞ、そんな話。

あとで忠を問い詰めてやらなくては。もつとも犬の弱みを一つ上乗せできるのなら大歓迎だ。

「だいたいの事情は理解した。では、これから英語で説明するよ」

愛之介から一通りの説明を英語で受けたランガは顔色変えたり動揺するような感じは見られなかつた。ただ淡々と頷きながら聞いていた。それでも説明を終えたころには少し顔

を曇らせていた。

「暦は、暦はどうして？ 話合いのためで何もなかったって言っていたけど」

小声でぶつぶつ言っている。やはり親友のことは気になるのだろう。

「赤毛くんのことなら大丈夫だよ。何もなかったって言っているんだし。セックス以外の目的で利用してはいけない施設というわけではない。場所的に都合が良かったんだろう」

車で軽く接触した。おそらくラブホテル近くで。それを揉み消そうと示談交渉の場所にラブホテルを選んだ。おおかたその辺りだろう。忠は常識人ぶっているが発想が自分以上におつ飛んでいる。この際、締め上げておくべきだろう。

ランガは「良かった」と安心したように言った。

「ラブホ文化がある国は限られているからね。日本はカナダと違って住宅事情はよくないんだよ。実は夫婦での利用が多いとも聞く」

「でも、それなら普通のホテルとかでもいいと思うけど。どうして専用のホテルがあるんだろう？ 普通のホテルと何が違うの？ それとも日本のホテルはセックス禁止なの？」

ランガの突飛な発想に愛之介は苦笑いを浮かべる。

「流石に禁止できないよ。ラブホテルがある理由だけど、一つは泊まるというより短時間

での利用が多いんだ。ただセックスするだけならその方が安く利用できるしね」

「そうなんだ」

「他にもセックスの為だけの特殊な設備があつたりするんだよ。雰囲気とかが全然違うんだ。ベッドが円形だったり回転する仕掛けがあつたりと色々。他にも派手派手しい照明とかバスルームがガラス張になつていたりという非日常的な空間になつている。部屋のコンセプトごとにバリエーションがあつてムードを盛り上げているんだ」

話しているうちに段々悲しくなつてきた。なんで、セックス連呼して回転するベッドだとか真面目に解説しているんだろう。男子高校生相手に。

「へえ面白そう」

面白そう？ 見ればランガの青い瞳はキラキラと輝いている。この子は普段ばーっとしている癖に妙なところで好奇心を発揮する。

「わかったかな」

「説明してくれてありがとう」

「どういたしまして」

そこまで話し終えた愛之介の仮面奥の瞳をランガはじつと覗き込んだ。

「愛抱夢はラブホ行ったことある？」

まさかそんなストレートに切り込んでくるとは思わなかった。

意外なようだが愛之介はラブホテルに行ったことはない。そもそもセックスを第一の目的で誰かと会うなんて発想はなかった。ホテルのレストランで食事をして気分が乗ればそういう展開になることもあるだろう。その場合ホテルに部屋をリザーブしておいたほうが理にかなっていたのだ。

いや、それ以前に神道家の家に誓ってラブホテルなど有り得ない。ラグジュアリーホテルこそが神道家に相応しいのだ。

「残念ながら、そんな機会なくてね」

「それならどうして知っていたの？ 部屋のこととか」

そこを突っ込んでくるのか。

「一般教養というか普通に生活していればそのくらいの情報いやでも入ってくるよ。放っておいたって君もいずれ知ることになっただろうね。それにラブホが違法建築物というわけではない以上、議員はその辺りの事情は当然知っていないといけないからね」

最後の方は当然のごとく屁理屈だ。

「すごいね」

ランガは変に感心しつつも相変わらず興味津々の様子だ。

「行ってみたいのかい？」

「暦だけ行つたことがあるなんて狡いと思つて」

何が狡いんだか子供の思考にはついていけない。

「張り合うようなことではないだろう」

「そうだけど」ランガは不満そうに口をへの字に曲げた。

愛之介は、そんな彼にとんでもないことを迂闊にも口走つていた。

「そんなに行きたいのなら僕が連れて行つてあげようか？」

しまった、と思うが時すでに遅し。後悔先に立たずだ。

これを脊髄反射とか刺激反応と言うのだろう。思考より先に口が動くとは政治家失格だ。すでに失言政治家の第一歩を踏み出しているのかと思うとぞつとする。

「え？ いいの？」

ランガの顔がぱあと明るくなり無邪気に身を乗り出してくる。

「ぎ、君がどうしても言うのなら」

「ありがとう。これで唇に俺も行ったって言える。唇と同じ話ができるね」

言うな！ 神道愛之介、政治家生命最大のピンチだ。

「ちよつと待ってくれ。ランガくん、これは誰にも話してはいけないよ。君は僕とセック  
スしたいの？」

ランガはブンブンと首を横に振った。そりゃそうだ。まだ唇へのキスすらしていないのだから。

「でもね、ラブホにふたりで入ったとなるとたえそれが社会見学だったとしてもセックスをしたと周りから見られるんだ。言い訳の余地もなく。君は僕が国会議員だって知っているよね。その事実をマスコミが嗅ぎつけてみる。それだけで君とは何もなくても僕は失脚する。しかも十八歳未満の君相手では淫行で僕は犯罪者になってしまう。わかるね？」

「そうだよね」とランガは残念そうに目を伏せた。

「今までも俺が世間知らずで話が通じなくて、唇を困らせているような気がして」

まったく、この子はそんなことを負い目に感じていたのか。

「どうするか君が決めるんだ。君はそのことを誰にも話せない。もちろん赤毛くんにも。

それでもラブホテルに僕と一緒に行く？」

「行く」

恐ろしいことに即答だった。

もう覚悟を決めるしかない。子供の好奇心にはかなわない。

「このことは行く前も行ったあとも、永遠にふたりだけの秘密だ。守れる？」

「俺、誰にも、暦にも言わないって約束する」

「いい子だ。そこまで言うのなら連れて行ってあげよう」

「ありがとう。それと暦が行ったラブホがいいんだけど。スネークに訊ける？」

「ああ、調べておくよ」

そのとき「おいランガ」と声がした。

「あ、暦が呼んでいる。俺、もう行く」

「では僕から連絡するよ」

赤毛の親友の元へとランガは走り出した。

ふたりの会話が聞こえてくる。

「ランガ、あいつと何話していたんだ？」

「愛抱夢、英語話せるから日本語のわからない言葉を英語で教えてもらっていた」  
嘘ではないな。

冷静に考えると色々とおかしい。

何よりも面倒だ。絶対にマスコミに嗅ぎつかれてはまずい。そのためには何重もの対策を施す必要がある。赤毛の彼をラブホテルに連れ込んだ前科がある以上、忠には全力で協力させる。

ランガにしてみればテーマパークに遊びに行く感覚と大差ないのだろう。色っぽい展開には、どう頑張っても持つて行けそうにない。

それでも少々風変わりなデートだと思えば悪くない。

当日、Sをふたりのために解放させておこう。食事にも誘う。そしてラブホで遊ぶ。

この少年はラブホテルの部屋でどんな表情を見せてくれるのだろう。そんな密やかな楽しみを手に入れたのだ。こうやってふたりだけの秘密を少しずつ積み上げていく。今はそれで十分だ。

そしてラブホで遊ぶ

いつか君との関係が大きく変わる。  
そう信じているよ、ランガくん。

《了》

## 温度差があるキス

Sで帰り支度をしているとき、暦がためらいがちに言った。

「あいつ、お前に対してスキンシップ過剰じゃね？」

言われてランガは首を傾げた。

「あいつって？」

「決まっているだろ。愛抱夢だよ。他に誰がいるんだよ。肩抱いたり腰に手をまわしたり手を握ったりとか」

「暦だつて同じだろ？ まだ親しくなる前から俺に抱きついてきたり肩組んできたりしてた」

「あれは親しみを込めてだなあ。こつちでは普通だし」

「こつちって？ 母さんが日本人はシャイだからハグしたりしないって言っていたけど。暦だけが例外なんだと思っていた」

「で、でもなんか違うんだよ。あいつのは。こう、いやらしいというか」

「いやらしい？ 愛抱夢のハグもキスも父さんとするみたいだよ」

「キ、キス？」暦の声が裏返った。

いけない。ハグはともかく、人目につくところでキスなんてしたことないのに。

暦は押し黙ったのち、小声でぶつぶつ言い出した。

「あ、いや、あつちではチューは挨拶だったか。ランガはカナダ育ちだし、あいつはアメリカに住んでいたことがあつたって聞いたし。イタリアで修行していたジョーなんて人目を憚らず普通に恋人でもない美女とキスしているしな。父さんとするみたいって言っているんだから特別な関係では……」

勝手に納得しているけど、キスが挨拶って誤解というか偏見なんだと思う。ゼロじゃないけど普通ハグ止まりだ。キスが挨拶はむしろヨーロッパの文化だ。それだつて唇と唇はない。ヨーロッパからの客人が挨拶でチークキスをしようとする多くのカナダ人は戸惑う。ジョーはイタリア関係なくジョーの文化だとは言いがたい。

もつともセカンダリースクールあたりから、悪ふざけで男同士でキスをするというのは一時流行った。ただの受け狙いだし周りの笑いを取ろうという目的は、日本で行うところの芸人と同じだ。キスしたふたりが爆笑するまでが一連の流れだ。

特に親しい友人なんていなかったランガは笑うでもなくぼんやりとそんなクラスメイトたちを眺めていた。

いずれにしろ唇と唇のキスで挨拶なんて聞かない。

「ねえ唇、挨拶のキスって唇と唇でするわけじゃないよ」少なくとも、それだけは訂正しておかないと。

暦はホツとした顔で「だ、だよな」と言った。

暦には俺と愛抱夢のことで心配かけちゃっているのかな。暦が考えているようなことは何もないんだけど、これからは周りの目を少しは気にしないと。ランガはそう思った。

愛抱夢は、ふたりきりでいるとよくキスしていいかと訊いてくる。特に断る理由もなかったから、訊かれるたびに「いいよ」と返事をしていた。

額、髪、目尻、頬、大体キスをしてくるのはそのあたりだ。

そつと優しく触れてくるところは父さんと同じだ。だからか、肌を掠める吐息のくすぐったさは、すごく懐かしく、密着した体から伝わるぬくもりは穏やかで泣きたい気分

なる。

たまに「唇にしているかな？」と訊いてくる。そんなときの愛抱夢はいたずらっ子のように見えた。もちろん本気じゃないってわかっているから「駄目」と返す。

そのときの彼はすぐに「冗談だよ」と笑い、ハグしながら額とか髪にキスをしてくれる。

俺がうんと小さかったころ、父さんは唇へもキスをしてくれた。チュツと小さな音を立てながら軽く一瞬触れるだけのキス。日本ではそんな習慣なかったからと母さんとはあまりキスしなかったけど、父さんが俺にキスをするのをニコニコ笑って見ていた。

もちろんプライマリースクール入学前の話だ。

親から子供へされる唇と唇のキス。それは子供がまだ幼児であるまでのごく短い間だけだ。

幼かったときの遠い記憶の中にあるキスの感触が唇に蘇る。愛抱夢と唇と唇でキスしたらどんな感じだろう。父さんのキスと同じなのだろうか。

ランガは唇を指でなぞり、少しドキドキする胸に手を当てた。そして、あることに気がついた。

そういえば愛抱夢は、なんで俺にキスをしたがるんだろう？

今の今まで考えたこともなかった。

## §

愛抱夢から不定期に入るバイトは時給がよく断る理由はなかった。DOPE SKETCHのシフトを調整してもらい、なるべく受けるようにしている。暦には話しているけど相手の正体が愛抱夢であることは伝えていない。それもバイトの条件だ。暦も追及はしてこない。ただ英語を使うバイトだという理解でいるのだと思う。

その夜、ランガは臨時のバイトという名目で、愛抱夢の表の顔である愛之介の部屋にいた。彼は事務所から戻ってきたばかりだ。

愛抱夢はスーツのジャケット脱ぐとソファアの背もたれへ無造作に放った。ランガはそ

のジャケットをハンガーに掛けた。彼は「ありがとう」と言い、グラスの水を口に運びながらパラパラと書類を眺め始めた。

顔色が良くないように見えた。疲労の色は隠せていない。

今は部屋でふたりきりだから愛抱夢呼びで構わない。

「愛抱夢、タバコ吸いたいんじゃない？ 俺戻るから」

「そういうときは言うから、気を使わなくていいよ。むしろ君にはもう少しここにいて欲しい」

「疲れているね」

「疲労困憊ってやつかな。大人は神経すり減らすこと多いんだよ。特に政治家稼業なんて碌なものじゃないからね」

大人は大変だと思う。Sのスケーター愛抱夢と政治家である神道愛之介の印象は随分と違う。それは愛抱夢だけではない。シャドウ、ジョー、チェリーと大人たちは皆それなりに真つ当な社会生活を営んでいて、表の顔と裏のSでの顔を使い分けている。

違わないのはランガや暦や実也の学生組くらいだ。

「何か俺にできることある？」

顔を上げた愛抱夢がニコツと笑った。

「心配してくれるのかな？　なら君にキスをしたい」

そう言いながらソファーから立ち上がり、両腕を広げ歩み寄ってくる。

「いいけど、一つ教えて。あなたは どうして俺にキスしたがるの？」

彼の目が丸くなり、軽く吹き出して「今更？」と言った。

「急に気になって」

「君を抱きしめキスすると僕が癒されるからだよ」

「前に実也が言っていた。疲れたときにふわふわの犬や猫を抱くと癒されるって。俺も犬や猫と同じってこと？」

愛抱夢は「ふふふ」と笑った。

「君は面白いこと言うね。ある意味当たっているよ。でも僕は犬や猫じゃ癒されない。ラングくんじゃなければ駄目なんだ」

俺は犬や猫みたいにふわふわじゃないと言いかけたが黙っていた。多分そういうことではない。

「それより僕は、今まで君がなぜキスを拒否しなかったのかをずっと考えていたんだ。挨

拶だというのは、おかしいよね。どうして？」

どうして？」

最初は断る理由がなかったから。そのあとは、自分もキスされるのは嫌じゃなかった、むしろ好きだったからだと思う。

理由は唇に話した通りだ。

——愛抱夢のハグもキスも父さんとするみたいだよ。

「愛抱夢のキスが」と言いかけたが、続く言葉は唇にぐいっと押しつけられた彼の人差し指に遮られた。

「ああ愚問だったよ。僕はもう答えを知っているんだ。それを君の口から聞かされたくない。だから答えなくていい。その代わりにこれを訊いておこうか。君はなぜ唇へのキスは拒否したの？」

言いながら愛抱夢はすつと前へ出た。ランガは思わず後ろへ一歩退いた。

「え？ それは冗談かと思って」

「僕はいつでも本気だったよ」

「あなたは冗談だよって」

「本気をお願いしているのに、あつさり断られたなんて恥ずかしいからね。後出しで冗談ということにして誤魔化しただけなんだけどな。君は本当に鈍感だね」

鈍感と言われ少しムツとする。でも最近色々な人から指摘されるから、そうなんだろうと思い始めている。

また愛抱夢が一步近づく。そうやって彼が距離を詰めればランガは後退りする。そんなことを何度か繰り返した。やがて背にあたる壁の硬い感触が、これ以上逃げられないことを教えた。

「行き止まりだよ、ランガくん」

深紅の瞳が真っ直ぐランガを射抜いた。目を逸らすこともできない。

ランガは胸を手で押さえた。どうしたんだろうトクントクンと鳴る心臓がうるさい。愛抱夢とスケートをしているわけではないのに。

頬に指が触れるのを感じてランガはピクリと震えた。

「怯えているのかな。僕が怖い？」

今まで愛抱夢を怖いと思ったことは一度もなかった。皆が恐怖だという彼の暴力的なビフだって、ランガにとってスリリングで最高のワクワクでしかない。

だけど、こんな愛抱夢をランガは知らない。

気がつけば「怖い」という言葉がランガの口から漏れていた。

愛抱夢は目を細めて笑った。

「嬉しいなあ」

それは本当に嬉しくて仕方ないといった顔だった。

「嬉しいの？」

「だって君は今までまったく気がついていなかったからね。自分が親愛だけではなく性愛の対象としても僕から見られていたことに。そして今ようやくそのことに意識が向いたんだ。その未知の僕を君は怖いと感じた」

そんなこと、考えたこともなかった。俺は今までこの人の何を見てきたのだろう。

愛抱夢はランガの唇を指でゆつくりとなぞった。

「決めたよ。僕は君の唇にキスをする。嫌だったら逃げていいよ。君なら簡単だろう？」

ああ、それと君が拒否したからといって、アルバイトが無くなるとか、僕が君に冷たくな

るとか、そんなことは心配しなくていいからね。そう、色々なことが少しだけ先延ばしになるだけさ」

ゆつくりと愛抱夢の顔が近づいてくる。

逃げる？ どうして？ 逃げる理由を考える。真つ白だ。何も見つけられなかった。

チュツというリップ音とほぼ同時に、唇がさらつと触れ、すぐに離れた。

「これは君が知っているキスだね」

そうだ、この感じ。昔、父さんがしてくれたキスだ。

ランガはコクリと頷いた。

腰にまわされた手にグイッと引き寄せられる。顎を掴まれ至近距離で見つめてくる赤い瞳。ますます速く激しくなっていく心臓の鼓動にランガは困惑した。

どうしよう愛抱夢に聞こえてしまったら。

「では、いいかな？ 次は君の知らないキスだよ」

唇に温かい吐息がかかり、熱と湿り気を帯びた唇が重なった。ランガは男の背中に腕をまわしシャツを強く掴んだ。

徐々に深くなっていく口づけ。やがてランガはがくりと膝を折った。そのまま愛抱夢に弱々しく縋りながら崩れ落ちていく。そんなランガを男はしっかりと腕に抱き留めながら、ふたり揃って床にペタリと座り込んだ。

愛抱夢はランガの耳元で囁いた。

「最初はこのくらいにしておこうか。君の反応は初々しくて可愛いね」

可愛いと言われるのは少し面白くなかったけれど、文句を言う余裕なんて残っていない。

ランガは力の入らない体を男に預けたまま、彼の腕の中で苦しい呼吸を繰り返すことしかできなかった。

今だったら、この人に何をされても受け入れてしまうだろう。そんな気がした。

男の胸に頬を押し付ける。ほのかな体臭と煙草のにおいを感じランガは目を閉じた。

《了》

## 欲望の隠れ場所

愛之介は地方選候補者への応援演説中、人集りとなつた聴衆の中にふわりと動く水色を視界の隅に捉えた。

ランガくん？

視線を向ければ、目が合つた。

彼は驚いたように目を丸くすると、くると背を向け足速にその場を立ち去つてしまつた。

演説を終えて候補者と固い握手を交わしてから人混みを掻き分け、たまに差し出される手を握り返し愛想笑いを浮かべ目で彼を追う。しかし見失つてしまつたようだ。そのまま忠の待つ車へと急足で向かつた。車内でメッセージを送つてみよう。近くにまだいればいいが。

車の前に立つ忠が「どうぞ、愛之介様」とドアを開けた。

後部座席に乗り込もうと屈んだ瞬間フリーズした。先客がいたのだ。

「こんにちは、愛抱夢……でいいんだよね？」

「ランガくん、なぜ君がここに？」

「スネークに呼ばれて」

「車の前を通り過ぎようとする彼が見えたので、声をかけさせていただきました。愛之介様がもうすぐお戻りになると思い、少しお待ちいただいたのですが、差し出がましかつたでしょうか」

ランガの手前「余計なお世話だ」と虚勢を張るわけにもいかず、かといって素直に「よくやった」と褒めるのは癪に障る。

とりあえずスルーでいい。

黙ってランガの隣に腰を下ろした。

「迷惑だった？」と不安げに訊いてくるランガに「もちろん大歓迎だよ」笑顔で応えた。忠は車を発進させた。

事務所に戻る前の二時間ほど昼食と休憩の時間をとつてある。ゆつくりできるよう個室を押さえてあるのだが、もうひとりねじ込んでも問題ないだろう。そう思った矢先、忠がこちらの思考を読み取ったかのように言ってきた。

「予約した昼食の件ですが、その場で申し出ればもうひとり分追加可能とのことですよ」

だんだん腹が立ってきた。ここまで氣を利かせて先回りされると、こいつの手のひらで踊らされているような気分になる。さらに厄介なのは、それを指摘すれば認めたことになるから文句も言えない。

やはりここも反応しないの一択だ。

「ランガくん、このあとの予定は？」

「お昼ご飯にパンと牛乳を買って帰るくらいかな。母さん仕事だから」

前々から思っていたのだが彼の食事の偏りは少々問題ある。プロを目指すでなくてもある程度、栄養を考えた方がいい。いくら生まれ持つての才能があるとはいえ食事やトレーニングを間違えれば怪我や故障の原因となる。デタラメが許されるのはまだ若い今のうちだけだ。母子家庭ということで母親も、そこまで氣をまわす余裕などないのだろう。機会を見てこちらからアドバイスをするようにしよう。

「それならランチを付き合ってくれないかな」

「あ、はい」

個人的に話をするようになってはつきりしたのだが、彼は明確に断る理由が思いつかな

い限り、こちらの提案をあつさりと受け入れてくれる。

数分で到着したホテル内にある和食レストランは馴染みの店だ。その個室へと案内された。

「スネークは？」

忠がいらないことをランガは不思議に思ったようだ。

「忠は、別の席で食事をしているよ。元々僕がひとりになりたかったから予約したんだ。たまには息抜きしたいからね」

「え？　じゃあ俺が一緒でいいの？」

「もちろん問題ないよ。ひとりでというより仕事の延長みたいな連中から離れたかったという意味だからね。君は仕事とは関係ないし。忠だって同じだよ。彼だって上司の顔を見ないで食事したいだろう」

「そんなものなのか。俺、暦と一緒に学校行って授業受けてランチ一緒に食べてSで滑って……でも、息抜きのために離れていたいなんて思ったことないけど」

それは少し妬けるかもしれない。

「大人になればわかるよ。今日はその赤毛くんと一緒じゃなかったの？」

「今日は都合が悪いつて。暦は、家族とか親戚のイベントがしょっちゅうあるつて言っていた。大家族で親戚付き合いいも近所付き合いいも多いらしい。俺は暦の誘いを断ることないけど暦はちよくちよく俺の誘い断つてくる。でも暦の家いつも賑やかで少し羨ましい」羨ましいね。

喜屋武という名字からして代々沖縄の一族なのだろう。親戚付き合いは濃いだろうし長男ともなれば大変だ。この子はそんな沖縄特有の事情など知らないだろうけど。

そんな雑談をしているうちに料理が運ばれてきた。先付けから始まって、お造り、腕ものとお上品に盛られている。

黙々と食べているが、大食漢のこの子にしてみれば和食のコースは量的に問題ありそう。もとぶ和牛ステーキを倍量にしてもらっているとはいえ大丈夫だろうか。おかわり自由の炊き込みご飯でお腹を満たしてもらうしかないが。

「こんな柔らかくて甘いステーキは初めて。和牛？」

「そうだよ。気に入ってもらえたようで何よりだ」

デザートとコーヒーが運ばれてきたタイミングで、気になっていたことを訊いた。

「それはそうと、ランガくん」

「何？」

「君は応援演説をしていた僕を見ていた。でも、目が合った途端にあの場所から離れたよね。逃げるみたいに。どうかしたの？」

デザートの抹茶アイスをすくいにかかったスプーンが止まる。

「本当に愛抱夢なのか自信なくて。愛抱夢がこっち見たとき、あんなにじろじろ見て、もし違う人だったらと少し恥ずかしくなつて逃げた。そうしたらスネークに声をかけられて、やっぱり愛抱夢だったんだなと」

ランガが愛之介の素顔を初めて見たのはトーナメントの決勝戦だ。激しいぶつかり合いで仮面が落ちた。その仮面で隠していた素顔を隠らずも晒してしまったのだ。

でも、夜の暗いコースでのことだったから、昼間会ったらわからないかもしれないとランガは言った。だから、愛之介は明るい中で素顔を見せることを都合の良い口実に、ランガを屋敷へと招待したのだ。

「先日、僕の家へ来たとき明るい中で顔を見ているよね？」

「うん、そうなんだけど。あのときはこれで覚えたから昼間会ってもすぐに分かるって、そう思っていたんだけど……」

そこで言い淀んだランガに先を促した。

「だけど？」

「なんか、あのとときと全然違う」

「違うって？」

ランガは軽く首を傾げた。

「雰囲気？ 服とヘアスタイルのせいかな。今はもう見慣れてきたから愛抱夢だなんて思えるけど。だから、街の中でたまに見かけるポスターがあなたと結びつかなくて、愛抱夢とちよつと似ているかもくらいだった。あれ愛抱夢だったんだね」

愛之介は苦笑した。

「名刺渡したはずだけど？」

「ごめんなさい。あまりよく見ていなかった」

「ばつが悪そうにしているランガに「気にしなくていいよ」と言った。

確かに、今は清廉潔白で売り出し中の若手政治家である神道愛之介を演出したコーディネートだ。髪はスタイリング剤で乱れなくまとめ、真面目で落ち着いた印象になっているはずだ。さらに、上質のスーツで品の良さと知性を全面に出すようにしている。

異界であるSでのマタドール衣装は論外としても、先日 of 神道家の邸宅で彼を迎入れたとき着用していたのもスーツではなかった。商工会絡みの付き合いで何着か持っているかゆしとスラックス。ヘアスタイルはSのときと同じだ。彼がリラックスできるようにと選んだカジュアルな装いだつた。

ランガが、政治家である神道愛之介のお堅いスーツ姿を間近で見るのは今日が初めてなのだ。

「で、君の感想聞かせて欲しいな。スーツ姿の僕。惚れ直したかい？」

「ほれなおし？」

ランガは不思議そうな顔で愛之介を見た。

軽く流してもらおうと思ったのだが通じなかつたらしい。もつとも可愛いきよとん顔を拝むことができたのだから良しとしよう。

「気にしないで、冗談だから」

「あの、そのスーツとても似合っているし、かつこよくて素敵だと思う」

ランガはお世辞の言えるような子ではない。ここまで言ってもらえれば十分だ。

「君に褒めてもらえると嬉しいよ」

「シャドウもチェリーもジョーもSとS以外、全然違うんだ。愛抱夢も同じだね。仕事のときみんな顔つきも違う」

「顔つき？」

「Sと違って、みんなちゃんとした大人に見える」

愛之介は思わず吹き出した。そうか、Sではあいつらも子供に見えるのか。

「僕にとつてマタドールの衣装はスケーターとしての、スーツは政治家としての戦闘服なんだよ。それぞれで気持ち切り替わる。スーツを着てヘアスタイルをピシッと決めた自分を鏡に映せば、これから古狸どもとバトルだぞって気合が入るからね」

「大人って大変だね」

大真面目な顔でランガは最後のアイスクリームを口に放り込んだ。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。

「残念ながらそろそろお開きの時間だよ」

「今日はありがとうございました。またご馳走になっちゃった」

「こちらこそ君のおかげでリフレッシュできたよ。これで午後の憂鬱な仕事も乗り越えられそうだ。ありがとう」

「俺にできるお礼ってある？ 何も思いつかなくて」

「それなら、これからこんなふうに僕に付き合ってほしい。どう？」

「わかった」

「では、最後にハグをしようか」

「うん」

両腕を下に向け、彼を迎いれるポーズをとる。

ランガは歩み寄ると、そうすることが当たり前だというように愛之介の腕の中に入り込み背中にも腕をまわしてきた。それは、ぎこちなさのない、ごく自然な動作だった。

愛之助は彼の肩から背中にかけ確かめるように手のひらを滑らせていった。しなやかな弾力を持った筋肉は女のような柔らかさはない。子供ではない。けれどまだ成熟した男とはいえない繊細な危うさを持った肢体。愛之介の胸の中でしつくりと馴染む体温が愛おしい。

君は、あまりにも無防備だ。何の警戒もせずにこうして容易く触れさせてくる。僕が君にどんな欲望を抱いているのか気づきもしない。

実際、ここがレストランの個室でなければ危なかったんだよ。

愛之介は優しく抱きしめながら「キスしてもいいかな？」と訊いた。

「いいよ」

「唇には？」

「駄目」

「ふふ、冗談だよ」

愛之介はランガの雪のような髪を撫でながら、目尻にそつと唇で触れた。

《了》

## 君の胸で僕は安らぐ

不用意に触られるのは苦手だ。背後から声かけと同じタイミングで肩に手を置かれたりすると、うつかり睨みつけてしまうことすらある。それは大抵先輩議員だったりするのだ。が、そんなときは慌てて愛想笑いを浮かべる。

自分より力のあるものから構われるのは、嫌でも仕方ないと諦めることはできた。けれど明らかに自分と同等以下のもので構われれば、はつきりノーと言う。

小学校に入学したころには自分より強い立場にいると思える同級生などいなかった。いや、一学年か二学年くらい上級生であつたとしても、その家が神道家より力を持っていなとわかれば、気を遣う相手ではないと判断していた。

別に見下していたわけでも、自分が偉いと思っていたわけでもない。

ただ、嫌なことを「嫌だ」と言つて拒否していいのか、我慢しなければいけないかの違いだつた。

「愛抱夢は構われるのが嫌いなのか？」

愛之介の部屋でランガは唐突に訊いてきた。

今、この部屋に彼がいる理由だが、建前はいつものバイト。本音は精神安定剤？ その言葉が一番ピッタリくる。ランガには内緒だ。

愛之介は顔をあげ、ソファアの前に立つランガを見た。

「どうして？」

「唇から聞いた。構うのは好きだけど、構われるのは死ぬほど嫌いだって、愛抱夢がビーフのときに言っていたって」

あの悪夢のビーフか。

表情に出てしまったのだろう。ランガは「ごめんなさい。嫌なこと言っちゃったかな」と謝ってきた。

そんなふうに謝られれば、かえって傷つく。自分の未熟さを自覚させられるから。

「別にいいよ。構われるというか触られるのが、どうも苦手なんだ。子供の頃からね」

「嫌だって言わなかったの？」

「もちろん言える相手には言うよ。ただと言えない相手もいる」

伯母たちの顔が浮かび、その途端、動悸と吐き気がした。

欧州かぶれの伯母どもは、これが上流階級のスキンシップだとばかり幼いころからベタと触ってきた。頭を撫でたり抱きしめたり、挙句、キスしてきたり。こっちの快、不快なんて微塵も考えやしない。

「愛之介さんはなんて愛らしいのかしら。ほんと天使のよう」

「神道家の跡取りに相応しく育てることが私たちの役目なの」

「だからね。こうやって可愛がつてあげるわ。でも、厳しくしなくてはいけないこともあるのよ。それも愛之介さんを愛しているからなの。わかるわね」

「ありがとうございます。僕はこんなにも愛されて幸せです」

「嫌だつて言えない相手つて、脅されたの？」

「え？ いや、そういうことではなくて」

「だって、そんなことプライマリースクール入る前に習ったよ。自分の体は自分のものだから、触られて嫌なときはちゃんと嫌だつて言いなさいつて。日本は違うの？」

ああ、それは性教育の基本だ。ところが日本ではそんな当たり前のことも教えない。

もちろん愛之介も教えてもらっていない。もつとも、それを知っていて実践したところ

で、もつと嫌な目にあうことは目に見えていた。耐えてやり過ごすことが一番被害が少ないのだと幼いころに学習してしまったのだ。

「日本は色々遅れているんだ。もちろんいいところもあるけど。僕も政治家として責任を感じるよ」

ランガは難しい顔をして、少し考え込んでいるようだった。

「愛抱夢は、誰かからハグされたりキスされたりして嬉しかったこと、ないの？」

ランガは父親や母親からのハグやキスを思い描いているのだろう。それは彼にとつて当たり前の幸せの記憶だ。しかしランガは愛之介の親子関係や家族のことをあまり知らない。

「そういえば、ないね」

抱きしめられたこともキスされたことも、無理にその記憶を掘り起こそうとするれば気分が悪くなる。抵抗したくてもできなかったのだから。

「いつも愛抱夢から、俺にハグしたりキスしたりしてくるのは、あなたが俺より大人だからだと思っていた。でも違うんだね」

「違いはしないよ。君が愛しくて抱きしめたいと思うのは間違いない。けれど君の言うと

おりそれだけじゃないのかもしれないな」

ランガは隣に座り、愛之介の頬に指でそつと触れた。間近から見つめてくる青い瞳が、戸惑うように揺れていた。

「これは、大丈夫？ 嫌じゃない？」

首を傾げ訊いてくる。

愛之介はランガの指に自分の手を重ねた。

「もちろん、嫌じゃないさ」

そう、嫌じゃない。彼の触れてくる指はとても優しく気持ちいい。

「ねえ、嫌だったら嫌だって言つて」

ランガは愛之介の頭を胸に抱き寄せた。

「あなたにキスしていい？」

愛之介の前髪を掻き上げながら訊いてくる。

「してくれるの？」

柔らかな唇が額にそつと触れてきた。

ランガの胸に頬を押し付け心臓の鼓動に耳を澄ます。体からゆつくりと力が抜けていつ

た。

「よかった。俺に構われるのも駄目だったらどうしようかと」

安堵したような声だった。

こんな無防備な状態で誰かに体を預けるなんて、そんな自分に驚いている。

そうか、僕にもできるんだ。

また一つ君に教えてもらった。

「あと、もう少ししていたいんだけど。いいかな？」

愛之介の頭を抱くランガの腕にぎゅつと力がこもった。

「いいよ」 囁くようなランガの声が耳元で心地よく響き、愛之介は目を閉じた。

## 光さす道

神道家の邸宅。

塀で囲まれたプールは、こっそり滑るには格好の場所だった。掃除は行き届いていたが水が張られることもなく放置され誰も近づかない。夜は人氣もなく塀で囲まれているために周囲から見つからない秘密の遊び場だ。広大な庭で屋敷から離れていたこともあつて、ウィールの音は防音対策が行き届いている屋内には響かない。

ふと塀の陰でうずくまる子供の姿が見えた。

愛之介様？

彼は忠の父親が仕える主人の子息だということもあつて、気軽に話しかけられる相手ではない。なかったのだが、自分より年下の小さな子供がたったひとりで、膝をかかえ肩を震わせている。その姿に忠は一步一步、子供の元へと歩み寄つていった。

近づく足音に愛之介は顔を上げ振り向いた。

泣き腫らした目。頬を伝う涙が月灯りを受けキラリと光る。

おそらく彼の教育と躰を請け負っているという三人の伯母や父親に涙を見せることはできなかつたのだろう。だから、どれほど辛いことでも耐えて耐えて、だけど、もう泣くことを我慢することができず、誰にも見られないようにたつたひとりで泣いていたのだ。気づかなかつたふりをして、そつと立ち去れば良かったのかもしれない。ある程度大人になればそうしただろう。しかし当時の忠は十分子供だった。

「一緒に、滑りませんか？」

気がつけばボードを差し出していた。

スケートは楽しい。それは自明のことだった。だから、泣いている愛之介様を、その楽しさで慰めることができるか疑いもしなかった。ただ純粹で愚かだったのだ。

## §

「愛抱夢は愛を取り戻せたの？」

忠をじつと見つめてくるのは、湖面に張った氷を想起させる澄んだ青。

ランガに今日の仕事の流れをざつくりと説明し終えたときだった。彼には、たまにアル

バイトと称して英訳和訳の手伝いを頼んでいる。それなりに役に立ってくれてはいるが、どうしても彼の手が必要というわけではない。ただ主人である愛之介が彼をそばに置いておきたいというのがその本来の目的で、アルバイトはその口実だった。

この子は、そんな主人の思いなど知る由もない。

「少しずつ取り戻しているように見える。君から見ても愛抱夢は変わったと思うか？」

「スケートは前より楽しそうかな。危険な滑りをしなくなっただけ、ジョーやチェリーとも笑って話をしている。でも、スケート以外のことは……前の愛抱夢がどうだったか知らないから、わからない」

無理もない。ランガにとって愛抱夢との接点はS限定だった。彼にとって愛抱夢は「すごいスケーター」の一言だったのだろう。当然、愛抱夢の人となり意識が向くことなどあるはずもない。多分あの日まで。

だが愛抱夢は違う。

Sはイヴを探す目的のためだけに愛抱夢が創設した大掛かりな舞台装置だ。

当時、いつか出会えるだろうイヴを求めてSの中継を逐一チェックするというのが、多

忙を極める愛抱夢の欠かせない日課だった。

そして、ランガを見つけた。

それからというものの愛抱夢はランガを己の思考、行動の中心に据えていた。愛抱夢の世界はランガを中心に回っていたと言っていいたかもしれない。ランガを見出してから、あのトーナメント決勝戦までの一連の愛抱夢の行動は、全てイヴであるランガを手に入れるためのものだった。

それを知らない多くのスケーターたちが危険なビーフに巻き込まれていくことになる。

政治家として売り出し中の神道愛之介はまさに順風満帆だった。清廉潔白で爽やかな若手人気政治家。女性人気が特に高かった。

一方、裏の顔、むしろ本来の彼である愛抱夢は疲弊していた。壊れていたと言ってもいい。イヴを探して繰り返される期待と落胆。愛抱夢は追い詰められていた。彼の精神はとうに限界だった。もうあとはない。

おそらくそのせいだろう。最後のイヴ候補であらうランガに対する執着は常軌を逸していた。

そこまで愛抱夢にイヴを、ランガを求めさせてしまったのは自分のせいだ。あのとき彼の父親がボードを燃やしたとしても、自分が裏切りさえしなければこんなことにはならなかった。そう忠は自分を責めた。

その後、忠は何年も愛抱夢のすぐ近くにいながら彼の心の扉を開かせることはできなかった。そのための鍵を持ち合わせていないのだ。

大人社会の中、若くして父親の地盤を引き継いだ愛之介を守ることには忠は徹してきた。有能な秘書として。

今更、心を閉ざした愛抱夢に言葉を届けることは不可能だった。できることは、トーナメントに勝ち、大きな問題を引き起こす前に愛之介からスケートを取り上げることだけ、という極論に忠は行き着いてしまう。

その間違いに気がついたのは、暦という赤毛の少年の負けてもなお楽しげな笑顔に、かつて見せた幼い愛之介の笑顔の記憶が重なったときだった。

そして、それは同時に万策尽きたことを忠に突きつけた。それだけ自分の罪は重かったのだ。

あとは愛抱夢の心の大半を占め、愛抱夢すら超えるかもしれない稀有な才能を持ったラ

ンガに委ねるしか術はなかった。

思い起こせばひどい話だ。こんな子供を危険に晒してしまったのだから。

この子は、愛抱夢の生い立ちや背負っているもの、忠との関係をまったく知らない。

こうしてS以外の交流が深まった今でも「すごいスケーター」以外は、「偉い政治家」「地元の名士」「お金持ち」というような子供っぽい漠然としたイメージしかないのだろう。

それでいいと思う。大人のしがらみから自由にいられる彼だからこそ、あのと託せた。結果、かたく閉ざされた愛抱夢の心の扉をこじ開け、その中に飛び込むことができたのだ。

「君のおかげだよ。改めて感謝する」

ランガは不思議そうな顔をした。どうやらピンときていないらしい。

「あの、スネークはイヴがなんだったか知っている？」

「なぜ、私に訊く？」

なかなか厄介な質問だ。

「あなたが、愛抱夢が愛を取り戻すには俺がふさわしいって言ったから、イブと関係しているのかと思って。話したくなければ別にいいけど」

イブについて、忠も具体的に何を意味しているのか完全に理解しているわけではない。単純に考えると、愛抱夢と名乗りイブを求めるということは、恋人や結婚相手のことと考えてしまうのが普通だろう。

しかし、それは、おそらく違う。結果的にそうなる可能性もゼロではないが。

「愛抱夢が求めた唯一の他者。そのくらいしかわからない」

「愛抱夢は仲間などというあやふやなものは信じていないと言っていた。それなのに俺を連れて行こうとした」

妙なことを言う。連れて行くとは、どこへ？

「あのビーフ中にそんな話を？」

「うん。でも、そこ楽しくないところだった。スネークも、あそこへ行ったことあるの？」

「すまない。あそこって何の話だかよくわからないのだが」

「ごめんなさい、説明下手で。スネークは行ったことないんだね。そこへ入ったとき愛抱

夢は『ようこそ、ふたりだけの世界へ』って、こう振り返った。俺が崖から落ちる少し前かな」

ランガは両腕を下にして広げたポーズをとった。

「落ちる前？ ふたりが向かい合って滑っていたことはなかったはずだ。それに、あの状況でそんな会話ができたというのか？」

ランガは難しい顔をして、何かを考えているようだった。

「あれ？ ずっと向かい合って話していたような記憶がある。声は、聞こえているはずない？ けど何を言っていたかははっきり伝わってきた。今まであまり気にしていなかったけど、あれは何だったんだろう」

ランガは何度も右や左に首を捻っては困惑している様子だった。

「そこ、愛抱夢は素晴らしい世界って言っていたけど、真っ白で、何も見えない何も聞こえない何も感じなくなっていくんだ。父さんが死んだときみたいに。だからあそこに愛抱夢を置いていっちゃいけないと思った。それなのに愛抱夢は嫌だつて。くだらない世界には戻りたくないって」ランガは口もとに小さな笑みをふわりと浮かべた。

「まるで駄々っ子みたいだったよ」

この子はいつたい何を見たのか。

もしかするとランガが飛び込んだそこは愛抱夢の世界。誰も侵すことのできない聖域だったのだろうか。そこに辿り着ける資格を持つているのは特別な才能を持つ選ばれたスケーターだけ。その世界に至り、かつ闇に引きずり込まれることなく、愛抱夢に手を携え光の中へと引き戻した。

そうか、君はそんなことをやってのけたのか。

現状それができるのはランガしかいなかった。この子がいてくれた奇跡に感謝しよう。あのときの自分はもう許されることはない。そう忠は思っている。

けれど、愛之介が放った言葉を思い出す。

——お前は一生僕の犬だ。

彼の父親である愛一郎に唯々諾々と従うだけの犬だった忠が、少なくとも父親の犬でなくなつた瞬間だった。

一度壊れてしまつたものを元に戻すことは叶わない。それでも新しい関係を構築しなおすことはできるのかもしれない。

「俺、スネークにお礼を言わなくちゃって思っていた」

「札？」

「うん、スネークが愛抱夢にスケートを教えてくれたから、俺、愛抱夢に出会えた。だから」

忠は目を見開いてランガの顔を見た。

「だから、ありがとう」

見落としてしまいそうな小さな微笑が、柔らかな朝の光の中へゆつくりと溶けていった。

## 俗世で生きる

「ランガくん？ もう寝たかな」

そつとノックしてからゲストルームへと入っていく。

書類の英訳や和訳を手伝うという名目の不定期アルバイトは、少しでも家計を助けたいと思っている孝行息子の彼にとって渡りに船なのだろう。頼めば二つ返事で引き受けてくれる。

集中的に片付けて欲しいと理由をつけていつも泊まりがけにしてもらっている。けれど、それは建前。本音はできる限り君を側に置きたいだけだ。

開けっ放しの窓から差し込む冴え冴えとした月の光を浴びた彼の寝姿がベッドの上にあつた。

ああ、美しい。なんて清らかなんだろう。

あどけない寝顔は実年齢よりずっと幼く見える。ビーフ時の好戦的な彼とは別人だ。それにしても君は警戒心というものが無すぎる。その気になれば、僕は君にどんな酷いこともできるんだ。僕は何度も夢の中で君を犯している。知らないだろう？ 抵抗する

君を押さえつけ猛ったペニスで貫きたい。熱く絡みつく粘膜の中へ自分を深々と埋め、何度も突いて、泣き叫ぶ君を汚したい。

そんな嗜虐心に突き動かされてしまえば、僕は君にとっても残酷なことをしてしまうかもしれない。

軽蔑するかい？

でも、もうひとりの僕は君をずっと守りたいと思っている。誰からでも、僕からも傷つけられないように、君を宝石箱に入れて大切に仕舞って置きたいくらいだよ。

そんな相反する二つの情動が愛之介の中でせめぎ合っていた。引き裂かれるような痛みを胸に与えながら。

窓から流れ込むひんやりとした夜気が頬を掠めた。愛之介は開け放たれた窓とカーテンを静かに閉めた。朝方はもっと冷えるだろう。理性を保てるうちに自分の寝室に戻ろう。

眠るランガの髪をそつと撫で唇で触れた。

そのとき、手首を掴まれた感触に慌てて体を起こす。目を覚ました様子はない。ランガはそのまま愛之介の腕を胸に抱きしめ頬を寄せた。

やれやれ。僕の腕は抱き枕とかぬいぐるみのようなものなのか。この腕を引き抜けば起

こしてしまうかもしれない。安心しきつたような寝顔に、それは少々かわいそうな気がした。

指が自然に外れるようになるまで、こうして彼の寝顔を眺めていればいい。

ランガの唇が微かに動く。

「ダッド……」

愛之介は苦笑した。

父さん、か。残酷だな君は。萎えることを言ってくれる。

ランガはカナダ人の父親と死別している。父親との死別は自分と同じなのだが、その父子関係は全く違う。

彼の滑りの基礎をつくったスノーボードは父親の指導だと聞く。それは今のスケートの滑りへと繋がっている。もともと才能はあったのだろう。それでも父親という優秀な指導者がいて初めて滑りの才能を開花させることができたのだ。

あまり自分のことを話さない彼だが、父親をどれほど愛し、そして愛されていたかは伝わってくる。

愛之介も若いうちに父親を亡くしている。

けれど父親を失って大きな喪失感を抱えることになったランガと自分は違う。父親である神道愛一郎が亡くなったときの気持ちを一言で表すのなら開放感という言葉が一番近い。

愛之介にとって父親は俗世の象徴だった。

神道愛一郎は威圧的で強権的な男だった。家長として絶対的な権力を持ち、神道家内のことを全てを意のままにしていた。

もちろんスケートに対しては、これっぽちの理解も示さなかった。

政治家としての手腕は確かに素晴らしかったのだろう。今の自分は父の足元にも及ばないなんてこと、まだひよっこ政治家でしかない愛之介は身に染みている。

だから畏怖とともに政治家としての神道愛一郎を尊敬もしていた。だが父親としての彼、その人間性はむしろ軽蔑していたのかもしれない。愛し愛されていると自らに言い聞かせていたところで、くだらない世界を構成する一部であつたことには変わらない。

愛之介は指でランガの髪を弄りながら、ぽつりと漏らす。

「君は僕のことをどう思っているんだろう」

もし僕が今の年齢より十歳ほど上だったのなら、君はもう少し僕に甘えてくれていたの

だろうか。君がお父さんにそうしたように。もつとも、そうなる君が僕を受け入れてくれることは今以上に難しくなってしまうだろうね。僕も君に欲情してしまうことの後ろめたさをもつと強く感じていたに違いない。

やがてランガの指から力が抜けたことを確認して、愛之介はそつとベッドから離れた。

「おやすみ、ランガくん」

早朝、路面を滑走するウィールの小さな振動音が聞こえてきた。

ランガが滑っている。おそらく忠も一緒だ。ランガは忠と滑りたがった。希望を叶えてやらないわけにはいかない。空いている時間は自由に滑っていいとふたりに伝えてある。

愛之介は、物心がついてから一度も水がはられたことのないプールへと向かった。

子供のころ忠と一緒に何度も滑った。愛之介にとってスケートの原点が詰まっている思い出のプールだ。

スケートは神道家に縛られ続けてきた愛之介の唯一の息抜きであり救いだった。スケートがなかったら幼少期の記憶の中に「楽しい」は存在しなかったかもしれない。

その記憶を随分と長いこと封印してきた。

朝の光の中、ふわりと宙に浮くランガの姿が目には飛び込んできた。

高く伸びやかなエア。美しいフォルム。逆光で縁取られた輪郭が金色に輝いていた。あのとき見た彼の周囲に舞う白い雪と羽を一瞬幻視して、愛之介は息を呑む。

着地したランガはボードを蹴り上げ掴むと、愛之介に向かってダッシュしてきた。

「おはよう、愛抱夢。うるさかった？」

「おはよう。うちの屋敷の防音対策完璧なんだ」

「見て、スネークから教わった」

言うなりランガは再びプールへ飛び込み滑り出した。

「おはようございます。愛之介様」

「おはよう、忠。ランガくんはどう？」

「恐ろしい吸収力ですね。基本でもコツでも一度教えればほとんどのことはこなせる。その上こつちが想像もしなかったような形であつさりと応用して見せてくれます」

「知っているよ」

「それは彼の滑ることへの純粹さと素直さのなせる技でしょう。まるで昔の……」

忠は言い淀む。愛之介はふつと小さな笑い声を漏らした。

「昔の僕みたいだと言いたいのか？ 忠」

「あ、はい。申し訳ありません」

「別にいいさ。きつとお前の言う通りなのだろう」

忠は口元に穏やかな笑みを浮かべた。

「私はこの後の準備もありますので先に失礼させていただきます」

「ああ、よろしく」

忠は一礼してから屋敷へと向かった。

ボードを抱え戻ってきたランガが息を弾ませ訊いてきた。

「どうだった？ 今の」

「実にラブリーだったよ。ランガくん」

「また、それ？」ランガは不満そうに眉を寄せた。

「最高の褒め言葉なんだけどね」

「あれ？ スネークは？」

「仕事の準備があるからね。一足早く戻ったよ」

「スネークが愛抱夢の先生だったって、よくわかった」

「似ているかい？」

「あれは愛抱夢と同じ滑りだ！　って思うことがよくある」

少し前の自分だったら、そんな指摘は不快に感じたのかもしれない。でも今は大丈夫だ。

「そうか。君にスケートを教えてくれたのはあの赤毛の、確か暦って名前だった？」

「うん。暦は俺のスケートの先生でメカニックかな？　俺に合うボードは売っていないからって暦が作ってくれた。暦のボードが無ければ俺は今みたいに滑れなかった。暦って本当にすごいんだ」

親友の話をするときのランガの表情は生き生きと輝く。今ではそんな彼に心を掻き乱されることはなくなった。

「それにしても滑りは似ていないね」

一瞬の沈黙。それから「あ、そっか」とランガは何かに納得したようにボンと手を打った。

「スケートを教えてくれたのは暦だけど、滑りを教えてくれたのは父さんだったからだ」

「君はお父さんからスノーボードを教わったんだっただね」

ランガの滑りの基本はスノーボードだ。こと「滑る」ということに対する天才性は幼い頃から親しんだスノーボードで培ったものなのだろう。

「俺、父さんと滑るスノーボードが大好きだった。でも父さんが死んで楽しさがわからなくなつて。それで乗れなくなつて。暦はそんな俺に滑ることの楽しさを思い出させてくれた。スケートの楽しさ、たくさん教わった」

目をキラキラさせて話す親友のこと。そんなランガは眩しくて少しだけ羨ましかった。一生ものの親友を手に入れた彼が。

苦いものが込み上げてくる。自分たち大人が壊してしまった二度と取り戻せないものを見せつけられたからだ。それは微かな嫉妬と、同時に自分たちのような失敗は繰り返して欲しくないと願わずにはいられない。

「それなら僕は赤毛くんに感謝しなくてはいけないな。彼がいなければ君はスケートをやることもなく僕は君と出会えなかった。これを言い出すとキリがないけどね」

「俺も、俺もスネークに感謝するよ。スネークがあなたにスケート教えてくれたから俺は愛抱夢に出会えた」

そうか、君も僕と出会えたことを喜ばしいことと思ってくれていたのか。

「嬉しいなあ、ランガくんがそう言ってくれるのは。では君にとつての暦くんが僕にとつての忠みたいなものだったのかな」

ランガはうーんと首を捻った。

「俺にとつての父さんが愛抱夢にとつてのスネークだよ。滑ることの楽しさを初めて教えてくれた人なんだから」

ああ、なるほど。そういうことか。

ランガが昨日ぼつりと漏らした言葉を思い出した。

「愛抱夢と俺、ちよつと似ている」

「そうか」とだけ言つて追求はしなかった。したところで彼がそう感じた理由を明確に言語化することはできないだろう。

ランガは自分の感情や受けた印象をうまく説明できない。「ドキドキする」とか下手すると「なんか変」みたいな漠然とした表現をするが、それが何かを当の本人もよく掴めていない。詳しい説明を促すと首を傾げて黙り込んでしまう。それはまだ日本語が不慣れだということもあるだろうが、おそらくカナダにいたころからそんな調子だったのだろう。

あの赤毛の少年が初めての友達だと聞いた。この歳まで友人がいなかった、もしくは必要としていなかったというのは驚きだ。察しのいい両親の愛情に包まれ、他人との関わりを必要としてこなかったのかもしれない。

もつとも、それは自分も大差ない。だが偽りの世界で神道愛之介という人間は、表層だけをとり繕い多くの役立つ他人と親交を深める、ということを容易くやってのけてきた。他者の感情に寄り添ったり共感したりという演技は上手かった。そう自負している。人心収攬の才能に恵まれた若手政治家という評価を得られたのだから演技賞くらい貰えてもいい。嬉しくはないが。

そんな自分に比べランガは圧倒的に経験値が足りていない。

そして今、腑に落ちた。ランガが似ていると感じたものの正体。

ふたりとも滑ることの楽しさを最初に教えてくれた大切な人を失っている。

ランガは死別という形で。愛抱夢は裏切りという形で。

そうして、あの大好きだった世界の中でふたりともひとりぼっちになってしまった。ふたりにとって楽しいはずの世界は孤独を強く突きつけてくる場所になったのだ。

愛抱夢とランガ。スケートとスノーボード。失い方が違えば、もたらされる情感は大き

く異なる。

ランガは父親の死と向き合えず、真つ白な虚無の中でひとりぼっちでたたずむことしかできなかった。母親に連れられて来た沖繩の明るい陽光の中にも、世界は色を失くしたまま。そんなランガの無彩色の世界を再び色づかせたのは、暦という赤毛の少年だったのは間違いない。

無二の親友とスケートを得たことによって、ランガは再び滑る楽しさ思い出すことができたのだ。

一方、愛抱夢の絶望と孤独。それはスケートの師であると同時に生まれてはじめて心を許した相手の裏切りによるものだった。暗闇の中に突き落とされ人間不信に陥った愛抱夢は、楽しく滑っていたはずの仲間を自らの意思で切り捨てた。いつか裏切られ傷つく前に。ただ怖かったのだ。

そんな中、愛抱夢は偶然入り込んだゾーンに夢中になる。あの素晴らしい世界があれば、あやふやな仲間などいらないと思えた。なのに何故か、共にいてくれる存在イヴを探した。そんな矛盾に目を背けたまま何年も探し続けて、ようやく見つけたイヴがランガだった。

それなのにランガはイヴになることを拒否した。「そつちは楽しくない」と。

あの決勝戦、ランガは愛抱夢を置き去りにしてゴールすることもできたはずだ。なのに、それをしなかった。

「滑ろう。ひとりじゃ楽しくない」微笑みとともに差し出されたボードを愛抱夢は受け取った。

並走しながら、少しずつ取り戻していく「楽しい」の記憶。忠と、やがてチェリーやジョーたちと。

愛抱夢のプライドが「くだらない」と意地になって最後の抵抗を試みる。だが所詮なけなしの抵抗だった。

君が思い出させてくれた滑る楽しさを、僕はもう手放さない。

そこまで思考を巡らせ、ふと気づく。

待てよ？ そうすると僕にとつてのランガくんは、ランガくんにとつては曆くんになるということなのか？

いや、黙っていよう。それは断じて認めたくない。

「愛抱夢？」

掛けられた言葉に意識を引き戻された。振り向けば青い瞳が怪訝そうに愛之介の顔を見つめていた。

「どうかした？」

「今日一日の過密スケジュールを少し考えていた。大人は色々大変なんだよ」

戯けた笑顔で適当にはぐらかした。大人は大変、というのは子供を煙に巻くには良いフレーズだ。

「なんか変」

ランガは敏感に何かを察したのか、眉を寄せ口を尖らせた。

これも使い過ぎれば不信がられるな。ほどほどを肝に銘じておこう。

「それよりそろそろ朝食だ。シャワーを浴びて支度して。急いでね」

「あ、こんな時間」

慌ててエントランスへ駆け込んで行くランガの背中を見送り、煙草に火をつけた。

一服してから戻ろう。

ランガを俗世から引き離し、ふたりだけの世界に閉じ込めておく意味は既に失ってい

る。

僕は俗世で生きていくことを選んだ。君がいるこの世界で。その方がずっといい。

君のことを何よりも大切に思っている。それでも君を性愛の対象として欲している自分も否定しない。

君の清麗さは一度抱いてしまえば儚く消えてしまうものなのだろうか。焦れば永遠に君を失うかもしれない。それが何よりも怖い。僕は臆病なんだ。

僕は僕の欲望と折り合いをつけないといけない。

ああ、もちろんうまくやっていくさ。

いつか君が僕を求めてくれる、その日まで。

## はじまりの合図のキス【R18】

ランガは那覇に住むようになって一年と少しになるのだが、那覇から出たことはほとんどないと言った。旅行らしきことはスケート仲間と宮古島に行つたくらいだという。その宮古島のビーチに感動したことを嬉しそうに話してくれた。

それならば、ということで一泊二日の小旅行に彼を誘った。

時間的に離島は無理だが、本島でも綺麗なビーチはそこそこにある。

さて、旅行はいいが政治家としての自分の立ち位置を考えればどう監視の目を向けられているのかわかったものではない。最悪ランガをスキャンダルの中巻き込むことになる。やはりリスクは最小限に抑えるべきだろう。

変に勘ぐられるのは面倒だ。かといってこそそそするのは性に合わない。外堀を埋めておけばいいと、まずは彼の母親から攻略することにした。

ランガはあっさりと「この人が、話していたスケート友達で、たまにアルバイトさせて

もらっている人」と紹介してくれた。前もって彼が一泊二日の近場観光のプランを説明してくれたこともあつてスムーズに話はまとまつた。

息子さんは責任を持つてお預かりし無事に家までお送りします。彼には給料以上に働いてもらっていますからご褒美ですよ。

「この子をどこにも連れて行つていなかったから助かります。お忙しいでしょうに、本当にいいのですか？」と恐縮し「よろしくお願いします」と何度も頭を下げられた。

それと政治家としての自分の正体も変に隠せばそのことを知ったときに、かえつて混乱させるだろうと判断し、さらつと名刺を手渡した。彼女は驚いたように目を見開き、名刺と愛之介の顔を交互に見た。そこは爽やかな神道愛之介スマイルで押し切った。

胡散臭さなんて微塵も感じさせるものか。

よし、母親の信頼は勝ち取れた。第一関門突破と考えていいだろう。多少の後ろめたさ  
は見て見ぬ振りをしておこう。

そして当日。忠に借りさせたレンタカーを使うことにした。神道家の車では少々仰々しい。

多忙を極める愛之介にしてみれば、無理やりスケジュールを調整して捻出した貴重な休日だった。

那覇からだとも考えても日帰り旅行の移動距離なのだが、そんなところにすら行ったことないという彼だ。問題ないだろう。移動に時間を取られるのはもったいない。

美ら海水族館でしばし遊んで今帰仁城跡なきじんぐすくに立ち寄り琉球王朝の歴史に触れてもらった。

それから宿泊予定のホテルがある北谷サンセットビーチちやたんへ向かった。そこは夕日が美しい有名なデートスポットという俗っぽさはあるが、雪山育ちのランガなら十分楽しめるだろう。

ホテルにチェックインしてビーチへと向かう途中、白いチャペルが見えた。ウエディングドレスの新婦とタキシード姿の新郎が階段をゆっくりと降りて行くところだった。そしてブーケトス。拍手と歓声が沸き起こる。

「教会で結婚式？」

「ああ、あくまでも結婚式専用の教会。リゾートウエディングだ」

「何、それ？」

「県外から新婚旅行を兼ねて、こっちで結婚式を挙げるカップル結構多いんだよ。沖繩にしてみれば貴重な観光資源だし、カップルにしてみれば安上がりで式、披露宴が開催できる上に新婚旅行も兼ねられる。あと、内地は梅雨で雨ばかりだけど、沖繩ならタイミングよければ梅雨明けていているからね。濡れずに憧れのジューンブライド結婚式をあげられる」

「梅雨って日本で初めて知ったけど、雨季のことだよね？」

「まあ、そうだね。内地の梅雨明けは七月中旬過ぎだけど、こっちは梅雨入りも梅雨明けも一ヶ月ほど早いからね。運が悪いと七月に明けるなんてことあるけど」

「ふーん」

「憧れる？」

「雨が多いとスケートできなくなるから、憧れない」  
なぜそうなる。

「梅雨じゃない。ジューンブライドに、だ」

ランガは顔をしかめ口を尖らせた。

「それ、憧れるのは女の人でしょ？　なんで男の俺が憧れるの」

そこまで露骨に嫌そうな顔をしないで欲しい。少しくらい可愛らしく頬を染めてくれてもバチは当たらないと思うのだが。まあ、この子にそんな反応を期待しても無駄なことは分かっている。

「君は容赦ないね」愛之介はため息混じりに言った。

陽が傾きつつある浜辺をそぞろ歩く。

彼はキョロキョロとあたりを見回した。

「なんか、カップルだらけだね」

「ロマンチックな夕日が売りのデートスポットだからね。気にしない」

本当は他のカップルと同じように、彼の肩や腰を抱いてエスコートしたいのだが、ここはSではない。この美貌の少年相手にそれをやれば流石に怪しまれそうだ。どこで誰が見ているかわからない。我慢我慢と政治家新道愛之介として自制心を働かせた。

小さな波の音を聞きながら夕暮れの海を眺める。徐々に落ちていく太陽が水平線に触れ海面と西空をオレンジ色に染めていた。

「海に沈む夕日、初めてゆっくり見たような気がする」

「那覇でだって普通に見られるのに？」

「見ていたはずなんだけど、スケートやっていたから記憶に残っていないんだと思う」

「君も大概スケートバカだな」

「人のこと言えないでしょ」不満そうな物言いに「そうだったかな」と返す。

「山で見る夕日と全然違うね。海面でキラキラ反射してすごく綺麗だ」

「気に入ってくれた？」

「もちろん。今日は連れてきてくれてありがとう。暦たちは海なんて珍しくもなんともないって言うんだ。どうせ旅行するのならハラジュク行きたいとかU.S.J.行きたいとか雪の中でスキーやスノーボードしてみたいとか言っていた」

まあ無理もない。もともとスキー場で雪と大格闘した拳句、二度と行くかと後悔する沖縄県民は多い。

「いつでも行けるとなると敢えて行こうとしないというのはどこでも一緒だよ。東京の人でスカイツリーに行ったことない人なんて普通にゴロゴロいる」

「いつか暦にカナダの雪を見せてあげたいな。もちろんあなたもね」

「いいね。君の故郷でスノーボードを体験したい。僕は君とスペインにも行きたいかな」

「なぜ、スペイン？ Sでのコスチュームもマタドールだよね」

「旅行で周ったヨーロッパで一番しつくりきた。空気感……フラメンコの本場、情熱の国だからかな」

そんな取り留めも無い会話をしているうちに、太陽は水平線の下に沈み、空は本格的な闇に覆われようとしていた。それとともに星々の煌めきも強くなっていく。

暗がりの中、少しならいいだろうと少年の肩を抱いた。彼は特に戸惑う様子もなく自然に体を寄せてきた。そのまま目を閉じ耳を澄ます。寄せては返す波音が星闇の中でさらに静かだ。

時間の流れが止まったようなこのふたりだけの空間をもう少し堪能していたかったが、残念ながら時間だ。

「さてと、ホテルに戻って食事しようか」

声をかけたタイミングでグーと空腹を訴える音が聞こえた。

彼は「ほんとうはすぐお腹空いていた」と少し恥ずかしそうにお腹に手を当てた。  
うん、知っていた。この子はまだ色気より食い気だったこと。

振り向けばライトアップされた観覧車が目に飛び込んできた。

「あれは？」ランガが指さした。

「沖縄唯一の観覧車なんだ。乗りたいかった？」

「少し」

「今日はもう無理だけど明日なら一周回るくらいの時間はある。どうする？ 乗るか  
い？」

「乗りたい」

「了解だ」

ホテル内のイタリアンレストランにコース料理を予約してある。本当は食べ放題ビュッ  
フェのほうが彼は喜ぶだろうことはわかっているのだが、それは抵抗がある。

ビュッフェを選べば、この人目を引く容貌の少年を明るい照明の下で多くの人の視線に  
晒してしまうことになる。用心するに越したことはない。

彼は黙々とよく食べていたが、発する言葉は相変わらず美味しいのみだった。それで  
も、その表情から満足してもらえていることは伝わってくる。

ディナーを終え部屋に戻る。

指定した部屋はオーシャンビュールーム。バルコニーに出れば海が一望できる。こだわったのはそれだけだ。他は大袈裟で無い、ほどほどの部屋がいいと判断した。

シャワーで汗を流しバスローブを着てバルコニーにふたり並んで暗い海を眺めた。

「そういえば今日煙草吸っていないね」ぽつりとランガが言う。

「持つてきていないんだ。このホテル全室禁煙だし、君といるとあまり吸いたいと思わなくなるからね」

「そうなんだ」

そう言ったきり何かを考え込んでいる様子で押し黙っている。

恐らく煙草の話題に意味はない。

「何か僕に言いたいことがあるんじゃない？」

「うん、訊いていい？」

「どうぞ」

「愛抱夢は、俺とセックスしたい？」

また唐突かつストレートだな。

「そりやもちろん。でも、いきなりどうしたの？」

「愛抱夢は俺の唇にキスをするようになった。それから結構経つよね。あなたは俺のことを性愛の対象として見ているって言っていた。なのに、それ以上のことしようとしなから、どうしてだろうとちよつと気になって。旅行に行こうって言われて、そのつもりなのかなって」

確かにそのつもりだった。彼が嫌がらなければの話だが。

もともとセックスで得られる肉体的快感を第一の目的にすることはない。だったらとつて手を出している。その機会はいくらでもあった。そんなこと準備も含め一時間でさつさと終わらせることができる。セックスは目的ではなく手段だ。ふたりだけの世界。その共有のための。

ならば限られた時間の中で刹那的な快楽のためだけにやるものではないと思えた。ゆつくりとふたりだけの時間を過ごしたかった。その流れの中でこの少年を抱けるのなら、それは僥倖というものだろう。

今まで彼にキス以上を求めなかったのも、今回、泊まりがけの旅行に誘った理由もそれだ。

それが今、奸計をめぐらす必要もなく彼は自分の手の中にあつかりと堕ちてこようとしている。それなのに怖気づき踏み出せない自分がいる。これはいったい何なのだ。

「君は未成年だからね」

完全に思考停止した返答だ。

「性交同意年齢は過ぎていくけど」

淫行になるでは誤魔化せなくなっているか。要らん語彙と要らん知識が増えているのも厄介だ。

「それでも君は子供で僕は大人だ。法的に問題なくても道義的に問題ありなんだよ。特にね、僕は売り出し中の人気若手政治家つてことでメディアに見張られる立場にある。君をそんなトラブルの渦中に巻き込んでしまうわけにはいかない。親御さんにも心配や迷惑をかける」

「なんでバレると思っているの？ 俺、誰にも言わないのに」

その通りだ。部屋で一晩一緒に過ごしたとしても、密室で何が行われたかなんて、目ざといマスコミ連中だつてわかりはしない。相手が女子高校生なら大騒ぎだろうが、男子高校生、まして母親の許可をもらっているという証言があれば、勘繰る方がどうかしてい

る。

「一理あるね。けれど君は本当に僕とセックスしたいと思ってるの？　そうでなければやめたほうがいい」

大きく波立ちはじめた心とは裏腹に、分別ある大人の対応を取る。淡々と子供に諭すような落ち着いた口調で、すらすらと紡がれる言葉が虚しく響く。

「やったことないから、わからない。やってみればわかるかもって」

真っ直ぐ向けてくる眼差しは純粹すぎて、その眩しさに思わず目を逸らした。

周囲の目、メディアの監視。那覇を発つてからずっとそればかり気にしていた。それは未来あるまだ未成年のランガを守るためと自分を納得させていた。でも、本音は政治家である自身の保身のためだ。それなのになんて空々しい。

卑怯だな。神道愛之介という男は。政治家という今の地位に固執している癖に、この少年を手放すこともできない。

いや、それも違うか。政治家に固執しているのは神道家だ。自分はその神道家に支配されているだけだ。

ある絶望的な結末が、暗く澱んだ淵からふっと浮かび上がりそうになった。きつく目を閉じ、それを識閾下に封じた。

意識するな。考えるな。見るな。それをしたら最後、僕は君を……。

そのときランガのバスローブのポケットでスマホの着信音が鳴った。ごめんと一言謝って彼はスマホを取り出し画面を操作する。

「あ、母さんからだ」

ランガの頬が緩んだ。

「連絡し忘れていただろう。心配しているんじゃないのか？」

「全然。母さんの友達が結婚して写真が送られてきたからと転送してくれた。俺のことも可愛がってくれた人だから。本当は母さん式に行きたかったみたいだけど遠いからね。見る？」

「僕が見ていいの？」

「大丈夫」

すつと手渡されたスマホ画面を見れば、二組のカップルが写っていた。ウエディングドレス姿の新婦ふたりとそれぞれの後ろにスーツを着た新郎。

「ジューンブライドだね。しかもダブルウェディングか」

「違うよ」とランガは画面に人差し指を置いた。

「え？」

「結婚したのは、前にいるふたり。後ろにいる男の人はふたりの元パートナーなんだ」

なんでもないことのようにランガはさらつと言う。面食らった。

そうだった。カナダでは同性婚が普通に認められていたのだ。

決めつけていた。知識としてはある。理屈ではわかつている。それでも先入観に縛られ何の疑いも無く男女二組の組み合わせ以外の可能性なんて想像もできなかった。一般的日本人の、何よりも神道家の価値観にどっぷりと染まっている自分では。

「日本とは違うね」

「ここまで来るのは大変だったって母さんから聞いた。子供のこととか、解決しなくてはいけないことが山のようにあって何年もかかったって」

他人には想像もできない苦悩を味わってきたのだろう。それでも多くの困難を乗り越えてきただろうふたりの笑顔は、こんなにも幸せそうだ。

写真の笑顔に釣られて自然に口元が綻んだ。それと同時に心がふつと軽くなるのを感じた。

自分を何重にも縛る神道家の鎖。それらから逃れる術をまだ見出せていない。

いずれ伯母たちが選んだ相手と結婚することになる。そんな未来しか見えてこない。今はまだ。

その現実を意識から遠ざけていた。考えないようにしていた。ただ逃げ続けていた。

——君と僕とではどこにも辿り着けない。

気づいてしまったら全てが終わる。その結末を何よりも恐れていた。

そんな自分が刹那的にこの子を抱くことは酷く残酷なことだ。それが迷いの正体なのだ。

けれど、がんじがらめに巻きつく鎖が、一本だけ外れた音が確かに聞こえた。

今の自分がイメージできる未来が全てではない。

ランガはポケットにスマホを戻し「ごめん、話途切れさせちゃつて。えっと、続き」と愛之介に視線を戻した。

「あなたは、いつも俺のこと愛しているって言ってくれるよね。俺はあなたのことが好きだけど、愛しているのかよくわからない。俺は父さんを愛していたし母さんを愛している。暦のことだって大切な友達で大好きだからラブって言っていると思う。けれどあなたへの好きはそれとは違う。あなたとハグするのが好きだ。唇にするキスも好き」

ランガはすつと愛之介の手を両手で持ち上げ包むように握った。

「この手に触られるのが好き。もつと触って欲しいと思っている。俺もあなたにもつと触りたい。あなたをもつと感じたい」

するりと首に腕が回された。

「あなたは今日ずつと変だった。あまり俺と目を合わせようとしなかったし、何か悩んでいるように見えた。俺に飽きたの？」

語尾が微かに震えていた。

自分の中にある漠然とした不安をこの子は敏感に感じ取っていたのか。

「僕が君に飽きる？ そんなことあるものか」

絞り出すように言い、その体が折れるほど強く抱きしめ唇を重ねた。

長い口づけのあと、愛之介はランガを抱き上げベッドへと運んだ。そのままシーツの上に横たえバスローブの胸をはだければ、オフホワイトのバスローブよりなお白い肌が晒された。

なだらかに隆起した胸が呼吸とともにゆつくりと上下している。

これは毒だ。

この肌に赤い印をいくつも刻んでいきたという衝動をねじ伏せ指で触れた。

沈み込むような柔らかさを持った女の体とは違う。適度な硬さとしなやかな弾力を持つた筋肉。それを覆うきめ細かな肌。

脇腹から胸に向かって手のひらを滑らせていけば、ランガはくすぐったそうに身を振る。親指の腹が薄紅色の突起に触れると彼は息を詰めピクリと震えた。指の動きを止め彼の顔を見れば、自分の反応に困惑の表情を浮かべている。

少し意地悪したくなった。

「感じた？　どんなふうに？　言ってみて」

みるみるうちに、彼の顔から首筋まで朱に染まっていく。

「なんか変な感じがした」

「気持ちよかった？」

「わからない」

「じゃあ、やめようか」

「え？」

きょとんと目を丸くした彼の表情のあどけなさに内心で頭を抱えた。とんでもない犯罪行為のような気がする。

「嘘、やめない。君のここは敏感だね」

ランガの胸に顔を近づけ熱い息を吹きかけながら、突起を口に含み舌で潰すように弄んだ。

彼は小さな悲鳴とともに覆い被さる頭を掴み胸から引き剥がそうとした。邪魔をする手を彼の頭上でまとめて押さえつけた。

執拗に愛撫を続けられれば逃れようと自由に動く脚をジタバタと動かした。ランガの身体能力でこんなふうに暴れられれば、支配下に置くことなど並大抵の男には難しいだろう。

でも僕に、この程度の抵抗は無駄だ。

ランガはやめてとは言わない。やめて欲しくないからだ。かといって苦痛と紙一重の快感、受け流すには強すぎる。どうしていいのかわからず混乱しているのだろう。

これ以上虐めても可哀想だ。

頭を持ち上げ、拘束していた両手首をそつと外した。雪のような髪を撫でながら顔を覗き込めば涙目になっている。

「君の胸が感じやすいってことがわかったのは、収穫だな」

「そんなことない」むきになって無意味な反論をしてくる。

バカにされたとも思っただろうか。懸命な様子で睨みつけてくる、その強がりがいじらしい。

「褒めているんだよ。エアが誰よりも高いことと同じように君の優位性だってこと」

我ながらしょうもない例えだ。

「優位？」

「胸が感じやすいってことは、後ろでいきやすいってことだから」

「うしろでいきやすいって？」

ああダメだ。頭の上にクエスチョンマークが五つくらい並んでいる。

少年の無垢すぎる反応を見れば、今日は最後までこの行為を持っていけそうにない。むしろそのことにホッと胸を撫で下ろす自分がいる。

「今はまだ気にしない。おいおいわかってくるから」

言いながらバスローブを脱ぎ、彼の背中とシーツの間に手を滑り込ませ、裸の胸と胸を重ねた。首すじにキスをすれば彼は首を竦めた。そのまま頬まで唇を這わせていく。

「今日のところは抵抗しないで僕に任せてくれるかな。少なくとも君を気持ちよくさせてみせるから」

「わかった」

「いい子だ」

「じゃあ、そのあと俺にも。俺にもやり方を教えて。あなたのこと気持ちよくさせたいから」

吹き出しそうになるのをなんとかこらえた。

断言できるが君にそんな余裕はない。

「了解した。では目を閉じて。キスからやり直すよ」

ランガは素直に目を閉じた。

愛之介は少年の柔らかい唇にそつと始まりの合図のキスをした。

《了》

## 僕が探したのはイヴではなく、たったひとりの君【R18】

男の指が前立てに触れる。胸元が開かれバスローブが肩からストンと床に落ちた。晒された白い背中を撫でるひやりとした空気に、ランガは微かに震えた。エアコンの設定温度は何度なんだろう。

「寒い？ 大丈夫。すぐに熱くなる」

男はバスローブを脱ぎベッドの上にバサツと投げた。

ランガはさつさと全裸になった男の発達した三角筋から大胸筋、腹筋へのラインを視線でなぞった。見事な逆三角形の体型だ。彼は着痩せするタイプだと思う。いつも筋肉を晒しているジョーとは違い裸身を目にしてはじめて、その見事に鍛え抜かれた肉体を意識させられることになる。

無意識に指を伸ばしていた。手のひらを肩から二の腕まで滑らせた。その硬い質感にランガは唇を寄せる。ボディソープの残り香をほのかに感じる。舌を這わせた。

「どうしたの？ ランガくん」

「愛抱夢の味がする」

「可愛いこと言うね」

笑いを含んだ声。顎をつかまれ唇が重なった。

角度をずらしながら強く吸われる。やがて唇を割って柔らかい舌が滑り込み、歯列をノックしさらに奥へと進んだ。あたたかい舌と舌が絡み合う。

きつく抱きしめられれば愛抱夢の体臭が立ち上る。ドキドキしてどこか安心する匂いだ。

ベッドに横たえられ胸から脇腹を男の手のひらと唇が這っていく。

敏感な場所を集中的に愛撫されているわけではないのに、散漫な痺れが肌表面を断続的に走った。

唇から漏れる吐息が熱を帯び小さな喘ぎが混ざり始めたころ、下着を剥ぎ取られうつぶせにさせられた。

尻の割れ目にそって指が滑り込んでくる。入口、そして内側へと塗り込まれるローションの冷たい感触に少し身を固くする。愛抱夢はそんなランガの背中に胸を重ね、もう片方の手を胸の下に滑り込ませ緊張をほぐすように、緩慢な愛撫を続けた。

その間、埋め込んだ指の本数を増やしながら自らの通り道をほぐしている。時間をかけ慎重に。自分を受け入れたときに傷をつけないように。

これは、いつもの欠かせない儀式。それでも、まだ挿入されての快感を得られたことはなかった。はるかに痛みの方が大きい。いつになったら慣れるのだろうか。

彼は、ランガの苦痛が大きいと判断すればすぐに行為を中断してしまう。焦らなくていい。待つと、何年でも待つと言った。でも、と反論しようとすれば、僕は八年もイヴを探していた。それを思えば、どうってことはない。君はこうして僕の腕の中にいる。それで十分だと。

愛抱夢に愛撫されるのは好きだ。彼の手で導かれる射精で得られる快感は、高く決めたエアに似ている。ふわりと宙を飛び体を回転させたとき開ける視界。鳥になって風を切り飛翔するイメージ。マスターベーションとは全然違う爽快感。

いつも自分だけ気持ちよくしてもらっているような気がして、申し訳なく感じていた。だから彼の要求にはなるべく応えたかった。

指が引き抜かれ、体に密着していた熱が離れた。ピリッと袋を破る音が聞こえた。コン

ドームをつけているんだとわかった。これもいつもの手順だ。

けれど、そのあと体をひっくり返されて「え？」と何度も瞬きをして真上から見下ろす男の顔を見た。

愛抱夢は悪戯つ子のような笑みを浮かべ「今日はこっちからしてみようか」と言った。いつも後ろから抱かれていた。その方が体位的に無理なく負担は少ないと言っていたはずなのだが。

「どうして？」

「君が僕に犯されているとき、どんな顔しているのか見たくなった。いいよね？」

カーツと顔が熱くなる。

「い、や、だ。悪趣味、変態、ドスケベ、えーとそれから、エロオヤジ」

とりあえず思いつくだけの日本語で悪態をついてみた。使い方は間違っていないと思う。

「他は許容できてオヤジは傷つくなあ。悪い子だ。悪い子に拒否権はないよ」

彼は楽しそうな笑顔でランガの膝の裏を掴み肩にかけた。腰が浮いた次の瞬間、下肢

鋭い痛みが襲った。

「うっ……」

思わず声が出て男の腕を強く掴んだ。

彼は一旦動きを止め「力を抜いて」と耳元で囁いた。

そして軽く唇を合わせ少しづつ体重をかけてきた。異物を押し戻そうとするような抵抗に逆らいながら彼は徐々に腰を進めた。深くなつた結合の刺激に反らせた喉から、抑えきれない小さな呻きが漏れた。無意識に逃れようとする体を引き戻し愛抱夢は緩やかに腰を動かしていく。

辛くないと言えは嘘になる。

前回、無理をさせたくないと言った愛抱夢は行為を中断してしまった。焦る必要はないと。今だってランガの苦痛が強いと判断すれば、彼はすぐに体を外してしまうだろう。けれど、それはもう嫌だった。

愛抱夢があるポイントを掠めたとき、信じられない感覚に襲われ高い悲鳴が喉から迸つ

た。一瞬、彼は動きを止めたけれど、すぐに何もなかったように律動を再開する。強く弱く速く緩やかにとリズムをつけながら。

その度に断続的に快感の波が押し寄せる。それは徐々にランガの中で昂ぶりを増していった。

深々と貫かれ、内臓をえぐられ自我もろとも粉々に碎かれていく。一方的に四肢を開かれ、為す術もなく陵辱されている。自分でコントロールすることのできない受動的な快楽に呑み込まれつつあるのだという不安。

この行為の先に、あの空間が広がっているような気がした。

何も見えない、何も聞こえない、何も感じない。ただ真つ白な虚無の中へとひとり放り出される。

それはランガにとって絶望的な孤独、あるいは緩慢な死のイメージだった。

——怖い。

耐え難い恐怖に囚われ、ランガはわずかに残った意識を振り絞って目をうつすらと開いた。

覆い被さる愛抱夢の顔がぼんやりと見えた。ランガを犯しながらも見守るように見つめ

ていた。

目が合った彼は察したのか微笑んでランガの背中の下に腕を差し入れた。強く抱き締めながら汗で濡れた肌を密着させる。

「大丈夫だ。僕はここにいる」

そう耳元で低く囁かれ、ランガは安堵して目を閉じた。

愛抱夢は再び腰を動かし始める。この男の腕に抱かれ守られているのだという安心感。絶頂へ向かう大きなうねりの中でランガは愛抱夢にしがみつき身を委ねた。

全身を痙攣させ忘我へと至る白く霞んでいく意識の中。

閉じた瞼のはるかかなた。

遠くで烟る風景の中に、大切な〈何か〉があるような気がした。

## §

ぼやけた視界の中に、宙に浮く深紅の瞳を捉えた。薄明かりの中でもとても綺麗な色だと思う。その瞳の持ち主はどこか複雑な表情をしていた。

「愛抱夢？ そんな顔して、どうしたの？」

ぼんやりとした口調でランガは訊いた。

「大丈夫？」

言いながら愛抱夢はランガのふわふわの髪をくしゃくしゃと指で掻き混ぜた。

「何が？」

ランガは髪を乱す男の手を制止しようと腕を持ち上げた。そのとき覚えた違和感に自分の手をじつと見つめた。指が小刻みに震えている。手を握ったり開いたりしてみるが、なんかうまくいかない。

「覚えていないのかい？ 君は氣を失っていたんだ。短い時間だけど」

え？ 何となく思い出してきた。

そうだ、とても妙な感じだった。真つ白な空間の中へとたつたひとり放り出されたような感覚。上も下もわからないホワイトアウトのようだった。コントロールを失い大きな雪崩に巻き込まれていく。必死で、指を伸ばし掴めるものを求めた。けれど何もなかった。どこへ連れて行かれるのかわからない。誰もいない。ただ怖かった。

でも、この男に強く抱きしめられているのだと感じたとき、とても安心したことを覚えている。だからほっとして力を抜いた。

そして自分の肉体の主導権を完全に手放していた。

それからの記憶がない。

上半身を起こそうとしたとき、腰に鈍痛が走った。ランガは顔をしかめた。

「無理に動いては駄目だよ」

ランガの背中に男の手が、すつとまわされた。彼は丁寧にブランケットでランガをくるみながら抱き起した。

男の裸の胸に片頬を押し付け目を閉じた。汗ばんでいたはずの肌が、もうサラサラと乾いている。エアコンが強く効いたこの部屋は肌寒いくらいだ。

「痛む？」

「少し」

「出血はなかったから心配ないよ」

「見たの？」

「身体を拭かせてもらったから」

ランガは眉を寄せた。見られたことも恥ずかしいが、その間、目が覚めなかったことに愕然とする。でも、それより今はこの奇妙な身体感覚だ。

「なんか変なんだけど。震えが止まらない。歯が、こうガチガチしている」

ランガは両腕を掴んで自分を抱き締めた。

頭の上で、ふうーと息を吐く音が聞こえた。彼はランガの髪を指でいじりながら言う。

「君は自分がどうなったかわかっている？」

「氣を失っていたって、さっきあなたが」

「そうなんだけど、どうして氣を失ったか、その理由だよ」

ランガはかぶりを振った。

「君は僕と一緒にいったんだ」

いったとかいくとかいう日本語、なんとなく使い方を理解したのはこの男と、こんな關係になつてからだつた。

「俺、いったの？」

「そうだよ。僕は普通に射精でいったけど」彼は、ずっとランガの尻の割れ目に沿って指を滑らせる。身体がピクリと反応した。

「君は射精でいったんじゃない。ここでいったんだ。つまりバックでいかされた」

「そんなこと何でわかるの？」

「そりゃ、僕はずっと君を見ていたからね」

抱かれながら愛抱夢に言われた言葉を思い出した。

——君が僕に犯されているとき、どんな顔しているのか見たくなった。

カーツと頬が熱くなる。

俺がわけわからなくなっていたとき、一方的に顔を見られていたのか。

チラリと男の顔を見れば、嬉しそうに目を細めていた。口もとは浮かぶのは余裕の笑みだ。

羞恥を通り越して、だんだん腹が立ってきた。腹立ちついでに、そもそも何でいつも俺が挿れられる方なんだ？ という根本的な疑問に辿り着いた。それって不公平だと思う。

そうだ、たまには俺に挿させてくれたっていいじゃないか。何故、今まで気がつかなかったんだろう。

「ねえ愛抱夢、たまには俺にも……」

そこから続く言葉を愛抱夢はキスをすることで封じた。ランガが言おうとしたことを察

したのかもしれない。

愛抱夢は唇を離して「とても綺麗だったよ」と耳元に低く囁いた。その声だけで、ゾクゾクとしたものが背を駆け上がっていく。

ブランケットの内側へと彼の手のひらが滑り込み素肌に触れた。ランガは息を詰めピクリと全身を震わせた。

その様子に愛抱夢は狡い大人の笑みを浮かべた。

「一度、こんなふうに達した身体は敏感になるんだよ。あともう一回くらい、いかされてみる？」

愛抱夢の五本の指が脇腹を撫で、胸を這い回り、やがて指の腹が乳首を捉えた。潰すようにゆつくりと捏ねはじめ。痺れるような快感が走る。声が漏れないように唇を噛んで耐えた。

ふと、小さな喘ぎが聞こえた。あれ？ そっか、これは自分の声だ。

唇が重なりベッドへ押し倒された。男の重みを全身で感じ、ランガは愛抱夢の首に腕を絡めた

## 宵闇の雨音

雨は嫌いだ。

そもそもスケーターで雨が好きなやつはいない。

雨では滑れない。それ以前に水浸しになればデッキが駄目になる。

その日、ちょうど配車されたタクシーのドアが開いたタイミングで、通り過ぎようとするランガが視界に入った。赤毛の親友と一緒にだった。彼はちらりと愛之介の顔を見るが、少し目を丸くしただけで通り過ぎて行つた。

ふたりの会話が聞こえてくる。

「知っているやつなのか？」

「いや」

彼の親友はトーナメント決勝戦の夜、暗闇の中で愛抱夢の素顔をディスプレイ越しに少し見たかもしれないくらいだ。特にこのスーツ姿の自分とスケーター愛抱夢を同一人物とは思わないだろう。

それより問題は。

「愛之介さん？」

ランチをともした令嬢が怪訝な顔をした。

「失礼しました。知り合いかと思ったのですが、人違いだったようです」

笑顔で答え、愛之介は、その令嬢の手を取り、乗車を紳士的にエスコートする。

「短い時間とはいえ有意義な時間を過ごせました。本来はお送りするべきなのでしょうが、この後予定が控えておりまして」

「気になさらないで。愛之介さんはお忙しいのですから」

「申し訳ありません。この埋め合わせは必ず」

「楽しみにしています」

「僕の方から連絡させていただきます。では」

令嬢はシートに座ると微笑み軽く会釈をした。

ドアが閉まり走り出したタクシーを、爽やかな笑顔で見送った。それと入れ替わるように、黒い車が静かに近づいてきた。運転席から出てきた男が後部座席の扉を開いた。

「ご苦勞、忠」

「下地様との面会時間が迫っています」

「わかった。すぐ事務所へ向かってくれ」

「かしこまりました」

車に乗り込もうと屈んだときポツリとうなじに水滴が落ちた。見上げれば空は灰色の雲で覆われていた。

「やはり降ってきたな」

「これから雨足が強くなつて、夜半には断続的に降つたりやんだりになるという予報です。Sは中止にしますか？」

「仕方ないな。参加者に連絡してくれ」

「はい」

スケートのデッキは雨、というか水に弱い。少しばかり濡れたくらいなら問題ないことが多いが、びしょ濡れになれば、そのデッキは二度と復活しないと考えた方がいい。

今夜は久しぶりにSでランガと滑ることができると思つたのに。雨は嫌いだよ。よりに

よってデートのタイミングを見計らって降るとは無粋極まりない。

いや待てよ。そうだ、それならばとあるアイディアがひらめいた。

マンションの前に車を止め、彼を待った。

「お待たせしました」

助手席のドアを開けて彼は乗り込んできた。手にはスケートボードを大事そうに抱えて。

「ランガくん、それ」

「雨やんだし。滑れるかなと思って」

「一時的にやんだに過ぎないよ。雨雲レーダーをチェックすればわかる。これから降ったりやんだりを繰り返すんだ」

「そうなんだ」と彼はうなだれた。

「それに降らなかったとしてもコースはぬかるんでいたり水溜りがあつたりする。濡らしてしまえばデッキは傷む。それ、お友達が作ってくれた大切なボードなんだろう？」

「うん」

ランガはギュッと胸にスケートボードを抱き締めた。

ずっと意識していなかったが、あの赤毛の親友がつくったスケートボードがなければランガはここまで才能を発揮することもなかった。そのことに意識が向いたのも、あのトーナメント決勝戦後だった。ずっとランガの滑りそのものにしか目がいつていなかったのだ。

短時間でランガのスノーボードで培った滑りの癖を見抜き、最適化する。おそらくあの赤毛の彼も別の意味で特別な才能を持っているのだろう。そんな単純明快なことも今まで見抜けなかった。

そこまで追い詰められていたのだ。当時の自分は、どこまでみつともなく余裕がなかったのか。忠が自分からスケートを取り上げようとしたのも、今ならなんとなくわかる。もつとも許しはしないが。

「だからスケートは諦めて」

「わかった。じゃあ、どうして俺に会おうって？」

「僕はやつとのことで時間を作ったんだよ。君とスケートができる、君と会える時間だね。スケートができないまでも、せめて君に会いたいと思ったっていいだろう？ 次いつ

時間をとれるかわからないんだから」

「それなら何をするの？」

「浦添あたりまでドライブしようか。上手く雨がやんでいれば公園の高台から夜景が見られるよ。上手くしなくても君とこうして一緒にいられるし。お腹空いたらドライブスルーでハンバーガーやプーティーンでも調達しよう。異存は？」

「無いよ」

少年が微笑したことを見て車を発進させた。

車を止め公園の高台まで二分ほど並んで歩く。雨はやんでいるが星は見えない。雲の切れ間はなさそうで、またいつ降ってきてても不思議ない。

「へえ、綺麗だね」

星が見えずとも、ここから眺める夜景はなかなかのものだ。

「雨が降っても街灯りが消えることはないからね」

この天気だ。狙い通り人気はない。遠慮なく彼の肩を抱いた。

「ねえ今日の昼のことだけ訊いていい？」

「いいよ」

察しはつく。

「一緒にいた女の人は？」

「気になるの？ 嫉妬してくれたのかな」

少し揶揄うように言えば、彼はムツとしたように口元をへの字に歪めた。

「そういうんじゃないくて、もし恋人とか婚約者とかだったら、俺こんなふうにあなたと会っちゃいけないかなって」

ランガに下手な誤魔化しは話をややこしくする。正直に話した方がいいだろう。

「見合いで会った人だよ。少し前にね」

「見合いつて、結婚のためのマッチング？」

「そうだね」

「結婚するの？」

「まさか。振られた」

「え？」

「振られたというのとも違うか。彼女まだ大学生だからね。親から言われて見合いも渋々

さ。僕にとつても渡りに船。お互いの結婚したく無いという利害が一致した」

「そうなんだ」

「今日会っていた理由だけど、向上心も向学心も旺盛な女性で、大学卒業したらアメリカ留学したいらしい。なので、アメリカ留学経験のある僕から話を聞いたかった。それだけさ」

「そっか」

「でも、どうして婚約者や恋人がいたら僕と会えないと思ったの？」

「もし父さんが生きていて、あなたが俺に会うみたいにならば父さんが誰かと会っていたら、母さん悲しんだり怒ったりするかなって」

ズキッと胸が痛んだ。

彼と自分を納得させるような言葉を探した。しかし見つけることはできなかった。

押し黙ったまま、腰をぐいっと引き寄せれば布地越しに穏やかな体温が行き交った。コトリと肩に彼の頭が乗った。心地よい重さだ。

絹糸のような髪を指で梳きながら唇を寄せた。

そのとき、ぽつりと手に水滴が落ちた。続いて、頭に肩に腕に背に、そして地面に、大

粒の雨がパタパタと激しく打ちつけはじめた。本格的に降り出した。

不意に密着していた熱が体から離れた。

「降ってきたね。車に戻ろう」

くると背を向け彼は走り出した。

「待つて、ランガくん」

「愛抱夢、急いで」

遠ざかる彼の背中を追いかけた。

待つて、行くな。僕のそばから消えないでくれ。

「ランガっ！」気がつけば彼の名を叫ぶように呼んでいた。

追いついた愛之介は、少年の背後から腕を回し引き留めた。すぐるように。そのまま折れるほどきつく抱きしめた。

「愛抱夢？」

「待つてくれ」

「早く戻らないと」

「もう少し、もう少しこのままで」

「濡れるけど」

「濡れてもいいさ」

言いながら、うなじにかかる髪を鼻で搔き分け彼の首に顔を埋めた。ランガはくすぐったそうに首をすくめるが、愛之介の手首を軽く掴んだだけで引き剥がそうとはしなかった。

抵抗がないことに安堵して拘束する力を緩めた。首筋に唇を這わせてから、首を捻るように自分の方へと向けさせれば不思議そうな表情でじつと見つめてくる。しとどに濡れ頬に貼りつく髪をそつとどけ顔を近づける。ランガは素直に目を閉じた。

——僕は、君がいい。ずっと一緒にいて欲しいのは君だけだ。

そんな言葉を呑み込み唇を重ねた。

激しさを増す雨音が、宵闇の中へ静かに吸い込まれていった。

《了》

## 深海にある楽園

亜熱帯の鬱蒼とした低木に覆われた薄暗い坂道を降っていく。浜辺へと向かう途中、視界が開けた瞬間、少年は「わぁ」と声をあげ立ち止まった。

「The way of the moon……月の道だよ。ランガくん」

月の光が海面や湖面に反射してできる光の筋をそう呼ぶ。

「すごく綺麗」彼は目を輝かせた。

「気に入った？」

「うん。愛抱夢っていつも説明しないで強引に俺を連れて行こうとするよね。もう慣れたけど」

「僕はサプライズが好きなんだ。月の道もね、天候に左右されるだろう。雲がかかればアウト。今夜は運が良かった。さらに月の位置が高すぎても低すぎても綺麗に道はできない。これもあと三十分もしないうちに月は高く昇って光の道は消えてしまう」

「もし曇っていたら、どうしていたの？」

「もう一つのサプライズを予備で用意していたさ」

「それは何？」

「言えない。次のサプライズだからね」

それから程なくして、月の道は消え満月は海面や浜辺を満遍なく照らしはじめた。手を繋ぎ誰もいない浜辺を歩く。聞こえるのは寄せては返す静かな波音だけ。

「そういえばさ、暦にしる実也にしる、近くにいくらでも綺麗なビーチがあるのに海で泳ごうとかしないよね。宮古島では少し海に入っただけ」

足を止め少年の肩を抱いた。

「沖縄で海水浴したりダイビングやシュノーケリングしたりする人は、内地からの観光客や移住組ばかりだからね。沖縄の人にとっては、海は夜バーベキューして酒を飲むところだから」

「どうして入らないの？」

「また海水浴でもしたいの？」

「うーん、一度海に入って納得したというか。日焼け止め塗っても火傷みたいになって大変だった暑くて調子悪くなったから。スケートの方が楽しい」

「君みたいな色白の子は気をつけないう。ここの紫外線は強過ぎて危ないよ。海はこう

やって眺めて楽しめばいい。日中のエメラルドグリーンの海も綺麗だけど、僕は夜の海の方が好きかな」

「うん、わかるよ」

「沖繩の人があまり海水浴しない理由の一番は身近すぎて珍しくないからだと思うよ。それと海の恐ろしさを知っていることも大きいかな。毎年、海の事故で亡くなる人がいるけど、ほとんどが内地の人、観光客なんだ。ハブクラゲみたいな毒を持った生物もいるし。他にも海は神聖なところ、という刷り込みが漠然とあるのかもしれない」

「神聖なところって、曆もそう思っているのかな」

「赤毛くんとかほとんどの県民はそんなこと全く意識していないと思うよ。キリスト教でも仏教でもない沖繩の土着信仰がなんとなく染み付いているだけさ。ニライカナイって海の底にある理想郷がある。死者の魂が還る冥界でもあるんだ」

「死者？ 冥界？ よくわからない。そんなところが理想郷なの？」

「沖繩は先祖崇拝だからね。つまり亡くなったご先祖が守り神みたいな感じか。そのご先祖様がいらっしゃるから理想郷」

そこまで説明して、はたと気づく。なるほど繋がってしまった。

理想郷……エデン、そして冥界。

愛之介は、トーナメントで自分がやらかそうとしていたことに思いを馳せる。

唯一のイヴを迎入れようとしていたあの世界。楽園エデンは愛抱夢にとって、まさに理想郷だった。

ランガが一度あの世界を知れば、その素晴らしさを分かち合えると疑いもしなかった。俗世に身を置きながらも、望めば何度でも繰り返しの世界に耽溺できるのだと。

何故なら、僕らはアダムとイヴなのだから。

それが、思い出したくもない悪夢の準決勝。結果的には勝利したものの泥を被り惨めな姿を晒してしまった。それより最悪だったのは、ランガが愛抱夢から赤毛の少年を庇おうとするかのように立ち上がったことだった。

そのことは、お前はひとりぼっちなのだと愛抱夢に強い孤独を突きつけてきたのだ。

——僕を癒してくれるのは、イヴだけだ。イヴを——君を手に入れなければ僕は癒されない。

決勝戦で、急遽変更したコース。青紫のライトアップ。暗紫色の闇の中を滑る死と隣り合わせの危険なコース。ゴールに置かれた墓標、棺桶と十字架をモチーフにしたデッキデザイン。死へと誘う死神をイメージした衣装。

あれは愛抱夢が演出した冥界だった。

死にたかったわけではない。それでもふたりだけの世界の行き着く先にあるものが死であつたのなら、納得いくような気がした。イヴのいない俗世で生きていくよりずっといい。イヴが永遠になれば、死すら新しい門出だと思えたのだ。

身勝手なものだ。無理心中に等しい結末を迎えることも厭わなかったのだから。

ランガは理解していた？ 多分そうではない。ただ愛抱夢の心に触れてきただけだ。

結果、光ささない闇の中で、うずくまったままの幼い愛之介の手首を掴み引つ張り出したのだ。

「愛抱夢？」

掛けられた声に振り向いた。

「何？」

「黙り込んでどうしたのかなって」

ランガの肩を抱く手に力を込め引き寄せる。

雪を思わせる髪にキスをして耳元で囁いた。

「君を堪能していた」

「変なの」彼は、くすぐったそうに首をすくめた。

思い起こせば、ランガは一度も愛抱夢、こと愛之介を拒絶したことはなかった。あの情熱の愛である赤薔薇の花束を受け取ってくれた、あのときから。そして今も。

ならば、これからは？

ふと不安が胸をよぎる。

ランガは愛之介よりずっと若い。まだ子供だと言ってもいい。赤毛の親友をきつかけにして、これからも様々な人と交流していくことになる。出会いと別れを繰り返し、彼の世界はどんどん広がっていくのだろう。

だとしたら、こうして彼がここにいてくれる保証はない。ランガがいなくなった世界を自分は受け入れられるのだろうか。耐えられるのだろうか。

胸がざわつきはじめた。

「ねえ、ランガくん。もしも君が僕の側からいなくなりそうになったら、どうしようか」

彼の両肩をつかんで向かい合う。ランガはきよとした表情で愛之介を見た。

「俺、いなくならないよ」

「もしもの話だよ。そうなったら、僕は君がどこにも行けないように閉じ込めてしまうかもしれない。僕にはそれをするだけの力があるんだ。そうだ、ふたりだけのコースは用意しよう。僕と一緒に住む家と、スケートのコース。それが君の世界のすべてになるんだ。どうか？」

「いいよ」

この子は、ちゃんと話を聞いていたのか？ いいわけないだろう。

「君は、親友にも、お母さんにも会えなくなる。それで本当にいいの？」

「んー、それはいやかな」

「そうだろう？」

「でも、いいよ」

たまにこの子の反応は困惑させられる。自分だけかと思ったら彼と交流のある連中が口を揃えて言う。その最たるものが、何の銜いもなく赤薔薇の花束を受け取ったことだ、とチェリーやジョーは笑った。

「君は僕の言っていること理解している？」

ランガは、すつと視線を愛之介に向けた。その強い意思がこもった瞳に一瞬気圧される。この目を見たことがある。

——だったら、あなたも子供だ。

あのときと同じ目だ。

「あなたが、そうしたいのなら気が済むまで、そうすればいい」凜とした声が静かに響いた。「そのうち気が済むよ。俺は大丈夫だから」

「馬鹿なことを。大丈夫なものか。いつ気が済むかなんてわからない。それまで僕は君を思いのままにできるってことなんだよ。そうなったら、もう歯止めは効かない。きっと君を傷つけてしまう」

そうだ、たがが外れた僕は何をするかわからない。すでに妄想の中で何度も君を犯している。それもひどく残酷なやり方で。

ランガは、すつと愛之介の首に手をまわした。

「怖い？ あなたのことテレビやネットでも見るよ。俺、政治家つてよくわからないけど、みんなから尊敬されて頼りにされている人なんだって知った。それに愛抱夢は、すご

いスケーターだ。なのに、どうして？ たまに怯えているように見える」

「ああ怖いさ。君を失ってしまうこと。僕はそれが耐え難いほど怖い」

彼は愛之介の肩に、ことりと額を押し付けた。

「俺、どこにも行かないよ。それが信じられないのならそうすればいい」

満月の光が、ランガの水色の髪に反射してキラキラと煌めいていた。

愛之介はその髪を撫でため息をついた。

負けたよ。

「君を抱きたいな」思わず漏れた偽らざる思いだった。

「ハグする？」

「そういう意味じゃない。君とセックスしたいってことなんだよ」

ランガは肩から頭を持ち上げ、目を丸くして愛之介を見た。

そのあと、およそ三十秒ほど視線を宙に泳がせて、再び愛之介を見ると「わかった」と頷いた。

やはり、この子の反応は見ていて飽きない。

「抱かないよ」

ランガは眉を寄せ、どうして？　と言いたそうに口をへの字に曲げた。

「俺のこと揶揄った？」

「そうじゃない。抱きたいのは本音。でも、まだ君に無理をさせたくない。だから予約つてことにして。不満？」

ランガは左右に首を振った。

愛之介はランガの腰に腕をまわしグイッと引き寄せた。

「ではキスをしようか」

「うん」

うなじから髪を持ち上げるように手のひらを滑らせ、後頭部をしつかり固定し長いキスのはじまりを伝えた。ランガの腕が背中にまわされた。

銀色の月の光が降り注ぐ中、ふたりは抱き合いいつまでも唇を重ねていた。

《了》

## イヴを探して

スケジュールの確認、および代理出席した地元イベント、騒がしくなってきた高野議員周辺に関する報告の間も、主人の視線がディスプレイから外されることはなかった。怒りを買う可能性を想定しつつ、それとなく確認をしてみるが説明した内容は全て頭に入っているようで、忠の話を聞いていなかったわけではない。

主人である愛之介が見つめるディスプレイに映し出されているのはクレイジーロック。S会場だ。

多忙を極める彼は、愛抱夢としてSに顔を出すことは滅多にない。だが現場にいらなくてもリアルタイム中継、もしくは録画された映像のチェックは欠かさなかった。

Sのチェックは日課だが、それとは別に、ある少年の映像を繰り返し鑑賞していることを忠は知っていた。むしろ、そちらが主で、Sのチェックは今やおまけ程度の意味合いではない。

近々、開催予定のトーナメント。これも、この少年と滑るだけが目的なのだが、それを最大限に盛り上げるための演出がされるだろう。その少年と愛抱夢のビーフ以外は全て茶

番だ。なのに何も知らない多くのスケーターたちが各々の滑る理由や意味を胸に、エントリーしてくるだろう。

少年のSネームはスノー。本名を馳河ランガと言う。難攻不落と思われた愛抱夢のラブハッグを破った少年だった。

## S

「僕だけのイヴを探さなくては」

ぼつりと愛之介が漏らした独り言を忠は耳にする。あまり気に留めなかった。

もともとロマンティストを通り越して、エキセントリックな傾向が強い少年だ。当時から彼はスケーター仲間と遊ぶとき本名を隠し「アダム」と名乗っている。アダムといえばイヴ。恋人でも欲しい年頃なのだろうと軽く考えていた。

むしろ、そうであってくれたのなら、どれだけ気が楽だったか。

愛抱夢が廃鉱山にある危険なコースでスケーターを次々に潰している。その噂を忠が耳

にしたのは愛抱夢こと愛之介がアメリカ留学へ発つ少し前のことだった。

もともと、怪我人が出るたびに表沙汰にならないよう神道家の息がかかった病院で治療を受けさせ、示談交渉の上、事故そのものを握りつぶしていた。その事故が、このところ頻発している。嫌な感じがした。

当時、愛之介と忠の関係は壊れ、ふたりの間には修復不可能な深い亀裂が入っていた。原因は自分の裏切りにあると忠は考えていた。当然、忠が彼に助言することはもちろん、彼の真意を正すことも不可能だった。

都度、最善と思われる事後処理を忠は淡々とこなしていく。あとは、ただ見守ることしかできなかった。

彼が潰してきたスケーターとイヴとを関連づけることはなかった。

諸々の疑念が晴れないまま愛之介はアメリカへと発った。忠は彼の父親である愛一郎の秘書として慌ただしく、ある意味平穏な毎日を送っていた。

そうこうしているうちに留学を終えた愛之介が帰国する。それからほどなくして愛一郎が急逝した。彼は若くして父親の地盤を引き継ぎ政治家の道を歩むことになる。忠は、そ

のまま愛之介の秘書として仕えることになった。

忠に神道家から離れるという選択肢がなかったわけではない。それでも、まだ新米政治家の愛之介には愛一郎のもとで秘書としての経験を積んだ自分が必要だと判断した。彼もそれを望んだ。その忠を新しい主人は「犬」と呼び蔑んだ。

辛く当たられることは覚悟していた。それが一生受け続けるべき裏切りの代償ならば甘んじて受けようと決めていた。

神道家の財産を相続すると同時に父親の支配から解放された愛之介が愛抱夢として真っ先にしたことは、Sの創設だった。

廃鉱山を利用した大規模な違法スケートレース場S。愛抱夢の大胆な構想のもと、Sの構築から運営ほぼすべてを忠は任された。

S本来の目的を忠が知ったのは開設されてしばらくしてからだった。

愛抱夢はあるスケーターに注目した。

「イヴかもしれない」

そう彼は目を輝かせ、ビーフの招待状をそのスケーターに渡すよう忠に命じる。

「さあ、愛の儀式を始めようか」

ビーフに応じたそのスケーターは、クラッシュして大怪我を負った。

深紅の瞳に浮かぶのはありありとした落胆。

「君はイヴではなかった」

一転して冷たく言い放つ愛抱夢に、背筋が凍った。

そこで、ようやく忠はイヴが恋人などという単純なものではないと思ひ知る。同時にSそのものがイヴ探しのための大掛かりな舞台装置であったことを理解する。

それから愛抱夢は何人もの有望なスケーターに愛を語りビーフを持ちかけ、結果的に対戦相手を再起不能にしてきた。

愛抱夢は、いつしか〈愛のマタドール〉とS参加者から呼ばれるようになる。

彼の求めるイヴの条件とは、どのようなもののだろうか。イヴ候補と思しきスケーターが愛抱夢に付いていけずクラッシュすれば、彼は即座に興味を失っている。そのことから愛抱夢と同等以上の滑りの才能が必須条件なのは間違いない。

そんなスケーターがおいそれと現れるとは考えられなかった。はたから見れば、ただスケーターを潰しているようにしか見えないだろう。

イヴを探して繰り返される期待と失望。それは愛抱夢の精神を徐々に蝕んでいった。その一方、政治家である神道愛之介は順風満帆、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだった。

止めなくてはいけないと思った。このまま突き進めば、いつか握り潰せないほどの大きな事件になる。そうなれば政治家生命どころか、愛之介の人生そのものが終わる。

だが、どうやって？

一般的な倫理、道徳、正義などSでは通用しない。一般社会のそれを基準にしてしまえばSは成り立たない。参加者はそのことに納得している。たとえ子供であったとしてもだ。

いずれにしろ、心を閉ざした愛之介に忠の声は届かないだろう。

忠は、愛抱夢の動向を注視しながら、最善の解決策を模索し続けた。しかし何も見つかることはできなかった。

やがて愛抱夢は申し込まれるピーフを断り続け、Sへは顔を出さなくなっていた。かといって諦めたわけではないのだろう。Sのチェックは欠かしていなかったのだから。おそらく失望が積み重なるたびにイヴ候補に求める条件が厳しくなり、彼の眼鏡にかなうス

ケーターが現れなかっただけの話だ。

それでも愛抱夢はひたすら待ち続けていた。この世にたったひとりだけいるはずのイヴを。

そして主人は、待ち望んだイヴである少年スノーをついに見つけてしまう。

愛之介がスケートをするスノーをはじめて見たのは、対シャドウの中継だった。その滑りを見て愛之介は彼に興味を持った。いや、興味なんて生やさしいものではない。ゴール直前、爆竹の火花に彩られながら宙をふわりと舞った、あの一瞬で少年に魅入られてしまったのだ。

これは運命だ、と誰に聞かせるでもなく愛之介は目を細めうつとりと呟いた。

あれから深紅の瞳に映すのはスノーだけになった。愛之介は己の行動原理の主軸を彼に固定した。

そこからスノーを手に入れるためだけの行動を開始する。

とはいえ実際スノーをどうしたいのか具体的に何をするつもりなのか、は忠にも想像で

きなかった。

そんな愛抱夢の本来の意図を知らないスケーターたちが、その手のひらで踊らされていることに気づか無いまま巻き込まれていった。

それが全ての起点。Sを舞台にしたドラマが幕を開けた。

## S

「愛之介様」

「なんだ？ 忠」

「トーナメントの件ですが」

「先日、こちらからの要望は一通り伝えているはずだが」

「はい。対戦相手の選定方法は、抽選でよろしいのでしょうか」

愛之介はデイスプレイからやつと視線を外し、振り向き鼻で笑った。

「無用な気遣いだ。僕のスノーは負けない」

その自信はどこからくるのか。

ビーフは何があるか分からない。一回負けたら終わりの勝ち抜き戦では、体調、故障、ちよつとしたコースの異変などさまざまな要因が絡み、スノーはもちろん愛抱夢ですら不測の事態という可能性もあるのだ。

もしも、愛抱夢と戦う前にスノーが負けたら彼に興味を失い、次のイヴを探せばいいと考えているのだろうか。いや、それはないような気がした。彼は、スノーが確実に勝ち上がり自分と戦うと、恐ろしいほどの無邪気さで信じている。

愛抱夢の精神は既にギリギリまで追い込まれている。どうであれ、スノーは最後のイヴ候補だ。

「しかし……」

「くどいぞ、忠」

「申し訳ありません。余計なことでした」

ふんと鼻を鳴らした愛之介は、もう一度ディスプレイに視線を戻した。

分割されたパネル全てはスノーで埋め尽くされている。ドローンを使い、ありとあらゆるアングルから撮影された彼の姿が映し出されていた。

美しい少年だ。

だからこそ単純な恋慕であればいいと思っていた。彼に向けるものがスケートと関係のない恋愛感情であつたのなら、どれだけ救われただろう。自分も愛之介様も。それならいずれ醒める。余裕を持つて見守つていられただろう。

けれど、そんなものとは比較にならないほど愛之介が彼に向ける情動は重く深い。一方的に向ける狂おしいほどの思慕。

それは底の見えない暗い淵へと沈んでいく、歪んだ情熱だ。

そんなものがハッピーエンドへ繋がるわけではない。破滅へと向かう絶望的な未来しか見えてこなかった。

そこまで愛之介様にイヴを、スノーを求めさせてしまったのは、すべて自分のせいだ。いつそスケートなど教えなければよかった。そうすれば、もっと上流階級らしい趣味を持ち、スノーに出会うこともなかっただろう。

もう手遅れだろうか。だとしても、このまま放置するよりずっといい。

分割されたパネルが一つの大きなスクリーンとなり少年が大映しにされた。なんて楽しそうに滑るのだろう。直後、高く飛んだ少年に目を見張る。綺麗なエアだ。

スノーの滑りは、自分が知るスケーターの誰よりも純粹で真摯だ。それでいて貪欲。この子はどれだけスケートを愛しているのだろうか。

幼いころの記憶が不意に蘇る。そうだ、もうひとりこんな滑りを自分は知っている。

——見てろ、忠。えい！

きつく目を閉じ記憶を強引に封じた。

「僕は……」

その声に忠は目を開いた。

「戦えるって信じているんだ。だってランガくんは僕だけのイヴなんだから」

## いつかその日が来るまで

主人の機嫌が悪い。

不機嫌ついでに、忠の役目だった愛之介の私生活に関するサポートを、なぜか「やらなくていい」と言い出した。

例えば、「朝は自分で起きるから起こさなくていい」とひとりで起きられる宣言をする。は？　と思念のために確認すれば「くどい」と怒り出す。それで本当に起こさないでよくとギリギリまで寝てしまい、「どうして起こさないんだ」「いや僕が起こすなと言ったのか」「だとしても僕は忙しい」「疲労具合とか考えろ」「時と場合によるだろう」と苛立ちを隠せず口の中でブツブツ言っている。

手助け無用と見得を切った手前、大々的に怒りをぶつけるわけにもいかないのだろう。その分、長時間イライラ状態が続くのが厄介だ。

もちろん、忠以外の相手には、ニコニコと爽やかな神道愛之介スマイルは保っている。しかし、その反動かこちらへの風当たりがきつくなる。

仕事上でのトラブルは認められない。忙しきはいつものことで、ここのところ特に睡眠

時間が削られていることもない。体調に問題あるとも思えない。

だとすると考えられる要因はひとつ。

待ち合わせ場所のファーストフード店にスケートボードを抱えやってきた少年は、忠の姿を見つけると向かい側の席に腰をおろした。

「こんにちは」

「急に呼び出してしまつて済まなかつたね、スノー」

「大丈夫。でもスネークが俺に話があるつて初めてだよ。愛抱夢のこと？」

「そう、愛抱夢の様子が少し変なんだ。その理由を知りたい。その前に好きなものの頼みなさい」とメニューを渡す。

「じゃあ、オレンジジュースを」

「お腹空いているんだろう？ 食べたいものも頼んで。プーティーンもある。こちらからお願ひしてわざわざ来てもらったのだから遠慮しなくていい」

「はい」

テーブルにハンバーガーとプーティーンとスープが並ぶ。「いただきます」と食べ始め

るが、ガツガツではなくモグモグとゆつくりと咀嚼する口元は、犬でも猫でもなくウサギっぽい。

空腹をある程度満たしただろうタイミングで切り出した。

「先日のSで愛抱夢と随分と長い時間話していたね？」

「話していたけど、そんなに長かったかな」

「どんな話題を？」

「スケートのアドバイスしてくれた。重心の掛け方とかスタンスとかの基本と専用シューズについて」

スケートの話題が不機嫌の理由になるとは考えにくい。

「他に何か話さなかった？」

彼は眉を寄せ唇を尖らせて、うーんと唸っている。

「どんな些細なことでもいいから、思い出せることを教えて欲しい」

「あ、そういえば、よくわからないことを言っていた」

「わからないこと？」

「人生の伴侶になって欲しいって」

「伴侶？」

こんな子供に何を言っている？ 十代の男子高校生にいきなり人生の伴侶とか面食らわせるだけだ。うちの主人の前頭葉は正常に作動しているのだろうか。ことスノーが絡むと脳内シナプスにエラーが生じるのか主人の判断力は極端に怪しくなる。

「伴侶ってパートナーのことだったよね」

愛抱夢はベターハーフくらいの意味を込めていそうだが、面倒臭くなるのでとりあえず肯定しておく。

「まあ、そうだが。それで君はなんて答えたんだ？」

「『無理』って」

「一言？」

「うん」

おそらく原因はこれだとわかる。その一言だけとは、あまりにもそっけない。そのときの愛之介の様子が目に浮かぶが念のため確認してみる。

「愛抱夢はどういう反応をしていた？」

「黙っちゃったんで言葉が足りなかったかなと思って理由をちゃんと説明したよ」

「どんな理由？」

「愛抱夢の伴侶はスネークだから」

サラッととんでもないことを言い出す彼に、コーヒーを盛大に吹きそうになったが「ぶっ」くらいでなんとか堪えた。それでもむせてゲホゲホ咳き込んでいると「大丈夫？」と心配そうに忠の顔を覗き込んできた。

「問題ない。続けて」

「うん。そうしたら『それは誤解だよ』って、なんか慌てていた。それで『スネークは伴侶じゃなくて犬だから』とかなんとか」

焦りまくった主人の姿が目につかぶ。

「確かに、私は愛之……いや、愛抱夢の犬だが」

自分は何を言っているんだ？ 犬犬言われすぎて、犬根性が染み付いているらしくナチュラルに肯定してしまつた。愛之介が犬を持ち出しややこしくした話が、自分の不用意な一言でますます混乱に拍車をかけてしまう。

「スネークも昔ビーフで愛抱夢に負けたの？ 実也も勝ったら曆に犬になつてもらうって言っていたからSのルールに何かあるの？ 日本語で他に意味あるのかと調べたら、

〈DOG〉以外はスパイとしか出てこなくて。スパイが堂々とスパイって名乗るわけなし、わけわからなくなった」

彼は首を右や左に繰り返して傾げていた。

あまりにも邪気が無すぎて、忠は内心頭を抱える。なんて説明したらいいのやら。

「私の父は神道家の使用人だ。私も愛之介様の秘書をやる前はお父様の秘書をしていたね。愛之介様は使用人の私を犬と呼ぶことがある。つまり犬とは雇用主である愛抱夢の使用人とか雇われている側を指しているんだ。愛抱夢は凡人には理解不能な言葉を並べる詩人だと考えてくれ。愛抱夢の言い回しは独特で普通ではない。深く考えなくていい」

「わかった」

素直な子で助かる。

「それより、君はなぜ私が愛抱夢の伴侶だと？」

犬より、この子が自分を愛抱夢の伴侶だと捉えていることが問題だ。

「愛抱夢にとってスネークは、いなくなると困る人だから。俺がいなくなっても困らない」

スノーは大真面目な顔で真っ直ぐ忠を見た。

「私はただ雇われているだけだ。私がいなくなっても代わりはいくらでもいる。もつと有能な秘書を雇えば済むことだ」

「俺、政治家秘書の仕事ってわからないから、そう言われればそうなんだって思えるけどSはどうするの？ キャップマンへの指示とかSに関しては全部あなたがやっていて最近知った。クレイジーロックへ行くためにヘリコプターの免許も取ったって聞いた」

「それだつてS専用のスタッフを雇えばいい」

「あと朝起こしているんだよね？ それって家族と同じだ」

「ちよつと待つてくれ。なぜ君はそのことを知っている？」

「なんでだろう？ 愛抱夢がそれっぽいこと言っていたかも。他に俺をどこか連れて行くことになるときも、あなたが色々準備してくれていたんでしょ？ いつも忠にやらせようみたいなこと言っているんだ。愛抱夢って本当にあなたを頼りにしているんだなつて」

呆れたことにダダ漏れしている。忠は額に指を当て嘆息した。この鈍いスノーにすら気づかせてしまうなど自分の主人は迂闊過ぎる。

「君はそのことを愛抱夢に言ったのか？」

「うん。スネークみたいに毎朝、愛抱夢を起こすことは無理だよつて」

それが、ひとりで起きる宣言のわけか。そのシンプルすぎる発想はどうかと思うが。

「今までの話で検討はついた。ありがとう」

主人の機嫌が悪い理由は理解した。さて、どうしたものか。考え込んでいるとスノーが身を乗り出して訊いてくる。

「あの、もしかして俺が原因？」

「君は悪くない。それでも君のそつけない返し〈無理〉が愛抱夢に応えたんだろう。〈今はまだ考えられない〉というような保留だったら多分、愛抱夢は気にしていない。彼は意外と気が長いんだ」

そうだ。彼は何年もイヴを待ち続けることが出来たのだから。

「俺いつも愛抱夢にしてもらえばかりで、あなたと違って愛抱夢の役に立つことなんて何もできていないし」

「私のような役に立つ便利だけの都合のいい相手を、伴侶とは言わないだろう」

スノーは首を傾げ少し考えているようだった。

「都合のいい相手ってスネークは違うよ。うまく言えないけど愛抱夢はあなたのことに頼っている。甘えているなって最近感じるもの。信頼していなければ朝起こすなんてプライ

ベートなことまで頼まないよ」

そんなふうに見えるのか？

思わず否定しそうになった。裏切ったあの瞬間、全ての信頼を失っている。それは未だに取り戻せてはいないし、決して元には戻らない。

もつとも、そんなこと事情を何も知らないこの子に話したところで詮無いことだ。

「愛抱夢との間に何があつたのなんて知らないけど、あなたは愛抱夢のスケートの先生だ。俺にとつての先生が、最初に滑ることの楽しさを教えてくれた父さんと、スケートの楽しさを教えてくれた暦なのと同じだよ。それはずっと変わらない。愛抱夢はあなたと滑るスケートが大好きだったんだ。きつと今だって」

「そんなはずは……」と言いかけるが、幼い愛之介の屈託のない笑顔が脳裏に蘇り、続く言葉を呑み込んだ。

——スケートつてすつごく楽しい。忠、僕にスケートを教えてくれて、ありがとう。

愛之介にとつて楽しいのはスケートそのものではなかったのか。それなのに自分と一緒に滑るスケートが楽しかった？ そんなことは想像もできなかった。

愛之介は父の主人である大旦那様の子息だ。自分とは住む世界が違う。それは一生変わ

ることはない。今でも思っている。その壁は取り払うことは多分もうできない。あの人は主人で、彼に仕え支えることが自分の役目だ。

それでもスケートなら、そんなものを飛び越えてしまえるのかもしれない。今はそう思い始めている。

「ねえ、俺に何かできることある？」

「伴侶の件は、〈無理〉と言ったこと取り消して〈保留〉ということにしておいてほしい」

「わかった」

「これから時間は大丈夫？」

「平気」

「今ならまだ私室にいるはずだ。偶然君を見かけて連れて行つたことにしよう」

「うん。プールで滑れる？」

「愛抱夢に時間があれば」

おそらく主人はスノーの望みならば、無理をしても時間を捻出するだろう。

「滑れるといいな」

「それと、伴侶についていくつも意味があつてね。パートナー、ベターハーフ、ソウルメイト

もそう。あと仲間って意味もある」

「仲間？」

少年の顔がぱつと明るくなった。

「ああ、必ずしもひとりってわけではない。自分と同じ道を共に歩んでいける相手であることだけを抑えておけば、君はまだ若いんだから決めなくていい。ただ、これからも愛抱夢と今まで通り素直に向き合って欲しい」

そう、君の純粹さで主人をこれからずっと受け入れてくれさえすれば、それで十分だ。それは多分、大丈夫だと忠は確信している。

何故なら、この少年は赤薔薇の花束を受け取ったあの日から、一度も愛抱夢を拒絶したことがないのだから。

《了》

## 素敵なバスタイムをふたりで

「まだ六月なのにカナダ寒いことになっている。西側の海岸だけど」

ニュース動画を観ていた少年は愛之介の方へ顔を向けた。

「熱波が酷いみたいだね。五十度近い気温は沖縄だつて聞いたことない。異常気象が常態化しているんだろう」

「このままいくと沖縄は六十度くらいになっちゃう？」

「まさか。異常気象になると北海道より海に囲まれた島である沖縄の方が、逆に涼しくなる可能性があるんだ。現に今は沖縄より東京の夏の方が暑いよ」

ランガはうんざりしたようにため息をついた。

「暑いの手」

「それをなんとかするのも政治の役目だと持っているよ」

「お願い。早くなんとかして」

書類をトントンと揃えてデスクの引き出しにしまった。

「待たせたね、ランガくん。さあ素敵なバスタイムにしよう」

「あのさあ、どうしてもお湯に浸からないとだめ？」

顔を顰めた少年は気乗りしていない様子だ。でも、子供を言いくるめることなど他愛ない。

さて、ことの発端はランガが熱中症で倒れそうになったことにある。今は梅雨ということもあつて気温以上に高い湿度が問題だ。

そのとき、まさにナイスアイディアがひらめいた。この子とふたりで風呂に入ろう。

なぜ風呂かつて？ 本格的な暑さを迎える前に、雪の国から来た少年の汗腺を鍛える。

それが何よりもの熱中症対策だ。嘘ではない。

まさに天啓だ。神様ありがとう。

「それは何度も説明したよ。三歳くらいまで汗腺は完成するから、それまで涼しいところにいる君には沖縄というか日本の夏はキツイ。真夏になる前に汗腺を開いておいた方がいい。熱中症は怖いからね。そのための入浴だ」

毎日スケートで汗をかいている彼に必要なことなのかどうかは怪しい。が、この際それは大した問題ではない。この無知な子供がそのことに気づくことはないのだから。

「沖縄の人は一年中シャワーだけでお湯なんか浸からないって母さんも暦も言っていた。俺の家も暦の家も、バスタブ物入れになっているんだ。なのにあなたの家には、どうして大きなバスタブがあるの？」

「それは僕の趣味。でも君の熱中症対策に一役買うなんて、僕には先見の明があつたね。ということまで三十九度のお湯に最低二十分、一緒に浸каろう」

「二十分？ そんな長い時間浸かるの？」

「できればもつと長くがいいよ。ぬるめのお湯に、ゆつくり時間をかけて浸かつたつぷり汗をかかないとね」

「あとさあ、俺とあなた一緒に入る意味ある？ それが一番の謎なんだけど」

そこを突っ込んでくるのは、まあ想定内だ。この純朴な少年を丸め込むための言葉などいくらでも用意してある。

「まず、君はお湯に浸かるの慣れていないだろう？ 飽きてバスタブから出て涼んだりしそうだからね。きちんと浸かっているかどうか監視しないと」

「俺のこと、信用していないの？」

「そうだね。君が自分の体を大切にしているかどうかでことに關しては、信用していない

い」

「むっ」

「それと君は、湯に浸かりながら、うつかり寝てしまうかもしれない。そんなこととして溺れたら大変だからね。僕がついていてあげよう。もちろん寝てしまっても起こさないよ。君をこの腕にしっかりと抱き留めてあげるから、安心して」

「寝ないし、なんか安心できない」

「でも、そうだな。一つだけ一緒に入らないで済む方法があるよ」

「何？」

「監視カメラ使つてランガくんが入浴している間、僕が外から見守つてあげよう。もちろんカメラの仕様で録画されるけどね。どうかな？」

「い、や、だ。それはもつと嫌だ」

「では決まりだ。入る前に水飲んで」

冷たいミネラルウォーターのボトルを強引に押し付けた。

「ジュースはないの？」

「糖分が多いジュースは、水分補給にならない。出たらご褒美をあげるから、今は水で我

慢して」

水を喉に流し込む少年の美しい横顔を保護者面で見つめた。ちよつと黒いニタニタ笑いを慈愛に満ちた微笑みで覆い隠しながら。

脱衣室はそこだよ。先に入って準備して、と愛之介は水を飲み終えたランガの背中をポンと押した。

無意識に鼻歌を歌いステップを踏んでしまうくらい心が弾んでいる。頬が緩み口元に締まらない笑みが浮かぶ。いけない、いけない。こんな顔、誰にも見せられない。思わず窓の外を確認する。盗撮ドローンでも飛んでいたら厄介だ。忠は抜かりないので間違ひなく大丈夫だろうとは思っている。

待てよ、その忠が撮影している可能性も無きしにも非ずだ。

いや、前もって言うておくが、断じてランガに対して、性的なことをしようとしてやるわけではない。諸々を一足飛びに飛ばしまくって、一気にことに及ぶ気など毛頭ない。そんなことをしたら、やつとここまで心を開いてくれた彼を裏切ることになる。

ランガとは、刹那的な快楽を求め合うだけの関係にはなりたくない。エロいことなど爪

の先ほどこらいしか考えていない。全く考えていないと言えば嘘になるので正直に白状しておく。だとしても、それはもう少し先の話だ。彼が性的、精神的に成熟し、自然に受け入れられるようになってからと決めている。それまで気長に待つつもりだ。それは今でも変わらない。

おや？ それなのに、なんで自分はランガと風呂に入ろうなどという発想になったんだ？ あまりにも浮かれすぎていて失念していた。

少しばかり記憶を辿り、すぐに思い出した。あまりにも前のことでそう思うに至ったエピソードを忘却していた。

あれは、修学旅行のお土産をランガから手渡されたときのやり取りからだった。

「愛抱夢は何でも持っているし、行ったことないところなんてなさそうだから、気持ちだけ」と手渡されたお土産は可愛いゆるキャラのストラップ。君からのお土産なら何であつても宝物だ。ところが、修学旅行はどうだった？ と質問した流れから、ある意味当たり前前のことを思い知らされることになった。

「俺の肌、そんなに白い？」と彼はぽつりと言った。

「君は本当に色白、透き通るように白く美しい肌だよ？ どうして今更そんなことを」

「一泊だけ共同浴場の旅館があつて、みんなで風呂に入ったんだ。最初びっくりしたけど、日本ではハダカノツキアイって言うんだよね？ そのとき、本当に色白になつてみんなに言われた」

「いやらしい目で見られたのかい？」思わず身を乗り出した。

とりあえず、その連中のこと二、三発殴りに行つていいだろうか。

「俺、男だよ？ そんなことないと思うけど。そのあと皆でお湯を掛け合つてふざけて先生に怒られた。暦なんか足滑らせて転んだけど、スケートで転び慣れているつて自慢していた。みんなで、いっぱい笑つて、楽しかったよ」

無邪気なこの子の笑顔を見ればその楽しさは伝わってくる。が、このやりとりの中で強く意識させられた衝撃の事実。

あの赤毛の親友はランガの全裸を見たことがあるのに、自分はない。それどころか裸の白いだろう胸も、ジーンズに覆われた長い生脚も拝ませてもらつたことがないのだ。さらに鎖骨すら見た記憶がない。

それが去年の秋のこと。まさかストレートに「見せて」と言うわけにもいかず、あれ以来ずつとモヤモヤを引きずっていた。

そして突然、一緒に入浴する口実が降って湧いてきた。まさに千載一遇のチャンスだと思えた。

大体脱ぎ終えただろうあたりのタイミングで、バスローブを手に脱衣室のドアをノックし「ランガくん、入るよ」と開けた。

トランクス一枚になった少年の白い肌が目に飛び込んできた。彼はジーンズを丁寧に畳んで脱衣籠に置いて振り向いた。シャツも綺麗に畳んで重ねてある。

初めて見せられたランガの裸体にしばし見惚れる。繊細で美しいが、しつかりとした筋肉のついたアスリートの身体だ。白い胸を彩る二つの薄紅は花開く前の蕾のようだと思った。少年らしいすらりと伸びた手足。子供ではない。かといって大人として成熟しきれていない微妙で危ういバランスを持った肉体が目の前にある。

「俺、先に入っているね」

ランガは浴室のドアに指をかけた。

「ちょっと待って」

「何？」

「まだ下着脱いでいないだろう？」

「大丈夫だよ。これサーフパンツで下着じゃないから」

何でもないようにカラッとランガは笑った。

一緒にいるなんてこと、前もって知らせていない。なのになぜ用意した？　もしかして警戒されているのか？

「どうして、サーフパンツを持ってきたのかな？」

ランガは首を傾げ、不思議そうな顔をした。

「だって愛抱夢の家のバスタブ大きいって聞いて、俺、ジャクジー？　と訊いたらそんな感じだって言っていた。だったらスイムウェア着るのがマナーだよな？」

愛之介は内心頭を抱えた。

そうだった。カナダやアメリカにあるジャクジー、日本での言うところのジャグジーは水着を着るのがマナーだった。

「俺、何か間違っている？」

不安そうに見つめてくる少年のあどけない表情に、毒気を抜かれる。

愛之介はため息をついた。

潔く白旗を上げよう。

「うん、何も間違っていないよ。では、僕は自分の水着を用意してくるから、シャワーで身体でも洗って待っていて」

「わかった。早くね」

忠に何でもいから、なるべく早くスイムウェアを持つてくるように伝えた。

こちらの計画は若干の修正を余儀なくされた。まあいい。機会はまだある。どうせ身につけているものはサーフパンツ一枚だ。長い手足も、適度な筋肉がついた白い胸も、しなやかな背中も、惜しげもなく晒されるのだから。

《了》

## 愛し愛されること

「あなたと俺って、何なの？」

ふたりだけのために開けたクレイジーロックからの帰り、立ち寄った公園の高台からふたり並んで首里の夜景を眺めていたときのことだった。

「いきなりどうしたの？」

「昨日、暦の誘い断ったんだ。先にあなたとの約束が決まっているって説明した。そうしたら……あなたと俺の関係について訊かれた

それは赤毛がランガを遊びに誘ったところから始まったという。

## §

「なあランガ。俺、明日午後の予定がキャンセルになって暇になったんだ。だからさ滑りに行こーぜ。パーク行つてさあ」

「ごめん、暦。明日は先約がある。もう少し早く言ってくれれば空けておいたんだけど」  
「そっか、残念だけど、こつちも急だったしな。でも珍しいな。お前が俺の誘い断るなんて初めてじゃね？」

「そうだね。いつも断られるの俺だったしね」

「悪い。家族親戚イベント多いんだ」

「暦の家、大家族なんだから仕方ないよ」

「お袋さんとの用事か？」

「違うよ。愛抱夢に誘われたんだ」

「へ？ どこ行って何するんだよ、あいつなんかと」

「スケートはすると思うけど、他は分からない。俺をびっくりさせたいみたいで、いつも教えてくれない」

「いつも？ って、あいつとそんなにしょっちゅう会っていたのか？」

「そこまで多くはないと思うけど、予定が入っていなければ。断る理由もないし。暦も今度一緒にどう？」

「嫌だよ。俺あいつのこと苦手だし。ってゆーか、あいつが俺のこと嫌いだろう」

「そんなことないと思うけど」

「まさかだけど、お前ら付き合っているのか？」

「誘われたとき都合悪くなければ付き合うのは、暦と同じだよ」

「そーゆー意味じゃない。『結婚前提でお付き合いしてください』みたいな感じで告白でもされて、交際が始まったのになって」

「何それ？ 意味わからない」

「自分で言つといて、何言つてんのか俺もよくわかんねーけど。えーと、こ、恋人みたいな特別なカンケーっていうか」

「違うと思うけど」

「ランガが違うと思っていても、あいつがどう思っているかわかんねーだろ？ 変なことされたりしてないか？」

「変なこと？ 愛抱夢は俺が嫌がるようなことはしないよ」

「それならいいけどさ」

「暦は心配しすぎだよ」

「とにかく一応用心はしておけよ。あいつ変態っぽいし。お前、ぼーつとしていて鈍いから不安だよ」

「わかった」

§

大体の流れは理解した。あの赤毛は人のことを何だと思っているのか。まるで変質者扱いだ。妙な警戒心をランガに植え付けないで欲しい。それでも、彼はそれなりに親友のことを気にかけているのだろう。ならば当然の心配かとも思う。

自分もランガも、今の関係に明確な名称をつけることに興味はなかった。確かに恋人とは言えないだろう。かといって、ただの友人とかスケート仲間だと主張するには無理がある。

「僕たち、こうしてふたりきりで会えば抱き合って、キスもするよね」

「うん」

「そのことを知れば、赤毛くんだけじゃなくて、他の人も皆、僕たちのことを恋人同士だ

と思っても不思議ないよ」

「そうなんだ。俺は〈Dating〉なんだと思っていた」

ランガはぼんやりとした口調で、それでも少し眉を寄せた。

〈Dating〉……つまり、恋人関係になれるかどうかのお試し期間だ。告白文化のないカナダなら普通の発想だ。

日本では、それが恋人同士と見られてしまう可能性の意識はなかったようだ。

「ここは日本だよ」

「そうだった。父さんと母さんもそれで少し揉めたって話を聞いたことがある。母さんは正式な交際だと思っていたけど父さんは〈Dating〉だったって。日本では告白から始まって真面目な交際になるって母さんに言われて、告白からやり直させられたって父さん笑っていた」

〈Dating〉期間は、日本でいうところの二股、三股で色々な人とデートして自然とそのうちひとりと恋人関係になるなんてこともある。まあそれでトラブルになる話は留学中に見てきた。

アジア系の女の子が欧州から留学してきた男といい関係になって、女の子は恋人だと信

じていたのに、二股かけられたって泣いていたのだが、もちろん男に悪気はない。

「君は迂闊だな。そんな調子だと、なし崩し的に恋人認定されてしまうよ」

「俺さ、恋人なんて一生自分とは関係ないことだと思っていたんだ。誰かを特別に好きになつたりなんて想像できなかったし。今でもピンときていない」

「僕は君を愛しているよ」

「知っているよ。あなたはいつもそう言っているから」

薄い反応はいつものことだが、その声に苛立ちが内包しているような気がして思わず振り向いた。

「不満？」

首を回した彼の視線とぶつかった。

「俺、あなたの言う〈愛〉がよくわからない」

「わからないって？」

「あなたは今まで何人ものスケーターに『愛している』とか『愛してあげる』とか言ってきたよね。スケートは愛の儀式で、あなたが潰したスケーターのことだって、みんな愛していたんだって。実也がトーナメントで滑ったとき、あなたに何を言われたか話したん

だ。暦と実也はそれをネタに盛り上がっていて、ジョーとチェリーは『あいつはロマンティストなだけだ。気にするな』って。あれはフォローだったのかな」

ランガは赤毛と実也が盛り上がった会話の具体的な内容については触れなかった。この子なりに気を遣ったのだろう。もつとも大方の想像はつく。雑魚が言う陰口など気にはしない。それでも、ランガがそれを聞いていたのかと思うと、感情は揺れ心がざわつく。

「嫉妬しているのかな？」と茶化して精神安定を保ちたくなるが、それは悪手だ。

それもこれも自分で蒔いた種だ。

今まで愛を語ったスケーターたちは何人もいる。それは本当の愛ではなかったのか、といえどそんなことはない。真面目に愛していたと断言できる。そう、彼らのスケートを愛していたのは間違いない。

さて、どう伝えたらいいものか。愛抱夢、こと愛之介にとつての愛し愛されること。

「僕は子供のころから、多くの人、特に神道家の人たちから愛されてきたんだ。僕が愛されてきたのは、僕が優秀で負けることなく勝ち続けてきたからだ。なので負けた僕をあの人たちは愛さないだろうね。勝たなければ誰からも愛されない」

愛されるということは、自分が優秀であること、勝利の証明でしかない。敗者ならば愛されない。勝者であることは神道家の子供として存在を許される最低限のことだった。

他者から愛されることに特別な感慨など持ちようがない。

当たり前のことでしかなかったのだ。

「そんなはずない。父さんと母さんが俺のこと愛してくれたのは、勝ったからじゃない」  
ランガは大真面目に否定してきた。

「君の育った環境は健全だったようだ。君もお父さんやお母さんを愛していただろう？」

「うん」

ランガは頷いた。

「でも僕は違う。僕を愛してくれた人たちを愛したことなんて一度もない。あとね、僕が愛したスケーターたちから、愛されたいと思ったこともない」

「どうして？」

「僕は愛されるより愛したいタイプだつて前に話しただろう？ それが誰であろうと、たとえ自分が愛した相手であっても、愛して欲しいなんて発想が、もともとないんだ」

相思相愛など望みはしない。羨ましいとも思わなかった。自分の欲望のまま一方的に愛せばそれで済んだ。相手の気持ちを思いやる理由など欠片もなかった。

今なら理解している。それがどれほど身勝手な愛なのか。

「俺のこともそうなの？」

ランガの肩を掴み、真正面向き合った。

「君は特別。愛されたい……初めてそう思えた。それを望んでいる」

「俺は……」

彼の唇に人差し指を押し付け、続く言葉を遮った。

「愛がなんだかわからない、って言いたいんだろう？」

彼はコクリと頷いた。

「実は、僕もよくわからない」

ランガは数回瞬きをして、困惑を隠せず口をへの字に曲げた。

「何それ？ 散々、愛について話してきて、俺のことも愛しているって、わかっていないのに言っていたの？」

「ははは……。さっきまで普通に理解していたつもりなんだけど、段々わからなくなつて

きた。けれど君と一緒に答えが見つかりそうだ」

「なんか、はぐらかされた気がする」

ぐいっとランガの身体を胸に引き寄せた。

「そんなつもりはないよ」

しなやかな肢体を腕の中に閉じ込め、その少年らしい弾力をこっそり楽しんだ。まだ大人として完成する前の未熟さの残る筋肉だ。胸に布地越しの心地よい温度が伝わってくる。

熱く込み上げてくる愛しさに、こんな感情もこの子に出会って初めて知ったなと思う。

このぬくもりだけは手放さない。

力を込め抱きしめれば、ランガが身じろいだ。

「俺、どうしたらいい？」

「自然体でいいよ。ランガくんらしく感じるままに振る舞えばいい。僕は変わることなく君を求めるだけだ。君が僕を嫌がらないでいてくれる限りはね。それは僕のわがままでしかないのだろう。それでも、やめる気は無いんだ。大丈夫かな？」

「大丈夫」

即答だった。迷いを感じさせないその一言に何よりも救われた。

ランガは能動的に動くタイプの子ではない。拒絶さえされなければ、今はそれで十分だ。

いつか、ありのままの自分を愛して欲しい。そんな大それたことを願ってしまうことを、もう止められなかった。

《了》

## とある勝負の夜に

新月の暗い夜、神道家のプールにウィールの振動音が響いていた。

ガーデンライトの柔らかい光を浴び、ふわりと宙を飛ぶ少年に見惚れる。彼は休むことなく滑り続けていた。放っておけば一時間でも二時間でも延々と滑り続けてしまうだろう。いい加減声をかけることにする。

「ランガくん、少し休憩して水分を補給しよう」

「わかった」

プールの外へと軽やかに着地したランガはボードを蹴り上げ掴むと、愛之介の隣に腰をおろし差し出したボトルを受け取った。

水で喉を潤しながら取り止めもない雑談をする。ランガ周辺についてはなるべく把握しておきたい。彼の交友関係を中心に、さりげなく聞き出していた。そのことに若干の後ろめたさはあるが許容範囲だろう。もともと口数の多い子ではない。それでも、こうして話をしてくれるのは、心を開いてくれる証だと思えた。

もつとも赤毛の親友絡みの話題がほとんどなのだが。

「前に、暦の家族が海でのバーベキューに誘ってくれたんだ。そのときに初めて手で持つ花火をしたんだけど、アニメで見たのと同じだって思った。暦も暦の妹たちも、すぐくはしゃいで盛り上がったんだ」

楽しかった記憶を反芻しているのだろう。幸せそうな笑顔を見せつけてくれる。少しばかり妬けるかもしれない。

「手持ち花火は初めてだったんだね」

手で持つ花火は日本の文化だ。

「うん。カナダではプロが打ち上げる花火のイベントはあるんだけど。日本はどこでも花火が売っていて、誰でも子供でも一年中好きなところで花火ができるのすごい」

花火に関する規制は国によって違う。アメリカでも州によつては制限ないところから全面禁止のところまである。

「カナダは花火の規制はあるの？」

「州ごとに違うけど、日本と違って厳しいよ。できるのはハロウィーンのとさくらいで買

えるのもハロウィーンまでの二週間くらい。海や公共の場での花火は禁止。しかも打ち上げるのばかりで、手で持つタイプはあるのかな？ 買うのに年齢制限あるしで、やる機会はなかったな」

カナダ育ちの彼には、日本ではありふれた花火も新鮮に映るのは無理もない。

そこで、ふと思いつく。デスクの引き出しに、いただきものの花火が長いこと放置されていることを。ちょうどいい機会だ。

「ランガくん、少し待つていて」

部屋へ花火を取りに走った。

まだ開封されていない花火の箱を探し出し、水を入れた小さなバケツと一緒にプールへ戻った。

「それは何？」

「花火」

「買ったの？」

「ギフトとして貰ったものだよ。これは日本製の手作りで貴重なものだからって」

包装紙の中から桐箱が現れる。子供向けの玩具花火とは違う高級感溢れるパッケージだ。桐箱の蓋を開ければ、蝋燭と和紙で作られた線香花火が上品に収まっていた。

「これが花火？ 日本っぽくて綺麗だけど小さい。曆たちとやった花火はもっと長くて大きかったしカラフルだったよ。打ち上げ花火もあったし」

「君が赤毛くんたちと遊んだ花火は多分中国製だ。日本製はコストの面で中国に敵わない。贅沢品と言えるね。これは線香花火という日本の伝統花火で、派手さはないけれど繊細で趣があるよ」

「これ火をつけていいの？ こんなに綺麗なのに」

確かに、草木染め和紙で包まれた線香花火は風情がある。燃やしてしまうのは忍びないと思ってしまうのは無理もない。

「火をつけなければ花火にならないよ。こういった手作りの花火、僕も初めてで興味はあったのだけど、これひとりでもやつてもつまらないだろう？」

「ならスネークとやればいいのに」

悪気なく言っているらしいが、勘弁してほしい。

「それでは仕事の延長になってしまうからね。僕も忠も気分転換にならないよ」

「お互い気にしすぎじゃない？ 普段からもつと仲良くすればいいのに」

サラッと云ってくれる。君からの願いは出来る限り叶えたいとは思うのだが、それは難しい。大人のしがらみというやつがあるんだ。

気を取り直して、一応説明書を読もうと懐中電灯の光を当てた。

驚いた。子供の頃、学校関連のイベントとかで何の気なしに花火で遊んできたが、線香花火を長持ちさせるコツが細かく解説されていた。斜め四十五度で火をつけ最後までその角度を保つか。

蝋燭に火を灯し、プールを照らすガーデンライトを消した。

線香花火を一本抜き取ってランガに手渡し、花火を持つ彼の手に自分の手を添えた。

「さあ、ここを持って。この蝋燭で火をつけてね。そのまま最後まで、この角度を保つて」

「うん」

先端に火を付ければ、小さな溶岩のような火球ができる。

「動かすとその丸い球が落ちて、火が消えるから気をつけて」

「これ、すごく神経を使わないといけない花火？ 曆は妹と一緒に花火振り回して怒られ

ていたけど、火は消えなかった」

丸い朱玉からパチッパチッと火花がはじけはじめる。やがて四方八方に勢いよく火花が飛び散りパチパチパチと爆ぜる音が響いた。

「へえ」目を丸くしたランガの端正な横顔を線香花火の瞬く光が浮かび上がらせていた。火薬が爆ぜる音が少しずつ柔らかくなり、勢いが弱まった火花は花びらがはらと散っていくように、線となつて地面に落ちていく。

最後にジュツという音と共に、火球は光を失った。

ランガは顔を上げ、愛之介に視線を移した。

「消えちゃった。揺らしたから？」

「大丈夫。ちゃんと最後まで燃え切ったよ」

「よかった」

「それで、赤毛くんとやった花火と比べてどう？ 感想は？」

「不思議な感じがした」

「どんなふうに？」

ランガは何かを考えるように首を捻った。

「暦たちとやった花火は、賑やかで明るくて楽しくて、ワクワクする」

「興奮するってことだね」

「きつとそう。なのに、これは静かだ。見ていると気持ちが穏やかになる。リラックスするっていうのかな」

「僕も同じことを感じたよ。気分が落ち着き癒されるんだ」

「あなたも？」

「赤毛くんとやった花火とこの線香花火、君はどちらが好みかな？」

「どつちも好きだよ。でもそうだな、暦たちとやる花火は賑やかで楽しい方がいいし、あなたとやるのなら、こつちの花火と一緒にやりたい。地味だけどいつまでも、えーと、なんて言うのかな、残る？」

「ああ、それを余韻って言うんだよ」

「よいん？」

「線香花火で受けた印象を胸に、いつまでもそのイメージに浸っているんだ。そんな感じかな」

「日本語、また一つ覚えた」

「僕は君の余韻に浸っていたいな」

ランガの腰を抱き、ぐいつと引き寄せた。

「何それ」肩にかかる重みに振り向いた。寄り掛かりシャツに顔を埋めた彼の、絹糸のような柔らかい髪が唇に触れた。くすぐりたい。

ランガは、最初から触れるだけなら簡単だった。警戒心の欠如、ただの鈍感ということもあるのだろう。それでも、こうして自然にスキンシップを返してくれるようになったのは、いつからだろうか。

一線を越えさせてしまうのは既に容易いこと、となっているのかもしれない。

そうであるとしても、引き換えに何を失うのか、もう少し思い見る必要がある。

ふわふわとした雪を思わせる水色の髪を撫で、そつと息を吹きかけキスをする。

「さて、もう一回だけ、線香花火に火を付けようか」

「うん！」

「今度は僕もやろう。どちらが長持ちさせられるか勝負だ」

「俺、負けない」

ランガは頭を持ち上げ、キリッと強気に宣言した。

「どうやら彼のおかしな闘争心に火を付けてしまったらしい。受けて立とう。」

「僕も負ける気はないよ」

こうして、『線香花火、どちらが長持ちさせられるか一番勝負』の火蓋が切られた。

《了》

## アイスバブルの夢【R18】

使用済みのコンドームの始末を終え視線を落とす。ぐったりとうつ伏せになったランガは、シーツに片頬を押し付け、瞼を閉じたまま浅い呼吸を繰り返していた。力なく投げ出された脚の片方だけに絡み付いたブランケットとしわくちやになったシーツが生々しく、行為の激しさを物語っていた。その脚から、ついさつきまで自分を啜え込んでいた尻へのなだらかなラインを目でなぞった。

ゆつくりと上下する白い背中にそつと手のひらを置けば、彼はうつすらと目を開いた。

ぼんやりとした虚な瞳。半開きになった唇。

ゾクリとした。

少年から青年へ。ランガは日毎美しくなっていく。スクリーン越しには毎日見ているとはいえ、いつも会えるわけではない。だからこそ暫く時間をあけて見る生身の彼に驚き感動する。

出会ったばかりのころは、その容貌にまだあどけなさを残していた。同じ年頃の少年た

ちと比較して、むしろ大人びた顔立ちだったとは思うのだが、彼の表情、仕草は幼く、そのアンバランスさも大きな魅力だった。

それでも、自分はこの子の外見を愛したわけではないと主張しておこう。最初は彼の滑りに魅入られた。それからは存在そのものが光だと思えた。

ランガの美貌を意識するようになったのは、ほんとここ最近のことなのだ。

「何？」声が掠れている。

「シャワーはどうする？」

「まだ動きたくない。あなたが先に浴びて」

瞳がくると動き、やっと焦点が定まったように目が合った。

明るい光の中で輝く青い虹彩も、薄闇の中では色を失くす。それでも僅かな光を反射させ妖しく煌めいていた。

ふと頬に刺すような痛みを感じた。違う。これは強い冷気だ。

直後ある風景を幻視した。

夕闇に沈む凍てついた湖。

そうだこれは……

「アブラハムレイク」声に出していた。

「アブラハムレイク？」

彼が反応した。

「知っているのかい？」って知らない訳ないか。

「カナダの湖だから」

「留学していたころ、足を伸ばしてカナダに旅行したりもした。そのときに行ったことがあるんだ。冬のアブラハムレイク」

「俺も旅行で行ったよ。父さんと母さんと一緒に。うんと小さいころ。どうしてそんなこと急に？」

指を伸ばし、彼の顔にかかる水色の髪をどけた。

「君の色。ずっと記憶の中にある何かの青と白だっと思っていて、でも何だったか思い出せなくてね。沖繩の海や空の明るい青ではなく、湖面に貼った氷の冷たい青。それは間違いなかったんだけど、どの記憶と重なっていたのか、やっと答えが見つかった。この瞳の色も、髪の色も、白い肌も。冬のアブラハムレイクで見た色彩だ」

カナディアンロッキー。ジャスパー国立公園にあるダム湖。冬には湖面全体が凍りつく。それは極寒地の湖であればありふれた景色でしかない。一つ違うのがアイスバブルと呼ばれる現象だ。湖底に堆積した植物が発酵して発するメタンガスが、凍った湖面に遮られ、空中に拡散することなく氷の中に閉じ込められる。それが白い泡となり神秘的な景観が湖面に広がる。

見られるのはアブラハムレイクだけではない。日本でも確認されている湖はいくつもあ  
る。それでも、アブラハムレイクが世界で一番安定してアイスバブルを観賞できる湖だとい  
う。

青空が広がる晴れた日には、氷点下の湖面に貼る氷も明るい色に染まる。

冷たい氷の青。幾層にも重なる白い泡。

光の中にいるランガを想起させる。

そして闇に沈むアブラハムレイクは、今この薄闇に包まれるランガだ。

彼は眉を寄せた。

「あなたと話していると、たまにどう反応すればいいのかわからなくなることがある」  
「悪かったね。気にしないでいいよ。答え合わせできたことに僕がスッキリしただけだか

ら。ただの自己満足」

のっそりと上半身を持ち上げようとしたランガに手を差し伸ばし、ぐいっと、すくい上げるように抱き寄せた。胸の中にすっぽり収まった彼は気怠げに息を吐いた。

「知っている？ アブラハムレイクの氷って燃えるんだ。お湯も沸かせるんだって、父さんが言っていた」

氷に封じ込まれたガスは可燃性のメタンガスだ。氷にヒビを入れ、火をつければ当然燃える。

「なるほど。そんなところで君に似ているね」

「また訳わからないことを言う」

彼を抱く腕にギュッと力を込める。ランガは身じろぎ、素肌と素肌が擦れ合った。

「クールに見えて簡単に火がつく。情熱的だ。スケートも……」彼の首筋に唇を這わした。「セックスも」

ランガはくすぐったそうに首をすくめて身を振った。

「もう一回する？」

「したいけどしない。明日の早朝フライトだからね。それよりシャワー浴びられそう？」

「さっぱりしてから寝たいけど、まだ動きたくない」

わかりやすい甘えに笑みがこぼれた。それならば、と彼を抱き上げた。

「え？ なに？」

「バスタブにお湯を張って一緒に入ろうか。僕が入念に洗ってあげよう。別々に入るより時間の節約になる。どうかな？ それとこのホテル、ビューバスルームなんだ。入らないともつたないよ」

「わかった。でも入念はいらない。さつと流すくらいで大丈夫」

首に腕がするりと回された。肌を掠める吐息が熱っぽい。

「君は意外と体温が高い」前々から感じていたことを口にする。見た目は冷たそうな肌なのに。

「誰と比べているの？」そういう突っ込みをするようになったか。

「ナイシヨ」

ふーんと想像を裏切らず反応は淡泊。特に嫉妬してくれるような様子はない。まあ通常運転ではある。

「でも、あなたの方が俺より高いと思うけど？ いつも熱く感じる」

「それは筋肉量に比例するからね」

「そうなの？　じゃあ、ジョーはあなたより……」

洗い場に彼を降ろして、唇にキスをして黙らせた。

「他の男の話はそこまでだ」

バスタブにバスソルトを入れ湯を張っている間に、身体を洗うように言っただが、この子はスケート以外の動作がどうも緩慢だ。見ていられなくて思わず手を出した。

スポンジでボディソープを泡立て、全身に塗ったくっつけてやる。その間、ぼーつとしていた彼が、ブラインドに覆われた窓に目をやった。

「ねえ、あのブラインドの向こうが窓？　外、見える？」

「そうだよ」

泡だらけのまま、いきなりバスタブに飛び込もうとするランガの身体を押さえつけて、シャワーをかけた。

「ちゃんと流してから」

まるで大きな幼児だ。

洗い流し終えたところでバスルームの照明を落とした。ブラインドを上げれば夜景が目に飛び込んでくる。

「わあ」

バスタブの中でふたりくつろぎ窓の外を眺める。

いや、熱心に眺めているのはランガだけだ。自分はいえ、そんな彼をただ見つめていた。

不意に振り向いたランガと視線がぶつかった。彼は微笑んだ。

「愛抱夢と一緒に見たいな」

「見たって何を？」

「アイスバブル。あなたの話を聞いて懐かしくなった。俺がアブラハムレイク行つたとき、うんと小さくてあまり覚えていないんだ」

「それは素敵だね」我ながら歯切れの悪い返答だ。

あの景観をランガと一緒に見る。それが可能ならば、どれほど幸せだろうか。しかし今の政治家という仕事をしている限り、プライベートでまとまった休みを取ることは難しい。いつ行けるようになるかわからないし、確約もできない。

そんな自分の迷いを感じさせてしまったのだろう。

「ごめん。俺、困らせている？ わかっているから。愛抱夢は忙しいって。だから、これはただの夢だよ」

あまりにもいじらしい。だから君が愛おしくてたまらない。

神道愛之介、お前は何を気弱になっているんだ。

自分の情けなさに自嘲した。彼の肩を掴み、ぐいつと引き寄せ強く抱きしめた。

「まったく、僕を誰だと思っているんだい？ 君の夢は必ず実現させるさ。どんな手を使ってもね」

ランガは腕の中で小さくうなずいた。

## プロポーズの夜

その夜、クレイジーロックはいつにも増してギャラリーが多かった。理由は分かりきっている。愛抱夢対スノーのビーフ観戦が目的だ。

トーナメント決勝で凄まじい戦いを見せたふたりの再戦が行われるのだ。盛り上がりがないわけではない。トーナメント決勝とは違いスタート前からふたりともどこか楽しそうだった。もつとも和やかという雰囲気からは程遠い。愛抱夢もスノーも本気だ。ガラガラとした闘気が全身から溢れている

「賭けの賞品は何にするんだい？ スノー」

愛抱夢は、唇の両端をオーバーアクション気味に持ち上げた。目元がマスクで覆われている以上、表情は口元だけで作るしかない。これはごきげんな笑顔のつもりだ。

「いらない」

「そうはいかないよ。トーナメントとは違うんだ。規則だからね」

「最初にあなたと滑ったときは何も賭けなかったよ」

「あのときは、君と滑ることが目的だったからね。お互い賭けはどうでもよかった。でも今は違う。僕には賭けたいものがあるんだ」

「ふーん、何？」

「君だよ」

「俺？」

「そうだよ、スノー。僕が勝ったら、君は僕のものだ。なあに大したことはない。ただ一生、僕の側にいてくれればそれでいいんだ。簡単だろ？」

「うん。そんなのでいいの？」なんて素直な子なんだ。

「ちよつと待て！ そんなのでいいの、じゃねー」やはり赤毛はここで出しゃばってくるか。ふん、邪魔をしようとしたって無駄だ。それでも穏便な対応で収めることにする。なんといつても赤毛はランガの大切な親友なのだから。

「なんだい？ 赤毛くん。Sの掟は？ 賭ける賞品については……」

「対戦する者だけで決めるものとする」

「赤毛くんにしては上出来だ。よく覚えていたね。偉い偉い」

「どうも……じゃねえよ！ そんなこと言われても、こいつは、そーゆーことに関して幼

稚園児並みなんだよ、いろいろピュアっていうか」

知っている。ランガがピュアだなんて言われるまでもない。

「そうやって、いちいち保護者ヅラしないでくれないかな？ 規則は規則だからね」

「暦、最後まで話を聞こう」チェリーが赤毛の肩に手を乗せ制止した。やはり君は友達だ。助かるよチェリー。

「さて、邪魔が入ったけど。君が勝ったら何が欲しい？」

うーんと、ランガは首を傾げている。スケートと賭けを結びつけることは、この子にしてみたら難問だ。

「思いつかない」予想通りの返答だ。

「なら、僕が提案しよう。採用するかどうかは君次第だよ」

「どんなの？」

「君が勝ったら僕は君のものだ。僕は一生君に尽くすよ。悪くないだろう？」

「わかった」

「契約成立だ」

再び赤毛が身を乗り出した。今度は飛びかかってきそうな勢いだ。

「わかったじゃねーよ、ランガ！ 気を確かにしろ」

「落ちて、暦」

ジョーが赤毛を羽交い締めにして蛮行を防いでくれた。よくやった。君も僕の友達だ。  
「暦、気持ちはわかるがSにはSの守るべきルールがある。ランガだって子供じゃない。信じてやれ。愛抱夢はランガが嫌がるようなことはやらないはずだ」

そんなことは当然だ。

ジョーを見れば視線で静かに圧をかけてくる。お前、わかっているよな？ と。もちろんランガのことは一生大切に。誓うとも。

「あれって、実質……」実也のボソリという声が聞こえた。シャドウが続く。「プロポーズ？」

まあ君たちなら察して当然。気づいていないのはランガだけだ。

《了》

## 寂しい夜の特効薬

ネットニュースで未成年が巻き込まれる性犯罪を取り上げていた。主にSNSが温床になっているという話だ。

脅されて、または懇願されて裸の写真を送ってしまう。さらにその写真を拡散されたくなければと、次第に要求がエスカレートしていくという。

「これだけ問題になっているのに、被害者は減らない。かといって安易にネット規制かけるのも問題あるしね。基本は教育が重要だと思っている」

「そうだね」

ランガは目の前にあるアフタヌーンティセットに夢中だ。愛之介は聞いていないことなど承知で話を続けた。

「そもそも裸の写真など撮らなければいい。恋人だから大丈夫と渡しても、リベンジポルノに使われる可能性だってある。一度ネットに流されると削除は不可能。恋人同士だからといって一生別れないなんて保証はないからね」

書類をまとめて顔を上げればランガと目が合った。

「女の子は大変だね」

完全に他人事モードだ。

「被害者は女の子とは限らない。君も用心しておきなさい」

「わかった」

ランガはスクリーンにクロテッドクリームを塗りたくり口に運び紅茶で流し込んだ。ちゃんと聞いていたのかどうか怪しい。というか間違ひなく聞いちゃいない。

「そうそう。来週から視察で海外だ。二週間、場合によつては一ヶ月ほど会えなくなる」

「ふーん」

「寂しい？」

「唇がいるから、寂しくないよ」

迷いのかけらもない即答だった。少しは空気を読もう、というか気を遣おうよ。

顔を上げたランガと目が合った。微妙な表情の愛之介を見て流石のランガでも察したのかもしれない。

「あなたと会えないのは、もちろん少し寂しい、かもしれない」

フォローのつもりか。おまけのように付け足さないで欲しい。かえって悲しくなる。

「僕はすごく寂しい」

「変なの。今までだって二週間くらい会えないなんてよくあったし。それに、スマホ持つていくんだよね。なら毎日声くらい聞ける」

「言われてみればそうだね。まあ距離の問題かな」

「距離？」

「羽田と那覇なら、フライト時間は三時間かからない。でも海外だったらそうはいかないからね。何かあったときにすぐに駆けつけられない」

愛之介は一通りデスク周りを片付け、ランガの隣に座った。

「何かって、何があるというの？」

「さあ、なんだろうね。歳をとるとそんなつまらないことを考えてしまうんだよ」

「年寄りみたいなことを言う」

「それよりランガくんに頼みがあるんだけど」

「頼み？」

「そう、君の写真と動画が欲しい。海外視察のお供に持っていきたい」

ランガは不思議そうな顔で首を傾げた。

「よくわからないけど、どんなのが欲しいの？」

愛之介は目を細め人差し指をピンと立てた。

「もちろんエッチなのをお願いしたい。ありとあらゆるアングルから撮った裸の写真とか、マスターベーションの音声付き動画も欲しいかな」

ぬつと顔を近づければ、ランガは若干引き気味に目をパチクリさせている。

「愛抱夢、もしかしてかなりストレス溜まっている？」

「そりゃ、仕事柄仕方ない」

「とりあえずドクターに相談したほうがいいと思うよ。それで、そんなものどうするの？」

「どうするって使用方法は一つしかない。君のいない夜に僕を慰めてもらう」

「よくわからない。いつも通り会えない夜はテレフォンセックスでよくない？」

「ふむ。一理あると言いたいが、君は時差のことを忘れているね？」

「あ……そっか」

「よし、決まりだ。これから撮影会だ。もちろん君用に僕のも撮っていいよ」  
すくつと立ち上り彼の手首を掴んだ。

「はあ？」

ランガは目を丸くし数回瞬きをした。ここは彼が混乱しているうちに押し切るが吉だ。

「どうしたの？ さあ立って準備して」

掴んだ手首を引つ張った。

「い、や、だ」

ランガは愛之介の腕を引つ張り返して抵抗する。

「なぜ？」

「なぜって、なんか恥ずかしい」

見れば彼の顔は真っ赤だ。

滅多に見られない羞恥に赤く染まるランガだ。こんな頭の悪い話題を振った甲斐があつたと言えるかもしれない。

「今さら？」

「直接見られるのと、写真とか動画で見られるのは別。残るのも嫌だ」

彼は、ふいつと目を逸らし、口を尖らせた。

「それに、さっきあなたは言つたよね？」

「何を？」

「裸の写真など撮らなければいいって。恋人相手でもリベンジポルノに使われる可能性だってある。一度ネットに流されると消せない。恋人同士でも別れたらどうなるかわからない、そんなこと言っていた」

一応、頭に入っていたのか。ボーッとした子だと侮るとえらい目にあう。

「僕はそんなことはしないし、君と別れる気はないよ」

「知っている。あなたを信じていないわけじゃない。でもなんかうまく言えないけど嫌なんだ」

うまく言えない。ランガが言語化できない〈嫌〉か。昔の神道愛之介ならば、明確に言語化できない相手の戸惑いなど無視できた。強引に押し切ってしまっていた。

もっとも日本人相手の場合「嫌よ嫌よも好きのうち」というのがあって、相手の「嫌」を真に受けると進展しないと言うこともある。今ではかなり時代錯誤な価値観だが。

この子はカナダ育ちということもあってそれは一切考えなくていい。「嫌だ」と言えば本気で嫌なのだ。

「あなたは、今まで俺が嫌だと言ったことはやらなかったよね」

「そうだったね」

「だから、ごめんなさい」

目を伏せた彼の水色の髪を撫でる。

「謝らなくていいよ。その代わりと言ってはなんだけど、今夜はいつもより濃厚なセックスをしたいな。もちろん君の身体を傷つけるような無理はさせないから安心して」

「あ……あの」

みるみるうちに顔全体が赤みを帯びていく。

そつと、頭を胸に抱き寄せ耳元で囁いた。

「嫌ならやらない。どうかな？」

ランガは小さく頷き、同意の意思を伝えてきた。

## そこは優しくあたたかい

クレイジーロックから神道家の屋敷へ向かう車中でのことだった。

忠は主人から予定が何も入っていないければ、と前置きされたうえで、明日の午前中に神道邸まで足を運んで欲しいと頼まれた。少々手伝って欲しいことがある。詳細はそのとき話すと。本来その日は休日なのだが、この仕事をしているとこういったことは珍しくない。もつとも秘書の仕事とは関係ないという。

「彼におすすめの本ですか？」

「そうなんだ。昨晚Sでランガくん相談された。あの子は日本語文の読解力に不安があつて、現代国語以外の教科のテストも、設問文を理解することに時間がかかりつまづいてしまうそうなんだ。そこで教師から本を読むようすすめられたらしい」

「それでしたら順番として、まずあの暦という子に頼まなかったのでしょうか」

「赤毛くんか？ もちろん最初に相談したそうなんだが、いきなりスケートの雑誌を持ってきたということで雑誌はだめだと言ったら漫画ばかり貸してくれたらしい。一応漫画は

読んだそうだがあまり勉強にならないと。それで普通の簡単な本を、と言ったら妹の絵本を貸してくれて、ひらがなばかりでやはり参考にならなかったとか」

あの子たちの将来に不安を感じるやりとりだ。大きなお世話だが。

「それと、チェリーとジョーとシャドウと実也にはもう相談済みだ。チェリーのおすすめ本は漢字だけで書かれていて歯が立たない。シャドウは花関連の本、ジョーは料理の本、実也は動物の本しかないと言われたということだ」

スケーターつてやつは、どうしてこう常識の足りない連中ばかりなのか。

「愛之介様に今のスノー向けの本の心当たりはございますか？」

「考えたのだけど、安岡正篤の『政治家と実践哲学』くらいしか思いつかなかった。彼にはまだ少し早いように思うんだよ」

何を言っているんだ。少しどころか間違いない未来永劫早い。今更ながら主人もスケーターなのだと思い知る。

「他には？」

「ない。それでお前に相談している。不本意だが」

「でしたら、なぜ引き受けてしまったのです？」

安請け合い過ぎる。忠だってそんな心当たりがあるわけではない。

「他ならぬランガくんから頼りにされたんだ。僕への相談が一番最後になったというのは少々気に入らないが、まあそれでも僕が最後の砦になったということだ。何よりこの僕に不可能なことなんてないからね」

「はあ」

間拔けな声が漏れてしまった。あの決勝戦以降、どうも自制心が働きづらくなっている。もつとも主人は気に留めている様子はない。

「問題ない。どうにでもなるだろう」

愛之介は何ごとにおいても強気で自信満々だ。傍から見れば根拠薄弱に見えるのだが大抵うまくことが運んでしまう。いつか痛い目に遭うのではないかという自分の心配をよそに悪運が強いと言うべきか一向にその心配はない。

「スノーとはいつまでに、という約束を？」

「これから来る。ついでなのでランチに招待した」

「え……？」

読めてきた。ランガと一緒に時間を過ごす、が主人の目的で、今の彼に適した本を探

す、が手段になっている。間違はなく彼の悩みを利用した策略だ。

忠は上機嫌な主人の顔をチラリと見やる。ならば打つ手はある。

「ではこうしましょう。書庫でスノーと一緒に本を探します。しかしあの書庫にそんな本があるはずありません」

「どうのことだ？」

「探すポーズを見せるだけです。そのあと彼の好みを聞き出し通販で取り寄せる。でいかがでしょうか」

愛之介はニヤリと満足げな笑みを浮かべた。

「妙案だ」

話がまとまったそのタイミングで、使用人がランガの来訪を伝えてきた。

ランチを終えた愛之介、忠、ランガの三人は神道家の書庫にいた。

書庫内は使用人がまめに掃除をしてくれているおかげで埃つばさもカビ臭さもない。微かに漂う紙のにおいが懐かしかった。

「こんなに本がたくさん」

ランガは書庫内をぐるりと見回した。

「無駄に広い家だからね。収納には困らなくて、なんとなくつておいてしまう。捨てるタイミングを逃してしまうからそれも考えものだ」

「ここで見つかるの？」

「どうか。僕もここにどんな本があるのかよく覚えていないからね。一通り探してなかつたらネット通販で注文すればいいさ。アドバイスはするよ」

「わかった」

忠はふたりのやりとりを聞きながら、適当に本棚から本を引き出してページを開いて確認するふりをして戻すという作業を繰り返した。探しているという演技だ。愛之介も同じような動作をはじめた。

ランガはといえば所在無げな様子でキョロキョロしながら、同じように本の背に指をかけた。

「わっ！」

ランガの声とバサッという音に忠と愛之介は振り向いた。

「ごめんなさい。手が滑って」

ランガは落とした本を拾おうと、しゃがんで手を伸ばす。

「気にしないでいいよ。もともと捨ててもかまわない本ばかりなんだ」

「あれ？」落下の衝撃で開いたページを見てランガが素っ頓狂な声をあげた。

「この本変だけど。カバーと中が違っている」

忠と愛之介が覗き込む。

その挿絵ページには美少女のイラストが描かれていた。これは一昔前の、いわゆる萌え系の絵柄だ。カバーに印刷されているタイトルは『論語』とお堅いのだが。

「あ……」

忠と愛之介が顔を見合わせた。ふたり同時に思い出していた。

「これは僕が失くしてしまつて忠に返せなかった本だ」

その本が落ちて空いたスペースに目を向ければ中国古典がずらりと並んでいる棚だった。まさかこんなところに紛れ込んでいたとは。

「懐かしいですね」

あれは愛之介が中学に進級する前のことだったと記憶している。

「ねえ忠、僕に何か面白い本貸して」

愛之介はプールの外へと着地しボードを蹴り上げ掴んだ。

「愛之介様が読まれる本は、お父様や伯母様がたが選んでいて、それ以外は禁止だと聞いています」

「そうだけどさあ、つまらないんだよ。だから面白そうな本を僕に貸して欲しいんだ」

愛之介は利発な子供だった。同年齢の普通な子なら理解できないだろう難解な書籍も難なく読み解いてしまう。でもそれは楽しんだり気晴らしをするための読書ではなかった。

「お貸しするのは構いませんが、バレたら大問題になるかと」

「大丈夫。表紙カバーだけ交換しておけばバレないから。あいつらどうせ中なんてチエツクしないし」

「どのような本がよろしいのでしょうか。あまり愛之介様におすすめできるような本は……」

「忠の好きな本が読みたい。忠くらいの歳の人たちの間で人気のある本が知りたいんだ」

忠が所有する中高校生に人気がある本を候補として頭の中で思い浮かべた。

「わかりました。今度何冊か持って参ります。ただ愛之介様に気に入っていただけるかと」

うか自信はありません」

「好みじゃなくても忠の責任にしたりしないよ。面白くなかったらまた次の本を探せばいい」

「そうですか。文庫サイズでよろしいでしょうか？」

「うん。僕も表紙を交換できそうな本を探しておく。なるべく難しそうなやつ」

無邪気な共犯者たちは顔を見合わせクスリと笑った。愛之介と忠、ふたりがワクワクする秘密を共有した瞬間だった。

ランガが顔を上げ、愛之介を見た。

「この本面白かった？」

「面白かったよ」

「愛抱夢はこの本、好きだった？」

「そうだね。何度も読み返した。大好きだったな」

それは初めて聞く。

「俺、この本を読んでみるよ」

「ああ、でもこれはラノベと言つて君の勉強になるかどうかは」

「らのべ？」

「うん、なんて説明すればいいのかな」

なるほど、と忠は口を挟むことにした。

「案外、この本はおすすめかもしれません」

「どうのことだ？ 忠」

「この作家はラノベでデビューしていますが、その後一般文芸に転向しています。その分、文章、構成におかしなところがなく、かつ読みやすい。今のスノーに最適だと考えられます」

「いや、それでも」

「愛抱夢が大好きだったという本なら俺も読みたい。だめ？」

ランガは身を乗り出し真剣な表情で愛之介に訴えた。

だめだなんて言えるわけがない。

紅茶と焼き菓子を運ぼうとする使用人から、自分が持っていこうとワゴンを預かった。

忠が部屋に入ればふたり並んでソファに座っていた。ランガは本を読み愛之介はまだ目を通してない各種資料や報告書の束をめくっていた。ランガはわからない言葉を愛之介に訊き、その都度優しく丁寧に彼は答えていく。

ふたりのやりとりは歳の離れた仲の良い兄弟のようにも見えて、微笑ましかった。

「紅茶と菓子をお持ちしました」

「ランガくん、一旦本を閉じて。休憩にしよう」

「はい」

食器を下げようと部屋へ戻れば、ソファに座ったまま愛之介にもたれ掛かりランガは目を閉じていた。

「おやつを食べたら眠くなってしまったらしい。そつとしておこう」

小声で愛之介は言った。

温暖な気候の土地とはいえ、冬である今は流石に肌寒い。

「毛布をお持ちしましょう」

「頼んだ」

毛布を手にはランガの睡眠を邪魔しないようドアを軽くノックする。

返事がない。

そつと開けたドアの隙間から室内を窺えば愛之介も目を閉じていた。

足音を立てないよう慎重に近づいていく。ふたりとも瞼を開く気配はなかった。思ったより深い眠りに入っているのかもしれない。

お互いにお互いの身体を預け支え合っているように見える。視線を落とせば、指と指を絡ませ手を繋いでいた。

愛之介は日々激務に忙殺されている。疲労が溜まっていて当然だ。それでもいつ足を掬われるかわからない立場の彼が気を緩めることはない。表層的には、にこやかな笑顔を振り撒きながら常に緊張を強いられているのだ。安らげる時間など持てるはずもなく、ピンと張った糸はいつ切れるかわからない。そんな不安が常に付きまとっていた。

一枚の毛布をふわりと掛けた。ふたりを包むように。それから穏やかに眠る主人の顔を

忠はしばし見つめる。安らかな寝顔は子供のように見え忠は苦笑した。ふと、その中に幼い愛之介の面影を見つけてしまう。遠い日の記憶が静かに揺り起こされ胸が締め付けられた。

それでも。

主人に寄り添い無防備に眠る少年に視線を移した。

今はこの子がいてくれる。

胸にぼうつとやわらかな光が灯った。

この部屋の空気は、こんなにも優しくあたたかい。

## 恋人になった夜

チュツという軽いリップ音とともに唇が一瞬触れすぐに離れた。

「久しぶり愛抱夢」

「会いたかったよ、ランガくん」

ランガはキスをしてくることにためらいがない。日常の挨拶といった風情で彼の方から積極的に唇を重ねにくる。

ランガの両親はいつもキスしていてそれが普通だったと彼は話してくれた。

朝起きたら軽くキス、仕事に出かける前に慌ただしくキス、帰宅すれば速攻でキス、散歩しながら手繋ぎキス、見ていないけどきつとおやすみなさいのキスも寝室でしているのだらうと。それ以外でも特に何かがあるわけでもなくさりげなくキスをしていたと。

これらは夫婦もしくは恋人同士の挨拶のキス。親愛の表出だ。老夫婦だって同じだと彼は教えてくれた。

幼いころからそんな両親を普通に見てきたんだ。そりゃ抵抗がなくて当然だ。

一方、留学でアメリカに数年間過ごしたことがあるとはいえ愛之介は所詮日本人。さら

にそんなラブラブ夫婦など知り合いにはいない。人前でキスをする——伯母どもいわく、はしたない男女——など身近にいなかった。欧米かぶれのくせにと思つたが、あれは僻みだつたのかもしれない。

ここは日本だ、人目に付くところでは控えるように、とランガには言い聞かせてはあ  
る。だから今もコースから少し外れたフェンスの陰で、誰の視線も向いていない隙を見計  
らつてのことだつた。

この手の性的な意味などほとんど込められていないキスは、ランガに圧倒的なアドバン  
テージがある。自然体でキスを仕掛けてくる彼に愛之介は押され気味だつた。

もつとも誰もいない空間での性的で濃厚なキスなら愛之介に分がある。これは育ちとい  
うより単純に年齢と経験値の差によるもので、まだ少年でしかないランガもそれを理解し  
年上の男のリードに委ねていた。

とはいえ、この関係を持つてしても、ランガが自分のことを恋人と認識してくれている  
のかわからないし情けないことに訊く勇氣もなかった

金曜夜のS終了後に話したいことがあるから時間をつくつて欲しい、とランガに言われ

ていた。

どこで？ と色々考えたのだが彼の自宅マンションが無難ということで落ち着いた。母親は夜勤だということで帰りは翌朝十時過ぎになるという。話は長引くかもしれないし忠を待たせても申し訳ないからと、ランガは愛之介に一晩泊まっつていくことを提案した。

もちろん彼は母親にスケート仲間を泊めると予め説明している。

ふたりとも歯を磨きシャワーを浴び寝巻きに着替えてと、すっかり寝る体裁を整えていた。

愛之介はベッドに腰かけ、床にマットレスを敷くランガを眺めていた。

「愛抱夢の家と違って狭くてごめん。俺、こっちで寝るから愛抱夢はベッドで寝て」

「一緒に寝たいな」

「狭いよ」

「そうだね。でもその前に」

ランガの腕を掴みぐいっと引っ張れば、体勢を崩し倒れ込んでくる。すっぽり胸に抱きとめ「キスしていい？」と耳元で囁いた。

「今日はもう何度もしたけど」

ランガは指を折りはじめた。今日会ってからのキスの回数を数えているようだが、なんの意味がある？ 一日の上限でも決めているのだろうか。

「全部君からのキスだったからね。今度は僕からキスをしたい。どうかな？」

「わかった。その前に話がまだだよ。教えて欲しいことがあるんだ」言いながらランガは身体をを少し離れた。

「確かに今日のテーマがまだだったね。で何を知りたいの？」

「俺たちいつセックスするの？」

迷いも恥じらいもなく飛び出した質問は脈絡もなくストレートだ。

愛之介はまじまじとランガの顔を見つめた。彼の表情は真剣そのもので、青い瞳が睨みつけるように迫ってくる。

ここは冷静に返そう。咳払い一つで心を落ち着かせた。

「具体的には考えていなかった。様子を見つつかな。君の希望とかあるの？」

「あなたがやろうと言ったときかな。もういつでもいいと決めていた。今、これからでもいいよ」

ランガは元気一杯に両腕を広げた。

少し頭が重いような気がする。

「この部屋で？」

「だめ？」

部屋をぐるりと見回した。

ハンガーに掛けられた制服、デスクの上に並んだ教科書、校章の入った通学カバン。

いいわけないだろう。もういい加減慣れたがムードもへつたくれもない。頭がズキズキとするのは気のせいではなさそうだ。

「ここはいかにも男子高校生の部屋なんだよね。僕に罪悪感や後ろめたさを抱かせて君が面白がるとかいう何かのプレイ？」

少しだけ茶化して反応をみる。

「ざいあくかん？ うしろめたさ？ プレイって？」

ランガはきょとん顔でコテツと首を傾げた。いちにいさん……と六つくらいかな？ 頭の上に並ぶクエスチョンマークの数だ。そりゃ通じるわけないか。

「あー気にしないで。それより君は本気でやりたいと思ってるの？」

「やりたいじゃなくて、やったほうがいい、かな？」

やったほうがいい？ やらないとまずいことでもあるというのだろうか。意図が読めない。

「やったほうがいいとは？」

「正式な恋人同士になる前に、〈Sexual compatibility〉——身体の相性だった？ を確認しておいたほうがいいって聞いたことがある。あなたがまだ〈Dating〉だと思っている間に」

愛之介は額に指を当てうなだれた。

ここまでの流れではつきりしたことは、ランガが自分を恋人とはまだ認識してくれていなかったということだ。彼にとつての〈Dating〉期間など既に終わっていると信じたかったのだが。そもそも愛之介は最初からお試しなんてことを考えていない。ここは日本だ。

気を取り直して「その発想になった理由を説明してくれる？」と、水色の髪を優しく撫でた。

ランガは自分の胸に手を当てた。

「俺さ、あなたと会うとドキドキする。それが会う度に強くなっていくんだ。ずっとあなたが見せてくれるスケートのせいだと思って思っていた」

そこで言葉を区切り目を伏せ黙り込んだ。

ランガの片頬に手のひらをそつと添えた。

「落ち着いて。ゆっくりでいいよ」

彼は小さくうなずき口元をキュッと結んで顔をあげる。まっすぐ愛之介に向けられた青い瞳が微かに揺れていた。

「それが違うって気がついた。このドキドキはあなたへの好きなのかなって。好きがもつと大きくなっていくのかもしれないと思ったら、不安になった。——〈What if we're not sexually compatible?〉」

セックスの相性が悪かったらどうしよう？か。まったくなんてことだ。普通の子はそんなこと考えたりしない。

腰に腕を回し引き寄せるればランガは片頬を愛之介の胸に押し付けてきた。

「今よりあなたを好きになってから合わないってわかるくらいなら、今のうちに確認しておいたほうがいいかなって」

「きつと相性は最高だよ」

「What if……えつと……最悪だったら？」

間違いないそれは杞憂だ。でもまあ、それを説明したところでランガの不安は解消されないだろう。

「セックスなんてしなければそれで済む」

「え？」

ランガの背中で両腕をクロスしてそのままギュッと力を込めた。

「君は僕に抱きしめられるの好き？」

「うん、好き。あなたを抱きしめることも好きだよ」

「僕もさ。君を抱きしめることも君に抱きしめられることも同じくらい好きなんだ。癒されるからね。では僕とのキスは？　僕は君とするキスが好きだ」

「俺も好き」

「ほら、なんの問題もないだろう？　キスしてスケートをする。キスして一緒に食事をしよう。キスして手を繋いで、キスして抱き合って寝る。どう？　素敵だろう？」

「それで愛抱夢はいいの？」

「もちろんだよ」

「本当に？」

「本当。君は満足できないのかな？」

ランガはふるふると首を振った。

「僕が君を抱きたいと思つてゐるのは嘘じゃないよ。でもそれは今ではない。それといきなりは無理だよ。色々準備しなければいけないものもあるし。何より君の初めては大切にしたい。必ず素敵な思ひ出して見せるから」

いずれ訪れる特別な日。いかなる方法で君をうつとりとさせようか。どのような企画で盛り上げるか少し考えるだけでワクワクする。華やかでロマンティックな情熱の夜を君にプレゼントしよう。少々鈍感なこの子には、傍から見ればドン引きするくらい大袈裟な演出で丁度良いだろう。

「約束するよ」

愛之介は、すつと小指を立てた。

「Pinky swear. 大人はそんなことしないって、唇が……」

「赤毛くんが？ 大人はどうするって言っていたの？」

「こうするんだって、DAPね」

「それは友人間の約束だよ。恋人同士は大人でも指切りなんだ。日本では昔からね」

発祥は遊女が客に愛を誓った少々生臭いおまじないだったという逸話は黙ってしよう。

今は普通に無邪気な子供や恋人同士が指切りで約束を交わすのだから。

「わかった」とランガは素直に小指を差し出した。小指を絡め合う。

セックスが愛の絶対条件ってわけではないけれど、セックスに興味がないわけではな

い。全身全霊で受け入れる他者の肉体と心に自分の生を鮮明に映し出すことができるのだ

から。

それでも僕たちにはスケートがある。だから急がなくていい。無理しなくていい。今は

まだ。

「さて寝ようか。遅いしね」

「一緒に寝ていい？ 窮屈だったら下に移るから」

「もちろん。もともと同じベッドで抱き合って寝たいって思っていた」

「キスは？」

「もう遅いからね。おやすみのキスをしよう」

軽く唇を合わせればランガの口元が綻んだ。

「おやすみなさい」

「おやすみ、ランガくん」

部屋の明かりを落とす。

体を密着させ目を閉じれば、ランガの気持ちよさそうな寝息がすぐに聞こえてきた。

布地越しに行き交う穏やかな体温は、どこか懐かしくて愛之介を泣きたい気分にした。  
た。

ああ、なるほどと思う。恋人のぬくもりはこんなにも優しく愛おしい。

《了》

## あなたがいない時間、足りなかったもの【R18】

「会いたい」

先に音上げたのはランガだった。もう随分と長いこと会えていないような気がする。

「寂しいの？」と聞かれれば「寂しいわけじゃない」と答えてしまう。だって、そんなはずはないのだから。何故なら暦とはいつも一緒だし実也やジョーやチェリーやシャドウともSで会っていた。一緒に滑ってドキドキして笑って。それは本当に楽しくて楽しくて。だから全然寂しくはない。多分。

「僕も寂しいと感じる暇なんてなかったよ。忙しすぎてね。それはそれで寂しいことだけ」と

「忙しいものね。無理言つてごめん」

「ちようどよかったよ。会いたいのは僕も同じだから時間をつくるよ」

愛抱夢はすぐに承諾してくれたけれど、なかなかスケジュールが合わなかった。相手の表の顔が多忙な政治家である以上、強引に押しかけるわけにもいかずランガは待つ立場にならざるを得ない。

やつと都合がついたと連絡があつたその夜、彼と会うことになった。

スネークが迎えにきてキーを渡された。

車で連れて行かれたそこはガチガチのセキュリティで守られたLuxury apartments……日本で言うところの高級マンションだった。ものすごい場違い感にビクビクしながら乗ったエレベーターが止まるのは居住階だけらしい。おかげで迷うこともなく指定された部屋にたどり着きほつとする。

渡されたキーでドアを開けた。玄関の中で愛抱夢が出迎えてくれた。ヘアスタイルも装いもSではなくテレビなどで見る議員の新道愛之介だった。仕事を終え着替える暇もなくここへ来たのだろう。

「ようこそ、ランガくん」

「こんばんは。待った？」

「僕も今しがた着いたばかり。さあ上がって」

執務室を兼ねているらしいリビングへ通されキョロキョロあたりを見回した。オレンジがかった柔らかな間接照明が室内をぼんやりと照らしていた。夜ということもあって光度を抑えてあるのだろう。

それにしても、ランガが母親と暮らす住まいもマンションだが何というか決定的に違う。壁紙、照明、家具、カーペット？ 高級感溢れるというのだろうか。生活臭がしないのは執務室と考えれば当然か。

「ここも愛抱夢の家なの？」

「最近手に入れた。執務に使う落ち着いた場所が欲しいと言うことで、すでに公にしているよ。ソファーに座っていて。飲み物を持つてこよう」

広々としたリビングのソファーに座った。神道邸にあるそれと同じ贅沢な座り心地だ。

「仕事場に俺が来てよかったの？」

「本来の目的は別なんだ。ずっとその目的で使えてなくてね。はいどうぞ」

愛抱夢はジュースが注がれたグラスを手渡しランガの隣に座った。

「ありがとう」

「市販のジュースで悪いね。使用人がいればノンアルコールカクテルでもご馳走するんだけど」

一口飲む。グラスの中で氷がカランと鳴った。

「すごく美味しいよ。ごちそうさま」

「どういたしました。で、君は本来の目的に興味ある？」

ランガは首を横に振った。

「愛抱夢の仕事は難しいから。聞いても俺にはわからない」

彼はなぜか目を丸くして、すぐに肩を震わせくつくつと笑い出した。

「君は相変わらず鈍いね」

ムツとはするが、あまりにも色々な人から鈍い鈍いと言われ続けて、多分そうなんだろうと否定することも無くなっていた。だから「鈍くてもスケートできるし困らない」と開き直る。

愛抱夢はランガの肩を抱いた。

「君とこうして会うためだよ」

「え？」

まじまじと彼の顔を見ればいかにも好青年といった感じの爽やかな笑顔。男の本質をある程度知っていれば胡散臭く感じる要注意の笑顔なのだが。

「神道の家は伯母たちや使用人の目があるし、ホテルは色々対策を立ててもリスクが高かった。現に一度だけ危なかったことがあってね。何とか握り潰せたと言うか誤魔化せたけ

れど次もうまくいくとは限らない。セキュリティがしつかりとしたここならマスコミ連中も手は出せない。そう考えてね」

「俺のために？ 俺、迷惑かけている？」

「迷惑はかけられていないし、君のためでもない。僕が君に会うためだよ」

それは同じことではないのだろうか？とランガは疑問だったが黙っていた。きつと愛抱夢にとつては違うのだろう。

肩を掴む指に力が込められた次の瞬間グイッと強く引き寄せられた。顎を掴まれ顔を持ち上げられれば彼の顔が目の前に迫っている。ドキンと心臓が強く鳴った。ランガは瞬くこともできず深紅の瞳に見入っていた。

愛抱夢は苦笑した。

「そうジロジロ見られるとやりづらいな」

瞼に唇を落とされランガは目を閉じた。熱い吐息が唇を掠めすぐに柔らかく湿った熱を感じた。

じやれるように触れあうだけのキスはすぐに深くなっていく。音を立てて強く唇を吸われ、舌が歯列を割り穿たれた。やがて息苦しくなったランガは首を振って逃れようとするが、それを許さず男はランガの後頭部をしつかり掴み執拗に貪り続けた。

絡み合う舌と舌。混ざり合う唾液。静かな部屋に響く濡れたリップ音は淫猥で生々しくランガの劣情を煽っていく。

しばらくして唇が外されランガは苦しい呼吸を繰り返した。頬に男の指が触れるのを感じ顔を上げればぼやけた視界の中に二つの深い赤が浮かぶ。

彼の指がランガの頬を撫でた。

「とろけそうな顔をしている。君はキスだけでイッてしまいたいそうだね」

からかうような声音ではなかったけれど気恥ずかしさに目を逸らした。悔しいけれど否定できない。

「ラブリーだったと褒めているんだ」

シャツの前立てに男の指がかかり胸が開かれた。いつの間にかボタンが外されていたらしい。あのキスの最中に？ 愛抱夢はそのままランガの腕からシャツの袖を引き抜いた。

「あなたは脱がないの？」

ランガは男の襟元に触れた。彼はその指をつかみ引き剥がしニコツと笑った。

「ここエアコン効いているだろう？　僕は寒さに弱く君は暑さに弱い。だからね」

「狡い」

「大人は狡いものなんだ」

これは彼の常套句だ。ランガのクレームはこの一言で毎回あつさりかわされる。

体重がかかりソファアの上に押し倒されると上半身のいたる所にキスの雨が降り注いだ。

湿った舌と熱い吐息。胸に描かれる濡れた軌跡。

胸から唇が離れ今度は手のひらで上下になぞりあげられた。乳首を指の腹で潰すように小刻みに揺らされ、ランガは全身を震わせ鋭い悲鳴のような声を上げた。

「フッ……」と、笑い声のようなため息のような吐息が聞こえ、うつすらと目を開いた。男が真上から見下ろしていた。口元には薄い笑みを浮かべ。

ずっと見られていた。彼は自分が与える愛撫にランガが返す反応を眺め楽しんでいる。

「悪趣味」

ランガは両腕で顔を隠し男の視線を遮ろうとした。

「駄目だよ。ちゃんと顔を見せて」

彼はランガの両手首をまとめてつかみ頭上に固定する。その間もう片方の手は休むことなくランガの感じやすい場所を緩慢に愛撫し続けた。

愛抱夢はランガがどこをどうされるのが好きで、どうされるのが嫌いなのか、どの程度の刺激で陥落するかをよく熟知している。そのギリギリの微妙なラインを狙ってくる。こういう状況下では圧倒的に経験を積んだ大人が有利だ。まだ経験値の足りない自分では太刀打ちできないことをランガは知っていた。今に見ていると思うのだが現状どうにもならない。

媚態を隠すことも許されず男の目の前にさらされている。そのことがランガの官能をより強く引き出していった。

強く激しい快感ではない。じわじわと浸食していく甘い毒のように気づいたときにはいつも手遅れだ。逃れることは叶わず彼の手中に堕ちている。でもそれが不思議と心地よかった。

不意に下肢に男の手が伸びジーンズのジッパーが下された。下着の中へ滑り込んだ大きな手のひらにペニスをやりわり握り込まれ、ランガは息を飲み白い喉を反らした。

男は優しく上下に撫ではじめる。すでに熱を持っていたランガのペニスは徐々に硬さを増していった。

「そろそろイってみようか」

耳元で低く囁いた男の指の動きが速くなりランガはきつく目を閉じる。やがて迎えた絶頂に目の前を真っ白な閃光が走りその瞬間、射精していた。

爽快感と頭の中が空っぽになったような虚脱感。気怠い体を柔らかいソファにぐったりと沈め目を閉じ乱れた息を整えていた。

温かい手のひらが頬に触れた。瞼を開けば愛抱夢がじつと見つめていた。目が合うとニコツと笑う。

「気持ち良かった？」

「良かった」

ランガは素直に答えた。

「それは何より」

「でもアンダーウェア汚れちゃった」

「心配しないで。君の着替えは用意してあるよ」

いくらなんでも用意周到すぎる。日本では備えあれば憂なしっていうんだっただけ？

「ベタベタして気持ち悪い」

「ではバスルームへ直行だ。試してみたいバスローションがあるんだよ」

「分かった」

「それとこれで終わりではないって分かっているよね？　ここまではオードブルだよ」

「うん。俺だけというのはフェアじゃない。こういったことは共同作業でしょう」

愛抱夢はランガの頭を撫でた。

「はい、よくできました。まあ僕は僕で十分楽しませてもらったけどね。なかなか素敵な

眺めだったな」

愛抱夢は少し嫌な感じの笑みを口元に浮かべた。

知っている。こういうのをスケベなニタニタ顔って言うんだ。なら、ここで終えても

フェアな気がする。ランガは眉を寄せ口をへの字に曲げた。

彼は愉快そうに笑い「悪かった。少し意地悪だったね」とランガを強く抱き締めた。

あれ？　と感じた印象にランガは意識を向ける。

愛抱夢の背中に腕を回しギュッと力を込める。身体を強く密着させ目を閉じた。布地越しでも熱い。これはよく知る愛抱夢の体温。心地よくて安心させてくれる温度だ。そうか、と理解した。

「俺、愛抱夢と会えない間、足りなかったものやつとわかった。それはね……」  
続く言葉を遮るように愛抱夢はキスを仕掛けてきた。

唇を離し「今は黙っていなさい。その話は後で聞くと」言った。

向けてくる眼差しは思いがけず真剣で、ランガは黙って頷くしかなかった。

《了》

## 見えないもの、聞こえないもの

屋上で仲良くふたり並んでのランチタイム。

「俺、〈犬猿の仲〉って日本語、最初は仲良しのことだと思っていた」

「なんでそう思ったんだ？」

暦の箸が止まり、隣に座り紙パックの牛乳を豪快に飲むランガをチラリと見た。

「ジョーとチェリーが犬猿って言われているの聞いて」

「あーなるほど。確かにそうだな。英語で〈犬猿の仲〉ってなんて言うんだ？」

「Fight like cats and dogs」

「へえ、猿じゃなくて猫なんだ。犬は共通なんだな」

暦でもcatsとdogsくらいは聞き取れたらしい。

「うん」

「チェリーとジョーだけどさ、いつもどつきあっていて小学生以下の悪口の応酬だけど、なぜか一緒にセツトみてーなものだし。なんだかんだ言って信頼しあってお互いを気にかけているようにも見えるし。そう考えると仲良しだな。幼なじみだって聞いた」

「そっか、親友ってこと？」

「まあ腐れ縁って親友みたいなものだよな」

「くされえん？」

「切りたくても切れない繋がりがりっていうか、絆？」

「なんか憧れる」

「憧れる？」

「俺と暦が、ジョーやチェリーくらいの歳になつたらそうなるかな。なれるといいな」

「う、うん」

「あれ？ 暦、照れている？」

「お前たまに堂々と小っ恥ずかしいこと言うよな」

「そう？」

「まあいいけどさ。俺たちにはスケートがあるからな！」

「もちろん言つただろ？ 俺、暦とずっと、ずっと一緒にスケートしたい」

「暦はすくつと立ち上がり、綺麗に晴れた青い空に両腕を高く掲げた。」

「同感だ。俺たちは無限にスケートをするんだ！」

それは大人の面倒臭さを知らない無邪気な子供の特権、爽やかな青春のワンシーンなのだろう。

ランガはカナダにいたころ、友達らしい友達はいなかった。当然仲間などというものもない。沖縄へ来て、スケートを通して暦と友達になった。それが最初の一步。それからスケート仲間というものを知り、世界は広がっていった。

暦、実也、シャドウ、チェリー、ジョー、愛抱夢、多分スネークもスケート仲間だとランガは捉えていた。

その中でも、暦と自分は親友だ。

実也とももちろん仲良くはしているが、彼は学校に仲の良いスケート友達がいると聞いた。より親しい友人というのならスケート以外の繋がりもあるだろう同年齢の友達の方がよりそうだと言える。シャドウもSで仲の良いスケーターがいることはわかった。チェリーとジョーは自称犬猿の仲で幼馴染、でもS以外でも頻繁に一緒であることが多いらしい親友同士。

愛抱夢とスネークの関係は謎だ。愛抱夢はスネークのことを「犬」と呼ぶ。スネークも

「私は愛抱夢の犬だ」となんでもないので言った。愛抱夢が〈Master〉でスネークは雇われている〈Servant〉だと説明はされた。表向きには〈Private secretary〉だという。

日本語は今ひとつ使い方がわからないことがあるけれど、本人たちが納得しているのだからまあいいか。大人の世界は複雑すぎてまだ高校生でしかない自分には難しい。

スケート仲間の中でも、暦は生まれて初めてできた友達なのだから特別。しかも、通学、学校、バイト、Sと、誰よりも、おそらく母親よりも日がな一日一緒に過ごしている。それが楽しいのだから、きつとそれを親友と言うのだろう。

その暦とは一対一で会おう遊ぼうという話にはなる、というかなっている。

他方、実也、チェリー、ジョー、シャドウたちは仲間として皆で会う、一緒に滑って遊ぶという雰囲気はあっても一対一で会って何かをしようなんてことは想像できない。誘いもしないし誘われもしない。友達と言えるのかもしれないけれど、ふたりだけで会って時間を保たせられるほど親密なわけではない。年齢や知り合ってから時間の問題もあるかもしれないからこれから変わっていく可能性はある。

そこまで思考を巡らせ、あれ？　と思う。

俺と愛抱夢ってなんなんだろう？

実也、チェリー、ジョー、シャドウと同じスケート仲間ではあるのだが、彼らと同じカテゴリには属さない気がする。

一緒に遊ぶ仲間の輪の中に愛抱夢がいることはないけれど、彼と滑ることを第一目的にして一対一会うことはそんなに不自然なことではなかった。

## §

その夜クレイジーロックに愛抱夢が姿を見せるらしいと皆が噂していた。

ランガに愛抱夢から連絡があつたのは数日前。一緒に滑りたいから君がクレイジーロックに来るというのなら僕も都合をつけるよ、と。

願ってもないことだった。その日から愛抱夢と滑ることを想像して興奮が止まらなかつた。会える日が待ち遠しくて仕方ない。

愛抱夢と滑るスケートは別格だ。

もちろん他のスケーターたちと一緒に滑るのも、それぞれ違う楽しさがあつてワクワク

する。

特に暦と滑るスケートはドキドキして本当に楽しくて、世界はキラキラと輝き、お腹の底から思いっきり声を出して笑うことができる。そんなのは暦と滑ったときだけだ。やはり暦は自分にとって特別なのだ。

それを親友というのだろうか？とランガは理解していた。

では、愛抱夢とは？

一緒に滑ったとき、彼よりヒリヒリさせてくれるスケーターを他に知らない。彼と滑ったときほど純粹にスケートそのものに集中しのめり込むことはない。

引つ張られる。見たこともない景色を見せてくれる。虹色に輝くあの瞬間、ランガと愛抱夢しかいなくなる。それはゾーンというものだと後から知った。あれほど怖かったあの世界が怖くはなくなっていた。それはおそらく愛抱夢があの世界に閉じこもることに価値を見出さなくなったからなのだろう。

いまだに愛抱夢が一方的にランガを導く世界だ。それは変わらない。それでも今の彼なら大丈夫だとランガは確信していた。

あのときの闇の中に閉じこもり膝を抱え蹲る小さな子供はもういない。

——俗世でも君がいてくれる。僕はひとりぼっちではない。今はもう。

——いるのは俺だけじゃないよ。みんないる。

——そうだね。君がそれを教えてくれた。

前回滑ったとき、そんなやりとりをしたことをなんとなく覚えている。

直接言葉を交わしたわけではない。

でも、確かに伝わり、伝えることができたのだ。

ヘリコプターのプロペラ音を耳にして、参加者が一斉に上空を仰いだ。

「来た！ 愛抱夢だ」

「愛抱夢！ 愛抱夢！」

愛抱夢コールに会場内が沸き立った。やはり彼はS界のスターだ。

ヘリコプターからパラシュートで降下する赤い男にスポットライトが当たる。

こんな大袈裟な演出なのに疑問を持つ参加者はいない。

着地点だろう場所へ向けランガは走り出していた。

「おい、ランガ！ あいつと滑るのか？」暦が叫ぶ。

「もちろん！」

「いいけどさあ無茶すんなよー」

怒鳴るような大声が背後から聞こえた。

ランガは振り返り親友に手を振った。暦も手を振り笑っている。

「わかつているー」怒鳴り返す。

赤いマタドール衣装にいつもの仮面をつけて愛抱夢は降り立ち華麗にステップを踏んだ。

ランガは駆け寄る。

「愛抱夢、滑れる？」

「当然だランガくん。今日も負けないよ」

今のところ勝敗は五分と五分。

「今日は、俺が勝つ！」

大きな歓声が鳴り響く中、ふたりはスタート地点へと向かった。

## 勝っても負けても

「賭け？ 僕たちの純粋なスケートにそんな低俗なものはいらない。そうだろう？ ス

ノー」

何度目かの愛抱夢とスノーのビーフ。とにかく滑ることが目的のふたりであるため「対戦者同士は必ず何かを賭けなければならない」というS初心者でも頭に叩き込んであるはずの基本ルールを忘れている。愛抱夢はわざとだ。賭けを考える暇があつたらさつさと滑りたいとも考えているのだろう。ふたりのビーフで今まで賭けの賞品を取り決めたことはなかった。面倒くさいという気持ちはわからないでもない。

問題は、ルールを作ったS主催者である愛抱夢が無視しているという点だ。正直示しが付かない。

ここは一言釘を刺しておくべきだろう。

忠は、ずっと前に出る。

「なんだ？ 忠」

「確かに賭けの賞品など、おふたりの崇高な勝負に価値はないものということは重々承知

しております。しかし運営から言わせていただきますと、主催者が守っていないとなると、今後、参加者のルール遵守意識に悪影響が及ぶでしょう。なし崩し的に他のルールも守られなくなっていくことが危惧されます」

愛抱夢の口元がぐいっと曲がり表情を作る。

「確かに一理ある。だが何を賭ければ……」

「犬だ！ 負けたら犬になるんだ。次はランガが勝つ！！ てめえはランガの犬だ！」

声を上げたのは赤毛の子だった。思いついてやったつぜ！ といった満面の得意顔だ。

それに反応して「犬、犬、いつぬ！」の大合唱が沸き起こる。ギャラリーが一斉に悪ノリを始めた。

皆、愛抱夢の犬が見られる期待にワクワクしている。確かに見ものだ。日常的に秘書である自分を「犬」呼びしている主人が犬扱いされる？ 少し想像しただけで頬が緩んでしまふ。

愛抱夢はチラリと忠に視線を送った。

「なんだ、その締まらない顔は」

慌ててキリッと口元を締める。

「いかがいたしますか？」

「ふむ、スノーはそれでいいのかい？」

「暦の希望なら俺はいいよ」

「やったー！　ぜってー勝てようガ！」と赤毛の少年が拳を上げた。

「うん」スノーもニツコリ笑顔で応える。

「了承した。その提案を飲もう。僕が負けたら僕はスノーの犬だ」

おおおおお！！！！　と会場に歓声が響いた。

「愛抱夢が勝つたら？」スノーがチラリと愛抱夢を見た。

そうだ、そちらも決めなくてはいけない。

「僕が勝つたら……」

「うん、何を賭けるの？」

「スノー、君は僕の飼い主になって僕を管理する。どう？」

「わかった」

即答だった。多分スノーは何も考えていない。

赤毛の少年を含むギャラリ―は困惑のあまりかポカンと口を開けている。

最初に「はぁー……？？？」と身を乗り出し、大声を上げたのは少年だった。正気に戻ったらしい。

これは、どちらが勝っても起こるだろう結末は同じだということだ。

自分も赤毛の彼も一つ大きなことを失念していた。犬の飼い主、主人は所詮スノーだということだ。犬を管理できるような子ではない。

管理者不在の犬がどうなるのか、少し想像するだけでも恐ろしい。

「ちよつと待て！ てめー何か良からぬことをたくらんでいやがるな」

「良からぬこと？ それは心外だなあ。これはスノーも納得していることなんだよ。双方合意の上でというルールはきちんと守られているんだ。君が口を出すようなことではないだろう」

「暦、大丈夫だよ。俺負けないから」

スノーは呑気に微笑んでみせた。

「いや、その発言からしてお前、何もわかっていねえだろ！」

この一連のやりとりを呆れ顔で静観していたジョーが赤毛の少年の肩を掴んだ。

「落ち着け、暦。ルールはルールだ」

「なんだよ！ 俺ら所詮あいつの手のひらの上かよ！ 結局あのヤローの思い通りになるってことかよ」

地団駄踏んで悔しがる彼の気持ちはよくわかる。すまない。これは自分にも責任があるような気がする。

「大丈夫だとは言わないが、そもそも墓穴を掘つたのはお前だ」やはり呆れて傍観者を決め込んでいたチェリーがうんざりとした様子で口を挟んだ。

「愛抱夢はランガが嫌がることは絶対にしないはずだ。そこまで心配するな」

その通りなのだが、このスノーという子は、普通の子なら嫌悪しそうなことでも受け入れてしまうボーツとした子なのだ。友人としてはそういうところを含め心配なのだろう。が、残念ながらもう決まってしまったことだ。諦めよう。お互いに。なんせ愛抱夢はSの神なのだ。

「忠、こっちへこい」

呼ばれて顔をあげる。口元にご機嫌な笑みを浮かべ主人が耳打ちをしてきた。

「かしこまりました」

愛抱夢は明日までにある品を用意するように指示をしてきた。主人が所望するのは、な

るべく高価で品質の良い赤い首輪と赤いリードだ。犬用の。

嫌な予感しかない。

頭がガンガンしはじめたが気を取り直し、これからの作業手順を脳内で整理する。まずは、めぼしい候補をピックアップしなくてはいけない。明日中に調達しろとの命令なのでから急ぐ必要があるだろう。獣耳と尻尾グズも気を利かせて調べておこう。別にやけを起こしているわけではない。自分は痒いところに手が届く有能な秘書だと自負しているだけなのだ。

ふたりの勝負、ビーフのことはキャップマンたちに任せることにして、忠は主人の命に従うことにした。

どちらが勝っても負けても自分が為すべきことは変わらない。責務を完遂することに全力を注ぐだけなのだから。

《了》

## 可愛くて愛しい人

ピロートークのことを睦言と日本語で言うと言いた。

愛抱夢は睦言の方が風情があると主張する。

どちらも似たシチュエーションで使う言葉なのだからどうでもいいかと思うのだが彼はピロートークなる言葉は安っぽいソープオペラを連想させると言っていた。それは偏見とか先入観と言うのではないだろうか。

睦言は夫婦や恋人同士が主にベッドで仲良く語らうことで必ずしもセックスが必須ではないと説明された。なので彼がベッドでランガに囁く言葉はピロートークではなく睦言だという。

そんなこと拘って主張されても自分相手では無意味だとランガは考える。

まず眠気が勝つてしまっていて何を言っているのか頭に入ってこない。ぼんやりと聞き流しているだけだ。意識があるうちは適当に相槌を打つけれど、ほとんどが生返事だ。

それでも、耳元で優しく響く愛抱夢の声はランガに不思議な安心感をもたらしてくれ

る。そう、まるで子守唄のように。

寒い……。

ランガは剥き出しの肩に触れた。冷え切っている。室温がかなり下がっているようだ。この部屋は冷房が効きすぎている。

手探りで毛布を探り出し引き寄せようとするが何かにひつかってびくもしない。諦めて上半身を起こした。暗がりの中で手に握りしめている毛布がどうなっているのか目を凝らせば男が体に巻きつけ熟睡していた。

あれ？　と思いベッドの下を確認すれば自分が使っていたらしい毛布が床に落ちていた。それを掴み上げ整える。そんな作業をしているうちに目が覚めてしまった。

時間を確認すれば午前三時半。

傍らの男はぴくりとも動かない。いびきはもろんのこと寝息すら聞こえない。

息しているのかな？　ふと奇妙な不安に囚われ彼の鼻の前に手を近づけた。大丈夫、ちゃんと空気が動いている。

なんてバカバカしいことをしているんだろうと自嘲する。

そうこうするうちにすっかり眠気がどこかへ行ってしまった。隣で寝ている男が目を見ます心配はない。薄闇の中、何とは無しに男の寝顔をぼんやりと眺めていた。

あれ？ 愛抱夢ってこんな顔をしていたかな？

ふと覚えた違和感に男の顔をまじまじと凝視した。ランガの記憶の中にいる愛抱夢よりずっと若く見える。もともとランガの中には二種類の彼がいた。

仮面にマタドール衣装のスケーター愛抱夢と、スーツ姿の有能な若手政治家としての神道愛之助。もちろんカジュアルにランガと会うときの彼はどちらでもない。愛抱夢と愛之介を足して二で割った感じと言えがいいのだろうか。

いずれにしろランガよりずっと年上の大人の男性ではある点は共通だった。

再び視線を落とし、男の寝顔をじつと見つめた。

こんな愛抱夢をランガは知らない。

よくよく考えてみれば愛抱夢の寝顔を見た記憶はない。彼は忙しい。会えても一晩共に過ごす時間まで持てることは珍しい。

その少ない機会でも、ランガは愛抱夢の寝顔を一度も見えていないことに驚いた。

セックスの有無は関係なく、ベッドに入れば間違いなく先にランガが眠りに落ちてい

た。ランガはとにかく寝つきがいい。ふたり一緒にベッドに入って、愛抱夢に抱き寄せられ身体を密着させ、体温を分け合いながら彼の肩口に頭を乗せる。愛抱夢はそんなランガの頭を撫でながら耳元に睦言らしき言葉を囁く。でも一言二言から先の記憶はなかった。もちろん夜中に目が覚めてしまうなんてことも稀にある。でも目が覚めているのは一瞬のこと、愛抱夢の顔を見る間もなく再び深い眠りに落ち朝まで目覚めることはない。その上、愛抱夢より先に起きられたこともなかった。

それではランガが愛抱夢の寝顔を見られるわけがない。

その分、愛抱夢はずっとランガの寝顔を見ていたのだろうことに今更気がついた。ランガは少しだけ羞恥を覚えた。

顔を近づけ、しげしげと観察するように見つめた。安心し切ったように眠る彼の面立ちは、若いというより幼い子供のようだった。閉じた瞼を縁取るまつ毛が意外に長いことを発見して思わず笑みがこぼれた。

それと今まで意識したことなかったけれど愛抱夢はとても綺麗な顔をしている。

彼の髪にそつと触れてみた。目を覚ます様子はない。そのまま撫でたり指に髪を絡ませたりしてみる。

無意識に「可愛いな」と口にしていた。

そんな自分に驚き慌てて否定する。年上の男性に向かって可愛いなど失礼だったと。愛抱夢はランガのことを可愛いと言う。暦たちは可愛いと言われることを嫌がっていると指摘すると年下男性相手ならば問題ないと説明された。それが本当かどうかは別にして、年上男性に向かって可愛いは失礼なのだろう。

では可愛いでなければ何だろう。

そつとキスをして抱きしめたい。そんなふうにいる今のこの気持ちをなんて表現するのか。ランガはしばし思案した。

——愛しい。

ふと浮かんだ日本語。これは愛抱夢がときたまランガに向ける言葉だった。ストンと胸に落ちた。なるほど、「愛しい」か。これでいけるような気がする。他に何も浮かばない。日本語がまだ不自由なだけかもしれないけれど。

無防備な寝顔を晒す大人の男に視線を戻しランガは微笑んだ。

そうか俺はこの人を愛しいと思っているんだ。

胸の中が暖かい。

答えが見つかったところで、そろそろ寝ないと。起こさないようランガは愛抱夢の額にそつと唇で触れた。

と、そのとき後頭部を彼の手が掴んだ。そのまま引き寄せられ唇と唇が重なった。  
え？

唇が外され、彼を見れば薄目を開けていた。

「起きていたの？」

「少し前から目は覚めていた」

それは少々気まずい。可愛いと言ったの聞かれただろうか。とりあえず触れないでおこう。

「俺が起こしたの？」

「そういうわけでもない。でもいつキスしてくれるのかなと期待して寝たふりしていたんだけど、額だけで終わりそうだったからね」

彼は悪戯っぽい笑みを浮かべウインクをした。その表情に、ああやはりこの人は可愛いな、とランガは思う。

肩に回された腕にぐいつと抱き寄せられ、愛抱夢の胸に頭を乗せる形ですっぽりと収まった。

「起きるにはまだ早いよ。こうしていてあげるからもう少し眠りなさい。僕も眠るから」ランガは「うん」と頷いた。

耳を押し付けた彼の胸から、ゆつたりとした心音が聞こえてくる。心が落ち着くりズムだ。全身から力が抜け強い眠気に襲われた。

ランガは小さな欠伸を一つして目を閉じた。

《了》

## 凍えるほど寒いところで

東京に在住している政策秘書からの連絡を待っている間、愛之介は自室でランガと取り止めもない雑談をしていた。主にランガの情報を引き出したいだけなのだが。

「暦の家で食べた〈Baked Sweet Potato〉——日本語でなんて言うんだったかな？ 美味しかった」

「焼き芋だね」

そんなタイミングで秘書から連絡が来た。問題はなさそうだ。愛之介はノートパソコンをそつと閉じ焼き芋談義を続けることにした。すぐに終わるだろう。

「そう、それ。Sweet Potato TartとかCakeのSweetsじゃなくてただ丸ごと焼いただけなのに、すつごく甘くて。でもイメージが少し違った」

「イメージ？」

「日本のアニメで見たんだ。寒い中、熱々の焼き芋で手を温めながら食べているの。白い湯気が沢山出ていてとても羨ましいと思った。すごいよね。手を温めてお腹もいっぱいになるなんて。えっと一石二鳥？ ずっと憧れていたんだ」

今更だがこの子は妙なところに感心したり感動したりする。

「まあ、この土地では手がかじかむほど寒いってほとんどないからね。四十七都道府県のうち唯一積雪が観測されたことのないのがここ沖縄なんだ」

「ここ、ほんと暑くて暖かいよね。雪なんて降るわけないのは当然だなんて納得した」

正式に観測された降雪は二、三回くらいしかなかったはずだ。それも純粹に白い雪が降ったというのではなく、雨に混ざったみぞれだ。ここは亜熱帯の土地なのだ。もう晩秋と言えるのにランガは薄いシャツ一枚だ。地元民はそろそろジャケットを羽織っているのだが、雪国から来た彼にしてみればまだまだ寒さを感じる気温ではないようだ。

ランガは遠い目を窓の外へと向けた。浮かぶ白い雲と柔らかく霞んだ青空が広がっていた。ふと彼の周りにちらちらと舞う雪を見たような気がした。

「懐かしいの？」

「何が？」

「雪……いや、冬の寒さかな？」

「あ……」

彼は胸に手を置いた。

「夏の暑さは辛いけど沖縄は好きだよ。初めて友達ができたところだしね。暦たちがいる限りここからは離れられない。でもカナダの雪も冷たい風も、吹雪いているときの灰色の空と、よく晴れた日の濃い色の青空は俺を育ててくれたところだから。何よりも父さんとの大切な思い出がたくさん詰まっているんだ」

「一度、お父さんのお墓参りに行っただろう？」

「行つたよ。でもまだ寒くなる前で雪もない季節だったから」

「そうか。こちらへ引越してきてから君は一度も雪を見ていないってことだね」

「言われてみれば。俺、父さんのことがあって一度は雪というカスノーボードが辛いものになってしまったんだ。でも今ならきちんと向き合えるような気がする。だから俺の原点を暦……暦だけじゃなく仲間にいつか見てもらいたい。一緒に行ってくれればだけど」

「その仲間に僕は入っている？」

「もちろん」

「雪のシーズンになったら君をすぐにカナダへと連れて行つてあげたいけれど、流石にまとまった休みは取れそうもない。その代わりと言つては何だけど日本の寒いところへ飛んで雪の中で熱々の焼き芋を食べて蜻蛉返りするくらいならできるよ。どう？」

「それすごくいい」

「では決まりかな」

ランガは首を左右に振った。

「楽しそうだけどそんなお金ない」

「お金のことは気にしないで……」

そんな愛之介の言葉を珍しくランガは遮った。

「わかっている。あなたが俺のためではなく、そうしたいからそうしているなんてこと」

「ではどうして？」

「俺、あなたと対等になりたい」

目を見開いてランガを凝視する。すると少々居心地が悪そうに彼はふいつと目を逸らした。わずかに頬を染めて。

彼が再び口を開くのを無言のまましばし待った。

「大人のあなたと子供の俺では対等になんて無理なことだってわかっている。でも自分でできるところから少しずつでいいから」

この子も、こうして大人になっていくのか。それは喜ばしいことなのだろう。それでも一抹の寂しさが胸を掠めた。

「それが君の気持ちなら尊重しよう。それでも意地にならないで頼れるところは僕に頼って欲しい。生きてきた時間が違うんだから頼つたとしても対等ではない、なんてことにはならないよ。それに僕はもう対等だと思つていた」

「え？」

「君が僕にたくさんものをくれたんだ。それを返さないと対等にならないと思つたのは僕の方だからね」

彼は難しい顔をした。

「愛抱夢はさあそれよく言うけど俺何もあげていないし何もしていない。具体的に何？と訊いても教えてくれないし」

「別に意地悪しているわけではないよ。君がくれたのは言葉で表せないようなものなんだ。言葉にすることはできるけれど、それをすればするほど何か違うって僕が思つてしまふだろうね。そのことを僕は知っているんだ。いうことで説明できない。悪いね」

「はぐらかされているような気がする」

ランガは眉を寄せ唇を尖らせた。納得できるはずないか。

「そんなつもりはない。僕は政治という権力抗争の中に若くして叩き込まれたんだ。自分の意思と関係なくね。狡猾くないとやっていけない足の引つ張り合いの世界だ。だから実年齢より、もしかすると老けているのかもしれない。僕たちの年齢差つて今はとても大きいけれど、これが五年十年と経つとあまり差を感じなくなるはずだ。だからまだ焦らなくていい。無理して大人にならなくてもいい。君は君のままでもいい。くれれば」

「でも……」

「それに君は僕のことを『子供だ』と言ったよね。そんなことを僕に言えたのも僕がそれを許したのも君だけだ。だからもう僕たちはずっと昔から対等なんだ。今はそれで勘弁してくれないかな」

「うーん、仕方ないかな」

トーナメント決勝戦でぶつかりあったあの瞬間からふたりは対等だったのだ。

それなのに、ともすれば愛之介自身がそれを忘れがちになる。ランガを自分の手元で守りたい。自分の保護下に置いて安心していたい。その気持ちを抑えることは難しい。

いつか、ランガが成長して自立した大人になったとき、果たして今のように愛之介のそ

ばにいてくれるのだろうか。

それを考えるとどうしようもなく不安で怖い。情けないことだという自覚はある。

「ねえ、愛抱夢」

ランガが顔を上げ愛之介の顔を覗き込んだ。

「俺、雪はなくてもいいけど、やつぱり寒いところで焼き芋食いたい。東京も冬は寒いよね？」

「沖繩に比べれば凍えるほど寒いよ。ダウンや厚手のコートが必要なくらいはね」  
ダウンも厚手のコートも、沖繩に住む限り着る機会ほとんどない。

「二泊くらいのパッケージツアーならバイト代の貯金で何とかかなと思う。前に暖かくなったらデイズニールランド行きたいって暦が言い出して調べたことがあるんだ」

「そのときは僕も君と一緒に焼き芋食たいんだけど、いいかな？」

「最初からそのつもりだよ。東京なら愛抱夢と一緒に食べられると思ったんだ」

「それは嬉しいな。初めて食べる焼き芋が君と一緒にだなって」

ランガは目を丸くした。

「愛抱夢……もしかして焼き芋食べたことなかったの？」

「実はない。この家にいる限りその手のものを食べる機会はなかったから」

「どうして？ あんなに美味しいのに？」

「神道家ってそういう家なんだ。ということと都合のつきそうな日をいくつかピックアップしておいて。僕もスケジュールを合わせよう」

「わかった」

「話がまとまったところでそろそろ滑ろうか」

「ごめん、俺が焼き芋の話題持ち出したりしたから」

「むしろ大きな収穫があったとても有意義な話題だったよ。素敵な約束もできたしね」

どっちにする？

「ハロウィンイベント？」

「ああ、商店街が主催するイベントだ。仮想パレードをやるんだ。俺の店も協力することになってな。テイクアウト用にパニーニを店頭に並べることにした」

ジョーが説明する。

「パニーニ？」と腕組みしたシャドウが首を傾げた。

「イタリアのサンドイッチだ」

「よくそんな金にならないこと協力する気になったな」

「あー？ お前みたいな守銭奴メガネと一緒にすんな！」

チェリーにジョーが反論した。

「仮装してスケートでパレードするのは有りなのか？」と暦。

「流石にそれはダメだ。暦くらい滑ればいいが、初心者がやってみる。怪我人が出るぞ」

「カナダでもハロウィンやっていたの？」と携帯ゲーム機から顔を上げないまま実也がう

ンガに話を振った。

「普通に仮装して菓子をもらいに行つたよ」

「あつ、そうだ！ 思い出した！！」と唇がポンと手のひらをグーで叩いた。

「なにごとだよ」とシャドウ。

「ずっと前のことだけどランガン家、遊びに行つたんだ。そのときランガのお母さんからランガの子供の頃の写真色々見せてもらったんだ」

「それがハロウィンに関係あるの？」

実也はゲーム機から目を離さない。

「うん、そのうちの一枚がランガが小さい頃のハロウィンの仮装写真で、それがもうめっちゃ可愛かった。今のこいつからは信じられないくらいな。かぼちゃパンツ履いていた、あれはなんの格好だったんだ？」

「確かWitchだったと思う」

「魔女のこと？ 女装？」と実也。

「Witchは普通女性だけど男性でもあるよ。でもなんでWitchだったのか小さかったから覚えていないけど」

「へえ、でもかわいかったなあ。女の子みたいだったし」

「暦、女の子みたいは余計だよ」

「今でも十分可愛いと思うぜ」

ジョーは女だろうが男だろうが、とりあえず可愛いとおだてて機嫌をとることが頭の天辺から足の爪先まで染み付いているらしい。

「性別は関係ないのか。この節操なしの軽薄ゴリラ」

チェリーが突つ込む。確かに軽い男だ。

「ふん。カーウに頼ってばかりのA-I依存症は頭がガッチガチだな。こういうのは日頃の習慣がいざというときにものをいうんだよ」

「そりやおっさんから見れば高校生なんて可愛くて当たり前だよ。まあ僕には負けるけどね」

「可愛いなんて言われて喜ぶのは実也くらいだろう。男ならバカにするかと怒ってみやがれ！」

シャドウが腕を組んだままぬつと実也に顔を近づけた。

実也は動じない。

どっちにする？

「古いおっさん世代と一緒にしないでくれない？ 僕らの世代は可愛いが正義だ

よ。……つと、しまったー！ 間違えた！」

実也はゲーム操作をミスしたらしく頭を抱えた。

さて、そんな賑やかなスケート仲間同士の楽しい交流を遠目で見ていた赤いマタドール衣装に身を包んだ男がひとり。

「ふむ、いいことを聞いた」

S 終了時間になり帰宅準備を整えているとき、ランガはひとりのキャップマンから声をかけられた。

「え？ 愛抱夢が？」

「そうだ。君の幼い頃のハロウィン仮装の噂を小耳に挟んだようで、その写真を所望している。もちろん、タダでは言わない。君の希望金額を支払う用意はある」

「嫌だよ！」

「スノー、そこを何とか飲んでくれないか？ 金以外の条件があれば何でも言っただけ

い」

「んー、というか、写真渡すのにそんな条件なんてどうでもいい。なんでスネークが言いにくるの？ 愛抱夢が直接俺に言ってくれば写真くらいあげるよ。こんなのお金もらいうようなものじゃない。デジタルデータで残っているはずだし」

忠は、ハロウィン写真をめぐるランガとのやりとりを主人に報告した。

「以上がスノーからの条件です。愛之介様から直接頼んでくれれば写真は無条件で送ってくれるとのこと」

「なるほど。ランガくんらしい。だがあの子のそういう対応は不安が残るな」

「不安ですか？」

「そうだ。不用心過ぎる。そのような調子だと頼まれれば誰であっても写真をあつさり渡しかねない。前々から感じていたのだがランガくんはあまりにも無防備なんだ」

それは同意する。が、その無防備さがあるからこそ、愛抱夢こと愛之介を今まで拒絶しなかったのだ。もし年相応レベルの用心深さを持つていたらとつくに愛抱夢を警戒をしているだろう。と忠は思ったのだが黙っていた。

「とりあえず、彼にメッセージを送ってみたらいかがでしょう」

「そうだな」

愛之介はスマホを取り出しメッセージを送った。

と、一分も待たずして着信音が聞こえた。

「こ、これは。忠、見てみる！」

スマホ画面を覗き込む。

「これでいいの？」と言メッセージが添えられた幼いスノーの仮装写真だった。かぼ

ちやパンツの……魔女？　というか魔女の弟子？

「……こ、これは！　なんてラブリーなんだ。今でも十分ラブリーだが成長したランガンは可愛いというより美しいと表現すべきなのだろう。でも幼い頃のランガンくんは別次元の愛くるしさだ。忠、これをすぐにパネルに……いや、その前にこの写真の使用可能範囲の取り決めが先だ。それにしても親はどういう教育をしてきたんだ。使用許諾契約前に写真を送ってしまうとは危険すぎる。彼とは一度ゆっくり話し合わないと。相手が僕だからいいようなものの今後どんな変質者が無防備な彼を陥れるかわからない。心配だ」

主人は興奮して一方的に捲し立てている。確かに可愛いことは認めよう。それにしても

幼い子供の写真にひとりでこれほど盛り上がる事ができるとは。忠には全く理解できなかった。そもそも第三者から見ても一番の変質者は……いや、やめておこう。不敬過ぎる。

それでも主人が幸せそうだから、まあいいか、と忠は納得することにした。

「良かったですね。愛之介様」

忠はにこやかな笑顔で主人を祝福した。少々引き攣っていたかもしれないが、今の主人では気づくこともないだろう。

「なあ、ランガ、相談って何なんだ？」

その日、暦はランガに自宅マンションに立ち寄って欲しいと言われた。

「ちよつと見て欲しいものがあるんだ。待っていて」

ランガはクローゼットを漁り出した。

「わかった。そういえばさあ、今度のSだけど、ハロウィン仮装必須だとかマジか？

チェリーやジョーなんて愛抱夢壊れたんじゃないかって。その手のイベントやるやつじゃなかったのにつてさ。チェリー、ジョー、実也、シャドウは普段のS衣装が仮装みたいな

どっちにする？

もんだからそのままでもいいとか言っている。愛抱夢なんてむしろSじゃない表の格好で参加した方が仮装になるんじゃないかね？」

「ほんと、そうだね」

「で、お前どうすんの？ 俺はジョーがスタッフ用に用意したやつ貸してくれるって言っただけど、めんどくさいさよな。いつそハロウィンSはパスするか？」

「せつかくSで滑れるんだ。パスはしたくないな」

「そうか」

ランガはクローゼットから平たい箱を持ち出してきた。それも二箱。

「その仮装に関係することなんだ。暦に選んで欲しい」

ランガは箱の蓋を開けた。

「何これ？ 仮装の衣装か？」

「うん、どっちがいいか見て欲しいんだ」

「つて、こんなものどうしたんだよ？」

「愛抱夢が送ってきた」

「はい？」

暦の声が裏返った。

「この前、暦にも見せた子供の頃のハロウインの仮装写真を愛抱夢が見たいって言うから送ったんだ。そのお礼だつてさ。気を遣わなくてもいいのにね」

「気を遣うつて、これお礼としては明らかに変だろう。いや、そもそもあんな危ないやつに写真送るなよ！」

「それで今度のハロウィンSにどちらか着て来いつて愛抱夢が言ってきたんだ。でも俺じゃ選べなくて。暦の意見を聞きたい」

「まさか、あいつが送り付けてきたこの衣装、着ていく気なのかよ」

「だって仮装しないとダメなんだよね？」

「そりやそうだけどさあ」

「それにすごいんだよ。どっちもサイズぴったりなんだ。まるでオーダーメイドみたいに。どうして俺のサイズわかったんだろう。びっくりだよね」

「いや、待て！ 感心している場合じゃねーよ。気持ち悪がれよ。おつかしーだろ」

「それでだけど。衣装はこっちの黒とオレンジがWitchで、こっちの白のがAngelなんだつて。あと両方とも上を脱げば普通に動きやすいデザインになっているんだ。羽や帽子

どっちにする？

もついている」

「ランガ！ 少しは人の話聞けよ」

「どっちが空気抵抗少ないのかな？ 上を脱がなくても滑りやすい方着て行きたい。暦はどう思う？」

「だから、人の話を聞けー！ーっ！！」

親友同士の噛み合わない会話はオチもつかず、それから三十分ほど続いた。それでも最終結論には至らず〈Witch〉と〈Angel〉。どちらの衣装を選ぶかはハロウィンS当日のランガの気分任されることになった。

《了》

今一度君をあの世界へ連れて行こう【R18】

ドアを開ければ秘書が出迎えた。

「お帰りなさいませ」

「彼は？」

「スノーはリビングに通してあります」

「ご苦労。様子は？」

ジャケットを脱ぎ秘書に手渡す。

「今夜も滑りたくない」と

愛之介の顔が曇った。

「僕が直接確認しよう」

「愛之介様」

「なんだ？ 忠」

「彼に……あ……いえ」

言い淀みを伏せた秘書が、何を言おうとしたのか察することは、容易い。

愛之介は鼻を鳴らした。

「案ずるな。一線は超えない」

「はい」

これは詭弁だ。忠も納得してはいまい。しかし万策尽きたお前にはもう〈俺〉を止めることはできない。神道愛之介、愛抱夢がやろうとすることに干渉することは今後一切許さない。ただ黙って見ているがいい。

「お前は戻っている。万が一クレイジーロックへの足が必要になれば連絡する」

「かしこまりました」

ドアの開閉と施錠の音を背後で聞き、少年が待つ奥のリビングへと向かった。

「ようこそ。ランガくん」

愛之介は口元に穏やかな笑みを慎重につくった。

「愛抱夢……」

ランガは愛之介の姿を認めると一瞬表情を硬くするが、すぐに射るような視線を向けてきた。

いつもなら可愛らしく感じるだろう強がりも、今はこちらの神経を逆撫でしてくれる。

「約束の日だね。君の答えを聞かせてもらおうか」

「この前も言った。あなたとは滑らない。もう滑れない」

忠の報告通りだ。一週間経つてもランガの気持ちに変化はなかったということか。  
ぎゅつと拳を握りしめた。

愛抱夢が偶然迷い込んだゾーン。俗世を忘れ純粹にスケートのことだけを考えていれば  
いい楽園だった。ところが、そこは俗世で感じる以上の強い孤独感を愛抱夢に突きつけて  
くる場所でもあった。そこが魅力的であればあるほど「お前はひとりぼっちだ」と。

光が強くなれば闇も深くなる。夢中になればなるほど耐え難いほどの孤独に苛まれて  
いった。彼はひとりぼっちの寂しさを癒してくれる他者をイヴと名づけ探し求め、ついに  
ランガを見つける。

そしてトーナメント決勝戦で愛抱夢は切望したイヴを自分のものにすることができた。

それなのにそのイヴは……。

愛之介は先週のランガとのやりとりを思い返していた。

「僕と滑りたくないの？」

「あなたと滑るスケートは好きだ。あんなにヒリヒリしてドキドキするスケートは、あなたと滑るときだけだから。他の誰と滑ってもあんな気持ちにはならない」

「ならば何の問題もないだろう」

すつと一歩足を踏み出せば、彼は後ろへ一歩退き首を強く横に振った。

「あそこは楽しくない」

「楽しくない？ どういうことだ？」

「真つ白で何もなくて、何も見えない何も聞こえない何も感じない。……誰もいない」

この子は何を言っているのか。

「僕がいただろう」

「最初はいた。でもすぐにいなくなってしまった。もしかしたらいたのかも知れない。けれど何も感じなかったんだ。あの場所では全ての感覚が失くなるんだ。何もわからなくなる。楽しいも悲しいも嬉しいも寂しいも……何もかも」

「そんなはずはない。また一緒に滑ればそれは勘違いだとわかる。いい子だから聞き分けて」

指でランガの頬に触ればピクリと後退る。彼の唇が戦慄いた。

「怖いんだ」

「怖いことなんて何もない。君はあの素晴らしい空間に初めて触れたことで戸惑っているだけだよ。今度こそ僕は君のそばから離れない」

「いやだ」

声を絞り出してランガは俯いた。

愛之介は嘆息し、しばし黙考する。ここは彼が落ち着くまで待つしかないだろう。

両手のひらで彼の輪郭を包み、なるべく優しく優しげな声色をつくった。

「わかったよ。一週間ほど時間をあげよう。今、君が置かれている状況は説明したね。

ゆっくり考えて決めなさい」

まだ混乱しているだけだ。少し頭を冷やせば彼の考えは変わる。あの誰にも邪魔をされない神聖な世界を求めるようになる。そう愛之介は信じていた。そのときはまだ。

「それが、君の導き出した答えか」

ランガは頷いた。

愛之介は困惑した。

ランガは愛抱夢とゾーンを共有することを許された唯一の存在だ。俗世に身を置きながらでも、望めば何度でもふたりだけの領域へと旅立つことができる。それなのにイヴになることを拒み、その権利を放棄しようとしている。それは愛抱夢という存在を否定することと同義だ。

あの素晴らしい世界を目にしていながらなぜ？ 理解できないししたくもなかった。

恫喝し無理やり滑らせたところで意味はない。今のランガではあそこへ至ることはできない。彼がその気になるよう誘導するしかないのだが、ここまで手こずらせてくれるとは想定できなかった。

困惑から苛立ちへ、やがてふつつとした怒りが腹の底から湧き上がってくるのを抑えられなかった。

ぎりつと握りしめた手のひらに爪が食い込んだ。

無造作に少年の前髪を掴み顔を上げさせた。薄く開いた瞼から、透き通った水の青が愛之介を捉えた。

それを目にした刹那頭に血が上った。

この世にたった二つしかない希少な青い宝石。手に入れたつもりだった。それなのにこの指は届いていなかったと言うのか。いつたい何年待ったと思っている。ランガこそが狂おしいほど求め続けた唯一無二のイヴなのだ。冗談ではない。今更諦めることなどできるはずもない。

愛之介はランガの腕を掴み乱暴に寝室へと引きずっていった。

「どうして君は自分がイヴである運命を受け入れない？」

怒気で声を荒げ、激情に任せてランガをベッドに叩きつけ馬乗りになる。少年は衝撃に顔を歪めるが声はあげなかった。

「君は間違っている。アダムに愛されることを拒むイヴなどどこにいるんだ」

ランガは大きく目を見開いた。

「俺はイヴなんかじゃない」

叫ぶように発せられた一言。致命的な拒絶。愛之介の中で何かが砕け散る音が響いた。一瞬の沈黙。頭からスーッと血が引き熱が奪われていく感覚。

徐々に落ち着きを取り戻した愛之介は、冷淡無常な目で組み敷いた少年を見下ろした。

「君には二つの選択肢を与えていた。今から僕がすることを受け入れなくては、いけないよ」

冷ややかに告げ少年の着衣に指をかけた。

「いやだ」シャツのボタンを外していく男の手首をランガは掴む。

「君が選んだことだよ」

ランガの抵抗を封じる一言だった。

ランガは愛之介に逆らえない。彼の母親も親友も男の掌中にあつた。そのことをよく言い聞かせてある。

現実問題、愛之介が提示したランガを縛るためのプランは諸刃の剣だ。一つ間違えれば愛之介の政治家生命そのものを終わらせかねない。行使することは非現実的なのだ。なんのことはない。ただのハツタリでしかない。

それでも、この無知な子供を支配するための脅しとしては十分機能すると踏んでいた。

シャツ、ジーンズ、下着とランガが身につけていたものを次々と床へ落としていった。

陽は傾きかけているが、ブラインドを上げレースカーテンだけで覆われた広い窓からの採光は十分で、寝室は照明をつけなくても明るい。隠そうとするかのように腕と脚を折り曲げ身体を丸める少年の四肢をゆつくりと開いていく。やがて白い裸体が惜しげもなく晒された。

はじめて目にする姿態は思っていた以上に美しい。

しばし眺めてから、そつと肌に触れば彼は息を詰めた。その感触を手のひらで味わいながら胸から腹まで滑らせグイッと力を込め指を食い込ませた。少年の腹筋に力が込められる。まだ若い筋肉はしなやかで柔らかい。

愛之介は目を細めた。

誰も足を踏み入れたことのない純白の、まだ一筋のシユプールも描かれたことのないシャンパンスノー。

それなのに不思議と性的な興奮は覚えなかった。

深紅の瞳は冷酷な光を帯びはじめていた。

愛之介の中で膨れ上がりつつある情動は憤慨であり焦燥だ。その中に支配欲や征服欲が複

雑に入り混じる。そんな彼が嗜虐心のまま動けば、この白い肌を引き裂き赤い血を流させ鬱血の痕を全身隈なく刻んでいくだろう。

それでも、その衝動を抑え込める程度の理性は働いていた。

少年の白い肌はほんの少しの鬱血も目立つ。目視できるような痕をつけるのは非常に危険だ。スケートによる怪我とは明らかに異なる傷痕は、母親や学校関係者の目に触れてしまえば大ごとになる。単純な暴力に訴えることは浅略だと判断していた。

肉体のダメージは最小限に。精神的に支配することを醒めた思考で画策する。

君がどこにも行けないように全ての逃げ道を絶つてしまおう。そうすれば君は僕に依存し僕だけを見るようになる。

「従わないイヴにはそれなりの罰を与えないとね」

愛之介はベッドに腰をかけ、残酷な謀略を巡らせほくそ笑んだ。

腹に乗せていた手のひらを、脇腹から外腿、内腿へと滑らせて行く。そのまま縮こまつたペニスをそつと握った。少年はヒュツという吸気音とともに白い喉を反らした。

それにしても予想はできたけれど間違いない。淡い色の未熟なペニス誰にも触らせた

ことはない。そう、この子は他者からの性的接触を知らない。

抱きしめられることもキスをされることも、彼の父親や母親からのもの、もしくは両親から近い人たちからだけだった。いずれにしろ愛おしさからくる慈しむだけの行為だ。触れ合うところで感じる体温も抱きしめてくる腕の強さも髪を梳く指の感触も頬を包む手のひらも、それらはランガにとって優しく不安を宥めてくれるものだった。

一方、愛之介はそんなふうに他者から慈しみを持つて触れられた記憶を持っていなかった。そう、ただの一度も。

男はなるべくソフトなタッチでバラバラと指を動かす。

「やつ……！」

ランガは自分を弄ぶ指を引き剥がそうとしながら身体を回転させ愛之介に背中を向けた。無意味な子供の悪足掻きがいつそ憐れだ。

横たわるランガを腕で拘束しながら抱き起こし彼の背に胸を重ねた。シャツ越しに伝わる少年の怯えがいつそ甘美だ。震える獲物の肩に顎を乗せ「言ったはずだ。君に拒否権はないよ」と耳元に告げた。

愛之介の手を引き剥がそうとしていたランガの指から力が抜けた。

ペニスを揉みしごきながら、もう片方の手も腹から胸へと這わせた。やがて胸の突起を探り当て二本の指を使って柔らかなタッチでいじってやれば、ランガは身じろぎ小さな呻きを漏らした。

ここも当然誰からも触れられたことはないか。

抗うことを諦めた少年は、ただ愛之介が与える刺激をやり過ぎそうとしていた。必死で意識を別のところへ飛ばしているのだろう。それは健気でいじらしいのだが逆効果だ。かえって男の嗜虐心を煽るだけだった。

愛之介は淡々と、しかし容赦の欠片もなく行為を押し進めていった。言葉はない。聞こえるのは空調の微かな唸り音。そして肌と布が擦れる音、はあはあと荒くなりはじめたふたり分の息遣い。それらは入り混じりとても小さな音量なのにひびく淫らに響いた。

男は腕の中にすっぽりと閉じこめた少年の劣情を刺激したり焦らしたりと、思いのままに快感を高めていった。間断なく漏れはじめた喘ぎは既に少年の意思でコントロールすることはできない。

今のランガは肉体の主導権を奪われた非力で哀れな子供でしかない。

徐々にしごく力を強めていけば、やがて手にピクピクという脈動を感じた。迸る熱いものを手のひらで受け止めた愛之介の口元に歪んだ笑みが浮かぶ。

前のめりにがくりと崩れ落ちるランガを片腕で抱き留めた。

「随分と出たね。溜まっていたようだ」

からかいを含ませた言葉がけにも反応は無かった。感情を封印し肉体の快不快から意識を逸らしているのか。屈する気はないという意思表示なのだろう。

ぎりつと奥歯を噛み締めた。どこまで強情な子なのか。

腕の中でぐったりと弛緩しているランガをそのままゆっくりとうつ伏せに横たえた。

手を拭きながら、少年の背から尻、太ももの滑らかな曲線を目でなぞった。

このまま力尽くで四肢を開かせ凌辱の限りを尽くすことも可能だ。それはゾクゾクするほど魅力的な誘惑だ。しかし、それで手中に収めたとしてもこの子は完全に壊れる。壊れたイヴでもないよりはずつといいかもしれない。とはいえ魅力が半減してしまうのも確かだ。

愛抱夢が欲しているのは完全なイヴなのだから。

少年の外腿を軽いタッチで撫で、尻、内腿へと手のひらを滑らせ時間稼ぎをしながら考

える。どうしたものか。

この子を壊さず追い詰めるギリギリのラインを冷徹に見極めようとする。

ふと気がつけば室内はすっかり暗くなっていた。全ての輪郭が蒼黒の闇に融け始めている。陽はすっかり沈み、夜の帳が下されたのだ。

スタンドライトを点けランガの足元から光が当たるよう設置位置を動かした。その意図を察した彼は首を捻り目を見張る。少年の尻が明るく照らされた。

「そのままで少し待っていなさい」そう言い残し部屋を出た。洗面所の棚から保湿用フェイスジェルを手にとった。

どうせ大したことをするわけではない。これからやろうとするレベルのことなら十分専用ローションの代用品になるだろう。

寝室に戻った愛之介は、少年の両脚を掴み左右に開かせた。抵抗は見られなかったが筋肉が強張っていることが触れた手に伝わってくる。

「そんなに緊張しないでいいよ。君を傷つけるつもりはない。むしろ気持ち良くなってもらうだけだから。今日のところはね」

白い尻を左右に開けばスタンドライトの照明で奥が明るく照らされた。綺麗な桜色のア

ヌスが閉じている。ここも誰にも触れさせたと見せたこともないのだろう。

人差し指と中指にコンドームを被せ、指先にジェルを乗せた。尻の割れ目に指を差し入れジェルを塗りつける。

「ひっ」彼の背が小さく跳ねた。

「冷たかったね？」

もちろんそれだけではない。ランガはプライベートゾーンについての教育は就学前から受けているはずだ。誰にも見せてはいけない、触らせてはいけない。そう徹底的に教え込まれた大切な場所を生まれて初めて自分の意思と無関係に暴かれ続けているのだ。

それがこのむしろ奥手の少年にとって、どれほど常軌を逸していることで混乱に陥らせているのか。自分の身に何が起こっているのか処理しきれないわけではない。

嬖とその周辺をグルグルと指でなぞった。軽く叩いたり押ししたりの強弱をつけ刺激を繰り返す。そして、もう片方の手をシートと胸の間に滑り込ませ胸の突起を探り出し柔らかな愛撫をはじめた。

ランガは声を嘯み殺しシートをぎゅつと握りしめた。意識を乖離させ人ごとのように自分の肉体を俯瞰し与えられる刺激をやり過ごそうとしているのか。生憎その頑張りはどう

あまり長くは保たない。

うつ伏せたランガの太腿がもぞもぞ動くのを愛之介は見逃さなかった。

「どう？ 気持ち良くなってきた？」

「なっていない」 苦しげな息とともに彼は強く否定する。見れば涙目だ。

「そうかな？ ムズムズしてきただろう？ それが感じているってことだよ。アヌスとその周りにはね、神経が密集していて敏感なんだ。そういうところは簡単に性感帯――

〈Erogenous zone〉にすり替わる。脳がそう学習していく」

言いながら、ジェルを足しつつ指先でなるべく軽いタッチでグルグルと円を描くようにマッサージを続けた。

「違う……」

うわごとのように違う違うと繰り返しシートに顔を押し付け弱々しく首を振り続けている様は痛々しい。

胸を撫で回していた指を下腹部へと滑らせていった。半勃ちになった彼のペニスを手のひらでそつと包む。

「若いからかな。さっきあれほど出したのに、もうこんなになっている」

コンドームを被せた人差し指をぐいつと強めに押し付けければアヌスはキュッと閉じ異物の侵入を拒んだ。それでも強引に第一関節まで振じ込んだ。

「うつ……」少年は顔を歪め小さな呻きを漏らした。この程度でも痛みはあるのだろう。

今はまだこれが限界か。侵入させた指をゆつくりと苦痛を与えないよう蠢かせ、もう片方の手で彼のペニスを完全に勃起上がるまで揉みしだいた。

少年の喉の奥から堪えきれなかった声が漏れる。それはごく小さな音量だったのに薄闇に覆われた静かな部屋ではとても高く悲鳴のように耳に反響した。

やがて少年のペニスはピクピクと脈打ち白濁した液体がシートに散った。

「いい子だ。全部出してしまいなさい」

優しい声音で囁いてみるが反応はない。

ベッドから立ち上がり、放心し力無く投げ出されている白い裸身を見下ろした。

「生憎そろそろ時間だ。僕はこう見えても忙しい身だね。可能であればもつとじつくり君を愛したかったな」

そうだ。きちんとした痛みを与えたかった。でも身体に傷痕をつけずに痛みを感じてもらえる方法が見つからなくてね。

しゃがんで少年の顔を覗き込んだ。水色の髪を指で梳いてみるが瞼を閉じたままピクリとも動かない。目を凝らせばシャツが涙で濡れていた。

ランガは愛之介の手から逃れることはできない。でもそれは絶望するようなことではないのだ。いい加減、諦めてしまえば楽になる。愛之介の腕の中に絡め取られ愛されることを喜びとすればいい。感謝し愛を受け入れればそれで済むことだ。

この子供はそんな簡単なことがなぜわからないのか。愛之介は彼の歳の頃には理解し受け入れていたことなのに。

少年の瞼がうつすらと開いた。目の焦点は合っていない。それでもスタンドライトの光を受け澄んだ青い虹彩はキラキラと煌めいていた。その清麗さに愛之介は息を呑んだ。彼の視界に自分が入るよう顔を近づけた。

君の瞳の中に今の僕はどのような姿で映し出されているのだろう。僕に向けられる眼差しに込められる君の感情を想像するとゾクゾクする。

嫌悪？ 憤怒？ 軽蔑？ 憎悪？ 敵意？

ああ上等だとも。それがなんであれ激しければ激しいほど好ましい。君の瞳に映し出されるものが僕だけなら。君が誰よりも僕を見てくれているのなら満足だ。僕はただ君に愛を注ぐだけだ。

顔にかかる水色の髪を指で退けた。

「あともう一週間だけ待つてあげよう。それまでに滑れるようになりなさい」

ランガの唇が微かに動いた。

「もし、滑れなかったら？」

苦しげに絞り出した声は掠れていた。

愛おしむような手つきで絹糸のような髪を撫でる。

「君が今まで誰からも何からも汚されたことがない純白の雪だったとしても、知識くらいはあるはずだ。僕が君に何をしようとしているか理解できているよね？」

言いながら手のひらで胸を撫でさすった。彼はヒュッと息を吸いピクリと震えた。

「いい反応だ。覚えが早いね。君の身体はもうこうして与えられた刺激を快感にすり替えることを覚えてしまったんだ」

愛之介はランガの白い喉元を包むように手のひらを置く。少年は息を殺した。

「……もし滑れなかったら、そうだね。こうして……」

愛之介は目を細め口元には冷やややかな笑みが浮かんだ。指に少しだけ力をこめる。

「君を壊すだけだよ」

静かに、だが強い圧を込め言い放った。

そうだ。自分のものにならないのなら、いつそ壊してしまえばいい。壊れたイヴでも  
気晴らしの玩具くらいにはなるだろう。

汚れた身体を清めるようバスルームに彼を連れて行った。一時間以内に身支度を整え帰宅の準備を終えるよう伝えた。今日起きたことは誰にも気づかれることのないようにしなさいと念を押す。

汚れたシーツは洗濯機に放り込んで乾燥までかけてからクリーニングバッグへ放り込んでおこうと考える。面倒だが噂話好きな使用人たちだ。そこまで信用してはいない。

ベッドルームは少年の青臭いにおいが残っているだろう。換気風量を強にして室内の空気を入れ替えることにした。

忠に連絡をし彼を自宅へ送り届けるよう命じた。

全ての片付けを終えひとりになった薄暗いリビングでソファアにどつぷりと全身を沈めた。疲労を感じて目を閉じ目頭を押さえる。

瞼の裏に濁りのない水の青が浮かんでいた。指を伸ばす。手に入れたはずだったのに触れるこすら叶わなかった二つの青い宝石。今度こそ必ず自分のものにして見せる。

冴え冴えとした光を湛えた青い瞳が真つ直ぐ愛之介へ向けられた。

ランガくん？ その目は……やめろ。そんな目で僕を……見るな……見るな！

「ランガーッ！」

気がついたら叫んでいた。ゆつくりと上体を起こす。額に触ればじわりと汗が浮いていた。乱れた息を深呼吸を繰り返して静めた。

どうかしている。これはただの思い過ごしだ。ランガはあんな目で自分を見たりはしなかった。ぼんやりと虚空に視線を泳がせていただけだったのだ。それなのに何故このようなイメージが突然湧いたのか。

誰であろうと、そんな目で自分を見ることは絶対に許さない。

嫌悪、憤怒、軽蔑、憎悪、敵意……どれだけぶつけられようが痛くも痒くもない。むしろ愉悅ではない。なぜなら僕だけを見てくれているのだから。なのに心象風景の中、自分に向けられたランガの目は……愛之介は首を強く振ってその印象を打ち消した。やめよう。実際に彼からそんな目を向けられたわけではない。ただほんの少し疲れただけだ。

そのとき愛之介が言葉にすることなく否定したのは「憐憫」だった

ランガを自宅マンションへと送り届けた忠が今度は愛之介を迎えに戻ってきた。

「彼の様子はどうかだった？」

「事情を知らない第三者から見れば特に異常は感じないでしょう」

「上出来だ。お前からどう見えた？」

忠の握りしめた手がブルブルと小刻みに震えていた。

「愛之介様、彼にいったい……」

「ふん、心配するな。一線は超えないと言ったはずだ」

そうだ。一線を越えてはいないと言い張ることはできる。それでも間違いない性的虐待

と言える行為だった。だが、ランガの身体の隅々を調べてもそのような痕跡は欠片も見つからないだろう。そんなヘマはしない。

「信じられないのなら病院にでも連れて行け」

「決してそういうわけでは」

忠はまだ何かを言いたげな表情だった。

「なんだ、忠。言いたいことがあるのなら遠慮するな」

言わんとしていることは想像がつく。

「スノーを力で支配できても心までは縛れません。それで愛は得られない。もし彼から愛されることを……」

愛之介はそこから先の言葉を遮った。

「勘違いするな、忠。僕がいつランガくんの愛が欲しいと言った？」

「え？」

忠は目を大きく開いた。

今更何を驚いているのだ。

「僕はふたりだけの世界で永遠にランガくんを愛したいだけだ。あそこでは彼の視界に存

在するのが僕だけになる。ランくんは僕だけのイヴなんだ。イヴがアダムの愛を受け入れるなんて当然だろう？」

そうだ。望んでいるのはたったそれだけ。それなのにランガは愛之介から愛されることを未だに拒み続けているのだ。

「愛之介様……」

「屋敷に戻る。車を回せ」

ランガに与えた猶予は一週間。それまでSは開催されない。ゆつくりと答えを導き出せばいい。愚かな結論に至らないことを祈るだけだ。

その間、愛之介はランガが日々どう過ごしているか、盗み撮りした映像チェックは欠かさなかった。

朝の登校、バイト、スケート仲間との交流。少々元気がないように見えるかもしれないが家族や友人から見ても異変を感じるほどではないだろう。

問題は、あの忌々しい赤毛と一緒にのときだ。

自分の置かれている状況を理解できているのかと疑問に思うほどの笑顔だ。滑る様子は

とても楽しそうに見えた。スケートボードの改良を依頼しているのかボードを手にしたふたりのやりとりも撮影されていた。

その様子に愛之介は強い憤りを覚えた。

全くもって感心しない。君にはよそ見をしている余裕などないはずだ。いずれ何らかの。警告は必要だろう

最終結論を聞かせてくれる約束の日。忠にはランガをマンションまで送り届けたらすぐに戻るよう命令していた。

「やあ、ランガくん」

言われた通り彼は奥のリビングにひとりで待っていた。

「愛抱夢……」

「返事を聞かせてもらおうか」

愛之介は上着をばさりとソファアームに投げた。

ランガが視線を上げた。鋭い眼光が愛之介を射抜いた。精一杯の虚勢だ。それでも意思

が宿り瞳に強い光が戻ってきている。

そうだ、その顔、その目だ。

「俺、あなたと滑るよ」

「よろしい。それでこそ僕のスノーだ」

両腕を下に広げ愛之介はランガに歩み寄っていった。

ああ嬉しい。やっと僕のイヴになる決心がついたのか。

「条件がある」

「条件？」

「ビーフで勝負する」

ランガは掴んだボードを前に突き出した。

愛之介は顎を上げ目を細めた。口元には満足げな笑みが浮かぶ。

「ラブリー！」

ならば今一度、究極の滑りへと君を誘おう。

本当に長かった。まだ見ぬイヴに焦がれひたすら何年も探し続けていた。

今一度君をあの世界へ連れて行こう

それもようやく終わる。

僕は遂に君を……完全なイヴを手に入れる。

誰にも邪魔されないふたりだけの世界で……ランガくん、君を愛そう。

《了》

## 少しばかり傷ついた

沖縄には四季がない。

それは沖縄に移住し、ちょうど一年ほど経ってランガが実感したことだった。

そのことを暦に言えば「ふつーにあるだろ？ 世界的に見て四季がこれだけはつきりしているのは日本だけだって聞くぞ」と怪訝な顔をされた。いや、日本だけというのは流石に偏見だ。カナダだって他の国だってはつきりとした四季はある。

それより日本全体はともかく沖縄のどこに四季がある？ 少なくとも冬は絶対がない。そう主張すれば「冬ちゃんとあるだろう。普通に寒くなるし冬があるから冬休みがあるんだよ。冬がなければ冬休みはねーんだよ！」と暦は大真面目な顔で屁理屈を捏ね出した。寒いといっても、あのくらいの温度は秋、せいぜい秋の終わりくらいの気温だ。その証拠に雪が降らないじゃないか。酔っ払いが冬野外でうつかり寝てしまっても凍死しないのがその証拠だ。

ランガの感覚からすればカナダ、少なくともランガが住んでいたところは四季がはつきりしている。冬、雪の中でのウィンタースポーツ、春の芽吹きと新緑、夏は確かに沖縄ほ

どの蒸し暑さはないけれど爽やかでそれなりに暑さは感じる。そして街も山も鮮やかな色に染まる、〈Autumn leaves〉……秋の紅葉だ。

それぞれ季節を感じるポイントはある。なら沖繩はどうだ？ 四月から十月まで海水浴が可能って、一年の半分くらいは夏つてことだろう？ 海水浴ができる九月や十月のどこに秋がある？ ランガに言わせれば、秋っぽさを肌で感じられるのは十一月末から一月くらいだ。紅葉もごく一部赤くなる木もあるけど真夏に赤くなったりもする。カナダで馴染みの〈Maple〉……カエデなんて12月あたりで稀に赤くなる葉っぱがあるくらいだ。カナダみたいに山全体や街路樹が一斉に赤や黄色に染まることなんてない。

そもそも一月には桜が咲き始め二月には満開つて、それは春つてことではないか。秋から春になっている。一体全体どこに冬がある？

今は秋ということになっている。でもとにかく暑い。観光客は半袖短パンでビーチサンダル。海で泳いで真っ黒に日焼けしている。それって秋ではなくて夏ではないのだろうか？ と言ったら「夏休み終わったんなら秋だ」と暦は言い出す。

一体沖繩の人たちはどうやって秋を感じるのだろう？ と暦に質問したら「内地の修学旅行生が秋冬服の厚着で汗だくになっていれば秋なんだよ。あとだな柿とか葡萄とか梨と

か栗を月日たちが食べたといって言つて母さんが買つてくると秋だなんて思う」と主張する。どうも色々と噛み合わない。

それを母さんに言つたら、母さんまで「そうね、スーパーで柿とか葡萄とか梨とか栗が売つていると秋だわ、つて感じるわ」などと言ひ出した。やはり母さんも暦と同じ根は沖縄県民だった。

「なるほどね」

ティーカップをソーサーに置き、愛抱夢は楽しそうに笑つた。

「クラスの間みな俺の言うこと理解してくれないんだ。カナダは日本みたいに四季はないだろうとか言ひ出すやつまでいるし」

唇を尖らせランガはストローを咥えた。

ランガは暦たち生粋の沖縄県民に理解してもらえないようなことを、よく愛抱夢にこぼしている。愛抱夢はアメリカ留学の経験もあり日本語の難しい言葉は英語で説明してくれる。何よりも視野が広い。ランガの困惑を受け止め、宥めてくれた上で沖縄県民の感覚も教えてくれる。

「まず、日本以外四季がないと考える人まだいたのか。昔そういつた日本は特別な国だと書かれたナシヨナリズムを煽る本があつてね。そのデマがいまだに一部尾を引いているんだ」

「沖縄って、俺がメディアやアニメから知つた日本と、なんか全然違うよね。日本はカナダと違って小さな国だから、全部似たようなものかと思つていた」

「小さな国だけど、南北に長いから寒いところから暑いところまでバラエティにとんでいる。それと沖縄は日本に併合されるまで、琉球王国という独立国家だったんだ。知つているよね？」

「うん、母さんからも聞いたし」

「赤毛くん代々沖縄一族で沖縄生まれ沖縄育ち、沖縄以外に住んだことないんだよね。それなら無理ないよ。地元以外知らない県民なら皆似たような感覚だよ。沖縄だけではなくて生まれ育つた土地以外知らなければそうなってしまう。大人になって外へと出れば視野も広がるだろう。それと赤毛くんも君の故郷行ったら、夏がないから四季がない、と言うかもしれないね」

「む……」

「それでも君の感覚は間違っていないよ。君みたいな極端な例ではなくても、例えば内地からの移住者は、やはり口を揃えて沖縄は四季がないって言っているんだ。あるのは春夏夏秋だってね」

「やっぱり」

「僕だって、沖縄しか知らなかった子供時代は赤毛くんみたいな感覚だったよ。それでも学校が長期休みのおときは東京近郊で開かれる塾の集中講座の合宿とかに入られたり、早いうちから海外への短期留学放り込まれたりして、まあ他の子より早めに沖縄以外を知る機会があっただけかな。今は大体一週間の半分は東京で、沖縄と行ったり来たりだから、季節感覚の違いは身に染みているよ」

「今は九月だから秋だって暦たちは言うんだ。こんなに暑いのに」

「カナダだともう紅葉——〈Autumn leaves〉のシーズンかな？」

「そろそろそうだね。九月の終わりのころになるとカナダは街も山も黄色や赤に染まるよ。〈Autumn leaves〉で。それって秋の風景なんだ」

「綺麗なんだろうね」

「綺麗だよ。俺にとって当たり前の風景だったんだけど、それが見られない沖縄に来て、

初めてあれはすごく綺麗なものだっただって、気がついた」

「そんなものだよ。赤毛くんは沖縄サンゴ礁特有の白い砂浜とエメラルドグリーンのを当たり前のように見て感動するようなものではないと思っっているけれど、もしカナダで暮らすようなことになったら、それがどれほど美しい景色だったかを知ると思うんだ」

そうかとランガは思う。失ってみて初めてそれがとても大切なものだだったと気づくのと似ている。あつて当たり前と思い込んでいるものはそれが特別であるなんて意識することもない。

ランガは目を閉じた。

カナダの紅葉は壮大で何百キロも連なる。鮮やかな色彩のグラデーションは本当に美しく観光客がそれを目的にカナダへとやってくるのだ。

〈Autumn leaves〉は木の種類によって違う色を見せてくれる。黄色、オレンジ色、赤、紫がかった深い赤。中でも、レッドメープル。鮮やかで深い赤だ。そうだ、この色は……。

ランガの記憶にあるレッドメープルの赤と、愛抱夢の深紅の瞳が重なった。

ランガは目を開き、サングラス越しに愛抱夢の瞳をじつと見た。この暗い色のレンズに隠され深紅があるのだ。

「あなたと一緒に見たいな。〈Autumn leaves〉——いつか」

「カナダの紅葉を？」

「うん」

「僕と？」

色のついたレンズを通して愛抱夢の目が大きく見開かれているのがわかった。

「そうだよ？ 俺と一緒に見たくないの？」

「そんなことはない。君と一緒に見られるなんて、最高だよ」

「じゃあ、どうしてそんな顔をしているの？」

「少し驚いた」

「何に驚くの？」

「君は、カナダの話をするときには、いつも『いつか暦に見せたい』が最初に来て、そのあと『仲間にも見せたい』で僕はその仲間に入っている、くらいだったからね。赤毛くんを抜きに一緒に見たいなんて言ってくれたの初めてののような気がするから」

あ……。

ランガは困惑した。言われてみればそうだったかもしれない。でも、それは愛抱夢が暦以外のその他大勢という意味とは考えていなかったのだが、そう思われても仕方ないのか。暦の指摘通り自分は言葉が少なすぎるんだ。

「あ、あの……あなたは暦の次とか、そんな意味じゃなくて。暦は沖縄から出たことほとんどないから見せてあげたいって思うんだ。愛抱夢は色々な国行っているしアメリカに留学もしていたから、俺が見せたいというのも違うと思って」

頑張つて説明してみたけれど、言い訳がましかつただろうか。

「ああ、そういうことね。僕も考え過ぎてしまったようだ。いや、でも嬉しい気づきだよ」

「もしかして傷ついてた？」

「少しばかりね。それでも僕は大人だから。そんな素振りは見せないようにしていたけれど、実はそこそこ嫉妬していた」

「ごめんなさい。暦にももちろんカナダの〈Autumn leaves〉を見せたいよ。でも、あなたには見せたいじゃないんだ。一緒に見たい、って思った。あの色〈Red Maple〉はあなたの色だから」

「本当にいいのかな？ そんなこと言つて。僕は本気にするよ」

「俺も本気で言っているよ。何年も先かもしれないけどふたりの都合が合えば必ず」

「わかった。情報集めておくよ。君と旅行ができることを今から考えるとワクワクするな。人生の楽しみが一つ増えたよ」

愛抱夢は心から嬉しそうに笑った。

そうか、この人はこんな幸せそうな顔で笑うんだ。

自分の唇からも小さな笑みが零れ落ちていくことに気づくこともなく、ランガはしばらくその笑顔に見惚れていた。

《了》

## 隣にいられない夜は、香りを通して抱き合おう

「困ったな……」ぽつりと主人の呟きが聞こえた。耳に入っていないふりをして淡々と作業を進めていった。すると「困った、困った」と二回ほど連続して呟いた。

忠は流石に反応することにして顔を上げた。

「愛之介様？　いかがされました？」

主人は待つてましたとばかりに忠に顔を向けた。困った困ったと繰り返して呟いていたその言葉とは裏腹に表情はにこやかで極めて機嫌は良さそうだ。

「実は少々困ったことがあってね」

ふうーと憂いを帯びた瞳を伏せわざとらしくため息をついている。あからさま過ぎるが気にしないでおう。

「どのようなことにお困りでしょうか」

「まず遡って説明しよう。ランガくんが僕と会えない日が続くことに寂しさを感じているんだそうだ。ここのところ忙しくてずっと会えなかっただろう？　先日久々に会ったとき、色々説明はしたのだが納得いかなかったみたいで、むうっとした膨れっ面でね。その

顔がまた可愛くて……」

そのときのスノーの表情を思い出しているのだろう。目を細めうつとりとしている。これは世間で言うところ「惚気」というヤツなのだろうか。多分そうだ。

忠は黙ったまま次の言葉を待った。

「そこで寂しさを慰めるために僕のイメージフレグランスをラングくんにプレゼントすればいいと思いついた。ナイスアイデアだろう？　それで調べてみたらオーダーメイドでフレグランスを調香してくれるショップが東京に何軒かあつてそのうち一件に特注することにした。基本情報は伝えてある。あとは出向いて詳細を確認し直接発注するようになるのだが僕はとても忙しい。先ほどから色々とスケジュールを調整してみたものの僕が直接行くのは不可能だとわかった。それが困りごとだ」

「私に何かできることはありませんか？」

自分へ何をさせたいのか簡単に予想はついたが一応訊いてみた。

「私用になつてしまふが僕の代行を頼めるか？」

「次の上京のタイミングでしたら問題はないでしょう」

「そうか、それは助かる。ならばお前に手続きを任せよう」

忠は地元秘書であり、愛之介が東京で議員として活動している間、沖縄の留守を守ることに仕事だ。そのことに差し障りがなければ稀に東京へ向かう愛之介に同行することもある。そのほとんどが政務とは全く関係ない愛之介の個人的な依頼で、東京在住の公設秘書にはとても頼めない大抵アレな用件だ。

「それは構いませんが、私はフレグランスについてはあまり詳しくはありません」

「一応、先方に送ったオーダーシートをお前のところにも送っておいた。今ここで確認してくれ。これを最低限のベースにしてあとは専門調香師に任せて構わないだろう。コストに拘らず香料のランクは高品質なものを存分に使うように伝えてある」

「かしこまりました」

忠は、スマホを取り出しメッセージを確認する。

性別、年齢、職業、などフェイクを混ぜつつの基本情報。他に食べ物の嗜好、趣味などライフスタイルなどが記載されている。

肝心の香りの傾向については、好みや特別こだわる香りの有無などについても書かれていた。主人が愛用しているコロンのブランド名はわかる。それ以外はあまり見慣れない単語の羅列だ。おそらく愛之介だってこんなことそこまで詳しくはないだろう。間違いない

スノーのために、付け焼き刃で勉強したのだと思われる。まあなんとも涙ぐましくも一途で健気だ。

け、健気？ その言葉が脳内に浮かんで少し間を置いて、吹き出しそうになった。グツと堪える。危ない危ない。

さて、どれどれともう一度画面に視線を戻した。

絶対の外せないのは……ローズか。これはわかる。主人は薔薇へのこだわりは強い。あとこれは……？

「ピオニー？」

「芍薬の香りだ。ランガくんの誕生花は芍薬なんだ。絶対に外せないだろう？」

得意げに主人は人差し指を立てた。シンプルな発想だ。

「タバコ？ タバコのおいなどあるんですか？」

「男性用フレグランスでは、結構使われているし僕がたまに使っているコロンにも調合されていたようだ。タバコの香りは僕の体に染み付いていると思うんだ。なら僕を感じてもらえると思わないか？ 素人考えだがな」

「なるほど。タバコのようなスモーキーさが欲しいということでしょうか」

「まあ、そういうことだ」

「あとはムスク？」

「そうだムスクはオスのジャコウジカの性線から取れるものらしい。今は天然ジャコウジカからの採取は禁止されていて全て合成だが、フェロモン作用があると言われている。

基本男性が女性を誘うものだ」

「スノーは男性ですが」

「そこが少し悩みどころだった。最初はそれでオスモフェリンと考えたのだが」

「オ、オスモフェリン？」

「またもや聴き慣れない単語が飛び出した。

「オスモフェリンは女性が排卵期に作られる女性ホルモンで、男性を誘うフェロモン物質だという説がある。もともと科学的に証明されたものではないのだが」

「よく調べられましたね」

「ここまでくると呆れるを通り越して若干退いてしまう。このことをスノーが聞いたら気味悪がるだろうか。いや、あの子の性格なら「ふーん」で終わるだろう。」

「だが、それだと僕というか男性が持っているフェロモンではない。ならムスクの方が僕を感じてくれるかと思つてな」

「さすが愛之介様です」

よくわからなかったがとりあえず肯定しておいた。

## §

その日、そのオーダーメイドフレンチサロンに忠はいた。

奥の部屋に通されアドバイザーとの打ち合わせがはじまった。

「前もつていただいていたオーダーシートと照らし合わせての方向性を確認させていただきますね」

「よろしくお願いいたします」

「注文のご本人様ではございませんね？」

「はい。生憎主人は時間が取れず私が代理で参りました」

「ご注文のお客様は男性で、ご自身が側にいなくても恋人の女性に自分の存在を感じてもらえるようなフレグランスをということでしょうか？」

「はい」

恋人は女性ではないが、話がややこしくなるので肯定しておく。

「かしこまりました。あと恋人がご使用になることは想定されているのでしょうか」

男子高校生だからまず使わないとは言えない。ここは適当に誤魔化そう。

「恋人は、仕事柄、フレグランスを普段は使えないとのことです」

「ということは恋人はひとりの夜に使用するものと考えればよろしいですね」

「そうなります」

「でしたら、注文された男性が日常的にご使用になるフレグランスということを想定し調香することがよろしいかと存じます。特にその恋人と会うときは必ずお使いになってください。やがてフレグランスとおお客様の体臭が混ざり個性ある香りになるでしょう。それは女性の中でふたつとない恋人のようになります」

「伝えておきます」

「それとは別に、同じ香調のルームフレグランスをつくりましょう。ほぼ同じ香料を使用

します。若干ルームフレグランスとしてアレンジさせていただきますが。それは恋人がひとり寝室で使用するものになります。睡眠の質を阻害しない、リラックス効果のある香りになります。アロマキャンドルもおすすめですがそちらもご用意いたしますか？」

あのスノーがキャンドルに火を点ける？　で、きちんと火を消してから寝る？

どう考えても無理だ。マンションを丸焼けにしてしまう未来しか見えない。

「あ、いえ、忙しい方ですのでキャンドルは少し難しいかと」

「ではルームフレグランスだけで。あとは香調の確認ですが」

「基本プロの方にお任せしたいとのことですが」

「かしこまりました。ローズやムスクは好きな方が多く基本調合しやすい香りですが、男性でピオニーを指定される方は珍しいですね」

「恋人の誕生花ということなので是非入れて欲しいと聞いております」

「そういうことですか。タバコは……確か愛煙家でいらつしやいましたね」

「はい。タバコの香り、スモーキーな香調の方が自分を感じてもらえるのではないかと思ったようです。素人考えですのでその辺りはお任せしますと申しておりました」

「これは問題ないでしょう。では完成までに一ヶ月ほどの猶予をいただくかもしれません

がよろしいでしょうか」

「はい主人も了承しております。よろしくお願いいたします」

深々と忠は頭を下げた。

トラブルなくフレグランスが完成してくれることを祈ろう。

## §

それから、ひと月から注文していたフレグランスが届いた。

愛之介が自ら使用する為のオードトワレとスノーが自室で使うルームフレグランスの二品だ。

主人は、早速オードトワレを手首にシュツと吹きかけた。甘くも優しい香りが室内を満たしていく。愛之介は満足そうに頷き、商品に同封されていた冊子を開いた。

「こう書いてある。上品な甘さとフローラルの華やかさを持たせた香調です。ウッドディーとタバコの甘い余韻が最後に残ります、だそうです。トップノートはベルガモット、レモン、ジェニパーベリー。ミドルはローズ、ピオニー、ネロリ。ラストはムスク、サンダル

ウッド、タバコ、タバコフラワー。ほう、素晴らしい」

さっぱりわからない。主人は感心しているが果たして理解しているのだろうか？ 疑問ではあるがそれは大した問題ではないだろう。

「ご満足いただけただけでしたら、その旨先方に連絡いたしましょう」

「そうだな。それともう一つ頼みたいことがある」

「何でしょう？」

「不公平だと思わないか？」

「不公平とは？」

「僕だって、ランガくと会えないときは寂しい。そんな夜は彼の香りに抱かれないと思うんだ」

主人の顔を上げしげと見た。よく恥ずかしげもなく言える……ここは絶句するところなのだろう。でもこの神道愛之介という男が言うとは何故か不自然さが無い。いや自分が慣れっこになってしまっただけなのかもしれない。

「スノーのイメージフレグランスを新たに依頼するということでしょうか」

「その通りだ」

「しかし、彼はフレグランスを使っていないのでは？ まだ高校生ですし。好みもわかりません。本人もよくわかっていない可能性の方が高いでしょう」

「そこはプロと相談だ。僕も色々調べておこう。また直接の依頼はお前に行ってもらいたい」

「……」

すぐに反応できなかった。男子高校生ということを伏せてどう相談すればいいのやら。

「何だ、黙り込んで。意見があれば言ってみろ」

「いえ、私に意見はありません」

愛之介はニツと笑って「だろうな」と言った。

「本人に香りのこだわりがないのなら嫌いなにおいでない限りこちらから提案したフレグランスを受け入れると思うのだが」

確かにスノーという子は先入観がほとんどない。それが何であつても受け入れてしまうところがある。だからこそ初対面のときから愛抱夢を拒絶しなかった。だが嫌なものは嫌だと頑なに拒否する子でもある。そう感じている。

ならばフレグランスはどうだろうか。最初に嗅いだ第一印象が悪くなければ普通に使ってくれそうに思う。しかし印象が悪かったら……いや、考えても仕方ない。そのときはそのときだ。

「確かにそうですね。ではどのような香りのイメージが？」

「彼はスノーなのだから当然、雪だ。雪のおいだ」

「は？ 雪ににおいがあるのでしょうか？」

沖縄で生まれ育った忠は当然雪には縁がない。においがあるとも言えないが、聞いたこともない。

「当然あるだろう。雨のにおいがあるくらいなのだから」

愛之介は自信満々に言い放った。

「そうですね」

屁理屈とは思えない。

「透明感があり、どこか涼しげで優しい香りだ。色のイメージはアイスブルー。男性でも女性でも使えるユニセックスな香調で依頼しよう」

「了解しました。申し訳ありませんが、ポイントをまとめて後ほどメモをいただけますで

しょうか。そろそろ私は仕事に戻らせていただきたいのですが」

「もうこんな時間か。引き止めて悪かった」

「いいえ」と軽く会釈をしたときだった。

「そうだ。一つ忘れずに入れて欲しい花の香りがある」

「なんでしょう？」

「すずらんだ」

「すずらんですか？」

「すずらは五月一日の、僕の誕生花だからな」

にこやかに笑う主人の顔を思わず凝視した。その笑顔にわざとらしさはなく、幼かった愛之介の面影が重なった。

そうだ、すっかり忘れていた。昔はこんなふうに笑っていたのだ。

忠の口元がふつと緩んだ。

「素敵な香りになりそうですね」

心からの言葉を残し忠は退室した。

## 君がいるから

これは、もしかしたら神道愛之介の人生の中で過去最大級のピンチなのかもしれない。この事態を招いたのは、間違いなく自分の初動ミスだ。グダグダの酔っ払いにこそならなかったものの、それでも確かに酔っていた。思考力、判断力が鈍る程度には。

党内若手国会議員有志による勉強会。その後、忘年会を兼ねて懇親会と称して軽い飲み会があった。

もともと議員としてのパーティ参加や飲み会をする時間があれば少しでも滑っていた。愛之介の中での価値基準では飲みよりスケートが優先事項ではあるのだが、最低限の付き合いというものはある。

その夜、ランガと東京で会う約束をしていた。

寒いところで熱々の焼き芋を食べたい、という第三者からみれば「は？」な夢がランガにあった。沖縄に比べれば東京は凍えるほど寒いといえる。冬の東京で一緒に焼き芋を食べる計画を立てていた。なんとも可愛らしくも微笑ましい約束だ。沖縄に戻るスケジュー

ルを調整し時間を捻出した。ランガは二泊三日のパッケージツアーを利用するという。その宿泊予定のホテルに愛之介もダブルルームを予約し、そこで落ち合うことにしていた。それは前々から決めていたことだった。

ところが日程を組んでしまったあとに懇親会があるとの連絡がきた。ランガは「気にしないでもいいよ。愛抱夢には付き合いというものがあるんでしょう？ 俺、部屋で待っているから」と言ってくれた。ランガとのディナーを断念するしかなかったのは残念だったが翌日もある。

飲み会終了後ホテルに到着したのは二十二時過ぎていた。

エントランスに足を踏み入れてすぐにスマホを取り出した。寝ていなければいいのだが。

「愛抱夢？」 眠たげな声が聞こえた。

「予定より遅くなつてごめんね。寝ていた？」

「お疲れ様。シャワー浴びて、少しうとうとしていた」

「君の部屋はシングルだね」

「うん、狭いよ」

「広めの部屋をとっておいた。僕のルームナンバー先に決めてもらっているんで送っていた。貴重品だけ持って来てくれないかな」

「わかった」

彼への連絡後チェックインしたのだが、この気早さが最初のミスだった。アルコールのため慎重さが欠けていた。

薄暗い廊下でランガはニコツと笑って片手をあげた。自宅から持ってきただろうスウェットの上下を着て愛之介が指定した部屋の前に立っていた。

「やあ、お待たせ」

「そんな待つていないよ。愛抱夢、荷物ないんだね」

「週半分が東京なんだ。スーツケースなんて転がしてられないよ。議員宿舎に生活必需品は全て、着替えも一揃い用意してあるからね」

ドアが閉まると同時に彼を抱きしめ強引に唇を重ねた。彼は身を振ってキスから逃れようとした。唇を離し顔を覗き込めば口をへの字に曲げ顔をしかめている。

「もう、アルコール臭いよ。結構お酒飲んだ？」

「ああ、悪かった。そこまでは飲んでいないつもりだったんだけどね」

「とりあえずコート脱いだら？」

「そうだね」

コートをハンガーにかけクロゼットにしまう。次にスーツのジャケットから袖を引き抜いた愛之介をじつと見てランガは眉を寄せた。

「なんだろう、いつもと違う」

「違うって？」

「愛抱夢ってさ、スーツのときいつもピシッとしているんだけど、なんていうんだろう。ヨレヨレしている？ シャツも皺だらけで襟はズレているし。ネクタイも緩んでいる」

「飲み会だと色々からまれるしね。特に僕は最年少だからいじられやすいんだ」

ネクタイを吊るし、ワイシャツはランドリーバッグに放り込んだ。

スラックスを脱ごうと靴を脱ぎスリッパに履き替えようとしたとき「愛抱夢、足、どうしたの？」とランガは怪訝な表情で愛之介の足元をまじまじと見た。

しまった。失念していた。いくらアルコールが入っていたとはいえ、今の今までのつかり忘れていたとは。左右の足のうち、今現在ソックスを履いているのは右足だけなのだ。

飲み会程度で、ソックスを片方無くするなど異常事態にも程がある。

頭の中が真っ白になった。浮気などと疑われたくない。この子を不安にさせたくない。それだけは避けたい。

「ランガくん、これはなんでもない。誤解しないでくれ！」

だがその刹那、とどめを刺された形になった。

「それにさつき気になったんだけどシャツに付いていた赤いアレってリップスティックだよね？」

慌ててランドリーバッグの中を覗いてみる。ギョツとした。赤い口紅が袖にベッタリと付着していた。ランガに指摘されるまで気がつかなかったとは。なんたる間抜け。失態。軽い飲酒であつてもここまで注意力が散漫になるとは。アルコールとは実に恐ろしい。

「どうということなの？」

「そ、それは、あやかちゃんが……」

我ながらあやかちゃんはないだろう、「ちゃん」は。自分の狼狽えっぷりに呆れる。

「〈Ayaka-chan〉？ 女の人？」

「はい女性です。一年生議員の綾香議員です」

「さつきから口調が変だよ？ いつもの愛抱夢らしくない。そんなに後ろめたいことでも

あつたの？」

「いえ、全くありません！」

動揺のあまり声が裏返ってしまった。

「やつぱり変だ。なんか誤魔化そうとしていない？」

ランガは唇を尖らせ、ぬつと顔を近づけてきた。

「誤魔化すなんて、そんな……浮気なんて断じてないよ」

自ら浮気などと口走つてどうする？ そうだ、やましいところなどない。

それでも悪い印象を持たれたくない一心で軽率な弁解を重ねている。それをすればするほど言動がおかしくなりランガの不審を煽つてしまっている。議員としての答弁でも陥りやすい罠だ。いや、議会でこの手のミスなんてしたことないのに、神道愛之介らしからぬこの体たらくだ。

「待つてよ。俺、浮気なんて疑つていないのに、どうしてそんなに慌てているの？ もしかして本当は浮気した？ とか考えて不安になっちゃうよ。ねえ、ちゃんと俺の目を見て」

ランガはじつと愛之介の瞳を覗き込んでくる。間接照明の仄明かりの中、冷たい湖面を

想起させる澄んだ青が煌めいていた。適当にはぐらかそうとしていた自分を恥じいるべきだろう。

「……話して」

「わかった、最初からちゃんと説明する」

あの懇親会後に二次会まで付き合わされた。断ることが難しかったのだ。すぐに切り上げるつもりだったこともありランガに連絡しなくても大丈夫だろうと判断した。二次会にまで参加してしまったことをホテルでひとり待たせているランガに知られてしまうことは抵抗があったのだ。

二次会は貸切でカラオケスナックだった。一時間かそこらで失礼させてもらうつもりだったのだが、そこでもんでもないトラブルに見舞われた。あやかちゃんからみの。

ちなみに綾香は名字だ。フルネームで綾香様子なのだ。一年生議員といっても、それなりにキャリアを積んできたアラフォー女性で彼女の知見は興味深く、政治家という職業しか知らない愛之介に比べればはるかに人生経験豊富で数少ない尊敬できる人だった。

ではあるのだが、この女性一つ困ったところがあった。酒癖が悪いのだ。とんでもない

問題行動こそは起こさないものの子供っぽい悪戯に周りは振り回される。

カラオケスナックで愛之介は綾香議員の隣の席だったのだが、酔っ払った彼女はいきなりテーブルの下に潜り込んだ。そこで何を思ったか……恐らく何も考えてはいなかっただろうがケラケラ笑いながら同席した人たちの靴を片っ端から脱がしはじめた。さらにソックスまで引き抜く始末だ。

最初、皆は口だけで制したが、一向にやめる気配がなかった。仕方なく隣の席だった愛之介が、彼女を引っ張り上げることになった。口紅はおそらくそのとき弾みでついたのだろう。

それから放り出されている靴やソックスから自分のものを見つけ出し履き直すことになった。ところがなぜか愛之介のソックスの片方だけが見つからなかった。テーブル、椅子と隈無く探したが出てこない。

ランガを待たせている。探す時間の方が勿体無い。ここからホテルまでタクシーだ。ソックスを履いていなくても凍傷を負うなんて心配はないだろう。

ランガに会える。そのことに頭がいっぱいで、片足は素足であることなどタクシーに乗り込んだ瞬間忘れていた。

我ながら浮かれ過ぎだ。

一通り説明し終えて愛之介は頭を下げ謝罪した。

「ランガくん、嫌な思いをさせてすまなかったね」

呷然としているというか、なんともいえない表情で聞いていたランガは首を横に振った。そしてホツとしたように笑った。

「大人って色々大変なんだね」

「大変というより、バカで呆れただろう？」

「びつくりしただけ。俺にはまだわからないことだらけだ。でも隠そうとしないで最初からちゃんと話して欲しかったな。だって本当にどうってことのない話だったんだから」

「わかったよ。今回のことで僕も懲りた」

「ねえ、愛抱夢はさあ、もう怯えなくていいから」

「怯える？」

「ごめん、日本語の使い方間違っていた？」

「いや……そうか。間違っていないよ。君の言う通り僕は怯えていたんだ」

「愛抱夢は、きつと俺には想像もできない複雑な大人の世界にいて、心を全部見せてはい

けないところにいるのかなって思ってたんだ。でも俺の前では無理しなくていいから。気にしないでいいから」

なるほどと思う。最初のミスは、ソックスを片方なくしていたことを失念していたこととアルコールで注意力散漫になりワイシャツに付着していた口紅に気がつかなかったことだと思っていた。それらのことに注視できていたら、真つ先に自分が部屋に入り体裁を整え、ランガを迎えることでなんの問題もなく取り繕うことができたのだ。

ランガがらみでなければ、狡猾な神道愛之介を難なく演じていただろう。

でも今は結果的にこれで良かったと思っている。ランガに対しては取り繕う必要など何もないのだ、ということを変更して思い知らされたのだから。

「俺、愛抱夢のこと全て話して欲しいとか知りたいってわけじゃないんだ。俺だって愛抱夢に何もかも話しているわけじゃないし」

それは自分も同じだ。ランガの交友関係、特に親友とのやりとりをいちいち聞いてなどいないし詮索もしない。たとえドローンを駆使して盗撮しようが、ランガの全てを把握できるわけではない。まして彼の心まで映すことは不可能なのだ。それに今やその必要性も感じていない。

ランガの水色の髪をそつと撫でた。

こんなふうに指を伸ばせば触れることができる。この子はここに、こうしていてくれるのだから。これ以上何を望む必要があるのか。

「ありがとう、ランガくん。また君から一つ教わった。明日には必ず埋め合わせはするから許して欲しい。評判のいい焼き芋屋も見つけたんだ」

「許すも何も。愛抱夢はほんと大袈裟なんだから。それよりシャワー浴びてさっさと着替えたら？」

「そうだね。君は眠かったら先に寝ていて。ベッドはキングサイズだからふたりで寝ても余裕だよ」

「でも……」

「大丈夫。寝込みを襲ったりしないから」

「え？」

「おや？　もしかして期待していた？」

ランガは、ふいつと目を逸らした。

「そういうことじゃない。だけどまだ寝ない。あなたとちゃんと話をしていないし、明日

の予定も聞いていない……」

どこか拗ねたような口調だった。

「じゃあ、寝たりしないよう頑張つて」

「俺、そんな子……」

子供じゃないと言いたかったんだろう。でもその言葉を遮ってバスルームのドアを閉めた。

焼き芋屋の調べはついている。明日は強く冷え込み雪がちらつくだろうとの予報だ。それは願ってもない天候でふたりのデートが祝福されているのだと思えた。なにしろ凍えるほど寒いところで熱々の焼き芋を食べる、というランガのささやかな憧れが現実のものになる。それは同時に最高の時間をふたりが共有することになるのだから。

## §

「え？ ソックス見つかったの？」

「ああ、見つかったというか、送られてきた」

この上なく楽しい思い出になった焼き芋イベントのあと、最初にランガと滑ったときのことだった。

「誰かが拾って届けてくれたの？」

「まあね」

速達で配達されてきた封書。ひっくり返してみれば、綾香祥子議員からだった。

内容は、先日の酔っ払い騒動の謝罪の手紙とともに、無くしたソックスの片方とお詫びらしき新品の同ブランドのソックスが同封されていた。

手紙によると、あの夜、綾香議員は片っ端から靴とソックスを脱がし、なぜか愛之介のソックスをスーツのポケットに入れていたとのことだった。それでは床をいくら探しても見つかるわけではない。

彼女は全く覚えていなかったという。テーブルの下に潜り込んだという記憶はうつすらとあったようだが。ポケットになぜ紳士物ソックスの片方だけが入っていたのか困惑し、その上そのソックスの持ち主もわからず途方に暮れていたらしい。が、あのテーブルで一緒だった人が愛之介のソックス片方が最後まで見つからなかったと教えてくれたというこ

とだった。

しばらく酒は控えます、と手紙は締めくくられていた。

「へえ、そうだったんだ。お酒って怖いね」

「節度を保って飲むことは難しいんだ」

「俺、二十歳になっても飲まないと決めた」

「それは賢い選択だよ。実際沖繩ですら若い層での飲酒量は減っている。お酒なんて百害あつて一利なしだからね」

「悪いことしかないってことでしょう？ それって煙草と一緒だね」

完全に藪蛇だった。喫煙本数は多いわけではないんだ。自室にいるときかSでしか吸うことはできないのだから、たまには吸わせて欲しい。もうこの話は引きずらない方がいいだろう。

「努力はしよう。さあ、もう一度滑ろうか」

手を差し出す。ランガは微笑み愛之介の手を取った。

## キスはおあずけ

久々のスケートデート。なぜかランガは落ち着かない様子で、しきりに唇を舌で舐めたり指で触れたりして首をかしげていた。

気になった愛之介は訊いてみる。

「どうかしたのかな？」

「最近、唇がボロボロなんだ」

ああ、確かに気になっていた。

「いつから？」

「最近かな。荒れる前からリップクリームでケアしていたんだけど、最近は塗っても塗っても皮が剥けたりして治らない。血が出ることもある」

「前はそんなにリップなんて塗っていなかったよね？」

「うん。手入れくらいしたほうがいいのかなくて」

「どうして、そんなこと気にしはじめたの？」

ランガは妙に落ち着きのない様子で視線を宙に泳がせはじめた。

「それは、えっと」

微かに彼の頬に朱がさしたのを認めて、大方察したが一応本人の口から言わせてみることにした。

「それは？」

「あ、あの……キ……」

ああ、やはりね。

「き……って？」

助け船は出してあげない。ここは本人の口から言わせたい。いやらしい笑みが浮かびそうになっている口元をグッと引き締める。この意地悪さにランガは気がつかないだろう。彼は決心したように顔を上げ愛抱夢に視線を向けた。

「キスするときに気になるんだ」

「そうなの？」と驚いたふうに目をまるくしてみせた。我ながら白々しい。

「リップクリームは、一日何回くらい塗っているのかな？」

「唇から教えてもらったこのリップだけど結構塗っている。ガサガサが気になりだしてから特に」

言いながらランガは、ポケットから取り出したリップクリームのキャップを開けた。あ、それはドラッグストアで五百円しないくらいで売っているリップクリームだ。男の子が買いやすいデザインの実薬部外品。

そして彼はゴシゴシと塗ったくりはじめたのだが、なんというか乱暴で雑な塗り方だ。リップをポケットに入れたのを見て、彼の顎を掴んで持ち上げ唇を注視する。荒れていることはわかっていたけれど、確かにこれは酷い。皮がボロボロと剥がれ血が滲んでいる。

まったく。君はもつと自分の肉体を丁寧扱ったほうがいい。自分の容姿を美しく保とうとする意識があまりにも希薄だ。

「痛そうだね」

「ヒリヒリする」

「話を聞いている限り原因は二つほど考えられるね。君はもともと唇の手入れなんてしていなかったよね。昔はリップクリーム使っている様子はなかったしね」

「うん。本当はあなたとキスするようになってから気になり出してリップクリーム使うようになったんだ。それなのに荒れちゃって。もしかしてキスが原因だったりする？」

「それはないな。だってそこまで頻繁に会えていないしそんなハードなキスをしているわけでもないから」

未成年相手にそんな激しいことをするほど分別がない大人ではない。キスに関しては、むしろランガの方が積極的なのだ。どちらかというと自分は押し切られている方だと思う。多分。

「じゃあ、どうして？」

「考えられるのは、たまたまそのリップが君に合わなくてかぶれた。あるいはリップの使用回数が多く、かつ塗るとき強く力入れ擦っていていることが刺激になった。君の塗り方かなりぞんざいだったから、おそらく後者かな。もつと唇は優しくソフトに扱わないと」

「詳しいね」

「僕も昔同じようなことで悩んでね」

「キスで？」

「どうしてそうなる？」

「いや、冬の東京は乾燥して唇も荒れやすいんだ。仕事柄テレビに映ってしまうことも多い。唇が荒れ放題だとみつともないだろう？　それでリップを塗ったりしたんだけど治る

どころか悪化してね。今の君とちようど同じだ」

「それでどうしたの？」

「別件で皮膚科に行ったとき診てもらったよ。そうしたら擦りすぎだつて注意された。

リップは一日三回くらいで十分。多くて五回までつて言われた。それもそつと塗つて決して擦らないようにと指導されたんだ。医者 of の言いつけを守つたらすぐに治つたよ。だから君も塗る回数と塗り方を考え直したほうがいい」

「知らなかった。リップは今まで使つていたのでいいのかな？」

愛之介は、ポケットからリップクリームを取り出した。

「君が今使っているものも悪くないと思うけど硬そうだから少し擦れそうだね。僕の使いかけで悪いけどこれをあげよう。高保湿のリップで滑らかだから塗るときに負担がかからないよ。嫌でなければ試しに使つてみて」

手渡されたリップクリームをじつと見ていたランガが顔を上げる。

「これ無いと愛抱夢が困るんじゃない？」

「買い置きはちゃんとあるから大丈夫だよ」

「じゃあ、使わせてもらうね。ありがとう」

言うなり、ランガは愛之介の首にするりと腕をまわし、顔を近づけてきた。いつもならそのまま唇が重なるところなのだけど愛之介はランガの肩を掴みそつと押した。

「だめ。そんな傷だらけでキスするなんて。悪化するだろう」

頬に手を添え親指の腹で少年の唇にそつと触れた。少々の傷が彼の美貌を損なうものではないのだが、やはり勿体無い。あらためて彼の唇に意識を向けた。

ランガを女性的だと感じたことは一度もない。それでもこの唇はイメージの中にある可憐な少女のようだと思った。淡い桜色。厚くもなく薄くもない、ふつくらとした綺麗な形。しつとりとして柔らかい弾力と心地よい温度。愛之介の唇に、記憶されているその感触が蘇った。

ランガはむつと唇を尖らせた。

「少しくらいなら大丈夫だよ」

その拗ねたような表情がなんとも言えず悲しそうで、思わず口元が綻んでしまった。触れるくらいのキスなら問題なんてあるわけない。でもだからこそ今は、少し焦らしてみたくなった。

「ランガくん、目を瞑って」

「え？」

「僕の言うとおりにして」

素直に目を閉じた少年の唇に自分の唇を近づけ、触れるか触れないくらいの距離で熱い吐息をそつと吹きかけた。ピクリと震えた彼の頭を撫でながら、髪に額に目尻に瞼に頬にと、唇以外のありとあらゆるところにキスの雨を降らせる。

そして最後に耳をべろつと舐めてやれば、小さく息を吸う音が聞こえた。

「次に会うときまでに治してきて。それまでキスはおあずけだよ」

自分の肩に頭を乗せこくりとうなずいたランガを愛之介はきつく抱きしめた。

《了》

## たぶんそこは聖域

強引に押し切られての早朝デート。休むことなく水分補給のみで滑り続けて空腹のあまりぶつ倒れそうになって、やっとランチにしようという話になった。

「何を食いたい？」

一応聞いてくるのはお約束。聞かれたところでランガはお腹が満たされればなんでも構わない。腹ペコで頭はまわらないし店も知らない。勝手に決めてくれるのならその方が楽だ。だから返事はいつも同じ。

「任せるよ」

「では、ハンバーガーはどうか？」

意外な提案が返ってきた。ハンバーガーは暦たち友達と食べるファストフードで食事というよりおやつだ。何より愛抱夢がハンバーガーに大口開けてかぶりつく姿は想像できない。

「どうしてハンバーガー？」

「なんとなくね」

そして連れてこられたハンバーガーショップは、想像していたようなファストフード店ではなかった。

そこはハンバーガー専門カフェ。曆たちとよく行く店とは随分と趣が異なる。カジュアルな店構えなのだが、知っているファストフード店より高そうに見えた。間違いなく高い。ハンバーガーといったところで愛抱夢が選ぶ店なのだから当然かもしれない。

店内に一歩足を踏み入れ、ふつと感じたこの空気、なんとなく覚えがある。

席に着きメニューをぼんやりと眺めてみる。どれを注文していいのかわからない。愛抱夢の顔をチラリと見ればニコツと笑った。

「君は好き嫌いはなかったよね？ アボカドは好き？」

「うん。好きだよ」

多分嫌いじゃなかったような気がしたからそう答えておく。

「では僕のおすすめでいいかな？」

「いいよ」

選んでくれるのならその方がありがたい。

「ではアボカドB」バーガーセットをとりあえず注文しよう。それで足りなかったら、あ

とでまた好きなものを追加オーダーして。それとハンバーガーには強制的にフライドポテトとスープとスティックサラダがついてくる。でも残念ながらプーティンはないんだ」

「別にいいよ。前に暦たちと行ったところのプーティン、カナダのものとなんか違っていったんだ。チーズのせいかな」

だからといって不味いわけではなかった。けれど第一優先で食べなくても、日本には他にも美味しいものがたくさんあることを知った。たとえばラーメンとか。

テーブルに注文した料理が運ばれてくる。大きなプレートには紙で包まれ、でもテープで止めていない分厚いハンバーガーが乗っていた。その周りに添えられているのはフライドポテトとフライドオニオン。

「ナイフとフォークもあるからね」と愛抱夢はテーブル上のカトラリーケースを指した。

「いらない」

「だろうね」

「愛抱夢は使うの？」

「まさか」

意外だった。普段の彼は上品にナイフとフォークを使い口に運ぶ印象が強かったから。では、と包み紙ごとハンバーガーをひっくり返して軽くぎゅつと押した。愛抱夢も同じことをしている。お互いに顔を見合わせた。サングラスの色つきレンズ越しに愛抱夢の目が丸くなっているのがわかった。

「ふうん、君もそうやって食べるんだ」

潰して少し薄くすれば口に入れやすいし具材とバンズが馴染んでバラバラになりにくい。やり過ぎればバンズのふわふわ感が損なわれる。加減次第だからこれは慣れだ。

「父さんから教わった」

「僕は留学中にね」

では遠慮なく「いただきます！」気持ち良くハモってしまった。

口を大きく開けて、あーむつとかぶりつく。チラリと目をやれば愛抱夢も一緒のタイミングでかぶりついてた。ここまでの流れは絶妙にシンクロしていて面白い。目が合えばふたり同時に吹き出しそうになっていた。一度笑いが起きると止めることは難しい。笑いを我慢しながら食べ続けようとするが、どうしても笑ってしまう。だつて目を見開いて頬張る愛抱夢の顔なんて見たことなく、ユーモラスで愉快で仕方ない。もつともそれはお

互い様だ。愛抱夢もランガの顔を見て笑いを堪えようとして堪え切れず肩を震わせているのだから。

それでも少しずつ食べることに集中していった。レタスのシャキシャキ感としつかりとしたトマトの酸味と甘み、アボカドのとろりとした濃厚さとベーコンの塩気。肉肉しいパテはもちろんビーフだけで作られているという。ソースがポタポタ垂れたり はみ出た具が落ちたとしても紙の中だし かぶりつく口元も紙に隠され 見えないから 少々下品な食べ方をしても 気にならない こともあり たい。

ポテトもスープもサラダも夢中で食べて、あつという間に平らげていた。

「どうだった？」

紙ナプキンで口を拭いながら愛抱夢が訊いてきた。

「これすごく美味しい」

「それは何より」

ランガは店内をぐるりと見回した。

「この店の雰囲気だけど、なんか懐かしい気がしたんだ」

「カナダにも似た店あるんだろう？ アメリカにこういったスタイルの店は結構あつて僕

はよく利用したからね」

「そっか、ここ父さんと母さんと三人でよく行った店に似ているんだ。味も近いかも。俺と父さんはそのままかぶりつくけど母さんはナイフとフォークで切ってからじゃないと口に入れないって」

「特に日本人女性の小さな口だと厳しいよね」

「今度母さんと一緒に来たいな」

「そうしたらいいよ」

「俺さ、最初ハンバーガーって聞いて暦たちといつも行っているような店なのかと思って  
いた」

「大手のチェーン店だね」

「そう、だからあなたからイメージできなくてすごく意外だったんだ。そんなもの愛抱夢は食べないと思い込んでいた。子供のころファストフードとかスナック菓子とか食べさせてもらえなかったって言っていたから。でもこんな店なら納得」

「僕の家はそうだった家だからね」

「今度さ、俺が暦たちとよく食べている店に愛抱夢を連れて行きたいな」

「君からの誘いは嬉しいんだけど、行かない」と愛抱夢は肩をすくめた。

「そうだね。こんな美味しいハンバーガー食べちゃったら行く気にならないか」

「そんな意味じゃないよ。実はもう何度も行っている」

「え？」

「そんな顔してどうしたの？　僕がファストフードへ行ったことがあるって驚いた？」

「うん、びっくりした」

「確かに子供のころはその手のものに縁がなかったけど、高校生にもなれば夜中抜け出してそこらじゅうの公道で滑って暴走しまくるとか、大人の目届かないところで好き勝手、迷惑行為をしていたさ。だからファストフードだつて……」

そこで愛抱夢は何か躊躇うように言葉を切った。

「ん？」とランガは首を傾げ愛抱夢の顔をじつと見た。

「まあ、友人とよく食べたんだ」

友人……この言葉にかすかな迷いを感じた。それってチェリーやジョーのことだろうか？　スネークは多分違う。

「そっか。俺でつきり……」

「それに、あそこは君たちの聖域だからね」

「せいikitte?」

意味がわからず聞き返すランガに愛抱夢はふふつと笑う。そして「僕にとってもか……」と目を伏せた。それはとても小さな声でランガに聞かせようとしたものではない。だからこそランガはなんとなく理解してしまった。

あそこは、ランガと暦がスケート話で盛り上がったところだ。これからも。きつと愛抱夢にとつても自分以外の誰かとの思い出をが詰まっているのだろう。

それならばランガと愛抱夢が一緒に行く理由はきつとない。自分たちは自分たちだけの場所を新しく見つけなければならないのだから。

「さあ、それよりまだ食べ足りないんじゃない？ チキンもおすすめだよ」  
メニューを差し出す愛抱夢に「じゃあ、それ頼む」とランガは微笑んだ。

《了》

## キスの意味が変わるとき

いつの頃からだろうか。ランガの唇にリップクリームの皮膜を感じるようになったのは。気になるというほどではなかったが。

そんなランガが、唇の荒れが気になると訴えてきた。確かにこのところ唇がガサガサであることが見てとれた。聞けば手入れをしなければと荒れ予防にリップクリームを使い始めたという。どうやらキスをするようになって普段無頓着な彼でも唇の手入れに目覚めたということだった。

そんな彼は可愛いし、その気持ちは嬉しくもある。でもそれは逆効果だった。リップクリームを乱暴に塗ることでむしろ唇を傷つけてしまっていたのだから。

そこで愛之介は、ランガに唇に刺激を与えないようにという注意を添えて、自分が愛用している高保湿のリップクリームを渡した。傷がきちんと癒えるまでキスはおあずけと言添えて。

シンブルに焦らしてみたというだけの意地悪だった。ランガはそんな愛之介の本心に気づくはずもない。

会えない間、ランガとはメッセージや電話でやり取りをしていた。唇の状態は改善しつつあるという。

「今度会うまでに治りそうだよ。あなたにもらったリップクリームのおかげだ。ありがとう」と感謝された。

「キスができるようになるまで気を抜かないように」と念を押す。

「わかった」と返事をする声は嬉しそうに弾んでいた。

通話を切ると同時に口元が綻んだ。

それにしてもランガはキスが好きだ。はじめてのキスこそ愛之介がリードしたものの、それからはランガの方がむしろ積極的だといえる。人目がなければ軽いキスを仕掛けてくるのは彼の方からなのだ。それもぎこちなさの欠片もない自然体で。唇と唇でのキスは、ごく幼いころの身内以外では初めてだと言っていた。その言葉に嘘はないだろう。

もともと性的な印象は希薄だった。それ以上の接触を求めるような素振りも見られない。だからそのまま肉体関係へと進んでしまう雰囲気は皆無なのだ。

ランガの中でキスはいつたいたいという位置付けのなのだろうか少々悩むところだ。

そんな取り止めのない思考を中断し、愛之介は引き出しを開けた。中から唇が完治したときに渡す予定のあるものを取り出した。それを手のひらに乗せじつと見つめる。前に渡した保湿目的とは違う効果効能を持ったリップだ。そしてこのプレゼントは自分にとっても大きなメリットがある。

§

「治ったよ」

ほら、とランガは顔を近づけてきた。

そんな彼の輪郭を両手のひらで包んで覗き込んだ。

「どれどれ。確認させてもらおうか」

血が滲んで痛々しかった唇は、明るい桜色を取り戻していた。

「どう？ もう痛くなくなった」

「そうだね。よかったよ。あのリップがダメなら皮膚科で診てもらったほうがいいかなって思ってた。荒れた原因はただのいじりすぎ。過ぎたるは及ばざるが如しだ」

「過ぎたるは？ 何それ？」

「何ごともやり過ぎはダメってこと」

「そう。じゃあキスしよう」

その唐突な「じゃあ」はどこからきた「じゃあ」なんだ？ などと突っ込む隙も与えず首に腕がするりとまわされた。チュッというリップ音とともに唇が触れる。その一瞬でわかる柔らかな弾力、しつとりとした潤い、心地よい人の体温。ランガの唇だ。

すぐに唇は外される。澄んだ青い虹彩が揺らめいていた。  
愛之介の口元からふつと笑みがこぼれた。

「君は本当にキスが好きだね」

目を細めランガの頭に手を置いた。

すると彼はパチパチと何度か瞬きをして「え？」といった面持ちで目を丸くした。

この反応、自覚はなかったのか。

「違うの？ 君は会うなりキスをしたがるから」

長いまつ毛がそつと伏せられた。

「そっか、俺キスが好きだったんだ。ごめん迷惑だった？」

少々焦る。

「迷惑だなんて、そんなことあるわけない」

「本当はいやなのに無理していない？」

「僕は無理する性格じゃないよ」

「うん。なんだろう。キスしたいって思ったからした。それだけ。愛抱夢がいやがつているのかも、なんて考えなかった」

そう言っただけ、彼は黙り込んでしまった。

ランガは自分の感情を言語化することが苦手だ。日本語が不慣れという理由もあるだろうが、たとえ英語でと促したとしても論理的に話すことはできない。

「いいよ。無理に説明しなくても。僕は君からキスをされることが好きだよ。君から愛されているとまで言わないけれど、君は僕のそばにいてくれると実感できるから。君を愛しているんだって安心できるんだ」

「最初にあなたがキスしてくれた。多分それで抵抗がなくなったのかな。あなたにキスしていいんだって思っちゃったんだ」

「君は僕がキスしても大丈夫だと思ったからキスをしてくれたの？」

「きつとそう」

それならば、少しだけ気になっていて、でも訊くことが怖かったことがひとつある。大きく深呼吸吸をして覚悟を決めた。

「もし……もしだよ、キスしてもいいよって言われたら、キスしたい人って僕の他にいるの？」

そう、たとえばあの赤毛の親友とか。

ランガは目を見開いて愛之介の顔を見た。

「それはどうだろう。考えたこともなかった」

ランガは顎に指を当て眉を寄せた。即否定することもせずに思い出そうとしているような仕草に少しばかり気鬱になる。

「おかしいこと訊いちやったね」

彼は首を左右に振った。

「ちようどいいから、ちゃんと考えてみる。たとえば、暦——俺、暦のこときつと愛しているんだ。初めてできた友達だしずっと親友でいたい」

なんの迷いもなく「愛している」と断言してしまうのか。わかっていた。君の一番は彼

だったね。理解しているはずなのに胸が強く痛んだ。

「でも、だからこそ唇とキスをするなんて想像できないし、したいとも思わない。どれだけ愛していても母さんや父さんとキスしたいと思わないのと一緒にだよ。もし唇からキスしたいと言われたら俺どうしていいかわからなくてパニックになりそうだ。そんな心配絶対ないけどね。だって俺たち一番の親友だから」

ランガは晴れやかに笑った。

では、僕は君にとってなんなんだろう？

そんな愛之介の心を読んだように彼は続けた。

「父さんと母さんは、いつもキスしていた。おはようのキスから始まって、いつてらしやい、おかえり、おやすみなさいと、目と目が合えばキスしていて、それが普通のことだったんだ。俺の両親が特別だったんじゃないって仲のいい夫婦や恋人、パートナーだとよくあることだから。母さんはキスの習慣がない日本人だったから最初は戸惑ったみたいだけど『郷に入れば郷に従えで慣れた』って。子供の俺にも伝わってきたよ。父さんと母さんが愛し合い、どれだけお互いを大切だと思っていたのか。でも母さんにはもう……」

青い瞳が潤んでいることを見て取り、ランガを抱き寄せた。

君を泣かせたいわけではないんだ。

愛之介の首に顔を埋めたランガの頭を撫でた。

「悪かったね。それ以上何も言わなくていい。考えなくていいから」

言葉にする必要はない。だって僕は既に知っているんだ。君がわかっていなくても理解してしまっただけから。

「うん」とくぐもった声が響いた。襟元にかかる布地越しの吐息があたたかい。愛おしさが込み上げてくる。

体を離れたランガが少しだけ低い位置から愛之介の目をじつと見つめてきた。

「俺、愛抱夢を利用していたのかな。本当は気づいていたんだ。あなたが俺に何を求めているのか」

愛之介は微笑み、ポケットから渡す予定だったリップエッセンスを取り出した。

「君にこれを上げよう」

「リップクリーム？ この前のと違うの？」

「前に上げたのは唇の荒れを防ぐ高保湿のリップクリームだったから、毎日お手入れに使うものなんだ。これはキスの前に使うリップエッセンスだ」

そうこれはキスが好きなランガにおあつらえ向きだと思った。

「キスで唇が荒れないように？」

「まあそれもあるけど……別の効果もある」

「別の効果って？」

「リップクリームと違って、キスしたとき気持ちいい。何よりも……」

それ以上の説明をどうするか少々悩む。

「どうしたの？ 教えて」

「聞きたい？」

「うん」

彼の耳元に唇を寄せた。

「エッチな気分になる」

一瞬ランガの表情が固まる。やがて手元のリップエッセンスと愛之介の顔を交互に見た。

「エッチの意味わからなかった？」

「わ、わかる。そのくらい。学校でもよく聞く言葉だから」

ランガの頬にさつと朱がさした。この反応。どうやら正しく伝わったらしい。

「そう、日本語たくさん覚えたね」

もつとも実際の程度の効果があるかは怪しい。たかが化粧品でそんな効果効能があつてそれを表記したら薬事法違反だ。でもまあ触れて気持ちのいい官能的な感触であることは保証する。

「これからキスの前にこれつけるの？」

「ん？ いや、ランガくんの中でキスの意味が前と変わってきた、と思つたときに使つて欲しいな。いつ使うかは君に任せるよ。それまで大切に取つておいて」

「キスの意味？」

「いくら鈍感な君でもそのときになればわかるはずだ。それとも今説明して欲しいかな？」

ランガはふるふると首を横に振つた。

「大丈夫。俺、そこまで鈍くないから」

「僕はね、気は長いんだ。焦らなくていいから」

君のキスが今はまだ喪失感を埋めるものであつたとしても、それを僕に求めてくれた幸

運に感謝しよう。

「ハグとキスしていい？　いつものやつ」

「もちろん」

両腕を広げれば、ランガは胸の中に収まり背中に腕をまわしてきた。チュツと唇が軽く触れるだけのキスを交わしてから、ぎゅつと抱きしめる。

背中にまわされた腕に力が込められ、彼は言った。

「キスの意味が変わるまでに、きつとそんな時間はかからない」  
返事の代わりに彼の頭をポンポンと軽く叩いた。

「さて、そろそろ滑ろうか」

愛之介は立てかけてあつたスケートボードを掴みいきなり走り出した。「負けない」ランガも前を走る男の背中を追う。

ふたりだけのスタート地点はすぐそこだ。

## 運命を感じたとき

「お前も随分とクラスに溶け込んだよな」と弁当箱に詰められているポークに箸を突き刺し唇は言った。

カナダからの転校生というもの珍しさもあって、最初は学校中の生徒からジロジロ見られていた。それに輪をかけランガの態度も態度だったおかげでひとり浮いていたらしい。らしいというのはそう唇が言ったからで、ランガは持ち前の鈍感さで気がつくことは決まてない。

そんなランガがクラスに受け入れられたのは、唇のさりげない気遣いのおかげだったのだろう。もつとも唇は無意識だったしランガだってそんなこと知るわけもなかった。

「転校してきたばかりのころさ、お前のことプリンスとか言って女どもがキャーキャー騒いで居心地悪かっただろう？ 『かつこいい！ 素敵！ イケメン！ スタイルいい！』」とか言われて、そりゃ最初は少しばっか羨ましかったけどさ」

唇は人差し指でポリポリ頬を掻きながら唇を尖らせた。

「そんなことなかったと思うんだけど、唇がそう言うのならそうだったのかな」

「ま、お前ボーツとしていて鈍いところあったから。でもそれがかえってよかったのかもな。日本だとお前の見た目は目立つんだよ」

「そんなに？」

「転校してきて初めてお前を見たクラスの連中『外人？』なんて言っていたんだぞ。ランガの母さん日本人といつても、お前は日本人に見えなかったからな」

え？ と首を傾げた。

「そうか。俺って日本人に見えないのか」

「悪い意味じゃないからな。カナダ人が転校してきたぞ！ ってクラスの連中身構えていた。日本語普通に話せたから皆ホッとしたんだ」

「カナダといつても色々な人種がいるよ」

「女子が外人って言ったのは白人に見えたってことだろ」

確かにカナダの人種別構成比はヨーロッパ系白人が七十パーセント超えていて、アジア系は十パーセントくらいだったと記憶している。カナダ人といえば白人というイメージがあるのは当然かもしれない。

「うーん」

ランガは眉を寄せながら牛乳パックに口をつけた。

「そんな難しい顔すんなって！」

バシッと勢いよく背中を叩かれ牛乳を吹きそうになった。

「ちよつと曆！」

「ははつ。そんなん、ちつせえことだからな。お前がカナダ人だろうが日本人だろうが関係ねえ。どこの国の人間かなんてことよりスケーターかどうかの方が俺たちには重要なんだ。そうだろう？」

胸をはって言い切る親友をランガはまじまじと見る。そしてくすりと笑った。まったく曆らしい。

「そうだね」

俺たちはスケーターなんだとランガは同意する。

「なあ、俺、お前が沖縄に来てこの学校に転校してきてくれて本当に良かったと思っていて。お前に出会えて、毎日一緒に滑れて本当に楽しいんだ。もしお前がいなかったら、今でも俺は……」

珍しく真面目な表情で曆は目を伏せた。

今ならわかる。暦はずっと孤独だったことが。明るくて誰とでもすぐに打ち解けることができる暦なのに、彼には同世代のスケート友達はいなかった。クラスメイトたちを熱心に誘ってみるものの誰も乗ってこなかったという。

そこにたまたま転校してきたのがランガだった。

少しだけスケートに興味を示したように見えた転校生に暦は食らいついた。絶対に離さないとはかりに。とにかく押して押して押しまくってきた。暦のスケート談義にランガがつまらなさそうな顔をしていても、諦めることなくひたすら熱く語り続けた。ヨーロッパでもアフリカでも東南アジアでも、どこから来た転校生であつてもおそらく関係はなかったのだろう。一緒に楽しく滑ってくれる相手であれば。

そのなり振り構わない情熱には呆れるが、それほど暦は渴望していた。仲間と一緒に滑るスケートに。ひとりで滑るスケートはつまらない。

たくさんの親しい友人たちに囲まれ、笑顔の中、スケーターとしての暦はずっとひとりぼっちだったのだ。

今ではそのしつこさにランガは感謝している。強引にスケートを推められなければスケートをはじめたことはなかった。そうなればここまで暦と親密になれなかっただろう。

そのスケートを通して、さらに多くのスケーターたちと仲間になれた。カナダにいたところからは考えられないほど交友範囲が広がった。

だからスケートはすごい。年齢、学校、職業、肩書きなど関係のないフラットな世界。スケーターという大前提の上では皆対等だ。国籍も人種も社会的地位もあの世界では価値を持たない。だからSが、スケートが大好きなんだ。

Sの外でも、スケートボードを抱えた人が困っていたら他人事じゃないと手助けしたくなるだろう。たとえば言葉が通じない国の人であつても仲良くなれそうな気がする。

きつとそういうことだ。

「俺も暦に出会えなかったらと想像すると少し怖い。スケートも知らなくて今でもきつとひとりで、友達いないことが寂しいなんて知らなかった」

「俺だつてそうさ。ランガでなければ実也やシャドウやチェリーやジョーたち実力者たちとは、住む世界が違うと思ひ込んだまま交流するきつかけなんて持てなかっただろうし。俺のスケートの世界は、きつと狭いままだつた。みんなお前のスケートに引き寄せられたんだよ」

「そんなことないよ。暦がいなければ皆と親しくなんてなれなかった。暦のおかげだよ。」

俺ひとりじゃ何もできない」

暦はランガの顔をまじまじとみて「そうか」と言った。

「俺たちはふたり一緒ではじめて力を発揮できるんだな。お前は俺の最高の相棒だ。俺たちが出会えたことは運命なんだよ」

「運命って？」

「そこは追求するな、さらつと流せよ！ 恥ずかしいこと何度も言わせるな」

暦は顔を赤くしている。

「うん」

なんとなくだけどわかった。ふたりとも不完全で足りないところだらけだ。でもだからこそ補い合い助け合うことができる。

「いいか？ お前と俺はスケーターだ。スケートは無限に楽しいつて知っているスケーターだ。それはぜってーに変わらない。そうだろう？」

屋上の明るい陽光の下、丸い目から覗く瞳をキラキラと輝かせ暦は畳み掛けるように力説した。

この親友はごちゃごちゃと言わない。結論はいつもシンプルで迷いが無い。だから暦の

言葉はすんなりとランガの胸に収まってくれる。

暦と一緒になら可能性は無限大だ。俺たちはきつとどこまでも一緒に行ける最高のバディなんだ。

「あはは、ほんと暦はすごいよ」

ふたりは目を見合わせ、いつまでも屈託なく笑い合っていた。

## §

満月の明るい夜だった。神道家のプールに二つのウィール音が響いていた。

プールの外へ降りボードを蹴り上げ掴んで振り返れば、月明かりを逆光にふわりと宙高く浮いたランガの姿が目飛び込んで来た。シャツがたなびき銀色に縁取られたシルエットに目を奪われる。

ストンとプールの外へと着地したランガに声をかけた。

「少し休憩しよう」

「うん」

ランガは素直に駆け寄りペットボトルの水をゴクゴクと喉に流し込んだ。キャップをく  
るりと締めて彼は、愛抱夢に顔を向ける。

「ねえ愛抱夢。俺ってどう見える？」

唐突な質問だ。

「どうって君は綺麗だよ」

彼の頬を指で撫でながら正直に、しかしあまり深く考えずに伝えた。

「そういうことじゃない」

ランガは頬に触れる愛之介の指を掴み眉を上げムツと睨んできた。どうやらの外れな答  
えだったらしい。

「ん？ 機嫌を損ねたかな」と顔を覗き込めば、ふいつと目を逸らした。

「ごめん……俺の言葉が足りなかった」

「何かあったの？」

「俺って日本人に見えなかったらしい。転校したときクラスで『外人』って言われていた  
んだって唇が教えてくれた」

ああ、そういうことか。

「君は二重国籍だった？」

「にじゅうこくせき？」

「カナダと日本の二つの国籍を持っているかつてのこと」

「あ、うん。二十二歳になったときどちらを選ぶか自分で決めなさい、って母さんが言っていた」

「基本、日本国籍を持っていれば日本人だよ。でも皆見た目の先入観に惑わされる。クラスメイトは君みたいな外見の日本人にあまり馴染みがなかったんだろう」

「俺さ、カナダにいたころはアジア人で余所者だったんだ。父さんと同じカナダ人に見えなかったらしい。チャイニーズなんて言われたりもした。だからここでも俺は余所者なんだって少し引つ掛かった」

「アジア系アメリカ人も似た感じだったかな。ミックスルーツはこれから増えていくと思うよ。そうなれば皆の意識が変わる。今はまだ難しいかもね。気にしないことだよ、って慰めにもなっていない、ありきたりなことしか言えないけど」

「そうだよね」

「君はカナダにいたころ友達がいなかったって言っていたね。それが理由？」

「きつとそう。でも壁を作っていたのは俺の方だったんだ」

「幼かった君は敏感に周りの目を感じ取っていたのかもしれないね」

「父さんはそんな俺に無理をさせないようにしたんだと思う。俺も父さんと滑っていれば寂しくなかった」

「それでスノーボードに夢中になった？」

「本当に楽しかったんだ」彼は目を伏せる。「でも父さんが死んでスノーボードの楽しさがわからなくなつて、滑る意味を失ってしまったんだ。だから沖繩に来た。どうでもよかった。どうせスノーボードやめちゃったんだから雪がなくても構わないと思っていた」

「でもスケートに出会った」

「うん。スケートをきっかけに暦と友達になって、それからSで仲間ができてクラスメイトとも仲良くなれた。カナダに暦がいたのなら、もしかすると違っていたのかなって最近思う」

改めて、この子にとって赤毛がどれだけ大きな存在なのかを突きつけられた。ざわつく胸に己の未熟さを自覚させられる。

「暦はさ、そんなこと些細な問題だって言うんだ。どこの国の人間かってことよりスケー

ターかどうかの方が重要だって」

赤毛は脳みそがシンプルだ。不本意だが肯定するしかない。

「赤毛くんの言う通りだよ。Sにだっていろいろな見た目の人がいるだろう？ でもみんなスケーターとしてしか見ていない」

ランガは暗れやかに笑った。

「ねえ愛抱夢の目には、はじめて会ったときの俺ってどう見えていた？」

「ランガくんを最初に見つけたのはSの中継をチェックしていたときだよ。シャドウとビーフで滑る君を見たんだ。デイスプレイ越したたけだね。正直君の見た目は全く意識していなかった。スケートしか目に入っていなかったからね」

「はじめから俺をスケーターとして見てくれていたんだ」

ランガは嬉しそうに目を輝かせた。

忘れもしない。それは誰よりも美しく誰よりも攻撃的な滑りだった。ゴール直前高く宙を舞ったあの一瞬でこの少年に魅入られた。あれほど胸が高鳴ったことなんてもう何年もなかった。

それは運命を感じた瞬間だった。そう〈運命〉だ。

「暦はさ、運命だつて言うんだ。俺と暦が出会えたことが」

え？

思わず目を見開きランガの顔をまじまじと見た。彼はそんな愛之介と目が合うとニコツと笑った。その無邪気な笑顔に内心頭を抱える。鈍感すぎる。

否定の言葉を一方的に捲し立てたくなる衝動にとらわれるが、流石にそんなみつともない真似はできない。深呼吸ひとつで心を沈めた。

「君も運命だと感じたの？」と返す。

「暦は俺のこと最高の相棒だつて言ってくれた。俺もそうであればいいと思っていたから、すごく嬉しかった。運命つてよくわからないけど、暦に出会えなかったらスケートをすることなんてなかっただろうし、あなたとこうして滑ることもなかった」

ランガの大切な友人を否定しないよう慎重に言葉を選んだ。

「それでも僕は思うんだ。君がたとえ赤毛くんと出会わなくてもスケートは君を見つけるよ。なぜなら君はスケートに愛されているからね」

ランガは不思議そうな表情で首を傾げた。

「俺がスケートに？」

彼の両肩を掴み正面で向かい合う。

「そうだよ。そしてランガくんが世界のどこにいたとしても僕は必ず君を探し出した」

「え？」

芝居がかった仕草で手のひらを上に持ち上げ、夜空の輝く月を指した。

「ランガくんが、たとえ月に住む輝夜姫であつても天上で遊ぶ天使であつても深海にあるマグ・メルに住人だったとしてもだ。断言しよう」

ランガの目が見開かれ、ぱちぱちと何度も瞬きをした。

「ちよつ、ちよつと待つて。俺、あなたが何を言っているのか、まったくわからない」

「君がわかる必要はない。僕が納得しているんだから」

「あのさあ、俺のことおちよくっている？」

「心外だなあ。そんなわけないだろう」

「前からこういうことがちよくちよくあつて、ずっと俺が日本語わかっていないだけなのかと思つていたんだ。でもそれだけじゃなかった。愛抱夢は詩人なんだよね」

「は？ 詩人って誰が言っていたの？」

「スネークだよ。『愛抱夢は詩人で言葉の使い方が独特で普通の人には理解できなくて当然だから、あまり考えなくていい』みたいに言われたことがあるんだ」

なんてことを言ってくれるんだ。忠め。今度とつちめておこう。

「では簡単に言おうか。僕たちは必ず出会えていたんだ。どんな妨害が入ろうが誰が邪魔しようがね」

「俺が沖繩にいらなくても？」

「もちろんだよ」

「どうやって？ どう考えても無理でしょう？」

「無理なんてことあるものか。僕を誰だと思っているんだい？」

「愛抱夢でしょう？ Sではない方の名前は神道……アイ……愛之介だったよね」

「わかつているじゃないか。だからだよ」

「答えになってない」

それは……と言いかけた言葉を飲み込み、代わりに彼をグイッと抱き寄せた。

その言葉を口にするのは癪に障る。まるで赤毛をパクったみたいで二番煎じのような印象になってしまうのではないか。その言葉が陳腐なものに成り果ててしまう。だから意地で

も言わない。

それが僕たちの運命だから、とは。

「もう少しくうしていいのかな？」

愛之介の肩の上で諦めたようなため息が聞こえた。

「仕方ないな」

ランガの腕が背中に回され愛之介のシャツを掴む。布地越しに優しい体温が行き交った。

僕たちの邂逅は偶然の幸運ではない。出会うべくして出会った。必然だったのだ。僕は君を探し君は僕の腕の中に落ちてきてくれた。

だから、もうしばらく君をこうして感じていよう。

《了》

微睡まじろみの中で

耳元で小さく囁かれるこの男の声音が、ランガは好きだった。不思議な安心感を与えてくれる。

うつすらと目を開ける。ぼやけた視界に見下ろしてくる人影をとらえた。

愛抱夢？

が、すぐに瞼を閉じる。

まだベッドから離れたくなかった。もう少しこうしてブランケットに包まれぬくぬくしていたい。

愛抱夢が声もなく笑っていることが、わかった。

彼の指が額にかかる髪に触れる。湿った吐息が頬を掠めると同時に囁かれた。

「まだ夢の中なのかな？ ランガくん」

ああ駄目だ。そんな耳元で喋られたら……もう、目が覚めてしまう。少し気を利かせて欲しかった。なんか悔しい。ムカつく。

だから応えない。目は、わざと開けてやらない。

「まあ、まだ早いから寝ていてもいいけどね」

そうだよ。カーテンの隙間から早朝の光が漏れる様子はない。まだ夜明け前だ。そうに  
違いない。多分だけど。

愛抱夢の指が額にかかった髪をどける。

髪を梳き目尻から頬へと滑る指を感じた。触れるか触れないかギリギリで肌を撫でる指  
の感触はこそばゆい。

エスカレーターしなければ放っておけばいい。

あたたかい手のひらが頬から顎へかけての輪郭を包み込む。やがて手のひらは首から胸  
へと滑っていった。

パジャマの前立てから胸へ、するりと入り込んだ指の動きに別の意図を感じ、ランガは  
反射的にその手を払い除け、パチつと目を開けた。

「もう」

思わず、きつと睨み付けたランガに、愛抱夢は目を丸くした。

「おやおや、その目。今、目覚めたわけではなさそうだね。いつから起きていたの？」

「少し前」不機嫌そうな声が出てしまった。

「狸寝入りとは、悪い子だ」

「狸？」

「寝たふりをするって意味」

愛抱夢はうつすらと笑んだ。

起きあがろうとするランガの背中を大きな手ひらで支え、愛抱夢は自分の胸に抱き起こした。

「大人をからかうなんて、君はスケートに限らず怖いもの知らずだ」

「からかったわけじゃない」

ランガは不満そうに唇を尖らせた。

ただ、眠っているわけでも目覚めているわけでもない、あのふわふわとした感じが心地よくて名残惜しかった。まだ微睡まどろみの中に漂っていただけなんだ。

不意に顎が掴まれ持ち上げられた。至近距離から深紅の瞳が覗き込む。

「ふーん、そうなんだ」

見透かしたような目をランガに向け、愛抱夢は目を細めた。顔が近づき唇と唇が一瞬重なる。そしてランガの頭を抱き、そのまま後ろに倒れ込んだ。

「ねえ、なにをするの？」

愛抱夢の胸に頭がすっぽりと収まり、身じろいで形だけ抵抗する素振りを見せるが、拘束する腕の力が強くなるだけだった。

フフフ……と小さく笑う声が聞こえる。

「起こしてしまつて悪かったね。こうしていてあげるから、もう少し眠っていていいよ」眠っていていいよって、もうすっかり目は覚めてしまったのに？

それでも男の胸で聞く静かで、それなのに決して反論を許さぬ声音は心地よい。トクントクンと規則正しく打ち付ける胸の鼓動に耳を澄ます。

全身の力がゆっくりと抜けていくのを感じ、ランガは諦め目を閉じた。

《了》

## 大バカどものクリスマス

ジョーこと南城虎次郎のイタリアンレストラン シアラルーチェ *Siala Luce* では、クリスマスツリーを彩るLEDライトが静かに明滅していた。オーナメントの飾り付けも全て済ませ、店内はすっかりクリスマスムード一色だ。

十二月二十五日、誰もが知るクリスマスだ。その日は土曜日。二十四日のクリスマスイヴに続いてクリスマスランチ、クリスマスディナーと売り上げアップを狙えるイベントなのだが、今年の二十五日は一日まるまる貸切にした。スケート仲間で集まっただけのクリスマスパーティーをやるうという話で盛り上がっていた。一肌脱がないわけにはいかないだろう。まあスポンサーの当てがあるというのも大きいが。

「ランガのやつ都合がつかないんだってさ。まったくクリスマスくらい予定入れるなっただ。まさか俺に内緒で彼女と、とかいうんじゃないだろうな」

唇がぶつぶつ言いながら下唇を突き出した。

「ランガに彼女？ ないない。そーんなわけないだろ」

ププツと笑いながらも、実也は携帯ゲーム機から目を離そうとしない。

それに関しては実也と同意見だ。容姿が容姿なのでモテることはモテるだろう。だがエスコートなんて、からつきし駄目そうで気が利かないランガは、交際がはじまったとしても、あつという間に振られるタイプだ。俺が保証しよう。

「だよな。そういえばチェリーとシャドウは？」

「そろそろ来る時間だ」

カランカランというドアベルの音とともに和装ピンク髪の方が扇で口元を隠しながら入ってきた。薫だ。

「お、来たなスポンサー」

「誰がスポンサーだ！ 勝手に決めるな、この単細胞ゴリラ」

「年に一度の書き入れ時を捨てても俺は、皆のため場所と料理と労力を提供するんだ。大赤字は勘弁だぞ。お前も協力して当たり前だろうが！ がりがり亡者はどうせがつぼり金溜め込んでいるんだろう」

「ポケナスには理解できないだろうが、資産運用は高度な知略が必要なものなんだ。わかったか。知性欠乏類人猿め」

「んだとー？ この拝金眼鏡」

睨み合うふたりの額がぶつかりそうになった、そのタイミングでドアベルの音が再び店内に響いた。花屋のエプロンをつけた男が入って来た。素顔を晒したシャドウだ。

ふん、と薫はそっぽを向いた。

腹立たしいが仕方ない。今日のところは引き下がってやろう。

「打ち合わせに来たぞ。仕事だから十五分だけだからな」

シャドウは店内に入るなり、いきなりしゃがんでクリスマスツリーを支えるツリースタンドを覗き込んだ。

「どれどれ。コーカサスモミの水揚げは問題なさそうだな」

自分が届けたモミの木をチェックしながら「今のところ、どんな予定になっている？」と訊いてきた。

「基本会費制にするつもりだ。そのほうが気兼ねしなくて済むだろう。もつとも遠慮するやつなんていないだろうがな」

薫とシャドウの前にコーヒーを置く。

「それでいつものメンバーなのか？」

シャドウがコーヒーにクリームを垂らし顔を上げた。

「岡店長は夜の部だけ顔を出すそうさ。あとランガは不参加だ」

「ランガが？ どうしたんだ？」

「あいつさあ、都合が悪いっていうんだ。予定が入っているんだって」

暦は不満そうな表情で氷だけになったグラスをガチャガチャとかき混ぜている。

「なんの予定か訊かなかったの？」と実也はゲーム機から顔を上げた。

「なんとなく追求できなかった。ランガはいつも自分からは言わねえんだよな。こつちから訊けば隠したりしないで何でも答えてくれるんだけど」

「じゃあ訊けばよかったのに。暦が遠慮するなんて珍しいね」

「少し怖くて躊躇しているうちに訊きそびれた。ま、まさかあいつとの予定入れているんじゃないか、とか変なこと想像しちまつて」

「あいつ？」

「あいつっていったらあいつだよ、あ、愛抱夢だ」

メニューや食材などの予算見積もりのメモを配りながら「それはないな」と否定しておいた。そうさ、それはあり得ない。なぜなら、

「愛抱夢にも声をかけたんだ。少し遅れるけど顔を出すって言っていたからな」

「げっ、あいつ来んのかよ！」

暦は両手でダンツとテーブルを叩き、勢いよく立ち上がる。その弾みで椅子が大きな音を立て転がった。はぁーとげんなりとした表情で暦はため息をつき、椅子を起こしている。そんな赤毛の少年に薫が苦笑した。

「そう嫌そうな顔するな。今は俺たちと同じようにスケートを愛するひとりのスケーターだと思つてやれ」

虎次郎もフォローを入れることにする。

「それにスポンサーとして当てにしているんだ。そのおかげで酒を飲まない暦や実也の会費は食べ放題飲み放題でランチ、デイナー合わせて五百円ポツキリにした。これは決定事項だ。ただし準備や片付けは手伝ってもらうからな」

「やったね！」

「あとは大人の会費だな。とりあえず飲み代込み三千円でいいか？ 足りなかったら後でスポンサーが穴埋めしてくれるだろう」

「俺はスポンサーになることを了承したわけではないぞ！」

「お願いします！」 「します！」

暦と実也が両脇から薫の腕をガシツと掴み、つぶらな瞳をうるうるさせて、じとつと見つめている。

諦めたように薫は、ため息をついた。

ふたりともよくやった。スポンサー決定だ。

「それにしてもなんでランガは参加できないんだ？ 俺の花屋に生木クリスマスツリーの注文があつて届けたんだけどな。これより小ぶりなやつだ」

想像はつく。

「当日は母親とふたりでクリスマスを祝うのだろう。そもそもクリスマス当日に恋人同士で高級レストランとか友人と集まつてどんちゃん騒ぎなんて日本だけの習慣だぞ。イタリアだつてクリスマスは家族や親戚と家で過ごす連中がほとんどだ。俺の修行したりストランテはクリスマスは休みだったからな」

もちろん虎次郎だつて、そんなことイタリアに渡つてはじめて知ったことだった。

「え？ そうなのか？」と暦が目を丸くする。

薫が少年たちにクリスマスについて補足説明を入れた。

「お前たち忘れているみたいだが、そもそもクリスマスは宗教行事だ。キリスト教徒が多

い欧米と、ほとんど無宗教な日本じゃ受け止め方が違う。ランガはカナダにいたころ、毎年、家族でクリスマスを祝っていたんだろう。なら今年も二人、いや三人で過ごしたいんじゃないのか。寂しくても諦めろ」

暦は、はつとした顔で目を伏せた。

「そうだよな」

「しよげるな。せめて俺たちで楽しく盛り上がろうぜ。ランチとディナーの二本立てでだらな」

暦の背中をポンと叩いた。

## S

「メリークリスマス！」

クラッカー音が店内に鳴り響いた。

ここは日本だ。キリスト教徒の国のクリスマスなんて気にしなくてもいい。日本式で楽しく盛り上がろう。

手分けしてテーブルに料理を並べた。クリスマスランチだからブルスケッタやピザやパスタを中心に少々軽めのメニューにしてある。訳あって急遽アルコールは、提供しないことになった。クリスマスディナーまで酒は我慢してもらおう。

ある程度皿が空になったところで時計を見る。そろそろ時間だ。

「適当に食べたなら、クリスマスアクティビティだぞ」

暦が最後に残ったピザの欠片を口に放り込み首を傾げた。

「アクティビティ？ 何だそれ」

「ゲームとか、まあ遊ぶだけだ。皆スケボー持ってきたな。俺たちのサイコーの遊びはなんだ？」

参加者全員が一斉に拳を上に掲げ、声を揃え返してきた。

「スケート！」

「よし！」

「それで俺たちにボード持ってこいと言ったのか」

シャドウは口の中に残る肉をコーラで流し込んだ。

「でもどこで滑るのさ？」と実也がソースで汚れた口元を拭いながら訊いた。

「そんなものSに決まっているだろう」

「じゃあ愛抱夢がSを開放してくれたのか？　そういえば、あいつまだ来ていなかったな」と暦は店内をぐるりと見回した。

「やつとはクレイジーロックで落ち合うことになっている。その後もう一度皆でこの店に集まり夜の部がスタートする。それが今日の予定だ」

このスケジュールは、もちろん薫と共有している。

「では、いざクレイジーロックへ出発だ！」

「ウオーー！！！！」

店内に雄叫びが鳴り響いた。

クレイジーロックには、打合せどおり先に到着した愛抱夢とスネークがSを開場して待っていた。そして、もうひとり……。

「ランガ！」

「暦！」

親友の姿を認めると同時に暦とランガは走り出していた。

「Happy Holidays、暦ー」

「何言っているんだよ。メリークリスマス！」

「日本ではキリスト教徒でなくても気にせず『メリークリスマス』で構わないぞ」  
追いついた薫がアドバイスをした。

「そうだったね。じゃあメリークリスマス！」

そしてランガはチラツと暦の後ろにいる実也とシャドウに視線を移した。

「メリークリスマス！ 実也、シャドウ」

「メリークリスマス！」ふたり声を揃えて返す。

「よかった。ランガ、来れたんだね。今日は予定があつたんじゃないの？」

「ジョーとチェリーが色々調整してくれたんだ。サプライズだから内緒だって言われたから黙っていたけど」

「そうか。良かったのか？」とシャドウが腕を組み、ぬつとランガに顔を近づけた。

「そうだよ。母さんと過ごすつもりだったんだろ？ 無理していないか？」

「大丈夫だよ、暦。母さん、クリスマスを空けるために昨晩は夜勤で、今日も深夜勤にシフト組んだんだ。だから今は仮眠をとっている。俺がいると、どうしても一緒に起きてい

ようにするから助かったよ」

「じゃあ、夜はパーティに参加できるのか？」

ランガは首を横に振った。

「クリスマスディナーは母さんと……父さんと三人でという約束だから。皆と滑ったら夕食までに家へ戻るよ。ごめん曆」

「まあ、そこは残念だけど気にすんなよ。何よりクリスマスにお前と滑れるなんてサイコーじゃないか。すげー嬉しいサブライズだぜ」

「俺もみんなと滑れるなんて、ほんとサイコーのクリスマスだよ」

「ランガ」虎次郎が声をかける。「お前の分の料理、愛抱夢の車に運んでおいた。カナダのクリスマス料理と違うだろうがイタリア料理もうまいぞ。なんせ俺が作ったんだから。イタリアのクリスマス菓子パネトーネも入れておいた。料理は余ったら冷蔵庫に入れて明日くらいまでに食べ切ってくれ。もつとも、お前なら残りそうもないな」

「ありがとう、ジョー。おかげで母さん、クリスマスディナーのことで悩まなくて済んだから、ゆっくりできている」

視線を感じて顔を向ければ、赤いマタドール姿に仮面をつけた男がこちらを見ていた。

男の方へと歩いて行く。

「よつ、メリークリスマス、愛抱夢」と手を挙げ彼の真正面に立った。

「メリークリスマス、ジョー」

「ランガのピクアップご苦労さん」

愛抱夢の口元にフツと笑みが浮かぶ。

「構わないよ」

「久しぶりだな愛抱夢」と背後から薫の声がした。「メリークリスマス」

「やあ、メリークリスマス。チェリー」

「お前、俺たちからこの案を聞かされなかったら、抜け駆けしていただろう」

「それはどうかな。クリスマスアクティビティとして、父親と一緒に滑るスノーボード」

は、ランガくんにとって毎年の恒例行事だっただろうことなど容易に想像ついたさ。でも具体的はどうするかまでは考えていなかった。それでも、なんとか叶えてやりたいとは思っていたよ。だからお前たちからの提案は渡りに船だったさ」

「ランガを自宅に送り届けたあと、店には顔を出すんだろう？」

一応確認する。

「せつかくだからね」

「お前と飲むのは初めてだな」

薫の声は心なしに弾んでいる。確かに酒を共にしたことはない。そもそも愛抱夢と交流を持っていたのは彼がアメリカへ留学する前のことだ。成人してからの付き合いはほとんどなかった。当然、一緒に酒を飲むなんて機会など持ちようがない。

ところが愛抱夢は、そっけなかった。

「ああ、すまないねチェリー。今回、酒は遠慮しておくよ。残念だが」

なるほど、そういうことかと思う。

「おい、付き合い悪いぞ。そうはさせるか。何がなんでも飲ませてやるからな」

飛びかかりそうな勢いの薫の肩を掴んだ。放置すれば愛抱夢の胸ぐらを掴んで締め上げるくらいしそうだ。

振り向いた薫に軽くウインクをして目で伝える。彼は眉を寄せ渋い顔だ。流石に気づいたらしく、ため息をつき吐き捨てた。

「ふん、勝手にしろ。ここまで骨抜きにされていたとは、お前も焼きが回ったもんだ」  
そのまま背を向けヒラヒラと手を振りながら、スケート仲間たちのもとへと向かつて

いった。

やれやれと頭に手を当て嘆息する。この幼馴染は拗ねていることを隠そうともしない。

「なあ愛抱夢。さつき、お前は渡りに船って言っていたけど、俺たちの提案がなくてもSを開けてふたりきりで滑ることも可能だっただろうに。本当はその方が好都合だったんじゃないのか？」

ふと疑問だったことを訊いてみる。

愛抱夢は軽く首を傾げ、しばし思案しているようだった。やがて虎次郎の方へ顔を向け口を開く。

「まあ問題ないよ。おそらくこれがベストだった。この方が僕とふたりだけで滑るよりラングくんは喜ぶだろうし、何より僕も幸せそうな彼の笑顔を見ることができんだから」  
虎次郎は目を見開き愛抱夢の顔をまじまじと見た。目元が仮面に覆われた彼の感情を読むことは難しい。それでも口元に浮かぶ穏やかな笑みから仮面の下表情を想像することは難しくなかった。あのときの彼の顔が脳裏に蘇る。

——お前らは特別だからな。

虎次郎の口から笑いを含んだ吐息が漏れた。

「お前、ランガの母親が出勤したあと、どうせ家から連れ出すつもりなんだろう？」

愛抱夢は質問には無言だったが、口角がスツと上がった。

「気がついてるのは俺と薰くらいだ。皆には黙っていてやるから安心しろ。だがランガが唇に報告するかどうかは知らんぞ」

「ランガくんは隠すようなこととは思っていないだろうな。でも自分からべらべら喋らないよ」

「だろうな。今回の諸々の件、一つ貸しにしておいてやる」

愛抱夢は「ふむ」と顎に指を当て考えるような仕草を見せた。

「借りはなるべく早く返しておきたいのだが、僕は何をすればいいのかな？」

「そうだな。近々三人だけで飲もう」

「君とチェリーとで、か。いいだろう」

「よし決まりだ。さて、そろそろ滑るか。皆待ちくたびれている。一斉によーいドンの掛け声でいいな」

「ああ構わない。今回スタートシグナルの点灯も無しだからね」

ふたり並んで、ワイワイガヤガヤと騒々しく盛り上がりつつあるスタート地点へと向かう。

「ねえ、スネークも滑ろうよ。みんなで滑った方が楽しい」

スネークに言い寄るランガの声が聞こえてきた。

「いえ、私は……」

「そうだよ。今日は負けないから。必ず勝つ！」と実也が勝気に宣言する。

「おう！ シャドウ様のリベンジだ」

「なんで滑らないんだよ。さては怖気づいたな」と暦が追い打ちをかける。

後退りしながら、スネークは助けを求めるように愛抱夢の顔を見た。

「忠、折角ランガくんから誘われたんだ。滑ったらいいだろう」

「はい」

虎次郎はパンパンと手を叩いて皆の視線を自分に集めた。

「そろそろ、はじめるぞ。今回、一番でゴールしようが賞品、特典など一切ない。ビリでも罰ゲームはない。なのでパーティに響かない程度、程々にな」

「おう！」

一斉に拳が振り上がった。

まあ、そうはいつでもスケーターなんて人種は大バカものだ。いざスタートすれば本気になることなど目に見えている。

虎次郎は全員スタート体勢にあることを確認した。

さあ本日のメーシェイェント、クリスマスビーフをはじめるとしよう。

「レディーゴー！」

《了》

## 君と見るオーロラ

「愛抱夢は、留学中カナダを旅行したことがあるって言っていたよね？」

ランガは手にしていたカナダ旅行のパンフレットを閉じサイドテーブルに置いた。懐かしくなったのだろう。代理店の店頭でもらってきたという。

「そうだね」

「じゃあさあ、オーロラ見に行った？ 観光客は結構行っている」

パンフレットの表紙には『オーロラ観測ツアー』と書かれていた。

「ああ、イエローナイフへ行つたよ」

イエローナイフ。観光客向けにオーロラビレッジが設置されていて誰でも気軽にオーロラを楽しめる。世界で最も安定してオーロラを観測できるところだ。三日滞在すればオーロラ鑑賞確率は95%以上だと言われている。もつとも肉眼ではつきり見えるオーロラではなく、なんとなく白い粉を空に撒いたみたいで、一般的なオーロライメージから程遠いものを含め95%以上だと主張しているので要注意だ。あの美しいオーロラが肉眼ではつきり確認できるかどうかは運次第ということになる。

「俺もさ、父さんに連れられて小さい頃行つたんだ。光のカーテンみたいでとても綺麗だと子供心に思った。日本語で言うところ、すごく幻想的？　それでもレベル4だったらしい。愛抱夢はどうだった？」

濁らない青い虹彩を煌めかせ、彼の顔が迫ってくる。

「うん、まあ」

我ながら歯切れの悪い返事だった。

今でも映像として脳内に再生することなど造作もない。美しいはずなのに、あのとき何故だろう……ただ揺らめく光のカーテンを無感情に眺めていただけだった。なんの感慨もなく。

黙り込んだままの愛之介にランガは眉を寄せ怪訝な顔をした。じーっと顔を覗き込んでくる。

「もしかしてオーロラ見えても、あまり綺麗に見えなかったとか？」

ああ、そっちね、と作り笑いを浮かべた。

「見たことは見えたんだけど、現地ガイドの説明ではレベル2とか3くらいで、あまり観測条件は良くなかったらしい。タイミングが悪かったんだ。仕方ない。一週間も二週間

も滞在できるわけなかったから」

これは嘘だ。当日は最高であるレベル5のオーロラだった。皆さんは本当にラッキーだ、とガイドが興奮していたくらい。もちろんランガはそんなこと気づくことはないだろう。

「運が悪かったんだね。……じゃあさあ、もう一度オーロラを見に行こうよ。今度は俺と一緒に」

思いがけない提案に軽く目を見開いた。

「君と一緒にかい？ それは素敵だ。いつか行こう」

「いつか、は嫌だ」

強い口調で言うと、彼は眉を寄せ口をキュッと結んだ。

「ん？」

「日本人が言ういつかは、その気がないから実現しないって聞いた。だから必ず俺と一緒に行くって、ちゃんと約束して」

真剣な面持ちで庄をかけてくる彼に、たじたじとなりながらも愛之介の口元が綻んだ。

「おや。そういうことを言うと、僕は本気で具体的な計画を立てちゃうよ。もう後戻りは

できない。ランガくんの都合なんて考えない。何がなんでも拉致してでも君を連れて行くけど。それでいいの？」

「いいよ。愛抱夢が時間を作れるようになるまで俺、楽しみに待っているから」  
微笑む彼の頭を抱き寄せ、水色の髪に唇を落とす。

「それでは決まりだな。さて、そろそろ休もうか。人生の楽しみが増えて今日は良い夢を見られそうだ」

スタンドライトの明かりを消した。

「もう、愛抱夢はほんと大袈裟」

クスクスと笑いながらランガは身を乗り出し、チュツと軽く唇を重ねてきた。

「おやすみなさい」

そのままゴソゴソとベッドに潜り込むと愛之介の肩に額を押し付けてきた。と、あつという間に寝息が聞こえてきて思わず苦笑する。

そして寄り添う恋人の心地よい体温に安らぎながら愛之介も、また目を閉じた。

夢を見た。

明かりが漏れるテントが建ち並んでいる。カナダ先住民が暮らしていたという居住施設  
ティピーをモデルにした待機場所だ。なるほど。ここはイエローナイフのオーロラビレッ  
ジか。

観光客たちの歓声が聞こえる。そこに、ぽつりとひとり佇む若い男の背中が見えた。す  
ぐに、あれは昔の自分だと理解した。次の瞬間、彼の視点が自分の視点へと切り替わつて  
いた。

夜空全体にわたって激しく揺れ動く光のカーテン。何も感じない。あのときと同じだ。  
とても美しいはずなのに心が動かされることは、やはりない。ただ網膜に映り込んでいた  
だけだった。今でも心は死んだままなのか。

不意に腕を掴まれ視線を落とす。水色の髪が唇に触れた。  
ランガくん？

「ほら、ちゃんと見ないともつたいないよ」

彼は愛之介の腕にぎゅつと抱きつき、オーロラが広がる夜空を指差した。

言われてもう一度、天空を仰いだ。これはレベル5の、愛之介の脳裏に刻まれた光景  
だ。あのとき確かに見た記憶のままのオーロラだ。

「わあ、すごいね」

ランガは無邪気にはしゃぐ。

光のカーテンが暗い空全体に広がりピンク、青、緑と激しく踊り狂っているようだった。なんて美しくも壮大で神秘的なのだろう。心が強く揺さぶられ、その刹那、目から涙が溢れた。あのと失くしていた感情を一気に取り戻そうとするかのように涙が頬を伝う。

これは夢だ。だから泣いても恥ずかしいと思う必要はない。そう自らに言い聞かせ、愛之介は夢の中で涙を流し続けた。

## 成人式には君とフォトスタジオへ行こう

バイクの轟音に振り向けば金色の不思議な格好の若者がふたり乗りしていた。それに続くのは派手に装飾された改造車。他にも奇声をあげる大盛り上がりグループは、皆お揃いのけばけかしいコスチュームに身を包んでいた。肩に虎や竜のぬいぐるみ、らしきものを乗せたりしている人もいる。どうやらグループごとに同じ衣装で揃えているらしい。

一方、女性の衣装は、これはわかる。着物だ。それも振袖という日本の有名な衣装だ。中には盛大に盛り上げ飾り立てたヘアスタイルの女性もいて、ランガのイメージする日本女性の楚々とした和装とは少し違っているようにも感じた。

そんな着飾った人たちは、あるイベント会場らしき建物へゾロゾロと入っていった。

「ねえ、暦、今日は何かのお祭りなの？」

不思議に思ったランガは隣にいる親友に尋ねた。

「はあ？ ちげーよ、成人式だ」

ランガは首を傾げた。

「えーと、成人すると皆コスプレしてお祝いすること？ 日本って不思議な国だね」

「いや、別にコスプレじゃねーから。あれ日本の伝統的な、えっと和服だよ。女性は振袖で、男のあれは羽織袴だ」

え？ 和服？ 羽織袴？ あれが？

言われて目を凝らして見れば、確かに羽織袴なのかもしれない。金色やらシヨッキングピンクやら、立体的なデコレーションを凝らしているものもあつたりで、とても日本の伝統衣装に見えなかった。むしろ道化師<sup>クラウン</sup>？

「へえ」

「他人<sup>ひとごと</sup>事みたいな顔すんなよ。俺たちだつて来年成人なんだぞ。来年から成人すんの十八歳になったから」

「え？ あんな格好しないとダメなの？」

「そんな決まりはないけど、成人式は中学校区ごとに会場が分かれるんだ。だから中学同窓会みたいなもので、中学時代の仲の良いグループが示し合わせてお揃いの衣装を用意する、つてゆーのが伝統っていうのかな」

「それが日本の伝統……。それって式に参加しないと成人になれなかったりする？」

それは日本ではなく沖縄の、しかも十年か二十年くらいの伝統なのだが、ランガは大いに勘違いをしていた。

「んなわけねーだろ。それと俺とお前の住んでいるところ校区違うから、会場は同じじゃないはず」

「暦と一緒にじゃないのなら参加しなくて良いかな。暦は？」

「俺は 一応中学時代の付き合いつものがあるし。約束なんだ。皆で揃いの衣装着るつて」

「へえ、あんな面白い格好するのなら、暦の参加する会場まで見に行こうかな」

「いや、いい。来なくていいから！」

暦は顔を赤くして必死で、やめてくれと懇願してくる。よほど恥ずかしい格好をするらしい。

「そう、残念。後で写真見せて」

「嫌だよ」

「ケチ」

「そういうえば、カナダではどうなんだ？ 成人式」

「え？ セレモニーなんてないよ。十八歳になれば自動的に大人扱いだ。それだけ」  
「ふーん、それは気楽かもな」

S

「僕の成人式かい？」

「うん。この前、面白い格好した人がたくさんいて、曆に聞いたら日本の成人イベントでの伝統だって言うんだ。だから愛抱夢もあんな格好をしたのかなって」

確かに羽織袴という和服がベースになつてはいるが、あれが日本の伝統的衣装と言われると語弊がある。けれど、そのことを説明しようとすれば、かえって混乱させるだろう。

「僕の成人式のときは留学中だったんだ。だから式典には参加していないよ」

「あ、そっか。残念。愛抱夢ではない、いつもスーツ姿の愛之介が、あんな面白い格好しているって想像つかなくて、写真あつたら見せてもらおうと思っただけ」

冗談ではない。あれは仲間内でお揃いの衣装で盛り上がるものだ。大人になつたらできない若気の至りで済ませようとする最後の羽目外しだ。いや沖縄県民が、大人になればや

められるかどうか怪しいが。

愛之介にはそんな仲間などいなかったし、いたとしても神道家がそれを許すわけはない。

「成人の日の後、日本に一時帰国したとき、成人式用の色紋付の羽織袴用意されていてね。写真だけは撮らされたよ」

「見たい」

「君が想像する羽織袴とは違って面白くないよ？」

「面白い面白くないじゃない。昔の愛抱夢が見たいんだ」

彼は興味津々な様子で瞳をキラキラと輝かせていた。

仕方ない。記念写真を収めてある引き出しの中から、該当する一枚を探し出した。

それを手渡せば、彼はじつと見つめていた。やがて顔を愛之介に向けた。そしてまた写真を見る、と交互に視線を行き来させた。

そうジロジロと見られるとこそばゆい。

「どう？ 面白くもないだろう？」

「赤い」

「は？」

「愛抱夢は着物も赤なんだ」

「これは神道家の身内が勝手に用意したものだけど、僕のイメージは赤だと思われていたらしい」

「でも、いつものマタドール衣装よりおとなしい赤？」

「そうだね。赤銅色という日本の伝統色なんだ」

「へえ。この落ち着いた赤も愛抱夢に似合っている」

「ありがとう。それはそうと君は成人式どうするの？」

彼は写真から顔を上げた。

「どうせ式典会場は暦と同じじゃないんだ。だから出席しなくていいかなって思ったけど、母さんが出たらって。普段着でも構わないからって」

気が進まなそうな様子で彼は頬杖をついた。

「せつかくなんだから君も羽織袴を着たらしい。式では着なくていいけど、せめて写真くらい。なんなら……」

この和装一式を貸そうか？　と言いかけて、やめた。これはランガの色ではない。

「僕が選んであげよう。レンタルならさほど高くないよ」

「写真撮るだけのために？」

「そうだね」

彼は眉を寄せた。

「えー？」

「気乗りしないかな？」

「しない。ひとりで写真撮るなんて恥ずかしい」

「写真に残せば、君のお母さん喜ぶと思うよ。きつと一生の宝物だ」

「そんなもののなの？」

お母さんが喜ぶで、反応が変わった。母親思いの素直な子だ。

「そういうもの。僕も付き合うよ」

「じゃあ愛抱夢もこれ着て、一緒に写真撮ってくれるの？」

ランガは写真を指差した。

愛之介は目を瞬かせた。この羽織袴は大切に保管されているから、可能ではある。でも、どうしてそうなる？

一応確認する。

「僕も羽織袴着るの？」

「そう」

「それで君と一緒に並んで記念撮影するってこと？」

「そうだよ。それなら俺も恥ずかしくない」

どう考えても逆だと思うが。

「それは構わないけど、君のお母さんに渡す成人式写真はひとりで収まらないとダメだよ」

「わかってる。でも、一枚くらい一緒に写真撮ってもらおうよ。俺ひとりだけに、フォトスタジオで羽織袴なんて面倒なことやらせるなんて不公平だ」

不公平のポイントがズレていると感じるのは気のせいではないだろう。

「わかったよ。君が望むのなら僕もこれを着て付き合うよ」

ランガはホッとしたように「よかった」と笑った。

赤の他人の男ふたりが、羽織袴の礼装でツーショットの記念撮影？ どう考えても勘繰られるシチュエーションだ。

しかし第三者からどのような目を向けられるのかに彼が思い至る様子は見られない。ランガは他人からの評価にいつも無頓着だ。

成人式で着た愛之介の赤銅色の羽織。今の愛之介でも十分着こなせるだろう。この羽織袴と並んでバランスのいいカラーコーディネートは、この子には白と青を基調色にして羽織袴を選べばいい。

愛之介とランガ。ふたり並んでの羽織袴の写真が美しい台紙に収まる。その映像が脳裏に映し出された。口元に締まらない笑みが浮かびそうになり、思わず手で覆い隠す。危ない危ない。

でも許して欲しい。なぜなら、それは——フォトウェディングそのものなのだから。

## 永遠の青

「おかえりなさいませ、愛之介様。奥様は坊ちゃんのご友人宅に招かれ外出されています。夕食は、そのご友人と一緒にと言いつかっております」

屋敷に着くなり、出迎えた執事が報告する。

「聞いている」

明日の予定がキャンセルになったため、急遽予定を一日前倒しての帰宅になった。妻も急なスケジュールの変更は、難しかったのだろう。

「伯母様方は？」

「御三方とも通院日です。本日はそのまま、ご自宅でゆっくりされるとのことですよ」

「そうか」

自室のデスクの引き出しに封筒とメモが添えられていた。

——署名とハンコお願いね♡

東京では鬱陶しい雨が続く梅雨真っ盛りだが、ここ沖縄の梅雨はすでに明けている。し

かし強い湿気を含んだ空気が女の体温のような生ぬるさで肌にまとわりつき、不快指数は亜熱帯の土地らしく高い。

窓の外に目をやれば、白く霞んだ青空が広がっていた。大気に水蒸気を多く含むこの地では、空気の澄んだ寒冷地と違い、抜けるような深く濃い青空を望むことはできない。

雨が降ってさえいなければ構わない。

「忠、クレイジーロックへ行く。車を回してくれ」

「かしこまりました」

忠は、どのような用事でしようか、などと余計なことは訊いてこない。淡々とこちらの要望に従う、痒い所に手が届く有能な秘書であることは認めよう。とはいえ少々やり過ぎなところもあり、それはそれで、こちらの思考を読まれているようで面白くない。

もっとも昔からそういう男だった。何も変わらなかつたのは、この男だけなのかもしれない。三人の伯母たちも、寄る年波には勝てず、気弱な言動が増えてきた。

神道家の当主は自分だ。もう誰にも口出しはさせない。

順風満帆だった。スキャンダルとは無縁。新道愛之介のイメージは清廉潔白。政治家と

しての地位は安泰。愛する妻と可愛い盛りの二歳になったばかりの息子。傍から見れば自分は、何もかもを手に入れた男に見えるだろう。

そんな羨望の眼差しを向けられれば向けられるほど、じわじわと精神的に、愛之介は疲弊していった。

誰にも吐露できない心の穴を空疎な笑みで覆い隠し、忙しくも穏やかで幸せな日々が、ただ流れていくだけだった。

Sは、もう存在しない。

多くのスケーターたちが残念がり閉鎖を惜しんだ。シャドウや実也、あの赤毛ですら泣いて感謝の言葉を残していった。愛之介の立場を理解しているチェリーやジョーは少ない言葉で労ってくれた。

だが愛之介、こと愛抱夢にとつて、すでにクレイジーロックは思い出に浸る以外の存在価値を見出せない場所になっていた。政治家としての立場が強固になればなるほど、違法レース場を主催するリスクは無視できない。

何より、イヴを探す意味はすでになく、また、あそこで彼に会うことは、もう決してな

いのだから。

別れを切り出したのは、彼からだった。プロになって世界を飛び回る彼と物理的に会える時間は、少なくなっていた。

——「俺、ずっとあなたに守られてきたんだね。だから、ひとりでやっていこうと思っている」

爽やかな笑顔でそう伝えてきた。ひとり立ちの意思表示だったのだろう。この子は、保護されるべき頼りない子供ではなくなっていた。

もともと、どこにも辿り着くことの叶わぬ関係だった。法律の壁は厚く、老いぼれと蔑みようが保守政党の重鎮たちの権力は絶大だ。旧態依然とした価値観を短い時間で壊すことは、神道愛之介の能力を持っても不可能だった。

ならば自分のわがままで、この稀有な才能を縛るべきではない。彼を解放するタイミングは今のだと心を決めた。

辛い決断だった。

彼がいなくなつて、心に何かを抜き取られたような空洞ができたことが、わかった。そ

れでも、いずれ時間が解決してくれる。新しい出会いが穴を埋めてくれる。そう自分自身に言い聞かせた。何の根拠もないのに。愚かだった。

そして、あれ以来一度も彼と直接会うことはなかった。お互い会おうという話を持ち出したこともない。

むしろふたりとも避けていたように思う。ここで会ってしまえば、自分は何をしでかすかわからない。何が起るか予測不可能だったのだ。

それでも連絡だけは取り合った。ただの愛執でしかなかったのだろう。彼との繋がりを綺麗さっぱり断ち切ることなんて、できるはずなどなかった。

女々しいと笑いたければ笑え。

近況報告だけの何気ないメッセージを交わす。それだけでも安心できた。

——「優勝おめでとう」

——「当選おめでとう」

——「負傷したんだって？　お大事に。回復に時間がかかるようなら、良い医者を紹介するよ」

——「ありがとう。そのときは相談するね。あなたも、とても忙しそうだけど、体には

気をつけて」

やがて、親族から身を固めろとの圧力が強くなってきた。そんなタイミングで彼女に出会う。すぐに意気投合した。思想の双子のように感じた。有能な弁護士だった彼女に政策秘書として自分をサポートして欲しいと熱烈にアプローチをかけた。

彼女に抱くのは、尊敬と信頼。

やがて、この女性とならば人生のパートナーとしてもうまくやっていけるだろうと思うようになった。

そしてプロポーズ。

伯母どもは神道家にふさわしい家柄の令嬢を、とヒステリックに、わめき散らした。老いた彼女らを丸め込むのはさほど難しくはなかった。

子供の知性は、父親ではなく母親からの遺伝として受け継がれることが、最近の研究結果でわかってきている。それほど僕のためと考え、おっしゃてくださるのですしたら、それなりの家柄で、かつ神道家にふさわしい頭脳を持った令嬢を紹介してください、とにこやかに跳ね除けた。

そんな優秀な令嬢がおいそれと見つけれられるはずもなく、いたとしても頭脳明晰で自立して生きていけそうな女性が、神道家などという面倒臭い家に嫁ぐわけないだろう。時代錯誤も甚だしい。最終的に伯母どもは渋々認めざるを得なくなった。

自分には勿体ないと思える女性だった。彼女とならば、生涯に渡って良い関係を築いていけると信じていた。

——「ニュース見たよ。結婚おめでとう。お幸せに。結婚祝いに何か贈るね」

——「ありがとう。でもそんな気を遣わないで」

これでいい。心から彼女を愛していた。彼も彼にふさわしい人と出会い愛し合うのだから。

やがて息子が生まれ父親としての喜びを知った。家族を愛している。それは偽らざる本心だった。

それなのに、彼を失ってできた空洞は空洞のままだった。どれだけ心が愛の泉で溢れようが、そこだけは空っぽのままだ。水で満たされることはなかった。

ひとりクレイジーロックに佇めば、彼の……雪の残香と青の痕跡を見つけようとしている自分がいる。

なんと情けなくも未練がましいのか。

クレイジーロックのゲートを開き、忠に、誰も入れるなと見張りを命じた。

ゲートが閉まり、背中に突き刺すような西日の熱を感じる。オレンジ色の夕日に照らし出されるダウンヒルコースを眺めやれば、遠い記憶が鮮明に蘇った。

過去、確かにここには、異様な熱気が渦巻いていた。

ビーフに挑もうとするスケーターのギラギラとした闘志、ギャラリーの熱狂、地鳴りのような歓声。

やがて人だかりの中、青い後ろ姿がスポットライトを浴びたように浮き上がる。振り向いた彼は、愛之介だけを見つめ、ふわっとした笑みを浮かべた。

——「滑ろう、愛抱夢。今日は負けない」

そうだね。滑ろうか。

そんな幻像を胸に、スタート地点へと向かう。ひとりぼっちのスタートを切るために。閉鎖されたSでは、もうコースの整備は行われていない。どこに落石や強風で飛ばされただろう枝木などが、あるか知れない。けれど自分にはさほど大きな問題ではないだろう。

ぐいぐいとスピードは上がっていった。風を切って滑る。少しずつスケートの感覚が戻ってきた。

なんて爽快なのだろう。やはりスケートは素晴らしい。

ここに彼がいてくれれば。ふと、そんな思いが脳裏をよぎってしまった。苦い笑いが込み上げてくる。ないものねだりは虚しいだけだ。

そうだ。彼はいない。もういないのだ。諦めるんだ。

諦めろ。

諦めろ。

諦めろ。

それでも彼に会いたい。

会いたい。

会いたい。

会いたい。

（ぼくは きみに あいたい）

と、そのとき、ひとりのスケーターが愛之介を凌駕するスピードで追い抜いていった。  
まさか。あの滑りは彼か？

自分の願望が見せた幻覚か。確かめなければ。

その背中を見失うまいと、限界まで速度を上げていった。

ふと気づくと愛之介は白い光に包まれていた。意識が飲み込まれる。

（着いてこられる？）

向かい合って彼は微笑んだ。青い虹彩に虹が浮かぶ。たなびく水色の髪が、美しい虹色の光を帯び煌めいていた。

ああ、間違いなく彼だ。焦がれ続けた美しい青。この世にたったひとつの。

（もちろんだとも、ランガくん）

フルスロットルで加速し距離を縮めていった。

頭の隅で警告灯が点滅する。危険、と。

構うものか。無茶は承知だ。たとえ引き換えに失うものが、この命であつたとしても惜しくはないさ。今の彼が幻影でしかなかったとしても、その結末に、僕は後悔なんてしない。

（会いたかつたよ。愛抱夢）

懐かしい名で呼ばれた。

（僕もだ）

（もう一度、来たかつたんだ。ふたりだけの、この世界に）

（それも同じだ。でも諦めていたんだ。嬉しいよ）

目頭が熱くなつた。この幸せな幻想の中でなら死んでもいい。本気でそう願つた。最後

に、この奇跡をくれたクレイジーロックに感謝しよう。これで思い残すことは何もない。

（だめだよ、愛抱夢。そろそろ戻ろう。俺たちが生きていく、俗世へ）

スピードが緩やかに落ちていき、彼は背後に消えた。

白い空間は掻き消え、目の前に広がるのは薄暗い荒廃した景色だった。

整備されていないコースを滑るガタガタとしたウィール音が大きく鳴り響いている。その音に意識を引き戻された。

すでに夜の帳は降ろされ降り注ぐ満月の光が眩しかった。

呆然とする。戻ってきてしまったのか。望まなかったのに。

気が抜けたらしくバランスを崩した。そんな愛之介の腰を誰かが抱き支えたようだった。背中に密着した体温を感じ、手がぎゅっと握られる。妙にリアルだ。

「ゆっくり止まろう」

涼やかで明瞭な声が耳元に響く。首をひねれば微笑む彼がいた。

停止したふたりは、蹴り上げたボードを掴んで向かい合った。

「久しぶり」

彼は首を傾げニコツと笑った。

視線を下に移し脚を見る。指を伸ばし彼の頬に触れ、その温かさを確認した。

「本当にランガくん？ 幽霊……じゃないよね」

「違うに決まっているだろ。何を言っているの？」

「あ、いや……どうしてここに來たの？ そもそも僕以外入れるはずは……」そこで気づく。「忠か」

「うん。スネークが中に入れてくれたんだ。ツアーから沖縄へ戻って、久々に暦たちみんなと会った。ジョーやチェリーから、あなたの話を聞いているうちに直接会いたくなつた。あなたの顔を見たい、一緒に滑りたいと、どうしても我慢できなくて。もしかして、ここに來たら会えるかなってなんとなく思つたんだ。そうしたらゲートにスネークがいて、愛抱夢が滑っているからって中に入れてくれた」

「もし会えていなかったら？」

「ん、会えなくても明日には、あなたの家へ直接行くかと思つていただけだね。もちろんアポイントメントは入れるよ」

手を伸ばす。

「本当に君なのか確かめたい。抱きしめていいかな？」

「いいよ。疑り深いな」

ランガの肩を掴みグイッと胸に引き寄せた。そのまま腕の中に彼を閉じ込め、手のひらを背中から、腰、首へと骨格と筋肉を確認するように滑らせた。

納得した愛之介は、くすぐったそうに、もぞもぞとしているランガをきつく抱きしめた。

「愛抱夢？」

名を呼ぶ彼の声音が心地よく耳に響く。

水色の髪を撫で唇を落とした。彼の匂いがする。

生身の彼が愛之介の五感を満たしていった。間違いなくランガだ。

ランガの腕も愛之介の背中に回されシャツの布地を掴んだ。

夢ではない。過去に失ったはずの優しい温もりが、今ここにある。

うなじから手のひらを滑らせ後頭部を掴み、額、頬にキスをしてから唇を重ねた。抵抗はない。口づけは少しずつ深みを増していく。唇を割り舌を差し入れようとしたとき彼は身を振り、愛之介の拘束から逃れようとした。

腕を突っぱね離れようとする彼の顔を覗き込んだ。

「嫌だった？」

ランガは首を横に振った。

「嫌じゃない。でも、こんなこと良くない。だってあなたには家族がいて……」

真剣な表情でランガは訴える。

ふつと口元に笑みが浮かぶ。

「君は、相変わらず真面目だね。少し説明させてくれないかな。僕の近況を話そう」

「わかった」

まず、このことから報告したほうがいいだろう。

「離婚することが決まっているんだ」

彼は驚いたように目を丸くした。しばし絶句したのち口を開いた。

「嘘……。あんなに素敵な女性なのに？ あなたは『妻を愛している』って言っていた」

「それは嘘ではない。今でも愛しているよ。離婚を切り出したのは彼女からだった。別々の道を進んだほうがいいと言われたんだ。お互い尊敬し合える今の関係を大切にしたいのなら、とね。異存はなかった」

目を伏せ、そのときの会話を思い出していた。

――「愛之介、あなたを愛している。あなたも私を愛しているわね」

――「もちろんだとも」

――「だったら別の道を歩いて行かない？」

――「どういうこと？」

――「離婚しましょう」

確か、そんなあつざりとした、やりとりだった。どれだけ愛し合っていたとしても、満たされないものはある。お互いに触れることのできない心の聖域は確かに存在するのだ。

「子供はどうするの？」

「親権者は僕、監護権者は妻ということで落ち着いた。彼女が基本育てることになる。もともと東京の人だから離婚後は東京で子育てをする。その方が学校の選択肢も広い。何よりもうるさい親戚の干渉から自由でいられる」

このことが明らかになれば伯母どもは、子供をよこせと大騒ぎするだろうことが目に見えている。が、残念ながら相手が悪すぎる。彼女らの敵は法律の専門家だ。おそらく伯母たちの持病が悪化するだけだ。

見れば、ランガはなんともいえない表情をしている。

「あなたは、それでいいの？」

「週半分は僕も東京だからね。従来どおり父親と母親が協力して子育てすることは変わらない。子煩悩な神道愛之介は変わらずだよ。いずれ彼女には、僕の秘書に復帰してもらうことも考えている」

「よかった。……あの、まさか俺が関係している？」

「君のせいではないから、気に病む必要はないよ。僕が彼女を愛しているというのは嘘ではない。でもね、愛してはいたけど彼女に恋をすることは、なかったんだ。僕が恋をして、狂おしいほど求めてしまったのは、君だけだよ。この思いはどうやっても消せなかった。消そうと、もがけばもがくほど思いは募って行くんだ。そのことを彼女は知っている」

真剣な面持ちで話を聞いていた彼は、そつと目を伏せた。

「俺には何も言えない。夫婦のことは夫婦にしかわからないから。でも話をしてくれて、ありがとう」

「どういたしまして。今度は僕の番だ。君のことを訊いていい？」

「いいよ」

「僕と別れたあと、噂で君にボーイフレンドができたことを知った」

「うん。正式に付き合った人は何人かいたよ。でも気づいてしまったんだ」

「何を？」

「俺さ、誰と付き合っても、ずっとあなたを探しているんだ。それがわかってから、もう誰とも付き合わないと決めた。付き合えばその人を傷つけてしまうから。それでいいと思った。だって俺にはスケートがあるし、一生繋がっていられる、何があっても俺のところからいなくならないと信じられる親友もいる。でも、なんて言ったらいいのかな……」

ランガは胸に拳を当てる。そして青い瞳が言葉を見つけようとするかのように宙空を見つめた。

彼も、また僕を探してくれていたのか。

ランガの肩を掴み、しっかり視線を交わした。

「心にポツカリとした空洞があつて、それをどうやっても埋められなかった……でいいかな？」

「そっか。うん、そんな感じ」

「僕と同じだね。もちろん幸せだったことは、嘘じゃない。子供が誕生したとき、嬉しくて天にも昇る心地だったさ。こんなにも自分と血がつながった息子が愛しいとは想像できなかった。君のお父さんは君に、こんな愛情を抱いていたんだって、そのことを理解できたんだ」

そんな幸せの中にいて何が不満なのかと他人は言うだろう。不満だったわけではない。(ただ、どうしようもなく、君がいなかった)

もう一度ランガの頭から足下まで、ゆつくりと視線でなぞっていった。

ここ数年で、少年っぽい危うさはすっかり影を潜め、逞しい青年へと変貌を遂げている。その美貌は大人びて、ますます磨きがかかっていた。

月明かりの中で煌めく青い虹彩。涼しげな目元。白く透き通った肌。風にそよぐ水色の髪。艶つぽさを増した桜色の唇。

その唇が動いた。

「白状すると、俺さ、あなたの結婚が決まったとき、泣いたんだ」

思わぬ告白に目を見開いた。彼は続ける。

「なんで泣いたのかはよくわからなかった。嬉しい気持ちと寂しい気持ちがごちゃごちゃ

で。もちろん嬉しかったのは本当だよ。あなたが幸せになれるんだって。けれど俺はもう一生あなたに会えない、会っちゃいけないんだって思ったら、涙が止まらなくなった」

「それなのに、君は会いに来てくれたんだね」

「うん。来ちゃった」と彼は肩をすくめ悪戯っぽく笑った。

「何を思つて、僕に会つて、どうするつもりだったの？」

「俺さ、久しぶりつて笑つて、一緒に滑つて、じゃあ元気で、またね！　つて手を振る。それだけのつもりだったんだ。それで納得するはずだった」

再び彼を抱き寄せ、耳元で言つた。

「それで納得されては僕が困る。さて近況報告が終わつたところで、行こうか」

「行くつて、どこへ？」

「別荘だよ。今夜はランガくとふたりだけで過ごしたい」

「え？」

「言つておくけど、君の都合を聞く耳は滑っている途中で崖下に投げ捨ててきた。一晚、何があんでも僕と一緒にいてもらう。その為には、どれほど姑息な工作でもやり遂げてみせよう。でないと、これが夢で君はいなかったのかもしれないと不安になる。朝まで一緒

にいて、やっとこれは現実なんだと実感できると思うんだ。そうでない君が消えてしまつたらという恐怖心から、僕は死んでしまうかもしれない」

ランガは目を見開き何度か瞬きをすると、ぶつと吹いた。

「わかつた。愛抱夢はそういった大袈裟なところ変わらないな」

楽しそうに笑う彼に、愛之介は微笑みを返した。

明日の予定をキャンセルしてくれた無礼者に、謝礼を贈呈したいくらいだ。ついでに一日帰宅を早めた自分へも拍手を贈りたい。

彼の手を取り、忠の待つゲートへ向かつた。繋いだ手をぎゅつと握り締めれば、彼も強く握り返してくる。

二度とこの手を離してやるものか。

僕は、もう一生君を手放したりしない。ああ、絶対にしないとも。だから覚悟してほしい。ランガくん。

——TILL DEATH US DO PART——

## 残り火

ランチタイムが終わり一息ついたところだった。

腐れ縁の幼馴染は図々しくも居座っているが、まあ仕方ない。今は、これから来る予定の懐かしいスケート仲間でもある友人たちを待っているのだから。

ドアベルの音に顔を上げればふたり連れの青年が店内に入ってきた。

「来たな。暦、ランガ。適当に座ってくれ。カルボナーラでいいか？」

出会ったばかりのころは、まだ少年だったふたりだが、ここ数年ですっかりと大人びた容貌になっていた。

「ジョーの料理ならなんでもいいぜ」と暦が椅子を引いて腰を下ろした。「俺も」とランガも続く。

「久しぶりだな、ランガ」

「ほんと、久しぶり。ジョーもチェリーも元気そうだね」

「そういえば、エックスゲームズ冬季大会優勝したんだって？ おめでとう。夏季大会は日本で開催なんだってな。千葉だったか？」

「うん。でも日本大会ではビッグエアはないんだ。パークで出場するつもり」

「お前なら大丈夫だろう。どっちでもな」

「ありがとうチェリー」

「活躍は嬉しいけどさ、あまり遠くへ行ってしまうなよ」

「暦、そう言われても大会に出場するには日本から離れないわけにはいかない」

ランガのピント外れの応えに暦がため息をつき、人差し指を親友に突きつけた。

「まったくオメーは相変わらずだな。意味がちげーよ！」

ランガは軽く目を見開き、不思議そうに首を傾げている。

薫はフォローも入れず、ただ笑っているだけだった。

プロになって海外にいる時間が長くなったランガは、日本語上達にブレーキがかかっている、というかむしろ後退しているように見えた。

それでも、こんなずれた反応も昔のままで、むしろホッとする。

ふたりの前に、パスタ、サラダ、スープを置いた。

「うまそう。サンキュ」

「食後はコーヒーでいいな」

「ありがとう。シャドウは仕事って聞いているけど、実也は？」

ランガはサラダを食べながら顔を上げた。

「全国模試らしい」

「そりゃ、あいつも受験だしな。文武両道つか」

暦はフオークにパスタを軽く巻きつけ、ズルズルと食べている。

「実也は、暦とは頭の出来が違うからな」

薫の余計な一言に暦は唇を尖らせた。

「言われなくても、わかってらあ」

ふたり食べ終えたタイミングで、コーヒーを淹れた。ついでに薫にもおかわりを注いでやる。

「ランガは、まだしばらく那覇に滞在するんだろう？」

ランガは薫に顔を向けた。

「うん、今回は少し長い滞在になるかな。なるべく母さんとゆつくり過ごすよ」

「それがいい」

「このあと母さんと待ち合わせなんだ。遅れたけど母の日のプレゼント買う約束で」

空になったカップをソーサーに置いてランガは言った。

「思いっきり甘えてこい。ついでに親孝行してこい」

「そうするよ、チェリー。そういうことで、申し訳ないけど俺、先に行くから。ジョー、ご馳走様」

「お粗末さま」

「おう、明後日は実也もシャドウも一緒だからな。みんなで滑れるな」

「楽しみにしている」

ランガは立ち上がった。

「そうだ、ランガ」

「何？ ジョー」

このことを彼に伝えていいのか少々迷っていた。なんとなく皆が話題にすることを避けていた、ある人物の名前を出すことに躊躇いはある。

ランガはその澄んだ青い瞳で虎次郎をじつと見た。

やはり話しておこう。

「愛抱夢が予定を繰り上げ、今日戻ってくるってさ。そろそろ那覇空港に到着している時

間じゃないかな」

一瞬、場の空気が凍りついた。

薫は眉をひそめ、唇は不安そうな表情でランガの顔を見上げる。

沈黙が落ちた。

ランガから表情が消えた。気のせいかもしれない。だがそう見えた。

彼は数回瞬きをして、軽く目を伏せ口元に笑みを浮かべた。

「そうなんだ。子供ができたって母さんから聞いたけど、彼は元氣？」

「ああ、元氣だ。早速、親バカ發揮している」

ランガはニコツと笑った。

「幸せそうでよかった。じゃあ、俺、行くから。また二日後に」

彼は片手を上げ、ドアに指をかけた。

ドアが閉まり、カランカランとドアベルの響きが耳に残った。

ふうーと唇が大きく息を吐き、緊張を解いた。薫はギロツとこちらを睨んできやがる。

おー怖っ！

「お前、なんであんな話題を持ち出した？」

「そんなの名前が出ない方が不自然だろう。まるで腫れ物扱いだ。これ、いつまで続ける気だ？」

薫は渋い顔をして、唇に視線を移した。

「お前、ランガから別れた理由とか、何か聞いていないのか？」

「たいしたことは。『独り立ちしたいから』なんて言っていた。あいつ、あまり自分のこと話さないんだよな。訊けば、もつと答えてくれただろうけど、プライベートなことだし詮索するのもなあつて。そっちは愛抱夢から何か聞いていないのか？」

「俺たちも『振られた』の一言だったな。ああ、それと『ランガを解放することにした』なんてかつこつけていやがった」

そうだったな、と薫も同意する。

「ランガから愛抱夢の話題を持ち出すことあったか？ 暦」

「ないし、俺もそんな話なんてしなかった」

「こつちも同じだ。もう、それは不自然なくらいだ。こちらから、さりげなく触れれば何でもないように話す。でも引つ張らず、さつさと切り上げてしまうんだ」

「ランガも同じだよ」

コーヒーカップに口をつけた瞬間、薫は顔をしかめた。

「おい、虎次郎。コーヒー入っていないぞ。おかわりだ。二人前」

「お前が飲んだだけだろう。偉そうなやつだ」

コーヒーサーバーを手に戻り、ふたりのカップに注いだ。

「そういえば……」

カップにクリームを垂らし唇が顔を上げた。

「あいつさ、別れる少し前、様子が変だったな。今から思えば」

「どんな様子だった？」

「なんか思い詰めているというか、考え込んでいるというか。まあプロになると色々あるのかな、くらいに考えていた。相談してこないってことはひとりで答えを出したかったんだろう、と思つて放つておいた。もしかしたら……」

虎次郎は腕を組んだ。

「あいつら、おそらくケリがついていない。何かがまだ燻っているんだよ」

「いい加減なことを言うな。根拠はなんだ？」

薫がジロリと虎次郎を見た。

「勘だよ！ 勘」

「脳筋ゴリラの勘か！ 毎度のことだが聞いた俺がバカだった。学習能力のない自分が嫌になる」

苦々しげに自虐の言葉を吐き出すと、薫は額に手を当て俯いた。

暦が薫と虎次郎の顔を交互に見た。

「おい、待てつて。何年経ったんだよ。ランガだつて、あの後、付き合っているヤツがいるつて聞いたぞ」

「そうだな、その相手とはどうなった？」

暦に質問する。

「そ、それは割とすぐに別れたつて言っていた。まあそれもよくある話だし……」

「確かに、なんてことのない、ありふれた話だな」

薫も暦に同意する。

「あ、……そういえば、その後、もう誰かと付き合ったりしないつて。スケートに専念したいなんて言っていた」

「ああ、なるほどな」

薫が納得したように頷いた。おそらく同感だ。

「なるほどって、どういう意味だ？　そもそも愛抱夢って国会議員が表の顔なんだろう？　しかも結婚して子供までいるんだぞ。さっきジョーが言っていた燻っているって何だよ、それ。色々まずいだろう。世間相場では」

真面目な青少年らしい反応だ。

虎次郎は、テーブルに肘をつけて体重をかけると、曆に顔をぬつと近づけた。

「なあ、曆。Sで乱痴気騒ぎを起こしていた俺たちスケーターが、世間で言うところの倫理とか道徳とか振りかざすなんて、滑稽だろうが」

「うっ、まあそうだよな。学校にバレていたら俺ら退学させられたかもだったしなあ。今、思い出しでもゾツとするぜ」

ふと視線に気づいて目をやれば薫が怖い顔で睨みつけていた。

「虎次郎、お前、意識して愛抱夢の話をランガにしたな。背中を押してやったつもりか？」

意識して、のところまでは当たっている。だが……。

「そんな大袈裟なわけあるか。俺は選択肢を増やすための情報提供しただけだ。アドバイ

スなんてする気はねえよ」

ふん、と薫は鼻を鳴らした。それでも反論はなかった。

「暦とランガ、俺と虎次郎と愛抱夢。スケーター同士の関係は、どうせ変わらないってことか」

暦が顔を上げ、丸い目から覗く瞳をキラキラと煌めかせた。

「そつか。俺もランガもお互い、ゼッターにいたくならないって信じ合っているんだもん。なんせ俺たちにはスケートがある。それだけは天地がひっくり返っても変わらないんだ」

「そういうこと。あとはあいつらに次第だ。……さて、この話は終わりだ、終わり」  
話題を変える。

薫と暦は食器の片付けを手伝いながら、最近できたらしい暦のガールフレンドの話をしている。

スケート以外の青春も大切だ。勉学に恋愛に、悩め頑張れ若者。

愛抱夢とランガ。不思議な関係だ。その繋がりは無二のもののように思えた。

虎次郎と薫のふたりは愛抱夢の古い友人だ。昔の彼を知っているからこそ見えていなかった。薫は愛抱夢の本質は変わっていない、と現実を認めようとはしなかった。虎次郎は変わってしまった愛抱夢を、ただ否定した。

ランガだけが、澄み切った青い瞳の中に愛抱夢の本質を映し出していたのかもしれない。そして、その孤独な魂に寄り添った。事情なんて何も知らないのに。いや、先入観がないからこそか。

俺たちが、あいつらにできることなど何もない。それでも、ふたりにとつて納得のいく結末を願わずにはいられなかった。

## はじめてのリンクコーデはあなたと

不用品の片付けをする母さんを手伝った。

引越してきて、とりあえずクローゼットに放り込んだ冬服。もう着なさそうなもの、傷んだものを避けて、まとめていた。

あのときは、ふたりとも精神的にもまいっていて、きちんと仕分けするなんて余裕はなかった。今、やっと落ち着いて、少し整理をしようということになった。

フローリングの床に散らばった冬服を眺める。

もう十二月だというのに、日当たりのいいリビングは汗ばむくらい暑い。

「こんなダウンとか、沖繩に在る限り、着ることないわね」

「もう冬なのに、この暖かさなのはびっくりした。でも、暦なんて二十度切ると寒い寒い大騒ぎするよ。女子なんてそのくらいになるとスカーフ巻く子いるのには驚いた」

「沖繩の人たちは寒がりなの。秋になると北風が強くなるから。気温より寒く感じるというはあるのよ」

「それだって、寒いつて大袈裟だよ」

「ふふふ……。母さんもカナダに行く前はそんなものだったわ。でもカナダで暮らしたら体があちらの気温に慣れて、また沖縄に戻れば、少しずつ昔の感覚が戻ってくる。人って適応力あるわよね」

「俺は、ここの夏の暑さには慣れない。無理。エアコンがあるから生きていられる」

「そのうち慣れるわよ」

「そうなのかな」

「ダウンや手袋とかイヤーマフとか、沖縄では着る機会ないかもしれないけど。日本でも内地行けば九州だつて冬は寒いから。いくつか取っておいた方がいいわね。冬に東京行きたいって前に言っていたでしょう？」

「そうだ。冬の東京へ行こうと、ある人とささやかな約束を交わしている。」

そんな会話を続けながら、最後の一箱を開封すれば、ペーパーバッグが二つ一番上に乗せられていた。それも未開封の。

「母さん、これは？」

菜々子は、一瞬目を丸くして、そのペーパーバッグを手に取り、じつと見つめていた。ペーパーバッグには可愛いビーバーのイラストが添えられた「Roots」のロゴが印刷さ

れている。

これは、ギフトバッグ？ 誰かへプレゼントするはずのものを忘れていたのだろうか。

「母さん、どうかした？」

黙り込んだ母親に、ランガはもう一度声をかけた。

「え、ごめんなさい。これは……」

そこまで言いかけ菜々子は、二つのバッグを愛おしげに撫で顔を上げランガを見た。

「これは、あなたとオリバーへのギフトだったの。あんなことがあつて封も開けず、すっかり忘れていた。それにしても、あの人ったら受け取らずに天国行っちゃって、損したわね」

ふふつと笑う母は、今にも泣き出しそうに見えた。

「中は、なんなの？」

「マフラーよ」

「マフラー？ スカーフのこと？」

「あ、日本ではマフラーって言った方が通じるわ」

「へえ」

「色違いなのよ。ランガとお父さんの。濃紺……ダークブルーに赤いポイントがあるのがお父さん、水色に白いポイントがあるのがランガに渡す予定だったもののなの」

「そうだったんだ」

菜々子は二つのうち一つをランガに手渡した。

「こつちが、あなたのね。沖縄で使うと冬でも汗疹ができるかもしれないけれど。旅行とかで使う機会もあるでしょう」

続いてもう一つのバッグもランガに渡そうとした。

「未開封だし、このブランド日本には入ってきていないから、欲しいという人がいるのなら差し上げたら？ 暦くんとかは、いらなにかしら」

「どうかな」

暦は、というか沖縄の男子高校生ってマフラーを使うのだろうか。記憶にない。そもそも暦はファッションへのこだわりが強くおしゃれだ。一貫した好みがあることをランガは知っている。

それでも一応、メッセージを送って確認してみるが、速攻で「使う機会なさそうだな。失くしそうだし遠慮しておくよ」と返ってきた。

まあ、想像ついたけど。

ランガは顔を上げ「唇は使わないらしい」と言った。

「そうね。風を通さない首を覆う薄手のジャケットがあれば十分だから。もこもこしたマフラなんて邪魔だし面倒臭いというのは、わかるわ。わざわざ使うのは、おしやれな子くらいよ。他に使ってくれそうな人はいないの？」

ダークブルーに赤か……。ある人の顔が浮かんだ。

あの人は、週の半分はきちんと寒くなる東京だ。ではあるけど、表の顔ではフォーマルな高級品ばかり身につけているイメージだ。これはカジュアル過ぎるような気がする。

「スケート仲間で、ひとり沖縄と東京を半分ずつ行き来している人がいるから、訊いてみる」

「そうね。有効に使ってもらったほうが、あの人も喜ぶわ。ランガのお友達なら、きっと大喜びよ」

「そうする」

その日、愛抱夢と会う約束をしていた。少し滑って、月末に東京へ行くスケジュールの調整をする。そんな予定だった。

前もって、マフラーの件を話しておこうかと思っていたのだけど、なんとなく言いそびれてしまった。直接持って行き、いるかどうか確認することにする。

もつとも愛抱夢は「ランガくんがくれるのなら、なんでも嬉しい」と喜ぶ人だ。そのものが本当に必要なのか、使いたくて使ってくれるのか判断がつかない。

大喜びする彼の姿は演技などではない、なんてことはわかっている。でも、本当はどうなんだろう。

そこは、スケートプールがある愛抱夢の別荘だった。

一緒に楽しく滑って、ランチにしようという話になった。

ガーデンテーブルには、きれいに料理が詰められたお重が並んでいた。テーブルに置いてある時計に表示されている気温を確認する。十二月だというのに日中の気温は二十度を超えている。やはり暖かいを通り越して暑い。

「遠慮なく食べて。出来立てというわけにはいかないけど、それなりに工夫されている

よ。琉球の宮廷料理なんだ。珍しいだろう？」

愛抱夢はポットから、吸い物をマグカップへと注いでくれた。

これは、中身汁？」

「ありがとうございます。いただきます」

澄んだ吸い物は臭みもなく、ほんと美味しい。

なんとなくマフラーの話を持ち出すきっかけが掴めない。でも大方食べ終えたところ  
で、意を決して切り出すことにした。

「あの、愛抱夢」

「何？」

これ、とペーパーバッグを差し出した。

「僕にくれるの？ 嬉しいな！」

思った通りの反応だ。

「あ、あの、こんなこと言うのもなんだけど、あなたのために選んだものじゃないんだ。

だから、無理しないで。中に入っているのはマフラーだよ」

「何か、訳ありみたいだね」

一応話しておいた方がいいだろう。

「それ、母さんが父さんを選んでものなんだ。俺と父さんに色違いで。でも、あんなことがあって、父さんにも俺にも渡しそびれて。この前、片付けをしたとき出てくるまで、母さんも忘れていたんだって」

「そんな大切なもの、僕がもらっていいの？」

「誰かに使ってもらった方が、父さんも喜ぶだろうって母さんが。色もダークブルーに赤のポイントだつて言っていたから、愛抱夢っぽいかなって思つて」

「そうか」

「でもカジュアルなブランドだから、愛抱夢が使えるかどうか。無理しないで」

愛抱夢はペーパーバッグを確認する。

「〈Roots〉だね。懐かしいな。このブランドなら僕でも着こなせそうだ。まして君のお父さん用にお母さんが選んだんだろう？ 問題ないよ」

「知っているの？ 日本には入っていないって聞いたけど」

「アメリカにも入っていたし、カナダに旅行したときに買ったよ。僕だって昔からスーツにネクタイだったわけじゃない。今だって仕事以外はスーツじゃない。だからありがたく

使わせてもらおうよ」

「よかった」

ランガはホッと胸を撫で下ろした。

「開いていい？」

「うん、確認して」

紙袋からマフラーを取り出した。ランガも初めて見るが。想像した通りのデザインだった。

愛抱夢は首に巻いた。

とてもよく似合う。まるで愛抱夢のために選んだようだった。

「君も色違いをもっているんだろう？」

「うん水色に白いポイントが入っているんだ」

「それなら、〈凍えるほど寒い東京焼き芋ツアー〉でふたりともこれを巻こう。ランガくんと最初のリンクコードなんて、人生の楽しみがまた一つ増えたよ」

愛抱夢は心から嬉しそうに笑った。それは作り物ではない笑顔だった。

はじめてのリンクコードはあなたと

それにしても人生って愛抱夢は本当に大袈裟だ、  
と思いつつも、ワクワクが一つ増えた  
ことにランガも同意し、微笑み返した。

《了》

## 永遠の赤

眼を閉じ、俯瞰的視野でパークの全景を鮮明な3D映像として、脳裏に描いた。目を開きスタートを切る。イメージしたとおりのコース取りで迷いなく滑り降り、ボトムから傾斜を一気に翔け昇った。キッカーで蹴り上げた体がふわりと宙に浮き、空中でデッキを掴みグラブ・トリックに入る。

ランガを中心にぐるりと大きく世界が回転した。目を大きく見開き、その景色を網膜に焼き付けた。

気持ちいい。この浮遊感はたまらない。

より高く、より速く、より大胆に。まだいける。限界は遙か先だ。もつと、もつと……高みを目指すんだ。

このヒリヒリした感覚は何ものにも代え難かった。

そんな視界の片隅に、自分を見つめる深紅の双眸を一瞬だけ捉えたような気がした。

——「今、大丈夫か？」

「うん、休憩中だから問題ないよ」

——「こっち、すげー寒くなってきたぞ」

「寒いって、何度なの？」

——「十八度」

「全然寒くない」

——「二十度切ったら寒い。それよりいつ沖縄帰ってくる？」

「クリスマスには」

——「じゃあ、そんときだな。おまえのボード、すんげーアイディアがひらめいたんだ」

「へえ、やっぱり暦はすごいな」

——「おう、きつと驚くぜ。なんせ俺は天才メカニックだからな」

「頼りにしている。暦のボードは世界一だ。土産何がいいか考えておいて」

——「わかった。つと、こっちはもう寝る時間なんだ。おまえの元氣そうな声聞けてよかったよ。俺は寝るな。おやすみ」

「俺も。暦と一緒に滑るの楽しみにしている。おやすみ」

暦とは、もう何ヶ月か会っていない。それでも、こうやって毎日、タイミングが合えば通話で声を聞いて、たわいのない会話をし、タイミングが合わなければメッセージを送り合う。

高校を卒業するまでは、いつも傍に暦がいた。

朝、待ち合わせてスケート通学。隣の席で授業を受け、ランチは屋上で一緒に食べる。そのままふたりで同じバイト先へ行く。バイトが入っていないときは、パークで一緒に滑る。

クラスメイトたちは「おまえらいつも一緒に、よく飽きないな。まさかデキているんじゃないだろうな？」などと茶化してくる。

暦は、ムキになって「んなわけねーだろ」と否定した。「デキている」の意味がわからなかったから笑って流していたけれど、後から暦に説明されて、ふたりで大笑いをした。いずれにしろ、間違いない母親より暦という時間の方が長かった。

暦と一緒にいるのは楽しい。それ以外の言葉は浮かばない。

その中でも、暦と滑るスケートは最高だ。ワクワクしてお腹の底から大きな声を出し

て、何時間でも笑い合いながら滑っていられる。あの心が弾む感じは、暦と滑っていると  
きだけだ。

競技スケートとは全く違う。もちろん、お金のための仕事と遊びを一緒にしてはいけな  
いことくらいはわかつている。

プロになって暦と毎日一緒にいることは不可能になった。最初は少し変な感じがした。  
落ち着かないというか不安というか。いつも一緒にいた友達がいないのだから。単純に寂  
しかったのかもしれない。

けれど、それもすぐに慣れ違和感も気にならなくなった。暦が近くにいなくても大丈夫  
だと思えるようになっていた。

なぜなら気づいたからだ。暦はいつも俺と一緒にいることに。確かに俺たちは繋がって  
いるんだ。きつと一生だ。そのことを強く実感できた。

そのことはランガの自信につながった。自分はひとり立ちできているんだという、ささ  
やかな自信に。

「よつ、ランガ。話は終わった？」

いきなり後ろから肩を抱かれる。そのままスマートフォン画面を覗き込んできた。首筋に生温い息がかかる。

リーアムだ。

彼は、ランガがよく練習するこの屋内スケートパーク近くにある大学に通う、大学院生だった。ランガがここアメリカに拠点を移してから、三人目のボーイフレンドということになる。正式に付き合い出して、まだ一ヶ月ほどだった。

趣味と割り切つてスケートを楽しんでる彼は、講義の合間に、こうしてふらつとランガを訪ねてくる。

「いきなり何するんだよ」

「誰と話していた？ 日本語だとわからないぜ」

「友達」

「男？」

「そうだよ、親友。俺にスケートを教えてくれた先生でもあるんだ」

スマホをポケットにしまう。

「愛している？」

「もちろん」

彼は、ふーんと至近距離から覗き込んできた。

「寝た？」

この手の軽口をランガは好まない。

眉をひそめ「親友とはセックスしない」と露骨に不快感を示した。

彼は肩をすくめる。

「冗談だつて。気を悪くしたのなら謝る。少し嫉妬したんだ。君の友人を侮辱するつもりはなかった」

「わかつているよ」

少し言い方がきつかったかもしれない。

ランガは目を伏せ笑顔を作った。

悪い奴ではない。ユーモアがあつて一緒にいるとくだらないジョークで笑わせてくれる。頭も切れるし気も効く。何よりも優しい性格でランガを大切にしてくれる。

そんな彼に、付き合いたいと言われたとき、断る理由を見つけることができなかった。なあ、ランガ。今夜、一緒に食事しよう。それから、俺のアパートに来いよ。どう？」

彼は、少し照れくさそうに人差し指で頬を搔いている。

この誘いが何を意味するのか、鈍いランガでも流石に察した。それなりに経験を積み年齢を重ねているのだから。

彼とは何度かデートを重ね、キスもした。流れるに不自然なところはない。

そうだ。何もない。

「わかった」

ランガのボーイフレンドは思いつきり破顔した。

「よしっ！ 俺、これから講義だから。また後で連絡する」

彼はスキップするような軽い足取りでキャンパスへ戻っていった。

ふと、うなじに、ある人の刺すような視線を感じ、振り向いた。

愛抱夢？

誰もいない。当たり前だ。愛抱夢こと神道愛之介は、臨時国会で忙しく、日本を離れることはできないのだから。

こんなことは前にもあった。ランガが前のボーイフレンドと親密になりそうになった夕

イミングだったと記憶している。

ランガは首を強く振って、その印象を打ち消そうとするかのように勢いよく、しかし乱暴に斜面を滑り降りた。お椀状になったボトムから緩やかな上昇カーブを滑っていくと上部の傾斜はほぼ垂直だ。そこから一気に空中へ高く飛び上がり、エア・トリックを決めようとした。

そのとき、耳にあの声が響いた。

——「ついでこい」

え？

その声に意識をさらわれる。軸がぶれ、空中姿勢が乱れた。

「どうした。らしくないぞ！ ランガ」

着地バランスを崩し、尻もちをつきそうになったランガに、コーチの大声が飛んでくる。

無言で唇を噛み、ミネラルウォーターを喉に流し込んだ。手の甲で口を拭う。

愛抱夢——なんなんだ。

別れても、あの男は時と場所を選ばず、ランガの情緒を乱しにかかってくる。

いや違う。彼のせいではなく自分の責任だ。引きずられ勝手に感情をかき乱しているのは未練からだ。いい加減忘れるんだ。

あの人は、もう自分とは交わることもない人生を歩んでいるのだから。

ホストマザーに夕食はいらないことと、今夜は友人宅に泊まることを伝え、待ち合わせ場所へ向かった。

さやかな夕食を共にし彼のアパートへ。

リーアムと一緒にいる時間はリラックスして過ごすことができる。

アメリカに来て付き合った他の誰よりも。特にイベントがなくても構わなかった。お互い肩肘を張る必要がなく疲れない。たとえば言葉を交わさず沈黙が続いても気まづくならない関係は、気楽だった。

その夜も、ふたりソファアに並んで映画を観ていた。おそらくふたりともあまり観てはいないのだろう。ただのBGMでしかない。

彼の手がランガの二の腕を掴みグイッと抱き寄せた。ランガは彼の肩に頭をあずけ目を閉じた。

このまま恋人同士になることはごく自然な流れなのだろう。それも悪くないと思えた。だから、このボーイフレンドと肉体関係を持つことに、さほど抵抗はなかった。

その夜、心地よい疲労の中、狭いベッドで抱き合うようにして眠りについた。人の体温を愛しいと思えるのは、どのくらいぶりだろうか。

朝、傍らで眠る男より、早く目が覚めた。こういうことは珍しい。

かつて、あの人より自分の方が早く起きることなんてなかった。

そつと髪を梳かれ優しく頬を撫でられ、最後にはキスまでされて、ランガはようやく目が覚める。

——「そろそろ起きないとね」

彼の指の感触が不意に蘇る。

そんな遠い記憶に蓋をして、ゆつくりと上半身を起こした。カーテンの隙間から入り込む朝の弱々しい光が、ベッドカバーにやわらかな陰影を落としていた。

ベッドからカーペットに、そろそろと足を下ろす。

「何時？」

掠れた眠たげな声が聞こえた。

「ごめん、起こしちゃった？」

彼は、ごそごと時計を確認する。

「いや、起きる時間だね。朝食を準備するから、待っていて」

「手伝うよ」

ふたりでたわいもない会話をしながら朝食を摂った。

「俺、食べ終わったら帰るから」

「せっかくの土曜日だ。もう少しゆっくりしていけよ」

「うん、でもなんか滑りたい気分なんだ。またいつでも会える」

「ランガ……」

椅子から立ち上がったところで名を呼ばれ、手を握られた。

「何？」

視線を下げれば、じつと見つめてくる彼と目があつた。

その真摯な眼差しに心が揺れた。

「愛し合ってくれて、ありがとう」

その言葉はひどく重い響きを内包していて、ズシリと胸に落ちた。わずかに唇は動いたけれど声にすることが、できない。口の中がカラカラだった。

ランガはただ微笑み、体をかがめて彼の唇に軽くキスをした。

ホームステイ先に戻り、自分の部屋でスケートパークへ行く準備をしていたとき着信音が鳴った。ポケットからスマホを引っ張り出せば、母からのメッセージだった。

メッセージアプリを開く。

へビッグニュースよ！ あの神道愛之介議員が、結婚決まったみたい。素敵な女性。さすがね。ニュースサイトに詳しいこと書いてあるから興味あったら読んでみて。でも、あなたにはどうでもいいニュースよね。つい興奮してごめなさい〜

一瞬、感情が凍った。

震える指でスマホを操作し、日本のニュースサイトを確認する。

女性ファンが多い若手議員である神道愛之介の結婚は、大きく取り上げられていた。ふたりの馴れ初めからプロポーズの言葉まで。お祝いムード一色だ。

相手は政策秘書として彼を支えていた有能な女性だという。これからもずっと彼の側で、同じ理想に向かって手を携え歩んでいく、最高のパートナーであることが、彼のコメントから伝わってきた。

当然だ。あの人が選んだ女性なのだから。

愛抱夢が結婚。

そうか。よかった。本当によかった。あの人は、これからも順調な人生を歩んでいくのだろう。

これで彼は家庭を持ち幸せになれるんだ。政治家として、夫として、いつか父親としても。迷いは無くなるだろう。

ほっとした。嬉しかった。心からおめでとうを言いたかった。

それは偽らざる本心だった。

ぽつりとスマホの画面に水滴が落ちる。

あれ？ と慌てて画面を指で拭いた。手の甲にも水滴は、ぽたぽたと立て続けに落ちていく。

視界が滲む。驚いて目元を指で擦った。濡れた指を呆然として見つめる。

そっか、俺、泣いているんだ。なんでだろう。嬉しいのに。喜んでいるはずなのに。寂しい？

そんなはずはない。だって俺には、一生いなくなると知っている、誰よりも信じられる大切な親友がいる。たくさんのスケート仲間もできた。それに俺を大切に思ってくれるボーイフレンドだっているんだ。

ほら大丈夫だ。

なのに、なぜ涙が止まらないのだろう。

皮肉な笑みが浮かぶ。

違う。そうではないだろう。目を逸らすな。わかっている。本当は悲しいんだ。なぜなら、俺はもう愛抱夢に会えない。会ってはいけなくなったのだから。

それを言葉にした途端、鋭い針のようなものが胸を突き刺した。

自分はひとりぼっちではない。それでも誰もあの人の代わりにはならないのだ。あの人の代わりなんてどこにもいやしない。

こうなることは最初からわかっていた。その覚悟はあつたはずだ。

自らの意思で別れることを決めたんだ。自立しなければいけないと思ったから。

あの人に守られるだけだった。そして、そのことに気づくことがないほど子供だった。

ただ楽しいこと気持ちいいことだけを夢中で追い求めた。

愛抱夢と滑るヒリヒリするスケートは、何ものにも代え難い。高鳴る胸の熱を抑え込むなんて発想は、なかったし多分それはできなかった。

のめり込めばのめり込むほど、あの人に傾倒すればするほど、そこから離れることなんて考えられなくなっていく。それは麻薬のようなものだった。

それからスケート以外の愛抱夢を求めるようになるまで、さほど時間はかからなかった。

一緒に過ごす空間は心地よかった。あの人の話を聞き、食事を共にする。やがて、どちらからともなくスキンシップを求めていく。ハグしてキスをする。そうすることがごく自

然であるかのように。

いつしか、より深く強く繋がりたくなつた。あの人を感じたくなつた。欲しくなる。

一線を超えたきつかけなんて、もう覚えていない。でも、間違いなく仕掛けたのは自分だ。あの人はただ押し切られただけ。

愛抱夢は大人だから、神道愛之介としての立場も、そのリスクも何もかもがわかつてる。

自分は無知で愚かな子供だったから難しいことは何も考えなかった。その一瞬だけが全てで、無責任に自分の快だけを追い求めれば気が済んだ。

情熱的なセックス。快楽に流されどこまでも無防備になる自分を、あの人の腕の中でだけは、許せた。あの瞬間だけは、俺はあの人のものだったから。

状況が許す限り夜を共にし、寄り添いながら眠りについた。愛抱夢の胸の中は、繭に包まれているような安心感をランガにもたらししてくれた。

早朝のやわらかな光が満ちる寝室。ベッドの中で微睡んでいると、大きな温かい手のひらが、頬にそつと押しつけられる。その手の甲に自分の指を重ね、うつすら目を開ければ

深紅の瞳が覗き込んでいる。

目が合えば彼は微笑んだ。

——「おはよう、ランガくん。よく眠れた？」

ランガの口元が綻ぶ。

——「おはよう、愛抱夢」

身も心も、何もかもが満たされた幸福な日々だった。

肌を合わせてさえいれば、この関係は、ずっと続くのだと信じていた。自分は愛抱夢のことをよく知っているのだと、そう疑わなかった。

違っていた。そんな単純なものではないのだ。

神道愛之介の立場や、それ故の苦悩などランガには、全く見えていなかった。

そんなランガでも否応なく大人になる。やがて知りたくもないことを知ってしまった。

いつまでも無邪気な少年のままでは、いられないのだ。

卒業を控え自分の将来を鑑みるようになり、ようやく世の中、この日本という国の仕組みや現実に目が向くようになった。

カナダで同性婚は、当然の人権として認められていた。同性愛者の政治家だっている。それが日本ではどれほど特異なことで、受け入れる人が少ないのかをランガは深く考えることはなかった。

同性愛者だなんてことは、保守的な人々の中ではスキャンダルでしかない。それが現実だった。

神道愛之介は国政を預かる政治家だ。しかも保守政党の。政治家に同性愛者であることを公表している人はいる。だが保守政党である彼の支持者は、どうだろう。頭の硬い連中ばかりだと彼は、度々こぼしていた。

今からそんな日本を変えていくと彼は宣言した。嘘ではない。きつといつかやり遂げてしまうのだろう。でも、それはここ何年かの短い期間で成し遂げるなんてことは、不可能だ。ぼんやりとしたランガでも、そのくらいは理解できた。

そんな理想に神道愛之介が突き進もうとしたとき、自分は彼の足枷になりかねない、ならば今のうちに離れた方がいい。

それがランガの導き出した答えだった。

——「俺、ずっとあなたに守られてきたんだね。だから、ひとりでやっていこうと思っ

ている」

すつきりとした笑顔で、ひとり立ちの意思表示ができたと思っている。彼が安心できるように、大丈夫、ひとりですべてやっていると。

俺、頑張ったんだ。

自分の決断が誤りだったとは思わない。それを受け入れた愛抱夢も。

誰も悪くはない、何も間違っていない。それなのに、どうしてこんな身を引き裂かれるような痛みに耐えなければいけないのか。

枕に顔を押し付け、声を押し殺してランガは泣いた。泣いて、泣いて、一生分の涙を出し切ってしまったかのように、泣き続けた。

今日だけだ。明日になれば、いつもの自分に戻る。明日の朝には、おめでとくと、心からの祝福を彼に伝えよう。結婚祝いに何か贈ろう。

それまでの間、今だけは子供のように泣く自分を許してやろう。

ランガはそう自分自身に言い聞かせ、静かに涙を流し続けた。

あの人とはもう会えない。会ってはいけない。そんなことは、わかっている。それでも

願いが一つ叶うのなら、もう一度だけ、あの人に会わせて欲しい。

会って一緒に滑ろう。

そして、あのふたりだけの世界へ。

誰にも邪魔されないあの世界へ俺を連れていつて。

——お願いだから、愛抱夢。

《了》

## バラは赤、スマレは青

ベッドに寝転び、メッセージを送る。

「Langs…こんばんは。今、話せる？ 時間あるときに電話してくれる？ 俺はいつでも大丈夫だから。待っている」

メッセージを送信して、一分も待たずに通話の着信音が鳴った。

「愛抱夢？」

——「こんばんは、ランガくん」

「まだ東京だよ。大丈夫なの？ 無理していいない？」

——「何も問題ないよ。今は、プライベートタイムだからね」

「よかった」

——「何かあったの？」

「ん、大したことではないんだ。バカバカしいことだっただけ」

——「話してごらん。だって、君、僕に宥めて欲しい、もしくは慰めて欲しかったんだろう？」

「そうなのかな。くだらないって気分害したりしない？」

——「何であれ、君が僕に何かを求めてくれるのは、とても嬉しい。だから話して」

「今日、バレンタインデーだったから、シャドウの花屋に行つたんだ。それで、小さな赤いバラのブーケを買つたんだ。母さんに。もちろんあなたが東京でなければあなたにも買つていた」

——「嬉しいな。それは僕も同じだよ。バレンタインのバラは直接手渡さないとね。だから断念して別の日に埋め合わせしようと思つているんだ」

「ありがとう。それでね、父さんが生きていたときは、毎年バレンタインには、母さんに赤いバラとプレゼントを手に家に帰ってきた。今は父さんいないから俺が母さんに買ってあげようと思つたんだ」

——「君はお母さん思いの優しい子だね」

「父さん、俺にも赤いハート型カードを毎年のバレンタインデーにくれたんだ。ものではなくて、こういうことをしようという約束のメッセージが書かれた、俺を楽しませるため

のイベント企画だったんだ」

——「君が本当にお父さんっ子だったって、よくわかる。そんなエピソードを聞くとね」

「でも、最後にくれたカードの約束は守ってくれないまま、父さん死んで。それが悲しくて悔しくて、カードは捨ててしまった。見れば辛いばかりだし。でも俺、なんで捨てたんだろうって。父さんがくれたものののに、大切な思い出なのに。今更後悔している。……ごめん、こんな話をして。あなたには何も関係ないのに。何かを言っただけじゃなんだ。ただ誰かに聞いて欲しくて。だから忘れて。ごめんなさい」

——「捨ててよかったんだよ。お父さんも、もう叶えることのできない約束を君に引きずっては欲しくないんだと思うよ。それより新しく楽しいことを見つけてくれることを願っている。きつとね」

「そうなのかな」

——「では、君は、どんな楽しいことを見つけたのかな？」

「スケート！」

——「それなら、お父さんは喜んでいるよ。……僕は、そんな君が羨ましいよ」

その声はどこか寂しげで、はっとして息を呑んだ。そうだった。この人は……。

細かいことを聞いてはいない。でも、なんとなく伝わってきてしまった。愛抱夢と彼の父親との関係が。

「ごめん、愛抱夢。俺自分のことばかりで」

——「気にしなくていいよ」

「それより、愛抱夢。Happy Valentine's Day!」

——「Roses are red, violets are blue, maple syrup is sweet, and so are you. I

want you for my Valentine. What should I do? (バラは赤、スマレは青、メープルシロ

ップは甘く、そして君もね。バレンタインには君が欲しい。どうしたらいいんだろ

う?)」

「I want you too. But I don't know what to do. (俺もあなたが欲しい。でもどうすれば

いいのかわからない)」

——「本当はね、今すぐ君のところへ飛んでいきたい。君をこの腕に朝まで抱いていた

い」

「俺は、あなたの頭を撫でてギュッと抱きしめたい」

——「頭を撫でる？」

「なんとなく」

——「ふふふ。まあいい。少しは気が晴れた？」

「そうだね。ありがとう、話を聞いてくれて。なんかスッキリした」

——「どういたしまして。それより、週末には沖繩に帰る。時間をつくるから会おう。会って遅れたバレンタインを一晩たつぷり祝おう」

「うん」

——「さて、もう寝る時間だろう。おやすみのキスを君の唇にするよ。目を閉じて」

「わかった」

——「チュッ」

電話から聞こえるリップ音は、とんでもなく淫靡に響き、ゾクリとした。思わず自分の唇を指の腹でなぞる。しつとりと柔らかい彼の唇の、あの熱と弾力が蘇った。

ああ、心臓がドキドキとうるさい。愛抱夢に聞こえてたりしないだろうか。

——「どうしたの？ ランガくん？」

「なんでもないよ。週末あなたに会えるの、とても楽しみにしている」

——「僕もだよ。おやすみ、ランガくん。良い夢を」

「おやすみなさい。愛抱夢」

部屋の明かりを落とし、穏やかな安らぎに包まれランガは目を閉じた。自分を抱く彼の腕を感じながら。

《了》

## いつかの約束を果たすとき

二月八日にランガは誕生日を迎え十八歳となる。

誕生日といっても日本の男子高校生なんて仲の良い親友同士であつてもプレゼントを贈り合う習慣なんてない。友人の誕生日なんて頭に入っていないし。まして誕生日パーティーなど論外だと暦は言う。女子高校生同士だと事情は少々違うみたいだけどな、と。

そう言いつつも、暦は「誕生日おめでとう」の言葉とともにスケートグローブを通学路で渡してきた。去年の暦の誕生日は気づかず過ぎてしまったから、今年の八月八日には二年分のプレゼントを用意しよう。自分とちょうど半年違う暦の誕生日は覚えやすい。

十八歳は日本民法でいうところの成年年齢だ。それは父母の親権に服さなくなることであり、保護者の同意なしで契約などほとんどのことを自分の意思で行えるようになるということを意味する。しかし、それは負うべき義務や責任を伴うことなのだ。大人としての自覚を持ちなさい、と教師や母親である菜々子から散々言われた。むしろ説教に近い。

そんなこと言われたところで、その日になったらいきなり分別ある大人になれるわけではない。

Sで会う身近な大人を思い浮かべてみる。どう考えてもまともな大人ではない。それでも、そんな彼らの表の顔は、ちゃんとした大人だ。ランガや暦よりずっと。

そこで、はたと気づく。そうだ。ランガも暦も、実也と同じ未成年お子様括りではなく、チェリーやジョーやシャドウ、さらに愛抱夢とも同じ成年である大人の括りということになるのか。

今さらそんなことを意識してランガは愕然とした。この現実はいわじわとくるものがある。

バイトを終え帰宅すると、母の菜々子がプレゼントのショルダーバッグを渡してくれた。それだけではなく少し贅沢な夕食とケーキを用意してあるという。

「あなた宛に、お花とギフトが届いているわよ。誕生日プレゼントかしら」

それが誰からの贈りものなのか、差出人を確認しなくても、誰からかはわかる。

ランガの誕生日を覚えていて、誕生日当日に届くようプレゼントを手配するもの好きな

知り合いなど、ひとりしか思い当たらない。

そう愛抱夢だ。

包みを開けば、プレゼントはペンケースだった。それは職人に特注した上質のものだったのだが、ブランド品ではない。だからパツと見て値段の見当はつかない。そのことは彼なりの気遣いだった。ランガや、おそらく菜々子にもわかってしまうことはないように。

同時に届いた小さな花束を手にとった。この白い花を知っている。カナダにいたころよく見たはずなのに、名前を思い出せない。

覗き込んだ菜々子が目を輝かせた。

「かわいい。これはスノードロップね。懐かしいわ。こっちでは見ないものね。生ける？」

そうか。思い出した。スノードロップだった。

「うん、お願い。俺、そういうこと下手だし」

菜々子は「このサイズなら、むしろグラスがいいわね」とふふつと笑った。

冬の終わりに咲くスノードロップは春の訪れを告げる花だ。それは同時にウィンタース

ポーツシーズンの終わりが近いことを知らせるものでもあった。

特に手入れをしなくても、毎年雪解けの頃に咲く白い花。自宅の庭、教会や学校でもよく目にした記憶がある。カナダではありふれた、沖縄でいうところのハイビスカスやブルーゲンビリアくらい珍しくもない花だ。

そんな平凡であるはずの花も、ここ沖縄で見かけたことはなかった。

残雪の中で咲くスノードロップは、南国の強烈な日差しとは相入れない。ここでは、赤や黄色などの強い太陽光に負けない鮮やかな色の花がしつくりする。

カナダにいたころは、そこまで注目することもなかった可憐で清楚な白。

派手な演出が大好きなあの人のことだ。てっきり赤薔薇が届けられるとランガは思っていたのだが、予想が外れた。

おそらく愛抱夢はこの花になんらかのメッセージを込めている。

水を入れた花瓶がわりのグラスをテーブルに置いて、菜々子はブーケの包みを開いた。

色々な方向から眺め確認しつつバランスを調整している。どこか楽しい様子の子に、これはこれで気の利いたサプライズだと思った。

それから手元に視線を戻し同梱されていた封筒を開いた。  
パスデーカードと、これは……招待状？

へいつかの約束を果たすときがきたね

## §

指定されたその日は土曜日だった。招待状の送り主から秘書を迎えに行かせると連絡があつた。

当日、マンションに菊池忠と名乗る男が現れる。その正体は誰がどう見てもスネークだ。いや、スネークの正体が秘書か。

どちらでも同じことだけど。

黒いセダンの後部座席に座ったランガが、きちんとシートベルトを締めたことをバックミラー越しに確認し、運転手を務める秘書は車を発進させた。

ランガは窓の外をぼんやりと眺める。もう夕方の時刻だ。この時間でもまだまだ外は明るい。だいたい日が長くなってきたているのだとわかる。

一月、二月は沖縄でも一年で最も寒くなるという。暦やクラスメイトたちは、今は真冬だと主張する。なのに沖縄各地で桜祭りが開催されていて、皆春気分なのは矛盾している。

カナダでのランガの誕生日は、毎年、真つ白な雪の中で迎えていた。

外気温は氷点下の真冬だ。桜なんてあり得ない。もつとも雪の降らない南国沖縄では、そもそもランガがイメージするような冬はなく、自分の誕生日は、冬ではなく春を強く感じさせる季節だった。

これからもつと暖かく、いや暖かいを通り越して暑くなっていくのだろう、と思うとうんざりする。

それにしても、どこへ向かっているのだろう。

ランガはフロントシートの背もたれをぎゅつと掴んで身を乗り出した。

「ねえ、スネーク、どこへ行くの？」

「今はスネークではない。まあいいだろう。別荘に愛抱夢が待っている。君も何度か行つたことあるだろう？」

「うん。ただどあそこなら俺、バイクあるしひとりで行けるのに。忙しいあなたに手間をかけさせるようなことじゃないよ」

「バイクを運転して君に何かあつたらと気が気ではないんだよ。そういう理由で今日まで場所は秘密にしていた。話したら君は勝手にバイクで駆けつけそうだからということだ。

今夜は替えのきかない大切な日だと言っていた。愛之介様は細心の注意を払いたいのだろう」

「俺、そこまで運転下手じゃないよ。大袈裟なんだから」

露骨に不満げな声が出てしまった。

「たとえば君の運転技術が素晴らしくても、貰い事故というものもあるんだ」

「そんなの車も同じでは？」

「バイクと車で比較すると、いざ事故が起きたときの負傷リスクは雲泥の差だ」

ランガは眉を寄せた。それは屁理屈というものではないだろうか。

「つて、言うか、愛抱夢つてスネークのこと、酷使し過ぎな気がするんだけど。甘えすぎ

だよ。あなたも甘やかすの良くないと思う。朝、スネークがいないと起きられないとか、まるで子供じゃないか」

スネークの肩が小さく震えていた。彼は軽く咳払いをして口を開く。

「君が気にしなくていい。私は主人の命令に従うのが仕事なんだ。それで給料をもらっている」

なんだかよくわからないけど、本人同士が納得しているらしかった。これ以上口を挟むようなことではないのだろう。

そんなどうでもいい雑談をしているうちに愛抱夢の別荘に到着した。

ランガを車から降ろして即座に、スネークは別荘から立ち去った。

見れば夕陽を浴びた愛抱夢が、門の前に立っている。

太陽はすでに沈みかけていて西の空はオレンジ色に染まっていた。闇に侵食されはじめた東の空には、明るい星がひとつ煌めいている。

別荘の庭にあるスケートプールを見てランガは瞳を輝かせた。

スケートをするのならまだ明るさの残る今のうちがベストだ。

「滑ろう！ 愛抱夢」

思わず口走った第一声が、それだった。  
しまったと思うが時すでに遅し。

これを脊髄反射とか刺激反応というのだが、常識的にこういった場面では「お招きいただきありがとうございます」などと礼儀正しく挨拶すべきところなのだろう。とても成年男子として相応しい態度ではない。

愛抱夢は苦笑した。無理もない。

「君も大概スケートバカだね。知っていたけれど」

「じゃあ……」

「でも今日はダメ」

ランガはムスツと頬を膨らませた。少しくらい滑らせてくれてもいいじゃないか。

「どうして？」

「そんな時間ないんだ。滑り出したら夜中まで滑ってしまうだろう？ 君は」

「あなたもだよ」

「そうだね。だから僕も我慢するから、君も我慢だ。滑るのは明日にしよう。ディナーは

ゆつくりと時間をかけたい。お腹空いているだろう？」

胃の辺りに手のひらを当てれば、グーと腹の虫が鳴り空腹を訴えた。胃袋は正直だ。ランガは頷いた。

「お邪魔します」

ここは誘われて何度かスケートのために訪れている愛抱夢の別荘だ。

というところで勝手知ったる他人の家なのだが、いつもと室内の印象がガラリと変わっている。そのことを指摘すれば、今日は君の誕生日のお祝い、成人祝いということで特別仕様なんだと言われた。

案内されたダイニングルームは暗かった。

愛抱夢に明かりを点けようとする様子はない。

食卓に置かれたキャンドルグラスの中で燃える炎が、食器やクロスをやわらかく照らしていた。それ以外の照明は全て落とされている。

ダイニングチェアに腰をかけるよう促される。

「お祝い遅くなつたね。お誕生日おめでとう。ランガくん」

「ありがとう、愛抱夢」

フルートグラスを持ち上げ乾杯した。グラスの中では繊細な泡がキラキラと光を弾いていた。

「これは？」

「ノンアルコールのシャンパン、まあ正確にはノンアルコールのスパークリングワインかな。シャンパンと同じ製法でつくりアルクールだけ取り除いてあるから、香りもいいだろう？」

「うん、ジュースと違って甘くないけど美味しい」

ランガはぐると室内を見渡した。

「暗いね」

「すぐに目が慣れるよ。不安かな？」

「大丈夫」

ランガは首を横に振った。

「このくらいの明るさにしておくと視覚情報に惑わされないんだ。人の味覚、嗅覚、聴

覚、触覚すらも研ぎ澄まされる。料理を味わうにはもってこいだよ」

そういう理由だったのか。言っていることは難しかったけれど、理由があることはなんとなく理解した。

センス良く盛りつけられた前菜を口に運ぶ。

メインは伊江和牛頬肉の赤ワイン煮込みをあたたためなおして出してくれるという。

調理人をこの場に呼ぶわけにはいかなかったから、火の通し加減が難しいものは避けたんだ、と彼は白い歯を覗かせ笑った。いや笑ったように見えた。多分だ。なぜなら光源はキャンドルの小さな炎だけで、この仄かな光の中で目の前にいる相手の表情を捉えることは、難しい。

それでも目を凝らして男の顔をじっと見つめれば、いつもの雰囲気とはかなり違う。キャンドルの炎がつくり出す陰影のせいなのか。

ランガは、なるべくそのことから意識を逸らし目の前の料理に集中することにした。サラダを口にする。独特の風味がある野菜だった。これは何の葉っぱだろうか。口に入

れては首を傾げていると、察した男が説明する。

「それは沖縄ハンダマのシーザーサラダだよ。少し苦味があつて香りに癖があるけど、大丈夫かな？」

「うん、これも美味しいよ」

ふたりは淡々と食事を進める。

ランガは食べることに夢中になると、口数が少なくなる。

年上の男は食べながら、たわいもない話題を振り、ポイントポイントで料理の解説をしてくれた。基本、沖縄県産の食材を使っているという。

うんうんと頷いて聞いてはいるが、明日には間違いなく忘れていそうで、食べさせ甲斐のないやつで申し訳ないとランガは、心の中でそつと頭を下げた。

メインである頬肉の赤ワイン煮は、口の中でとろけた。

「わあっ！ こんなのはじめて食べる。すごく美味しい」

感動して口走ったものの、相変わらず気の利いたコメントなんて浮かばなかった。日本語が不慣れというのもあるのだろうけど、たとえ英語であつてもなんて表現していいかわ

からない。もう成人、大人だというのに。

「気に入ってもらえて何より」

「ごめん、俺、なんか上手く感想言えなくて」

「君の顔を見ればわかるから、気にしなくていいよ」

ふと愛抱夢が手にしているワイングラスに目を止めた。

「俺もそれ飲める？」

ふたりのワイングラスに注がれたものは見た目は同じに見えるのだが、中身は違う。愛抱夢のグラスには普通の赤ワイン。ランガのグラスにはノンアルコールのワインだという。

「これ？ アルコールはダメだよ」

「俺、成人したんだよ。もう十八歳」

「君は誤解しているみたいだけど、喫煙年齢、飲酒年齢は従来通り二十歳からなんだ。そもそも二十歳になる前は完全な大人ってわけじゃない。特定少年として少年法は適用範囲だ。親の承諾なしで契約ができたり選挙権をもらえるようになっただけだ。その分、持たされる責任も増える。その程度の違いだよ」

「へえ……そうだったんだ」

白々しくとぼけてみせるが、流石に知っていた。

学校でも注意があった。愛抱夢は勘違いしたふりをして飲ませてくれるかと思っていたのだけど、このノリの悪さは想定外だ。

「気分味うだけなら、そのノンアルコールワインで我慢して。僕もこの一杯だけで終わりにする。でも、まあ今日は特別の日だったか……」

彼はワイングラスの残り全てを飲み干し、立ち上がりランガの椅子の傍へと移動した。

ランガは隣に立つ男を見上げた。表情が見えにくい薄闇の中では、感情が読めない。

頬に手のひらが添えられ、男の顔が迫ってくる。

心臓が強く鳴り唾をごくりと飲み込んだ。

彼は苦笑いを浮かべる。

「そんなにジロジロ見られたらやりづらい。目を閉じて」

ランガは素直に従った。

唇にかかる吐息はツンとアルコールのにおいがした。濡れた唇が触れたと思ったら、すぐに離れた。

臉をそつと開き顔を上げる。見下ろしてくる虹彩は、この薄明かりの中にあつても深い赤だとわかる。彼の人差し指が、唇に軽く押しつけられた。

「舐めてごらん」

濡らされた唇をそつと舐める。舌にピリピリとした刺激が走った。

「どう？ はじめてのアルコールは」

唇を指でなぞりながら顔を上げた。

「なんか苦い」

彼の目尻が下がる。

「アルコールの刺激と、あと赤ワインはタンニンが多く含まれているからね。渋いものなんだ」

なぜか心臓はドキドキしたままで、静まる気配はない。

「これ大人になると本当に美味しいうって感じるの？」

「慣れもあるし、人にもよる。君はどうだろうね。二十歳になってからのお楽しみだ」

「ふーん」

「ではデザートを用意してくるから、待っていて」

彼はキッチンへと向かった。

両手に白いプレートを持ち戻ってくる。それをランガと自分の前に置いた。小さなチョコレートケーキ、ムース、フルーツが綺麗に盛りつけられていた。器ごと冷蔵庫で冷やされていたらしい。

「本当はフォンダンショコラにしたかったんだ。でも、あれだと僕が再加熱して失敗する可能性を考えてね。また別の機会にご馳走するよ」

そんなもの電子レンジであたためても、どうせ自分にはわからないのに。愛抱夢はランガには想像もつかないところで妙に繊細だ。

「甘くて美味しい」

ああ、また頭の悪い感想だ。気の利いたフレーズが浮かばない。食レポなんて生涯自分には無理だと思った。

愛抱夢の顔を見る。このキャンドルだけの薄闇にも目が慣れたようで、彼の満足げな笑顔がはつきりと見てとれた。

食事を終え、ランガも片づけを手伝った。食洗機に並べて洗剤を投入し、スイッチを押

すただけだ。あと食器棚にしまうのは使用人の仕事だという。

「僕がやると間違えた場所に置いたりして、かえって手間をかけてしまうんだ」

「愛抱夢って、意外に家事できるんだね」

「冷蔵庫から取り出したり電子レンジであたため直したり食洗機に放り込むことを『家事ができる』とつていいのかどうか疑問だけれど。アメリカに使用人を連れて行くわけにはいかなかったから、洗濯、掃除、簡単な料理と、最低限のことは留学で身についたよ」

「そうか。じゃあ俺よりもできるのかな」

「かもしれないね。まあ基本的なことは慣れだよ」

不意に肩を抱かれた。ドキンと胸が鳴り、思わず首を捻り肩に置かれた手に、指に目をやった。

長くて綺麗な指だと思う。それでも骨格のしつかりした節くれたった男の指だ。

「さあ少し食休みをしようか」

こんな風に肩を抱かれるなんて、いつものことだ。よく知った彼の手が触れているだけなのに、なぜこれほど胸が高鳴るのか。

そういうえば愛抱夢は言っていた。暗い空間は視覚情報に惑わされず、人の味覚、嗅覚、

聴覚、触覚すらも研ぎ澄まされると。

こんなにもドキドキするのも、ずっと、ふわふわしているのも、そのせいなのかもしれない。

年上の男に寄りかかり、あたたかいお茶を胃に流し込めば少し気分は落ち着いた。

「ランガくん。約束覚えてるよね？」

ランガの水色の髪を指で梳きながら彼は訊いてきた。

「もちろん。あなたが忘れたり忘れたふりするんじゃないかと思っていた」

「僕が？ そんなわけないだろう」

「俺が成人して自分で決めたことに責任を取れるようになったら、俺は俺の意志で愛抱夢とセックスする。そう決めたんだ」

今までも、ふたりは、会えば抱き合いキスをした。ここ最近はお互いの体を触り合うこともあった。

それなのに、それ以上の進展はなかった。そこから先どのような行為をするのかの知識くらい、一通りはあるつもりだ。多分だけだ。

いい加減焦れて「やろう」と提案したのに、ランガが成人するまで一線は超えないと彼は頑なだった。あと少しだから待ちなさいと。あと少しなら前倒しにしてもどうってことないだろうと主張してみたのだが、愛抱夢は妙にこだわっていた。

普段あれだけメチャクチャな大人のはずなのに、愛抱夢のそういうところは理解が追いつかない。いや、もしかするとメチャクチャなのは愛抱夢だけで、神道愛之介としての顔は、計算高く慎重で用心深いのもかもしれない。

ランガにとって彼はSの王である愛抱夢だ。一緒にスケートをするときの彼は、もちろん愛抱夢なのだ。でもスケート以外で、こうやって一緒に過ごす彼は、神道愛之介の要素が半分くらいあるような気がする。ランガは感じている。

特に根拠はない。ただの漠然とした印象だった。

そこまで思考を巡らせ、一つ肝心なことを訊き忘れていることに気がついた。

「ねえ、愛抱夢」

「何だい？」

「俺とあなた、どっちがトップでどっちがボトムなの？」

髪をいじる彼の指の動きが止まった。首を捻れば深紅の瞳が間近にあった。眉間に皺を寄せ彼は渋い顔だ。

「君の希望はあるの？」

「やってみないとわからない」

そうである以上、いずれ両方試した方がいいとランガの発想はシンプルだ。

隣に座る男は人差し指を立てて、こう提案してきた。

「そう。では今夜のところはこうしよう。とりあえず僕がリードしよう。そのことには依存ないね？」

「うん、ない」

経験値が違いすぎてランガがリードするのは、流石に無理がある。

「それで最終的に君が選んだ。君の判断に僕は従おう。どうかな？」

「わかった」

髪から頬を弄んでいた指が顎を持ち上げ唇が重なった。

唇が外され、さてこれからベッドルームへ移動か、と唇をキュッ結び気を引き締めたと

き、彼はランガの耳元に唇を寄せた。

「バスルームへ行くよ」

「俺、臭い？」

思わず、自分の腕を持ち上げ、クンクンとにおいを嗅いでしまった。目の前の男はクスリと笑う。

「そういう意味じゃなくて、だって君、全身ガチガチに凝り固まっているだろう。緊張しているんじゃない？」

「緊張なんてしていない」

反射的に否定してしまっただのは、失敗だったかもしれない。

はじめてなのだから緊張して当たり前だ。緊張しないほうがいいがおかしい。誰だって、きつと愛抱夢だって最初はそうだったに違いない。

これなら素直に肯定しておいた方がまだマシだった。こういうところに余裕のなさが出してしまうのだと思うと少し悔しい。

男は顔を近づけフーンと覗き込んできたと思うと、ニツと口角が上がる。余裕の笑みだ。なんか腹立たしい。彼の方が大人歴ははるかに長く、こっちは大人になってからまだ

一週間経っていないってことを少しは意識して欲しい。

「君に触ってみて緊張を感じただけ……僕の勘違いかな。うん、でも僕が緊張しているんだ。ということで付き合つて。ゆつたりとお湯に浸かってリラックスしよう。どうかな？」

ランガは「わかった」と目を逸らした。

愛抱夢はランガの手を握り、バスルームに案内した。

湯に浸かることで筋肉が緩みリラックスできると彼はもつともらしく説明する。

広々としたこのバスルームも、他の部屋と同様に仄暗かった。

「ここも暗いね」

「この方が君も緊張しないかと思つてね。ああ君は緊張なんてしていなかったんだつたね。なんなら明るくすることもできるけど、どうする？」

人の悪そうなニヤニヤ笑いにむつとする。絶対に面白がつている。

ランガは「しなくていい」とそつぽを向いた。

全身を洗い湯槽へ入る。

バスタブは長身の愛抱夢とランガふたり浸かっても手足を思いつきり伸ばせるくらいゆつたりとしていた。ランガのマンションにある物入れになっているバスタブの四倍はありそうなサイズだ。

でも、このお湯って？

ランガは両手のひらで湯をすくった。手指の間からトロトロと流れ落ちていく様子をじつと眺め、怪訝な表情を浮かべながら愛抱夢の顔を見た。

「これ、スライム？」

彼は一瞬ボカンとした、と思つたら「君ねえ」とガクリとうなだれる。

「それバスローションでとろみをつけたんだ」

「なんのために？」

「身体がよりあたたまり、リラックスできるようにね。香りもいいだろう？ それに……」

愛抱夢はランガを、背後から腕の中に閉じ込めた。背中に彼の胸がピタリと合わさり、ぬるりと擦れ合った。

奇妙な触感の湯だ。

「このトロトロした感じが、気持ちいいと思わないかい？」

彼の手のひらが肌の上を滑っていく。気持ちがいいというのだろうか。よくわからない。それでも乾いた肌と肌が擦れ合うのとはまったく違うことはわかった。なんとも不思議な肌触りだ。

真似をして愛抱夢の肌に触れみる。彼の腕に置いた手のひらをスライドさせていけば、肌の上に広がるよろみの皮膜が摩擦抵抗を奪いぬるりと気持ちよく滑る。指の腹を押し当て、くるくると回してみた。

なんというか、これ面白い。ぬるぬる、ぬるぬる。この感覚、覚えがある。

ランガはクスクスと笑った。

「何がおかしいの？」

愛抱夢はランガの胸の前で腕をクロスし、首筋に唇を押しつけた。

「俺が小さいころ、父さんとスライムで遊んだことがあったんだ。全身ベタベタにして。母さん呆れていた。呆れられたのは俺より父さんだったけど。それを思い出した」

あたたかいローション風呂で、お互いの身体を触り合い、たわいもないおしゃべりをす。そうしているうちに少しずつ緊張がほぐれていった。

ランガは愛抱夢の弾力ある筋肉に手のひらを置き、滑らせてみる。その質感をじっくり確かめるように。

それにしても、愛抱夢の身体を、意識して見たり、こんなふうに触ったりするなんてこと今までなかった。なんというか新鮮だ。

そうやってあちこち触っていると、指の腹が愛抱夢の乳首を掠った。ヒュッと小さく息を吸う聞きなれない音に手の動きが止まった。はじめて見る反応だった。もう一度、今度は指先で突いてみる。ツンツンと。

「こらっ！ おいたはそこまでだ」

指をぎゅつと握られ、ランガは顔を上げた。彼は口端を上げながらも目は笑っていない。眉間に皺を寄せ、どこか咎めるような視線を投げてくる。

「嫌だった？」

「そうではない。ただ僕の予定が狂うんだ」

「予定って？」

その問いに愛抱夢は応えず、ランガを真正面に向い合わせになるよう身体を回し抱き寄せた。

「僕は君の好奇心を甘くみていたかもしれない。このまま放置してやりたい放題好き勝手やらせていると、エスカレートして何を始めるか分からないね」

「ダメなの？」

「焦りは禁物」

「焦りつて意味がわからない」

「君には難しい日本語だったね」

言い終える前に水色の髪が粘度のある湯の中でふわりと広がった。目を何度か瞬かせた。愛抱夢が真上から見下ろしている。何が起こったか理解するのに数秒はかかった。

湯面へ押し倒されたらしい。

そのまま覆いかぶさってきた愛抱夢は、頬そして唇へキスをした。不意に背中を支えられていた手が外され、湯槽の中へ沈みかけた。耳に湯が入りゴボゴボと口から空気が漏れる。

「ほら、ちゃんと僕に掴まっていないと溺れるよ」

ランガは慌てて男にしがみついた。

「ねえ、これじゃ、俺、何もできない」

「何もなくていいよ」

いや、よくない。これでは反撃できないじゃないか。そんな文句は声になる前にキスによつて封じられた。

体勢を立て直そうと試みるものの、がっちり抑え込まれていて身動きできない。まずい。愛抱夢は本気だ。

やがて歯列を割って侵入してきた舌は、ランガの口腔内を生き物のように這い回り、熱い舌と舌が絡み合った。

ふと肌の上で蠢く指の感触に意識をさらわれる。

その指は脇腹から腹を撫で上げ胸へと向かう。胸筋の上からランガの乳首を見つけ出し指の腹でやさしく触りはじめた。ぐりぐりとやわらかく揉まれるたびに甘い痺れが全身を襲う。

くちゆくちゅという濡れたリップ音を伴いながらのディープキス。せわしく漏れる息遣いは、彼のものなのか自分のものなのか、もう区別はつかなかった。

執拗に唇を貪られ頭がぼうつとする。その息苦しさからランガは首を振り逃れようとし

た。

やつとキスから解放されたランガは、肺に大きく空気を取り込んだ。「ふふふ」という笑い声に目を開けば、深紅の瞳が覗き込んでいた。大きく吐き出した自分の息が、やけに熱い。

胸をもてあそんでいた指が後ろに回された。背骨をひとつひとつ数えるようにして下へと辿っていく。

「抵抗してはダメだよ」

そう念を押し、男の脚がランガの閉じた両膝に割って入り、グイッと左右に開く。手のひらが内腿を撫で、会陰を指でなぞり尻の割れ目へ分け入った。その指はすぐにアヌスを見つけ出し、軽いタッチで襞を愛撫しはじめる。

「待つて、愛抱夢」

もそもぞとする慣れない感覚に思わず彼の手を掴んでしまった。

「どうしたの？ さっきから嫌だ、という反応じゃないよね。だから……その手をどかしてくれないかな」

彼の目が、有無を言わせぬ圧をかけてくる。

愛抱夢が何をしようとしているのかは理解しているし今更嫌ではない。そのくらいの知識はある。それでも……と、ランガは思う。

だって、まだ決めていないじゃないか、俺に決めさせてくれるって言ったのに？

ランガが躊躇っている間にも、その行為は徐々にエスカレートしていった。やがて男の指は侵入を試みようとする。粘度のある湯は潤滑剤のような役割を果たしているのか挿入時の抵抗は思いのほか少なかった。

やがて指は二本に増え内壁を広げ始めた。はじめて感じた痛みに顔を顰める。こじ開けられたそこから、自分の体温に近い温度の湯が入り込むのを感じてランガは顔を背けた。

「中、熱いね」

押し殺した声が鼓膜に絡み、耳朶に熱い舌が這う。喉を逸らし、抑えきれなかった甘い声が漏れた。

突然、彼は指を引き抜きランガの勃起上がったペニスをやんわりと握った。

「つつ……」

思わず息を詰める。

「ベッドに行かず、ここでこうしてフィニッシュにすることもできるよ。何も今日、焦っ

で一氣にことを進める必要もない。どうする？　こんなこと、今でなくてもいつでもできるんだから」

いつでもだつて？　何を言っているんだ。

「い、や、だ！」

ランガは強い口調で返した。

愛抱夢はその勢いに困惑の表情を浮かべた。

「どうしたの？」

いつでもできるから。そう言つて、いくつもの約束とランガを置き去りにしていなくなつた人を知っている。

だから……。

「いつでも、なんてダメなんだ。今じゃないと。今がいい」

ランガの真剣な眼差しに何かを察したのだろう。愛抱夢は困つたような笑みを浮かべた。

「言い出したらきかないね。君は。後悔しても知らないよ」

強く抱きしめてくる愛抱夢の背中にランガは腕をまわす。

「いいよ。どうせ、あなたは俺を後悔させたりしないでしょう？」

「上等だ」

ローションをシャワーでさつと流し身体を拭いた。愛抱夢は自らは赤いバスローブを身につけ、白いバスローブでランガをくるみむと、ひょいと抱き上げた。

「ベッドまでこうして抱いて行くよ」

「重くないの？」

「重いわけないだろう。僕を誰だと思ってる？」

愚問だった。この人はランガとの初めてのビーフで、滑りながら手を掴みぶん回してくれるような化け物だ。並大抵の筋力や体幹の持ち主ではない。

ランガは安定するよう愛抱夢の首に腕を巻きつけ、ふんわりとした赤いバスローブに顔を埋めた。

愛抱夢は白いシートの上にランガを横たえ、バスローブの前を開く。両脇に手をつき、上からじつと見下ろした。

「最後の確認だ。やめるのなら今のうちだよ」

「もう、しつこいんだから。俺はやめない」

ランガは唇を尖らせた。

彼は「そう」と薄く笑いゆつくりとランガに熱い身体を重ねた。

顔にあたたかい息がかかる。唇を重ねてから、頬、首筋から胸へ、さらに下腹部、内腿へと口づけは移っていった。

ランガの敏感なポイントを彼は、優しくかつ容赦なく攻めていく。唇で、舌で、指で。ただ彼に触られているだけなのに快感は際限なく高まっていくようだった。頭の奥が痺れ朦朧としていく。思考することが難しくなり、やがてすべての境界がぼやけていった。シートと身体、他者と自分。どろどろに溶けて混ざり合う。

こんなのではないとランガは思う。こんなふうになただ受け身でいることしかできない自分なんて。普通ならさっさと切り返し反撃に出ているのに。

「そうだ。約束だったね」

朦朧とした意識の中に、冷静な男の声が届いた。

「約束？」

声が掠れていた。

「ランガくん、選ばせてあげるって言っただろう？ 選んでいいよ。トップとボトム。どちらにするか」

意味はわかる。なのに霧がかかったみたいで思考が定まらない。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

ただひとつ言えるのは、こんなふうに追い込んでおいて、この選択をさせるとするのは理不尽ではないだろうか。

ランガは目を何度か瞬き、なんとか男に焦点を合わせようとした。赤いバスローブはすでに脱ぎ捨てられ彼は全裸だ。

鍛えられた三角筋に覆われ、丸く盛り上がった肩。分厚い胸筋から、腹筋へと視線を落としていった。腰は思いのほか細く引き締まり見事な逆三角形の体型をつくっている。

そうだ。この人は本当に美しい。心からそう思った。

その腰から続く股間に目を移せば、綺麗な造形を見せるペニスが屹立している。そこから目が離せなかった。

（俺は、あれが欲しい）

そう脳内ではつきりと言語化してしまい、ランガは激しく狼狽えた。欲情している自分を、もう誤魔化すことはできない。それは自分の中にある明確な欲望を認めた瞬間だった。

（あの熱いものを身体の奥に受け入れ感じたい。そしてあの人が望むままに俺を激しく掻き混ぜて……）

彼は再び訊いてくる。

「ほら、希望を言ってみて。君はどうしたい？ どうされたい？」

澄んだ青い瞳が目の前を映し出していた。

悔しい気持ちはある。今に見ているとも思う。

それでも……。

どうしたのかなんて、とうに心は決まっている。

愛抱夢の頬に指を伸ばし、そつと触れた。ランガはふわつと微笑んだ。

そして目を閉じ、その言葉を口にする。

「Fuck me, Adam.」

## 猫と遊ぶ

「愛抱夢、この子すごく慣れているね」

愛抱夢との早朝デートでのスケートのあと、食事を終えて公園を散歩した。そこで一匹の猫に出会った。成猫に近いサイズだったけれどまだ子猫と言っていい。野良猫のようだが人懐っこく、ランガから離れようとしない。

その猫と戯れつつ振り返れば、愛抱夢はベンチで脚を組み微笑みながら手を振った。

「ランガくんは猫が好きなの？」

「猫も犬も、動物は好きだよ」

「ペットは飼わないの？」

「うちのマンシヨン、ペット飼えないから」

「そうだったね」

日本のマンシヨンのほとんどがペット不可だ。ペットを飼いたければペット可のマンシヨンを探さないといけないのだ。それに今はまだ自分も母さんもペットを飼う余裕はないことをランガは知っている。

そういえば愛抱夢は、猫と遊ぶランガを眺めているだけで、こちらに近寄ろうとはしない。猫が嫌いなのだろうか。

「愛抱夢は猫が苦手？」

「どうしてそう思ったの？」

「さつきからこつちへ近づこうとしない。アレルギーとか？」

愛抱夢は困ったように笑った。

「アレルギーはないけど、まあ、あまり得意じゃないかな。ちょっとしたトラウマがあつてね」

ランガは立ち去ろうとする猫にバイバイと手を振って、愛抱夢の隣に再び腰をかけた。

「トラウマ？」

「子供のころ色々あつてね」

ふーんと、ランガは青い瞳をキラキラとさせて愛抱夢に顔を近づけ覗き込んだ。気になる。この人にも弱みがあるのだろうか。猫が怖いとか、ちょっと可愛いかもしれない。

「何があつたの？」

「聞きたいの？」

「聞きたい」

「他の人に言つてはダメだよ？」

「言わない」

「なんか、ワクワクする。」

「じゃあ、と彼は話し始めた。」

「僕の家では、スナック菓子、駄菓子の類は食べさせてもらえなかったつて話をしたことあつたよね？」

「うん」

「ある日、忠が小さなボトルに入つたラムネ菓子をこっそりくれたんだ。見つからないように食べてつて」

「ラムネ菓子？」

「ああ、そういえばカナダにはないかもしれないね。あとで買つてみようか。ソフトな粉っぽいキャンディつて感じかな。甘くて酸っぱいんだ」

「うん、食べてみたい」

「多分そんな美味しいものではなかったんだと思う。でも当時の僕には神道家の大人たち

が絶対に食べさせてくれない味で、宝物みたいに感じた。毎日少しずつ、一日、二粒か三粒って決めて大切に食べていたんだよ。もちろん隠れてだけど」

「それと猫とどういう関係が？」

「ああ、そうだね。その頃はまだ猫が苦手とかなかったんだ。人懐っこい野良猫とかいると隠れて遊んでいた。その日、忠にもらったラムネ菓子がポケットにあることを思い出して、猫に分けてあげることにした」

「猫が、そんなもの食べるの？」

「口元に持っていつてやったんだけど、食べようとしない。遠慮しているのかと思って」

「猫が遠慮？」

「僕が直接食べさせてあげることにした。口を手でこじ開けてラムネを入れてやったんだ。喜んでくれると思ったんだけど……」

この人、何を言っているんだろう。

「猫が喜ぶ……わけないよね？」

「そうなんだ。唸り声を上げながら、すごい勢いで引つ掻いてきて、猫はどこかに行ってしまった」

「それが、トラウマ？ 引つ搔かれたくらいで？」

「普通トラウマになるだろう。引つ搔かれたのはどうってことなかったんだ。ただ、あのラムネ菓子がどれほど大切なものだったか。その貴重な菓子を分けてあげたのに、食べてくれなくて地面に落ちて無駄になってしまった。子供心にもうすごいショックだった」

トラウマになったって、そこ？ とランガは内心突っ込んだ。災難だったのはむしろ猫だったのではないだろうか。

「猫だって好きでもないものに口に入れられて、迷惑だったんじゃないかな」

愛抱夢は、そのときの小さな自分に戻ってしまっているのか、どうも言っていることが子供っぽい。

「あの猫は、純真な僕の気持ちを踏み躪ったんだ。僕の優しい好意になんという仕打ちだと思ったよ。僕は太いに傷つけられた」

大袈裟な、とランガは絶句する。前々から芝居がかった大袈裟な人だとは思っていたけれど子供の頃からそうだったのだと理解した。こういうのを「三つ子の魂百まで」とか言ったっけ？

「子供のやることなんだ。猫も少しは考えてくれればいいものを」

そう言い終えて愛抱夢はランガを見る。困惑した顔を向けるランガを見て、さすがに氣まづくなつたのか「この話はこれで終わりだ」と軽く咳払いをした。

そしてベンチから立ち上がり「さて、ではラムネ菓子を買に行こうか」とランガの手を引いた。

ランガは、啞然として愛抱夢を見つめたまま腰を上げた。

「もしかして、愛抱夢ってバカだったの？」

反射的に口走ってしまつて、慌てて口を手のひらで押さえた。

しまったと思う。心の中でこつそり思うだけのはずだったのに声にしてしまった。

そしてふたり、なんともいえない空気の中しばし見つめ合っていた。

《了》

## アダムとイヴ、ルシファーとリリス【R18】

神は退屈凌ぎにヒトという新しいおもちゃをつくった。己の意志を持たない従順なおもちゃに神は愛情を注いだ。

明けの明星と謳われもつとも美しい大天使であるルシファー。彼は従順で知性を持たないヒトに跪けと命じる神に反発した。同じく己の存在意義を見つけようとする同志が集った。

天界戦争。

勝つ見込みがないことなど百も承知。

神が溺愛したヒトに対する嫉妬？ 神に取って代わろうという傲慢さ？

そんなものではない。勝手に言っていればいい。

「エデン——呆れるほどガバガバなセキュリティだな。ケルビムに化けたらあっさり潜入できたぞ」

「さすがアイノ……いえ、ルシファー様」

ルシファーは遠くで小動物と戯れる二つの人影を指差した。

「見ろ、スネーク。神が自身の身姿に似せて天使の次につくったヒトであるアダムとその妻イヴだ」

「ヒト……」

「ヒトは己の意志を持たない従順な、土塊から作られたおもちゃでしかない。神はよほど退屈していたらしい。ちなみにアダムは僕の妻リリスの元夫だ。リリスの話ではアダムは退屈な男でね。セックスは妻が上になることを頑なに拒否しいつも同じ体位でしかまぐわおうとしなかったそうさ。それでリリスは飽き飽きして愛想尽かしたのさ。そのあと神はひとりにはよくないとアダムの肋骨からイヴをつくった。強い自我を持ったリリスとは違う。イヴはアダムに従順で純真無垢だ」

「それよりルシファー様、今日のところは他の天使に見つかる前に立ち去った方がよろしいかと存じます」

「ふん。そんなヘマはしない。それよりおまえの身体を借りるぞ」

「何をなさるおつもりですか？」

「見ていろ。あいつらに知恵——自我——を植え付けてやる。放っておいても自我はいずれ芽生えるものだ。所詮神の創造物である僕たち天使や妻リリスがそうであったように。」

それは明日かもしれない、何百年、何千年先の未来かもしれない。でも、そんな時間をはけるなんて馬鹿馬鹿しいと思わないか？ さつさと、そうだ一瞬のうちに目覚めさせてやるだけだ。知恵の実を使つてな。ああ僕はなんて親切なんだろう」

§

心地よい風。

柔らかな陽の光と青く澄んだ空。

清涼な空気。素肌にも縋わずとも寒くも暑くもない快適な気候。

どこまでも広がる緑色の草原をあてもなく緩やかな歩調で歩く。

ヒトを害する凶暴な肉食獣など、どこにもいない。草食動物がのんびりと草を食むだけ。肌を傷つけるような棘を持った草木などない。

のどかで平和な世界。

空腹に苛まれることもなく病むことも老いることもない。

ただ食べて、無垢で罪のないセックスを繰り返すだけ。

何も考えなくていい。時間が過ぎていく。そもそも時間の概念などない世界だ。

それが樂園。

ならば、この地上は地獄だということのか？

エデンを追放されたアダムとイヴは荒廃したこの地で慎ましやかになんとか暮らしていた。

罪を犯したとはいえ、神も天使も彼らには最低限の手は差し伸べていた。

ふたりが暮らす質素な小屋へと足を踏み入れた。

「誰？」

イヴは家事の手を止め無遠慮な訪問者へ目を向けた。続けてアダムも顔を上げる。

「やあ。エデンで会った以来だね」

「あなた誰？ アダムに似ている」

イヴは首をまわして、アダムの顔と訪問者の顔を交互に見比べた。

「僕はルシファー。そうか、あのとき僕はスネークの身体を借りていたから、この姿で君に会うのは初めてだったね。こっちが本当の僕だよ」

「ということは僕たちを墮落させた蛇……サタンなのか？」

アダムが立ち上がる。

「墮落とは心外だな。それと、こちらが僕の妻、リリス。アダムはよく知っているよね」  
ルシファーの背中からびよこつと顔を出しリリスは微笑んだ。水色の髪、青い瞳。イヴとリリスは瓜二つだ。

「元氣だった？ アダム」

リリスはアダムの前に立ち首を傾げた。

「リリス……君がサタンの妻に？」

「俺に似ている？」

「神は意外とものぐさなのさ。別の造形を考えるのが面倒だったんだろう。まあアダムの好みに合わせてあるのかもしれないが」

「待てよ。だとするとアダムは大天使ルシファーのデザインを再利用したのか？ と気づく。まったく、なんという手抜きだ。開いた口が塞がらない。」

「あなたは俺を騙したんだ。知恵の実を食べさせたせいで俺たちはエデンを追われ地上に墮とされた」

イヴはきつとルシファーを睨んだ。

おお、地上に降りてこんな表情もできるようになったのか。そう思うと感慨深い。それでもリリスに比べれば、まだまだ幼く純真だ。

「よかったじゃないか。どうだい？ 知恵がついた感想は。素晴らしいだろう？ アダム」

「何を言っているんだ。エデンは悩みも苦しみもない幸せな世界だった。それをおまえたちが奪い僕たちはこんな苦勞を——」

「ほう、エデンは、知能が足りないヒトにとって楽な世界だったな。頭を使わないで済む」

小馬鹿にしたような口調で言うルシファーは、イヴの腰をグイッと抱き寄せた。イヴはバランスを崩しそのままルシファーの胸へと倒れかかる。

「何をする」

「退屈ではないセックスだよ。アダムのセックスはワンパターンでつまらないだろう？ 君はセックスで気持ち良くなったことあるのかな？」

イヴの耳元にあたたかい息を吹きかけた。イヴの肩が震えた。

「あ、ある」

「いいや、ないね。断言してもいい。本当の意味ではないよ。アダムはおざなりにしか愛撫なんてしていいだろう？ 何、そんなことすぐに想像つくさ。キスもそこそ前戯なんて発想はない。下卑た言い方をすればアダムが溜ったものを出してスッキリして終わるだ」

「俺は、不満なんてない」

「それは、つまりアダムの満足が君の悦びだったんだ。健気だね」

「違う」

「違わないよ。これから僕が君にセックスの気持ちよさを教えてあげよう。愛しのイヴ」

「アダム……!!」

助けを求めるようにアダムに視線を向けた刹那イヴは目を見開いた。

今のアダムはイヴどころではない。下半身を剥き出しにし仰向けになり膝を立てていた。その両腿に挟まれるようにして蠢くのはリリスの頭だ。水色の髪に指を絡ませ、アダムはきつく目を閉じ荒い呼吸を繰り返していた。

アダムの喘ぎ声は少しずつ音量を増していく。同じ部屋にイヴがいることなど、すっかり忘れていくように。今のアダムはリリスに与えられる悦楽に夢中だ。

かわいそうなイヴ。耳を塞ぐことができればどれほど楽だろうか。

イヴの顎を掴み顔を覗き込めば、青い瞳にありありとした絶望の色が混ざっているのが見て取れる。

「大丈夫。アダムのことはリリスに任せよう。知恵を得たアダムが今のリリスをどう受け入れるのか、実に興味深い。これでアダムもつまらない男ではなくなる」

言いながらイヴの簡素な着衣を一気に脱がした。慌てて体を隠そうとするイヴの両手首を掴む。

「さあ、こっちはこっちで楽しもうか。これで君はもうエデンにいたころの自分がちつとも幸せではなかったと知ることになる」

ゆっくりと体重をかけラグの上にイヴを押し倒し、真上からじっくりとその白い裸体を眺めた。伸びやかな筋肉に覆われた肉体は美しい。

首から胸、脇腹へと手のひらを這わす。唇を重ね、そのまま唇と舌を全身に這わしていった。アダムから一度も触れられたことのないだろう性感帯を探しあて愛撫していく。リリスと寸分も違わぬはずなのに、その反応は無垢で初々しい。これが日常的にアダムと身体を重ねていたというのか。

乱れる息。抵抗は形ばかりで弱々しい。

不意に、半開きになった薄紅色の唇から甲高い声が響いた。ルシファーは動きを止める。

自分の声の大きさにショックを受けたのだろう。汚れない純白の雪を思わせる肌が、さつと朱に染まった。

「声が出てしまったことが恥ずかしいのかい？ いいねその反応。すれっからしで羞恥心と無縁のリリスには望めない。新鮮だ。ゾクゾクするよ」

「ん……ちよつとルシファー、俺の悪口、聞こえているよ」

アダムにまたがり腰を揺らしながらリリスが喘ぎ交りに文句を言った。

「別に悪口じゃないよ。新鮮だというだけだ。君だって、ほら久しぶりのアダムは新鮮だろう？」

「まあ、言われてみれば、そう……だね」

そのとき呻き声とともに、アダムは大きく喉を反らしピクピクと全身を震わせた。

「あつ！……まだダメだって。もう少し堪えてよアダム。もう……」

クスクスと笑いながらリリスは、アダムの唇にむしゃぶりついた。

ふたりからイヴに視線を戻し、指と口を使い彼の敏感な箇所を弄び、追い詰めていく。イヴは従順だった。リリスと違い。自ら動くこともなく、されるがままに大きく身体を開かれ、惜しげもなくその姿態を晒してくれる。

うつすら開いた瞼から覗く青い瞳は虚で、思考は止まり、ただ肉体に与えられる快を追うことしかできていない。

いい……実にいい。僕が与える快感に流されていく。それでこそ僕のイヴだ。

唇から漏れる吐息の熱さが増し、苦しげな喘ぎがとめどなく漏れはじめたタイミンで、ルシファーは尻の割れ目にそって指を滑り込ませた。入口そして内側へとほぐしていく。もう片方の手は、緩慢な愛撫を続けた

その間、埋め込んだ指の本数を増やしながら自らの通り道を広げていく。時間をかけ慎重に。自分を受け入れたときに傷をつけないように。

「君は、アダムに、ここでイかせてもらったことないね。オーガズムなんて知るわけないか。まったくもって甲斐性なしの男だ。何か反論は？ アダム」

アダムを嘲笑するように言い顔を上げる。アダムはリリスと抱き合い、ただこちらを見ていた。

「虐めないであげて。アダムはこれからだから」

リリスが元夫にフォローを入れる。

そして第二関節まで埋め込んだ指で腹側を押してやれば淫らな声が部屋中に響いた。おそらくこんな声をアダムは一度も聞いたことないのだろう。

「いい声だ。もつとアダムに聞かせてやるといい。そして、これから僕に犯され快楽に溺れる君の媚態を見せつけてやるんだ」

指を引き抜き膝の裏をつかみ肩にかける。そしてペニスを少しずつ押し込んでいった。覆い被さりながら軽く唇を重ね、ゆつくりと体重をかける。異物を押し戻そうとするような抵抗に逆らいながら強く腰を埋め込んだ。深くなった結合の刺激に反らせた白い喉から苦しげな呻きが漏れる。無意識に逃れようとする身体を引き戻しルシファーは緩やかに腰を動かしはじめた。

君はこれで知るだろう。今、この瞬間が樂園だと言うことを。

## 桜を愛でる、君を愛でる

### 一、花の雨

沖縄の桜は一月から二月に開花し、各地で桜祭りが開催される。

内地では桜といえば薄紅色のソメイヨシノのことだが、沖縄で桜といえば濃いピンクのカンヒザクラを指す。ソメイヨシノはここ沖縄に植えたとしても花開くことはない。

ランガは市内で開催された桜祭りに赤毛たちと行ったときのことを話してくれた。

エイサーのステージや屋台など、カナダではお目にかかれないイベントはもの珍しく、存分に楽しんだようだった。友人たちとのひとときを屈託なく報告してくれる彼の嬉々とした様子に、それでもなんとか大人の対応ができたと思う。

穏やかではない心の内を余裕の笑みで覆い隠して。

嫉妬するようなエピソードがあつたわけではない。ただ、自分も彼とふたりで花見をし

たかった。いや、そうではない。桜の中にたたずむランガをこの目で見て、ただ愛でたかった。ささやかにそう願っただけなのだ。

そこではたと気づく。

ん？ 待てよ。ならばチャンスはある。関東地方の桜はまだ先だ。三月末から四月にかけて開花する。そこへ彼を誘い花見をすれば済む話だ。

そうと決まれば、花見スポットの選定だ。

愛之介は、過去に訪れたことのある桜の名所を思い浮かべた。名所というだけあつて多くの花見客が押寄せていたことを思い出す。

人目につくところは避けたほうが無難だ。ならばどこに決めればいい？

さらに記憶を手繰り、やがて思い出す。そうだ。あそこあの桜だ。あれがいい。

§

愛之介は計画通りランガを旅行に連れ出していた。

そこは東京からさほど離れておらず、渋滞に巻き込まれたりしなければ車で二時間かからず辿り着くはずの近場だったが、スケジュールの調整がうまくいかず目的地である貸別荘へ到着したときには、辺り一帯すっかり暗くなっていた。

ふたりを送り届けた忠は近くのホテルに宿泊し、明日迎えにくることになっている。

その貸別荘に決めたのは、周囲に野生の桜が自生するからだ。前に宿泊したときは、桜が目的だったわけではなかったのだが、一般的なソメイヨシノとは違う、ここの清楚な桜が強く印象に残っていた。

その桜の花色は純白。白い花と瑞々しい新緑の葉を同時に観賞できる。かといって、ソメイヨシノのような華やかさは感じさせない。そのおかげか、この桜の下で花見をしようなどというものは、いない。

そんなわけで誰かに邪魔をされる心配はないだろう。静かにふたりだけの世界を堪能できる。

今年は例年になく桜の開花が早かった。すでに散りはじめの際どいタイミングだったことがわかる。

満月の明るい光を浴び、ランガは目を輝かせ頭上の桜を仰いだ。見れば花びらが彼の周りをはらはらと舞いながら落ちていく。

そのとき、一陣の風がふたりの間を吹き抜けていった。白い花びらが一斉に散っていく。ざわざわと梢や葉が擦れる音がした。

ランガは振り向き、吹きつける風に乱される髪を手で押さえ、微笑んだ。

「すごいね。まるで雪、吹雪みたいだ」

「もちろん。桜吹雪というくらいだからね。沖繩の桜は品種が違うから、こんなふうに花びらがひとひらずつ散ったりしなかっただろう？ だからこの桜を君に見せたかった。まあカナダにも日本から寄贈された桜があつたかな」

「あるけど、花びらが雪みたいに見えるなんて知らなかったよ。それと夜に桜を見るのも初めてだ。花は明るいうちに見るものだから」

ランガはもう一度、首を背後に反らし桜を見ている。

無数の花びらが、満月の透明な光を受け銀色にキラキラと煌めきながらランガに振り注いでいた。ランガは空中に舞う花びらに触れようとするかのように手のひらを上に向け腕を掲げ、ヒラヒラと振っている。同時に薄闇の中で青を失くした彼の髪が、雪色に耀<sup>かがや</sup>って

いた。

その姿は、綺麗なんて言葉では表現できない。ふと浮かんだ言葉が清らかだった。

そうだ、白い桜の花言葉は『純潔』。

強引に連れてきた甲斐があつたというものだ。と愛之介は目を細め、その幻想的な風情にしばし見惚れていた。

不意に、漠然とした不安を覚えた。

白くきめ細かい、どこか無機質に見える肌と相俟って、彼はあまりにも美しく儚げで、この月明かりの中に霧散してしまうのではないか。そんな妄想に囚われた。

「ランガくん」

思わず駆け寄り指を伸ばす。

大きく目を見開き振り向いたランガの頬に触れた瞬間、確かな肌の質感と温度を感じ、ホッと胸を撫で下ろした。そして彼のうなじを手のひらで支え、髪に付着している何枚もの白い花びらを指で丁寧に取り取っていく。

そんな愛之介を捉えた青い瞳が、何度も不思議そうに瞬いた。

「どうかした？」

「いや、君が消えてしまうのではないかと。急に怖くなった」

ランガは眉を寄せ唇を曲げた。

「何を言っているの？ 消えるなんて、そんなことできるわけないだろう。俺、忍者じゃないんだから」

ランガらしいピント外れな一言に、安堵の息を吐いた。そうだった。彼はそんな柔な子ではない。温かい血が流れている生身の人間なのだ。自分のばかばかしい想像力に自嘲する。

ふと感じた頬を掠める風の冷たさに、急激な気温の降下を知る。夜気は湿気を帯びてきているようだった。夜空を見上げれば薄雲が広がっているようで、星々は見えない。明るく輝いていた満月も、ぼんやりとした朧月となって柔らかい光を放っていた。

夜半から早朝にかけて雨になるとの予報が出ていたことを思い出す。低気圧が近づいているのだ。関東地方でも山沿いは、みぞれ混じりの雨になるかもしれないと言っていた。

「花の雨になりそうだな」と、彼に聞かせようとしたわけでもない言葉をぼつりと漏らす。それを聞いてランガは手のひらで落ちてくる花びらを受け、握りしめ怪訝な顔で首を傾げた。

「花びらが？ 今度は雪ではなくて雨って、解けるの？」

「あ、そういう意味じゃない。花の雨とは、ちょうど桜が咲くころに降る、文字通り雨のことだよ」

「日本語難しい」

「少しずつ覚えていこう」

愛之介は目尻を下げ、ランガの頭を撫でた。そのとき、また冷たい風が吹きつける。

ランガは自分を抱きしめるように両二の腕を掴むと、ぶるりと震えた。

愛之介はランガの肩に手を回し胸に抱き寄せた。彼の背中に手のひらを滑らせ確認してみるのが冷たい。沖縄感覚で薄いシャツ一枚では無理がある。これでは流石に寒いだろう。そのまま温めるように、ぎゅつと抱きしめた。

「身体が冷え冷えた。明日の朝はもっと冷え込むだろうね。ジャケットはちゃんと持ってきた？」

「一応。ほんと、こんなに気温が違うとは思わなかった。沖縄に慣れると、こっちは肌寒く感じるね。それでもカナダに比べれば暖かいはずなんだけど。不思議だ」

「君の身体が少しずつ沖縄仕様になっっているんだよ。人間って結構順応力があるからね」

「あなたも母さんと同じことを言う」

「そろそろ中に入ろうか」

「わかった。明日、明るいところでも桜を見ることが出来る？」

「どうかな。雨の予報が出ているから、難しいかもね」

「そう、残念」

ランガは名残惜しそうに仰向いて桜を見た。風が吹くたびに、花びらは飛ばされ空中を漂っている。

「でも、明日の朝には——そうだな、雪原を見られるかもしれない」

言いながら、彼の輪郭を手のひらで包み顔を近づけていく。ランガは「何それ？」と目を丸くし、それでも臉を閉じ愛之介の口づけを受け止めた。

間もなく雨が降り出すだろう。天気予報では、明け方にかけて雨脚が強まっていくという。その雨粒に叩かれ、桜の花は明日まで保たない。そして、明朝になれば、青空の下で地面に敷き詰められた真つ白な絨毯を眺めることができるだろう。

そう、白い雪原のような。

二、桜餅を頬張る君を見る

夜半から雨脚が強まり夜明けまで降り続いた雨も上がり、梢の間から覗く空は青い。そして桜の木の下には一面の白い花びらが絨毯のように敷き詰められていた。当然、花はほぼ散ってしまっている。

「起きて。ランガくん」

シャツとカーテンを引けば、さつと朝日が差し込んだ。

「うっ……眩……しい」

掠れた声に振り向き、ベッドに目をやればランガは腕で目を覆っている。

「そりや朝だからね。それより雨がうるさかったけどちゃんと眠れた？」

「雨？ そんなにうるさかった？」

目を擦りながら上半身を起こそうとする彼の背中を抱き支えた。

「目が覚めなかったのならよかったよ。では朝食にするけど食べられそう？ ケータリングを頼んである。そろそろ届く時間だ」

「うん、お腹空いているみたい」

ぼーっとした様子で、それでも胃の辺りに手を当てている。

なんとか支度を終えたランガとテーブルを囲む。朝食のメニューは、クロワッサンとフランスパン。近くの牧場のミルクでつくられたヨーグルト。地元産の野菜を使ったサラダ。トマトのコンポート。ハムとソーセージ。地卵のトリュフ入りオムレツ。野菜スープ。フレッシジュース、紅茶とコーヒー。

「おいしそう」

そう言つてランガは、テーブルに並べられた料理に口をつけ、黙々と食べていく。目の焦点がどうも合っていないように見える。

「どう？」

「うん眠い」

まだ寝ぼけているのか、と愛之介は内心頭を抱えた。まあ、そういうところも彼らしくかわいいと思うのだが。

「そういうことではなくて、料理は口に合う？」

「ん？ あ、とても。このオムレツ……俺がつくるのと全然違う。中がトロトロしているし。どうやったらこんなふうにつくれるんだろう？ パンは焼きたて？ サラダも新鮮」

一応それなりに味わつてはいるらしかった。

「それは何より」

綺麗に食べ終えたころランガは、やつと目が覚めたようだった。

食後の紅茶を飲みながら「とてもおいしかった」とすつきりとした笑顔を見せた。

それから窓の外を眺め、すっかり散ってしまった桜を残念がり、庭にぎつしり敷き詰められた白い花びらの絨毯を見て「愛抱夢の言ったとおりだね。Snow field!」と振り向き目を輝かせた。

「さて、特別なデザートを用意してあるけど、食べられる？　ランガくんは食べたことあるかな？」

「何？」

「桜餅。桜の香りがするんだ」

菓子皿に乗せた桜餅と緑茶を彼と自分の前に置いた。

「桜？　初めて見る」

「食べたことなかったんだね。沖縄の和菓子屋でも売っているし大して珍しいものではないけどね。一年中普通に作れるはずなのに、なぜかこの桜が咲くシーズンだけ売られたりする

るんだ。だから沖繩では「月から、せいぜい3月くらいまでかな」

「食べていい？」

「どうぞ。他にも桜風味の焼き菓子詰め合わせもあるけど、君のお母さんへのお土産に用意したものだから、あとでふたりで食べて」

ランガは桜餅を鼻を近づけ、あれ？　と言いたげな表情になった。

「このにおい、昨晚桜を見ながら嗅いだにおいと似ているね。もつと弱いにおいだっただと」

「この和菓子は、桜の葉の塩漬けを巻いて、香りに移してあるんだ。花のにおいは、また少し違うとは思うけど方向性は同じ」

「この葉っぱは取るの？　食べていいの？」

「好みな。お店は食べないで、と言っていたから、最初は剥がして食べてみて」

彼はうなずき桜餅から葉を剥がして、ポイツと口に放り込んだ。小振の桜餅とはいえ一口とは。

もぐもぐ、ごくんと呑み込むと「おいしい」とお茶を口に流し込んでいる

「もつと食べる？　まだあるよ」

青い瞳をキラキラさせ、コクコクと首を縦に振って「食べる！」と身を乗り出す彼に、これは本当に昨晚のランガと同一人物か？と少々頭が痛くなる。

桜吹雪の中での幻想的な、あの情景が脳裏に再現された。

月の光を受け銀色に煌めく花びらが降り注ぐ中、頬も髪も唇ですら、暖色と呼べるような色彩の一切を失い、ただ青みがかった薄闇の中に溶け出していた。

その風情はヒトのカタチをしたヒトならざるもの。汚れとはほど遠い、いや誰も触れることすら叶わぬ浮世離れた存在に見えた。消えてしまうのではないか。そんな馬鹿馬鹿しい妄想に囚われ、彼の肌感と体温を確認しなければならなかった。

それが、今やどうだ。

正面に座るランガは完全に目が据わっている。目の前にある桜餅に夢中だ。今のこの子の脳内は桜餅一色なのだろう。

愛之介は目を細め、ふふふ……と唇の端を持ち上げた。

「何を笑っているの？」

「いや、そうやって桜餅を頬張るランガくんも、実にラブリーだと思ってね」

「何それ」とランガは眉根を寄せ唇を尖らせた。

そういつた拗ねた顔も、またラブリーだと思うけど、それを言ったら流石に君は怒るだろうか。

愛之介は上機嫌の笑顔で、一つだけ残った桜餅をランガにすすめた。

《了》

## 君が繋いでくれた俗世へ戻ろう【R18】

一日中引きずりそうな後味の悪い夢を見るようになったのは、ここ最近のことのように思う。

先日見た夢は、腕に赤い何本もの赤い線が刻まれていく——そんな夢だった。あのととき受けた痛みの記憶が鮮明に蘇る。目が覚めたとき、肌の上に刻まれた傷の痕が赤く浮き上がっていた。その行為を「愛」だと言われても疑うことはない。あれを暴力とは認識できないほど、夢の中の自分は幼かった。

もうひとつ、必死に誰かを探している夢も見た。やはり自分は子供だった。

神道家の暗い屋内を隈無く探した。使用人に「……見なかった？」と聞いて回る。皆困ったように目を逸らし首を横に振った。

庭に出る。庭師を見つけやはり「……はどこ？」と訊く。この庭師……名前は……だ。

「愛之介様……息子はどうここには来ません。大旦那様の言いつけです。愛之介様によからぬ影響を与えるからと。息子をご迷惑をおかけして申し訳ありません」

そんな……。嫌だ嫌だ嫌だ。忠、忠、忠、どこ？

もう一緒にスケートできないの？ 忠、行かないで！ ここにいて！

夢の中で泣いて、目が覚めた。

現実を起こったことは全く違う。忠は愛之介にスケートの楽しさを教えたくせに、そのスケートを取り上げた父親の側についた。それは愛之介を裏切ったと同義だ。さらに忠は神道家から離れたことはない。今でも愛之介の秘書として、日頃もつとも近いところにいて仕えている。それなのに、なぜこんな奇妙な夢を見させられるのだろう。

内容を覚えていないことも多いが、おそらく繰り返し似たような夢を見ている。間違いない。目が覚めたとき、強い無力感と喪失感に苛まれているのだ。大切なものを、心の拠り所を奪われるのだという不安だけが残る。最悪の気分だ。

そんなこと、今の現実世界での神道愛之介には、無縁でなくてはいけないことなのに。

これを悪夢というのだろう。こんなくだらない夢で真夜中に起こされると、そのまま朝まで寝付けないことも多い。睡眠が浅いことはよろしくない。日中のパフォーマンスに響き、今後、政務に影響しないとはいえない。いつもの神道愛之介のキレが鈍くなるのは問題だ。気づいているものは、まだいないだろうが、のちのち勘繰られるのも面倒臭い。

就眠場所を変えれば悪夢から解放され熟睡できるのだろうか。週末、気休めと知りつつ愛之介は、別荘で休むことにした。

正直それでも眠るのが、少々憂鬱だ。

ふと雪色の少年を思う。

彼がそばにいてくれれば違うのだろうか。

愛之介は手にしたスマートフォンをディスプレイをしばらく見つめていた。まだ夜の十時前だが彼のことだ。もう寝ているかもしれない。メッセージの方が無難だろう。寝ていたら諦めればいい。そこまで深刻な状況ではないのだから。

指が少し躊躇うように彷徨い、それから決心して画面に触れた。

なんて切り出そうか。

彼に知ってほしいのか隠しておきたいのか、愛之介自身もよくわからなかった。取り敢えず軽い感じで、どちらへも自然に繋がるように――指が動く。

へランくん、助けて

幸い就寝前だったらしく、すぐに折り返しの電話がかかってきた。

——「どうしたの？」

「このところ眠れないんだ」

——「睡眠不足？ 何か心配ごととか？」

「怖い夢を見るんだ。おぼけに追いかけられる夢とか」

——「はい？ なに子供みたいなことを言っているの？」

「だって僕は子供なんだろう？」

——「もう、すぐそれを持ち出す。……俺、どうしたらいい？」

「なるべく早く。できれば今すぐ会いたいけど、都合は？」

——「うん、大丈夫」

「今、いつものあの別荘に僕はいる。待っている」

——「わかった」

それから一時間も待たずに別荘のインターフォンが鳴った。

「やあ。早かったね」

「急いで来たから」

「上がって。連絡したとき、もしかして寝ようとしていた？」

奥のリビングへ通す。

「うん、もうパジャマでベッドに入ろうとするとところだったんだ。それで慌てて着替えた」

「悪かったね。でも嬉しいよ」

リビングのソファに座るよう促し、ノンカフェインのコーヒーをすすめる。隣に座ればランガは、じつと愛之介の顔を覗き込んだ。

「大丈夫なの？ 眠れないとか、怖い夢を見るとか、おかしいこと言っていたけど、疲れしている？ 仕事大変なの？」

「おや、心配してくれているのかな。そのことだけ……」両口角を吊り上げニヤリとした笑顔をつくった。「ごめんね。それ嘘だから」

ランガの目が丸くなり、すぐに眉尻が上がった。

「な……」

尖らせた唇がかすかに動いたのを見てとり、彼の唇に自分の唇を押しあて、そこから続

くだろう文句を封じた。

逃れようと身を振り首を振ろうとするランガの後頭部をがっちり掴み固定し、体重をかけソファーに強く押さえつける。やわらかい、でもきつく閉ざした唇を吸い、わずかに開いた隙間から舌を入れ、あと少し開かせた。

「ん……」

鼻から甘い声が抜け、ランガの身体が腕の中でほどけていくのを感じ、愛之介は少しだけ拘束する力を緩める。

ランガは唇を振り解き困惑した表情を浮かべた。

「いったい何なの？」

「長いこと君に会えなくて、僕の泉はカラッカラになってしまったんだ。ということ、なるべく早く君を充填したかった」

「じゅうてん？」

「君を抱きたかったってこと」

「だったらストレートにセックスしたい、つて言えばよかったのに」

「そう言ったら、君はすぐに飛んできたかな？」

「そ、それは……」

もごもごと口籠もり、ランガは黙り込んだ。

間違ひなく今夜こうして会うことはできていなかっただろう。こんなふうに慌てて駆けつけてくれる、なんてことは考えにくい。

「ほらね。やはりこうやって君を誘い出して大正解だったんだ」

「ずるい」

口をへの字に曲げ不満げなランガの頭を撫でてから、膨らんだ頬を両手のひらでぎゅつと挟んで顔を近づけた。

「大人はずるいものだって相場は決まっているんだ。僕は前々から君に忠告しているよ」

「そんな忠告なんて知らない」

ランガはプイッとそっぽを向いた。不貞腐れたような表情は、彼の面立ちを実年齢よりずっと幼く見せて、思わず苦笑する。

そんな顔をされると、自分が彼に対してやろうとしていることが犯罪臭くて、たまらない気分になる。もちろん、そんなことは断じてないと主張しておこう。

気を取り直してソファから立ち上がりランガの腕を掴んだ。

引つ張り上げたはずみでバランスを崩した彼を腕で受け止め、耳元に「それでは合意がとれたところで、はじめるとしよう」と告げた。

お揃いのバスローブだけを着て、ベッドの上に座り彼を抱き寄せる。頬から首筋にキスを落としてから、唇を重ね合わせた。かるく触れ合うだけだったキスは、角度を変えながら少しずつ深くなっていく。齒列を割り入り込んだ舌で口腔内を優しく撫で回せば、それに彼が応じ二つの熱い舌と舌が絡みあった。

ボディソープの残り香に微かな体臭が混ざる。気持ちを高揚させ、同時に癒してくれる。おい。ずっと欲しくて欲しくてたまらなかったランガのにおいだ。

やがて腕の中でランガはもぞもぞと身じろぎだし、頭を強く振って愛之介の唇から逃れた。苦しげな息を大きく吸って吐いてを何度か繰り返し、顔を上げる。

「もう、息ができない」

涙目で不満を言う彼に、目を細め笑う。

「息継ぎが下手なだけ。君は、軽いキスは慣れているのに長いキスは苦手だね」

「むっ……」

自覚はあるのだろう。少々むくれたような表情を見せたが特に反論はなかった。

ランガの背を抱きバスローブの前立てからもう片方の手を滑り込ませる。胸の丘をまさぐれば手のひらが柔らかい突起を掠め、彼はピクッと背を震わせた。そこが綺麗な桜色であることを知っている。何度も見せてもらっているのだから。

指の腹を使つてなるべくソフトなタッチで突起を弄ぶと、すぐにツンと硬くなった。ランガの表情をじつと見つめながら指を小刻みに動かしてやれば、その度に伏せたのまつ毛が小さく震える。胸に顔を近づけ、もう片方の乳首を舌尖で押し転がし吸った。ランガは愛之介の頭を引き剥がそうとする。無視して愛撫を続ければ彼の息が荒くなり、喘ぎを漏らしはじめた。

これ以上いじめるのも可哀想だ。胸から顔を上げれば、頬を上気させうっとりと蕩けるような表情のランガが目に入った。乳首だけで半分いきそうになっている少年は、なんとも愛らしく思わず笑みが溢れる。

ランガの腰を引き膝の上に乗せた。

「僕の首にしがみついて」

言えばランガは素直に従った。

バスローブの裾をめくり彼の尻に触れる。指示したとおり下着を着けていないことにほくそ笑み、小ぶりの丸い尻を手のひらで包むようにして揉みしだいた。

ローションを指にたつぷりとり、塗りつけながら入口をマッサージした。ローションを足しつつ指を挿入していく。指数を増やしながら、自らの通り道を整えていった。そして柔らかくほぐれた頃合いでコンドームをつけ、ランガにもつけてやる。

彼の尻を掴み持ち上げ、いきり立っているものを押しあてた。

「無理しないから。ゆっくり挿れるよ……」

肩に頬を押し付けたランガが、コクリとうなずくのがわかった。

亀頭で入口を慎重に広げ、一気に貫きたい衝動を抑え少しずつ奥へと進めていけば、肉の壁が異物の侵入を阻む。押し込めば少し戻され、また押し込んだ。挿入が深くなるにつれ、じわじわと快感が背をずり上がっていく。それを繰り返せば、やがてペニスは根元まですつぱりと彼の中に埋まり、熱い粘膜に包まれた。

濡れたような甘い喘ぎが、蒼く沈んだ静かな闇に吸い込まれていった。

膝の上で抱いた腰を揺らすたびに、肩からバスローブがずり落ちていき、はだけて覗く白い胸とその上を彩る桜色の乳首が、薄明かりの中に浮かび上がる。その淫らな姿態を強く目に焼きつけ、鎖骨から胸へと唇を押しあて強く吸った。

「あ……ん……ねえ、少し待っ……」

ランガは愛之介の髪を掴み軽い抵抗を見せる。

まとわりつく粘膜。キュッと締めつける肉壁。眩暈がするような快感に襲われ危うく果てそうになり、それでもなんとか耐えた。

「すごいね。僕の方が早くいつてしまえそうだ」

掠れた声で囁いたその直後、先に根を上げたのはランガだった。

「……あっ……う……」

こらえきれずに声をあげ全身を震わせたランガは、がくりと愛之介の胸に崩れ落ちる。重なる裸の胸が汗でしっとり吸いつき、早鐘のような心臓の鼓動が響き合った。ランガは愛之介の肩口に片頬を押しつけ浅くせわしない呼吸を繰り返している。首筋にかかる吐息が妙に熱っぽかった。

身体を繋げたまま、ランガをそつとシーツの上に横たえる。

「うつ……やめつ……」

体勢が動いたことによる強い刺激にランガは、愛之介の腕に爪を立て背をしなわせた。そんな少年を深紅の瞳が見下ろす。

白く透き通った肌、端正で繊細な顔立ち、長くスラリとした手足と、ランガの美貌は際立っている。なにより彼の持つ成熟前である少年特有の危うさも、大きな魅力だった。そんな未熟な身体を開かれ愛之介のペニスを受け入れさせられている。その様は、ひどく痛々しい。それでも今の愛之介にとっては、劣情を煽るものでしかなく、この行為を躊躇させる理由にはなかった。

無意識に逃げようとする腰を引き戻し、跳ねる身体を押さえつけ、顔を隠そうとする彼の手首をまとめて頭上に固定した。目尻にうつすら涙を滲ませ、苦しい表情で訴えるランガを執拗に攻める。

律動に合わせギシギシと軋むスプリングの音が耳障りだ。ふたりの息が激しくなる。ランガの額にぽつりぽつりと汗が浮き水色の髪が貼りついた。

切れ切れにあがる嗚咽のような声を聞き、それでも快楽に流される淫猥な表情を見つめ

ながら荒々しく漕ぎ続けた。やがてぐったりとした肢体を一層深く貫き、愛之介は一方的に達した。

がくりとランガの上に崩れ落ちた愛之介は、呼吸を整えながら彼の身体から小さくなつたものを抜き上半身を起こした。

乱れたシーツの上に、ぐったりと投げ出された白い裸身を目でなぞれば、ゾクゾクとしたものが背中を走り、果てたばかりの中心が早くも熱を持ちはじめていることがわかった。まだ足りないのだ。もっと、この少年が欲しい。

手のひらを彼の頬にあて首から胸へと滑らせていけばうつすらと開いた瞼から青い瞳が覗く。目が合う。

「これで、終わりだと思つては駄目だよ」

愛之介は微笑んだ。見開かれた青い瞳に、一瞬だけ怯えの色が混ざつたように見えた。それでもランガは嫌だとは言わなかった。愛之介は彼の上に覆いかぶさり、再びこの少年の肉体を貪りはじめた。

今の愛之介は、この美しい獲物を徹底的に蹂躪してしまいたいという情動に支配され、

それに従った。

乱れた息が落ち着いたころ、そつと身体を外す。頭の中を侵食していた熱が引き、冷静さを取り戻してきた頃合いで、彼の水色の髪を指で梳きながら「ランガくん」と小声で名を呼んでみた。ピクリとも動かない。

あれから三回ランガの中でいった——いや、そんな優しいものではない。ただ自分本位に犯しただけなのかもしれない。自覚はある。愛之介が一回いく間に、ランガは何度も繰り返しオーガズムに支配されていたのだから、気を失い、そのまま眠ってしまったとしても無理はなかった。

ランガは拒絶しなかった。気が進まないときは、はっきり嫌だと主張するような子だ。その彼が、嫌だもやめてもなく、ただされるがままに愛之介に身を任せていた。

温めた濡れたタオルで汚れた身体を拭きながら、白い裸身を見つめる。頭の中が冷めてくるとともに、自分のしでかしたことに愕然とする。

「酷いな」

ぽつりと漏れた言葉に、誰がやったのかと自嘲する。白い肌に赤い花びらのような鬱血

が散っている。それでも着衣で隠れる箇所だけに集中してつけているということは、無意識に理性は働いていたらしい。

全身隈無く拭き終え、一通りの後始末を済ませてベッドに腰をかけた。顔にかかる水色の髪を指でどける。泣き疲れて眠ってしまった子供のようない顔だ。愛おしさが込み上げてくる。そんな自分の身勝手な思考が嫌になる。

何度抱いても、どれほど激しい行為に付き合わせても、ランガの清麗さは失われることはなかった。これから決して失われることはないのだろう。

そんな感慨に耽っていたとき、いきなりパチつと大きく目が開かれ、青い瞳がはつきりと愛之介を捉えた。

心臓が止まるかと思つた。眠っていると思ひ込んでいたところで、こんな射るような視線を向けられたのだから。

ランガの口から怒りの言葉が飛び出す気配を感じ、瞬時に「ごめんね、ランガくん」と謝っていた。我ながら情けない。

「もう、らしくなく自分勝手だった」

ランガは恨みがましい目で睨んできた。

「それは認めるよ。あまりにも君が不足しすぎていて、がつつきすぎた。この埋め合わせは必ず……」

「そんなのいいよ。少し辛かったけど、何もかもが悪かったわけじゃなかったし」  
すべてを否定されなかったことに、ほんの少しだけ安堵する。

「いつから目が覚めていたの？」

「少し前。あなたに身体を拭かれているときかな。色々考えたかったから目は開けなかった」

「考えたかったって、何を？」

ランガはふいつと目を逸らし、ぼそつと何かをつぶやいた。それは小さな声だったが、確かに「嘘つき」と聞こえた。

「嘘をついて君を呼び出してしまったのは申し訳なかった」

「違う。そのことじゃない」

強い語調に、触れようと伸ばした指を引つ込めた。

「違うって？」

「嘘だと言ったことが、嘘だったんだ。あなたが眠れていないことも怖い夢を見ることがも

本当のことだ」

目を凝らして彼を見る。濁りない青い瞳が、愛之介をまっすぐ見据えていた。

「どうして、そう思ったの？」

らしくなく声が震えた。

「目の下は黒いし顔色も良くなかった。眠れていないんだなって俺でもすぐにわかったよ」

「参ったな……」

苦いものが込み上げてくる。まさかこんなにあつさり見抜かれてしまうとは。まだ子供だと思つて甘く見ていたのか。

ベッドから上半身を起こそうとしたランガは、痛むのか顔をしかめた。そんな背中を支え抱き起こせば彼はそのまま愛之介の胸に顔を埋めた。

「ねえ、そういうのはもうやめて」

胸の上でくぐもつた声が響いた。

「そういうのとは？」

「俺の前では我慢しないで。お願いだから無理しないで」

「別に我慢も無理も——」

「している」

珍しく、ランガは愛之介の言葉を強く遮った。

何も言えなくなつた。

確かにそうなのだろう。わかつている。ランガの前で虚勢を張る必要はないことなど。それでも、まだ自分の中のちっぽけなプライドが邪魔をする。だから……。

「努力しよう」

今はまだ、それで許して欲しい。

「俺では相談相手になれないし、そんなことわかつている。それでも……辛いのになんかふりしなくていいよ。本当は泣きたいのに笑ったりしなくていいんだ。俺とふたりのときは我慢なんてしないで」

ランガをきつく抱きしめた。力を込めて。折れるほど強く。痛い——と言われるまで腕の力は緩めなかった。

「君には敵わないな」

彼はもぞもぞと身じろぎ顔を上げた。

「その怖い夢って、もしかして子供のときの夢？」

「そうだね」

「それ、見るようになったのは最近のこと？」

「確かに最近見るようになったかな」

正確にはランガとの関係が親密になってからのことだった。

「じゃあ、もう大丈夫だよ」

「どうして？」

「それは、思い出すのが辛すぎて見ないように、心の奥に隠して蓋をしていた恐れだよ。でも心が強くなったから隠す必要もなくなったんだ。それで、もう平気だつて夢を見させられる。ねえ夢は夢だよ。現実じゃない。いつか見なくなるか、見ても、また見たなくらいで気にならなくなる。そう父さんが言っていた」

「君のお父さんが？」

「うん。俺が小さいころ雪山で遭難しかけたことがあったらしくて。あ、本当にしていたわけじゃなかったらしい。俺がひとり取り残されたと思い込んでいただけの話で。記憶は曖昧なのにな成長してから怖い夢を何度か見るようになったんだ。それで父さんが」

「そうか」

「だから、もう……大丈夫……」

語尾はあくびに掻き消されていた。瞼が半分閉じている。

「眠くなっているね」

「眠い」

「じゃあ、寝ようか。おやすみ、ランガくん」

「おやすみなさい」

ランガは愛之介の唇に軽くキスをして、ベッドに潜り込むと、あつという間に寝息を立てている。愛之介もランガに寄り添い明かりを落とした。

もう出会ってしまったのだ——ランガと。

選ばれたスケーターのみがたどり着けるあの素晴らしい世界。自分が自分でいられる唯一の場所。傷つけられることも裏切られることもない。

楽園——エデン。

ランガは自分とともに、あの高みへ至ることのできる唯一の存在だ。エデンでアダムと

イヴになるはずだった。それを彼は「楽しくない」と一蹴した。

あの決勝戦、丸裸にされた心。すべてを曝け出してふたりは全身全霊で激しくぶつかり合った。

そして曇りのない青い瞳は愛抱夢——愛之介のあるがままを映し出し、ただその孤独に寄り添おうとした。それもごく自然体で。

知ってしまったのだ。

心を覆う鎧を脱ぎ捨て、無防備なまま彼に包まれはじめて得られる安らぎを。

ランガの命を道連れにすることも厭わなかった——あれほどのことをしでかして、なお無条件で受け入れられることの幸せを。

あのとき確かに心を通わせ意識を共有し魂が共鳴した。

（僕はランガ——君を離さない）

心の中で、はつきりとそれを言葉にする。

理性が手放すべきと忠告してこようが、身を滅ぼすと警告してこようが、自分の意志とは関係なく魂はただランガを探し求めるだろう。どれほど強固な決意を持っても、己を律し自戒し抵抗しても、愛はランガに向かってだけ、ただ注がれる。

それは誤魔化しようのない事実なのだ。ならば否定せずにそれを認めようと思う。抗うことはもうしない。悲劇に向かうかもしれないという恐怖からも目を逸らさない。覚悟を決めてしまおう。

なに、うまくやっていくさ。何故なら自分は神道愛之介であり愛抱夢なのだから。

ランガに毛布を掛け直し、髪に口付けた。

そして目を閉じ、愛之介はゆつくりと深い眠りに落ちていった。

真つ暗だった。

——また悪夢か？

漆黒の虚空に、ぼんやりと浮かぶ柔らかな光が見える。目を凝らせば、その中で膝をかかえうずくまる小さな人影に気がついた。

泣いているのか？

愛之介はそつと近づき、指を伸ばした。

指先が触れるか触れないかで、慌てて引つ込め目を伏せた。

この子供は自分だ。

ひとりぼっちで、受けた傷や痛みを、意識の奥深くに閉じ込め蓋をする。

あるとき隠れて泣くことしかできなかった。

男は強くなくてはいけない。賢くなければいけない。頼ってはいけない。弱音を吐いてはいけない。泣いてはいけない。勝たなくてはいけない。

そう徹底的に叩き込まれた。それが愛されるための条件だったのだ。

周りの大人からそう諭され、疑う術を持っていなかった無垢だからこそ愚かだった自分だ。

幼い自分が、これから辿る運命を思うと胸が痛む。

生まれてはじめて心を許した相手とスケートとの出会い、そして裏切り。

深い闇と孤独の中でのたうち回り、ただイヴを探し求めることになるだろう。

そこまで思考を巡らせはたと気づいた。

いったい何を感じ傷的になっているのか。これは既に終わった過去を再生しているに過ぎない。ただの記憶の残渣だ。

君が繋いでくれた俗世へ戻ろう

君が言った通り夢は夢だ。

だから僕は君が繋いでくれた俗世へ戻るよ。

ランガ——君がいてくれる現実に。

《了》

## ふたりの距離はゆっくりと縮めていこう

### 一、ウサギはウサギでも

屋上での暦とランガ、スケートで繋がった親友たちのランチタイム。どうでもいい雑談のスタートはいつもスケートがらみだ。

「そういえばさ、おまえがスケートはじめてばかりのころ、先生に追いかけられたことあっただろ。あのときカーブ曲がれなくて塀に激突していたよな。今のおまえからは想像できないぜ」

顔を横に向ければ、弁当箱に箸を突っ込む暦と目が合った。

「暦は曲がり方教えてくれていなかったんだから。仕方ないだろ」

「だからといって減速もしないで、障害物に突っ込んでいくか？ ふつー。ランガは最初から度胸がいいというか命知らずっていうか無鉄砲だよな」

「ジョーに忠告されても愛抱夢とのビーフやめなくて、大怪我をした曆に言われたくない」

「あ、あれは、だな……。実也を侮辱したあいつがどうしても許せなかったんだ」

「シャドウとの最初のビーフも、曆はスケートを侮辱されて挑んで無茶をしたと聞いた」  
「誰から？」

「岡店長。ほら俺の最初のバイトのとき曆怪我していただろ。その理由を教えてくれた」  
「ポーク玉子を突き刺した箸を持ち上げ、曆は唇を突き出した」

「余計なことを。無茶だつて自分でもわかつてらあ。あんときはやるしかなかったんだよ」

ランガは笑う。

「曆らしいよね。自分の滑りたいという気持ちより、誰かが傷つけられた、とか自分のプライドが傷つけられた、みたいなことでムキになるの。いつも人のことを気にかけている。俺は誰かのことを考えるとかじゃなくて滑りたいって気持ちしかないから。俺は実也が侮辱されたとか、実也が傷つけられたんだって想像することはできなかった。……曆は、俺と違って人の気持ちかわかる。優しいんだ」

「おい、真顔で恥ずかしいこと言うなよ！　むしろおまえだよ。無茶している意識ない。迷いがないというかなんというか。まあ実際なんとかしちまうんだよな。俺ら凡人と違って……」

最後の方、暦の声は消えそうに小さくなってブツブツ声になっていた。

暦の指摘——言われてみれば、スノーボードをやっていたころもそうだった。

「いつか、なんともなくなることもあるのかな」

「どうした？」

「昔、父さんに言われたんだ。『おまえは〈snowshoe hare〉みたいだ。何も考えずに突っ込んでいくと、いつか痛い目に会うから気をつけなさい』って」

「ヘア？　髪の毛？」

「違うよ。えっと日本語でなんて言うのかな？」　ランガはスマホを取り出し確認してみる。「カンジキウサギだって」

「はあ？　あの耳の長いウサギ？」

「そうだよ」

「おまえが、あのかわいいウサちゃん？　どこが？」

暦はプププ……と笑った。

〈hare〉がかわいいって？ ランガは目をパチパチとさせた。まあ、確かに見た目は可愛  
いような気はする。でも……

「どこがつて、〈snowshoe hare〉つてもものすごいスピードで雪の中を走っていくんだ。  
敵から逃げるためにね。でも、勢いがありすぎて、たまに障害物を避けられず衝突して、  
そのまま死んだりする。そういうところが俺みたいなんだつて父さんが言っていた」

「カナダのウサギつてそんなに速く走れるのか？ 俺の知っているウサギと違う」

「暦の知っているウサギつて？」

「ふわふわモコモコの白い毛で柔らかくて、目が赤くて、ピョンピョン跳ねて、いつも口  
をもぐもぐさせてニンジン食べている。寂しいと死んじゃう、みたいな。おとなしい動物  
かな」

「〈snowshoe hare〉は群れにならない単独行動の動物だから、寂しくて死んでいたり  
したらもう絶滅しているよ。それに結構凶暴だよ？ 人にも馴れないし。あ、冬、食料が  
少なくなると他の動物の肉食べたり、ときには共食いしたりもするつて父さんが言ってい  
た」

「待て！ それ本当にウサギか？」

ランガはもう一度スマホで確認し、写真を曆に見せた。

「ほら、これが〈snowshoe hare〉だよ」

「耳が長い。確かにウサギといえバウサギか。ペットのウサギとイメージが違うのは野生だからか？ それにしてもカナダって怖い国だな」

カナダとは関係ないと思う。どうも話が噛み合っていない気がするけど、まあいいか。

§

「ということ、話が噛み合わなかったんだけど。俺の日本語がおかしいのかな？」

それから、数日後のSでのこと。暦とのウサギ談義を愛抱夢に話していた。日本語と英語についてランガの中で、なんらかの齟齬が生じたとき、とりあえず愛抱夢に相談することが癖になっていた。実際、アメリカの大学を出ている愛抱夢の日本語と英語を交えた説明はわかりやすい。

愛抱夢はランガの話を聞いて「ふむ」とスマホで何かを調べている。そして、「なるほど。そういうことか」と、ひとりで納得していた。

「おそらく赤毛くんの言っていたウサギって、〈rabbit〉のこと。日本では〈hare〉も〈rabbit〉もウサギなんだ。だから噛み合わなかった」

「あ……そうなのか。確かにどちらも耳長いから、デフォルメされたマスコットキャラクターになつたりすると区別つかなくて、〈rabbit〉か〈hare〉のどちらなのかと論争になつたりするんだ」

「まあ、僕も興味なかったからね。二つの言い方あることは知っていたけど、単純にペットのウサギを〈rabbit〉で、野生のウサギを〈hare〉というのだろうくらいに思っていたし調べもしなかった。実際は種が全く違う。〈rabbit〉はアナウサギで穴を掘るから前足の力が強い。巢穴まで逃げればいいから速くは走れない。ペットや家畜は全部これの改良種。〈hare〉はノウサギのことで、敵から逃げ切ろうとするからスピード勝負で後ろ足の筋肉が発達している、らしい。こっちは人に懐かないからペットにも家畜にもならないということだ。なるほど。勉強になるね」

勉強になるって、どう考えても愛抱夢の表の仕事にとつては何の役にも立たない無駄知識だ。もちろんスケートとも関係ない。

「そうだったんだ」

「お父さんは君のことを〈snowshoe hare〉みたいだつて言つたんだね。なるほどね。確かに」

愛抱夢はランガの顔をじつと見て、フフフ……と笑つた。

「何がおかしいの？」

「確かに、君がスケートをする姿はまさに〈hare〉だね。全身筋肉で引き締まつたバネみたいな身体。幅と高さのあるジャンプ、圧倒的スピード」

「じゃあ、俺、そのうち何かに激突したりするのかな。父さんが心配していたんだ。学校で塀にぶつかったとき大丈夫だったけど。スケートができなくなるような怪我だけはしたくないな」

「おや？ そんな心配、君らしくないね。最初の曲がり方を教わっていなかった初心者であつたときを別にすれば、今までに障害物を避けられなかったりぶつかったり、なんてことはなかっただろう？」

「確かに、ないかな」

「無意識だろうけど、君は、コースのコンディションをいくつかの視点から同時に俯瞰し、滑りながら瞬時に判断できているんだ。それで初見のコースでも大胆な滑りができてしまう。凡人だったらおそらく大怪我している。いや、それ以前に君のような滑りをしようなんて発想にはならないよ」

ふかん？ 愛抱夢の言っていることは難しくてよくわからない。そもそもランガは、自分がそんな特別だとは思っていない。

「へえ、そうなんだ」

適当に頷いておいた。

「実は、前から君のことをウサギ——この場合〈rabbit〉ね——みたいだなって思っていたんだよ。日本でのウサギのイメージって、白くてふわふわしていて温かくて……とても抱き心地がいい、なんだ。いつまでもずっと抱いていたくなるようなね。ランガくんも同じだよ」

「俺、ふわふわした毛なんて生えていないよ？」

「それは概念の問題かな？」

「がいねん？」

ランガには理解できない日本語が飛び出してきたけど、愛抱夢は言葉の説明をする気はないようで、勝手に話を進めた。

「ふわふわした毛がなくても、ランガくんのことを、ぎゅつとハグするだけで僕は癒されるんだ。疲れたとき、そばに君がいてくれればと思うことがよくあるよ。君をここでぎゅつと抱きしめれば、きつと疲れなんて吹っ飛ぶのに……って」

「そ、そうなの？」

「それでだが、僕は今、とても疲れている」

「それなら、Sなんかに来ないで家で休んでいけばよかったのに」

目元はマスクに覆われてはいるが、愛抱夢が微妙な表情になったのが、わかった。  
(俺、なんかまた空気読んでいなかった？)

「肉体的ではなく精神的な疲れだからね。家で休んでいても癒されない」

「ふーん、それは大変だね」

マスクの下から覗く愛抱夢の赤い瞳は真剣に真っ直ぐランガを見つめていた。

「ランガくん……」

名を呼ばれてドキッと心臓が跳ねた。何故か緊張する。

「はい」

「僕にギュッとハグされる気はない？」

「いいけど」

腕を下にして広げた。

うん、ハグならいつでも大丈夫。

愛抱夢の口端が吊り上がった。多分、にっこり笑ったんだと思う。

「今、ここではまずい」

「どうして？」

「日本にはハグの習慣ないからね。皆がびつくりする。特に赤毛くんに見られると大騒ぎになるかもしれない」

よくわからなかったけれど「そうなんだ」とだけ返しておいた。

「じゃあ、今度……」

「いや、僕は今、疲れているんだ」

わがままだなあと思う。

「どうすればいいの？」

「今から、一緒に滑ろう」

滑りながらのハグはスケートに集中できない。勘弁して欲しい。

「滑りながらは、ちょっと……」

「そんなことはしないよ。コースの途中からほんの少し外れると、ちょうど死角になった都合いい場所があつてね。誰かに見られることなく、君を存分にハグできるんだ。ほら、今の僕らにとつては打つてつけだろう？」

いくつか、よくわからなかったこともあつたけれど、とりあえずダメだという理由は思いつかなかつた。

「わかつた」

愛抱夢は満面の笑み——マスクに目元が隠されているので多分だが——で、恭しくランガの手を取った。

## 二、片思いの楽しみかた

Sのコースには何箇所か、まるで天然のジャンプ台のように綺麗なカーブを描きながら競り上がる岩がある。そこをキッカーにして崖を飛びコースをショートカットできれば、ビーフの流れは、より有利になってくれる。

ところが、ひとつだけ愛抱夢以外、誰も飛んだことのない崖があった。何せ飛んだところで安全な場所に着地できるかどうか見当もつかない上に、ショートカットにならないのだ。

実は、その崖を飛ぶと、まず朽ちかけたフェンスにデッキ底面を当てボードをスライドさせなくてはいけない。そこから飛び降りることで、やっと細い小道に着地することができるのだ。そのことを知っているのは愛抱夢だけだった。

今、その難関をあつさり攻略した二人がガタガタというウィール音を響かせ荒れた斜面を減速しながら滑り降りて行つた。

目的の場所へ到着した愛抱夢はくると振り向きざまにボードを蹴り上げ掴んだ。愛抱夢の後ろに続いたその少年は、涼しい顔をしてスツと停止する。心配はしていなかったが、思わずニヤリと笑みを浮かべた。

愛抱夢はやや大袈裟なジェスチャーで両腕を大きく広げ、招待客を歓迎した。

「ようこそ、スノー」

ランガは「へえ、こんなところがあつたんだ」とキョロキョロあたりを見回した。

「どう？ 気に入った？」

「ここが、コースからほんの少し外れたところ？」

「僕らにとっては、ほんの少しだっただろう？ あそこから飛ばないとここには来れないけどね。君と僕以外でここに辿り着けるものは、誰もいないさ」

コースを外れた死角になるようなところが、誰でも簡単に侵入できる都合のいい場所であつてたまるか。それこそ、誰かに邪魔されるかもしれない。最悪、先客がよろしくやつている可能性すらある。それを考え、簡単に入り込める死角がないよう入念に整備をした。ここは神聖なスケートコースなのだ。俗っぽい利用の仕方は許さない。

自分のことを柵に上げるのは、愛抱夢の当然の権利だ。なんせ愛抱夢はSの神なのだから

ら。

「実也やジョーやチェリーも？」

「おそらく無理だろうね。それ以前に、あそこから飛んでも下の構造がどうなっているのか確認できないのだから誰も飛ぼうなんて無茶はしないよ。ショートカットになるどころか遠回りになりそうに見えるだろうし。君だって、まさかいきなりフェンスに飛び乗ってデッキを滑らせるなんて想像できなかっただろう？」

「うん、思わなかったよ。それに、これからだってあそこで飛ぶことないよね。だって、ここ行き止まりだから飛ぶときワクワクしても、そのあと続けられないんじゃないかな。それより、ここからコースにどうやって戻るの？」

「ああ、ボードを抱えて少し崖を伝い降りてから、ジャンプして放り投げたボードを足でキャッチ。そのまま着地する、しかないね」

「ええ？ カッコ悪い。……まあいいけど」

「それより、ランガくん。君はここに来た目的、忘れていない？」

「あ、そうだった。ハグするんだよね？」

言われてはじめて、思い出した、という顔だ。

「そのとおり。ハグして、いいかな？」

「いいよ」

それでは遠慮なく、と腕を広げランガに近づきハグをする。彼の腕も愛抱夢の背中に回された。

ぎゅつと腕に力を込めれば、柔らかく弾力のある身体が跳ね返る。無駄なくついた筋肉の感触を、ピタリと合わさった胸で聞く心臓の鼓動を、ほのかに立ち上る汗のにおいを、全身で感じ、しばし堪能する。

しばらくして腕の中でもぞもぞと動いた彼は「疲れ取れた？」と訊いてきた。

「半分くらい取れたかな」

「これ、いつまでやっているの？」

「君がやめようと言うまで。やめなくなったら教えて。……やめようか？」

「ん？ まだ大丈夫だよ。あなたの気が済むまで、いいよ」

それならば、ありがたくこの幸せを噛み締めていよう。

それからどれくらいの時間、体温のやりとりをしていたのだろうか。名残惜しいがランガが呆れる前にやめておいたほうが無難だろう。だが、その前に……。

「ランガくん、もうひとつお願いがあるんだけど」

「何？」

「キスしていいかな？ もちろん、いつもと同じところに」

「いいよ」

いつものところ——髪や額くらいだ。かつてランガの父親がそうしたように、そこへのキスは抵抗がないようだった。もつともそのあと調子に乗って冗談っぽく「唇にキスしてもいいかな？」と訊くと「ダメ」と即答される。

そつと髪、そして額に唇を落とし、もう一度ぎゅつと抱きしめてから 愛抱夢は身体を離した。

「疲れ取れた？」

「お蔭で癒されたよ。ありがとう、ランガくん」

「どうってことないよ」

彼は無邪気なニッコリ笑いを浮かべた。

疑う様子は全く見られない。もちろん彼に言ったことは嘘ではないのだが、あの長時間のハグにしろ、キス——髪や額にとはいえ、キスはキスだ——にしろ、ランガはどうも警

戒心がなさすぎるように思う。自分だけなら良い、というか、むしろ歓迎なのだが他の人に対してはどうなんだろうか。

「君は、ハグしたいと言われたら、誰でもハグするのかな？」

「言われればね。とりあえずよく知っている人は嫌ではないよ。暦だけじゃなくて、実也、シャドウ、ジョー、チェリーと。でも皆日本人だから、そんなことしようとしたくないな。あ、でも暦はハグじゃなくて、何かあると断りもなく飛びついてきたり抱きついてくる。出会ってすぐの友達になる前から、もうそんな感じだった。それが自然すぎて嫌だとか嫌じゃないとか考えたこともなかったかな」

「確かに、見ていると赤毛くんは、嫌いな相手以外だったら誰に対してもパーソナルスペースが狭いね」

「うん。それも暦のいいところだよ。色々な人とすぐに親しくなれる。俺と違って」

「でも、普通、親愛のハグってそんな長時間抱き合っていたりしないよね？ 僕がずっと長い時間ハグしていて、無理していなかった？ キスも本当は嫌だったとか」

彼は、はつという表情で何度もパチパチと瞬きをした。

「俺、嫌なら嫌だって言うよ。でも確かに……俺、なんで平気だったんだろう」

そう言ったきり、首を傾げ黙り込んでしまった。

「悩ませてしまつて、悪かつたね。君は嫌ではなかつたつて考えていいんだね」  
「もちろん」

そうか。ならば今夜はもう少しだけ押ししてみようか。

「あとひとつ図々しいお願いがあるんだけど」

「何？」

「キスしていいかな？」

「したよ」

「そうではなく」と彼の桜色の唇に人差し指を軽く押し当てて。

「ここにね」

柔らかくしつとりとした感触だ。

ランガは、また目を大きく見開き愛抱夢の顔をじつと見つめている。

ややあつて「ダメ」とにべもなく返してきた。

少々性急すぎたか。

「そうか、変なこと言つて済まなかつた」

「俺、まだ、そこまであなたと……えっと、親密なわけじゃない。スケート以外の愛抱夢のことはあまり知らないし」

まだ……か。無意識で口に行っているのだろうか、その言葉だけで十分すぎることなんだ。

愛抱夢の口元から笑みが溢れた。

「それなら、もつと頻繁にS以外でデートしよう。お互いを知るためにね。どうかな？もちろんスケートもセットだよ。君にコーチしよう。僕の持っている技術、全て教えるよ」

彼の顔がぱつと明るくなる。目をキラキラさせて身を乗り出してきた。

「それいい。先約がなければけど。俺、暦とよく遊ぶ約束するし」

うん、まあそれは仕方ない。焦りは禁物。急いては事を仕損じる、だ。

あとどれくらい待たされるのだろうか。見当もつかないが、君がこうして自然体で僕を受け入れてくれるのなら、それで今は十分だ。その分、この片思いを楽しめばいい、と考えばそれも悪くない。イヴを待ち続けたあの時間を思えば、決して長いとは思えないだろう。

「では、そろそろ戻ろうか。保護者ヅラした赤毛くんが心配して探し回る前に」  
手を差し出せば、ランガは微笑み、その手を取った。

《了》

## プレゼントの理由

息子宛のプレゼント、思い返してみれば豪華な赤バラの花束が最初だった。

それにしても、これほどのバラ、どれだけ値が張るものなのか。間違いなく五桁はいくだろうと困惑したことを覚えている。

「こんな高価なバラ、どうしたの？」と訊けば、「貰った」の一言。

それはわかるのだが、知りたかったことは、誰がどのような理由でこれをランガにくれたのか、ということなんだけども。

「どなたからいただいたの？」

「スケートの人」

「お友達？」

「友達とは違うと思う」

友達でない？ まさか恋人とか？ いいえ。女性が男性にこんな大きな花束というのも

不自然だと菜々子は首を傾げた。

「どのような理由でくださったの？」

「お近づきの印……とか言っていて、意味がわからなくて友達に教えてもらったんだ。そうしたら、これからよろしくつてことだとか言っていた。俺、まだまだ日本語知らないよね。もつと勉強しないと」

よろしく、にしては大袈裟すぎると思うけど、息子は気にしている様子はない。

どうしよう。しつこく聞き出そうとすれば煙たがられるだろうし、怖くて追求できない。こんなときに父親がいてくれれば。

（助けて、オリバー）

「そ、そうね」

笑ってみせたけれど、引きつっていたと思う。息子は気に留めてもいなさそうだった。それより、夜勤前にバラの花を生けてしまわないと。

流星にこれほどの本数のバラをまとめて生けられる花瓶なんて我が家にはない。分割するしかなかった。小さな花瓶とグラスと……足りない。もうワインクーラー……バケツでもいいかしら。

それ以降、そのようなプレゼントが贈られることもなく、この一回だけで終わった……

と思っていたのだけれど、それからしばらく経つてのこと、また豪華な赤バラの花束を抱えて息子が外出から帰ってきた。

その日はスケートのローカルな大会で息子が優勝したとかで、その祝勝会があったという。そのパーティ会場で前に赤バラをくださった人からいただいたのだと説明してくれた。

そのときはとりあえず納得した。しかし、それからもちよくちよくお土産を貰ってくることが気になった。

花、小物、菓子……と、びつくりするほど高価なものでは無かったが、それでもどれもこれも確かな質のものを吟味されていることが何となくわかった。

「どうしたの？」と訊いてみても「貰った」の一言で済まされてしまいそれ以上聞き出せないでいた。

「もしかして最初に赤いバラをくれた人と同じかたからいただいているの？」とおつかなびつくり質問すれば「そうだよ」と何でもないことのように答えたきり、そこで会話は途切れる。

やはり、これ以上踏み込むことはできなかった。

まさか……まさか、スケート友達というのは嘘で、実はママ活！？ 息子は親バカではなくそれなりに目立つ容姿だ。学校でプリンスと呼ばれていると、暦くんが言っていたくらいだから、客観的にみてもそうなのだろう。

嫌な想像が脳裏をよぎるが、慌てて否定する。女性が多い職場での休憩時間に色々な女性週刊誌ネタなどを耳にし過ぎているせいだと思う。そもそも嘘ならば隠そうとするはずだ。こんなにあっけらかんとしているはずはない。だいたいランガはそんな嘘をつくような子ではないし、嘘をついたところで、すぐにバレるような嘘しか言えないだろう。

ああ、もう。こんなときに父親がいてくれれば、もつと突っ込んで腹を割って男同士の話をして、アドバイスをしていただろうに……と思いかけ、首を左右に強く振った。

いいえ、そんな弱気ではダメ。オリバーはもういない。私がしっかりしなければ、と菜々子はキュツと口を強く結んだ。

そんなふうに、ぐるぐると思考を巡らせていたとき、不意に呼ばれた。

「ねえ、母さん」

「え？ 何かしら」

なるべく平静さを装ってにこやかに返事をする。

「あのさ、俺、いつも貰っているばかりで、何か返した方がいいのかなって。くれた人は気にしないでいいって言っただけだ」

「プレゼントの理由によると思うわ。そのかた何故色々プレゼントをくださるの？」

この会話をきっかけに、話を聞けるかもしれない。でも、うるさがられないよう慎重に言葉を選ばないと。

ううっ……緊張する。

「お礼だっけ言うんだ。俺に救われたんだって。でも俺、自分が何をしたのかよくわからなくて。訊いても、笑っているだけなんだ」

「どんな方なのかしら？」

「すごいスケーターなんだ。俺よりずっと年上の男の人だよ」

「一緒に滑って楽しいのね？」

「うん。暦と一緒に滑るのと、また違うんだ。暦と一緒にだとワクワクしていつも笑い合っていて、すごく楽しいんだ。で、その人と滑ると、スリリングでヒリヒリするスケートとかなのかな。でも一緒に滑ると、ふたりとも同じくらいドキドキする。その人も俺と滑るのが楽しいんだって」

目をキラキラさせて、身を乗り出して息子は説明する。スケートの話になると表情が生き生きと明るく輝きはじめる。昔、父親とスノーボードの話題で盛り上がりつついるとき、雪山へ出かけるとき、こんな表情をしていたっけ、と思わず笑みがこぼれる。

父親を亡くしてから、ずっと失っていたものだ。スケートと出会って取り戻せたのなら、心からよかったと思う。もしお友達がスケートを教えてくれなかったら、この子は……。

「ねえ、もしランガがスケートに出会わなかったら？」

「父さんがいないんだ。俺、沖縄でもひとりぼっちで、楽しいことなんてなくて……考えたくないな」

「それなら、暦くんに感謝しないと」

「うん、感謝している」

「あなたは暦くんに救われたのね」

「そうだね。俺、暦に出会っていなかったと思うと怖い」

「でも、きつと暦くんはあなたを救ったなんて思っていないわ。それにね、あなたも暦くんを救ったのよ」

「俺が？」

「暦くんが前に言っていたの。あなたに会えなかったら、ずっとひとりぼっちでスケートしていたって。だからランガに会えて、本当によかった。毎日が楽しい。そんなことをね、照れ臭そうに言っていたわ」

「そうだったのか。俺、気がつかなかった」

「そんなものよ。だからきつとその人も、あなたに救われたと感謝しているんだと思う。あなたと暦くんは同じ年で対等だから、お礼とか考えずにずっと楽しく一緒にいればそれで自然なの。でも、その方はずっと年上だから何かをしないと気が済まなかったのかもしれないわね」

「そうなのかなあ。俺、スケートは仲間と滑るから楽しいって、言っただけなのに」

「多分そんな些細なことだと菜々子と思う。何気ない言葉。発した本人は大して意識していないどうってことない一言が何かの気づきになることもある。」

「その方、不器用なのよ。あなたもだけど」

「俺、これからどうしたらいいんだろう？」

「そうね……」

菜々子は考えをまとめようと宙に視線を泳がせた。

オリバーなら……あの人なら何を言うのだろう。どのようなアドバイスをする？ 思いつかないと、オリバーを……。

菜々子は顔をあげ、ニコツと息子に笑顔を見せた。

「普通でいいわよ。自然にね。ランガが感じるまま。自分の心を優先して。感謝も好意も行動や言葉で素直に表現すればいいわ。それとね、年上なら礼を尽くさないといけないとは思うけれど……」

少しだけその先を言葉にすることを躊躇してしまった。ランガは「何？」と不思議そうな顔をした。

そうね。きつとオリバーなら……。

「もしも、もしもよ。例えば、その人から何か嫌なことを要求されるようなことがあったら、何かを貰っているからとか何かをしてくれたから、という理由でイエスと言ってはいけない。自分を大切にしないさい。きつと父さんならそれを強く言うわね」

「うん、わかっているよ。父さんにずっと言われてきたことだから」  
ランガは胸を張った。

「もし、お礼の気持ちを伝えたいのなら、グリーティングカードを送っておいたら？　そして誕生日とかイベントのときにそんな高価ではないものをプレゼントしたらいいわ。あなたは学生なんだから、それで十分よ」

「そっか、そうするよ」

菜々子は微笑んだ。

おそらくそんな下心があつてのプレゼントではないのだろう。でも、何かあつたとしても、息子を、息子の判断を信じようと思う。過保護にならず干渉せずに。大丈夫。オリバーがずっとそう接してくれていたのだから。

菜々子は胸に手を当て目を閉じた。

オリバーはここに、そして息子の中で生きている。

## Paper message

「愛之介様、政務とは関係のないごくプライベートの手紙が紛れ込んでいました」

忠が郵便物の束から一通の封筒を手渡してきた。

「ああ、ありがとう」

汚い字だな、子供からだろうか。たまに子供からの可愛らしい陳情があつたりするな、  
と思いつつ裏返してみた。象形文字？ 解読に数秒かった。

——『※%#……ランガ』

ランガ？ ランガくんからだ？

しかし、なんで事務所に？ という疑問は、前に名刺を渡したことを思い出し即解消した。自宅の住所を彼は、まだ知らないのだから事務所宛に送るしかなかったのだろう。

それにしても、この字は。まあ、あの子は日本語の読み書きさほどやってこなかったと言っていたから、無理もないかと思いつつ封を開けた。

中に入っていたのはシンプルなデザインングリーティングカードだ。

二つ折りのカードの表にはスケートボードに乗るモンスタージャラのイラストがあしらわ

れ〈THANK YOU〉と印刷されていた。

こんなデザインどこから見つけてきたのか。

カードを開けば、メッセージが。こちらはランガの直筆か。やはり下手くそな字で「アダムへ いつもありがとう」と書かれていた。

同じことではないかと、クスリと笑う。

たつたこれだけの、どうってことのない、そつけない文面。

全く飾り気がなく彼らしい。

言外に〈迷惑だから〉をにおわせつつ「申し訳なくて、これ以上受け取れない」とか「もう気を使わないで」というメッセージではなかったことに、ホッとする。

つまり彼は拒絶していない。自分の好意を受け止めてくれているし、今後もし受け止めてくれるのだと思わせるに十分だった。

知らず知らずに頬が緩む……と、視線を感じ顔を上げれば、忠と目が合った。忠は一瞬目を丸くして、気まずそうな様子で手元の書類に視線を戻した。

コホンと軽く咳払いをする。

「ランガくんからの、僕に対する感謝を込めたグリーティングカードだ。そんなありがと

うと言われるようなことをした記憶はないのだが。律儀な子だ」

「礼儀正しい子なんですね」

「それにしても、彼はまだ日本語が不慣れなようだ。この字でよく届いたな」

「郵便番号と、所々解読できれば、この事務所であることを推察できるのではないでしょうか」

「なるほど。日本郵便は優秀だな」と実にどうでもいいことに感心してみせた。

気が緩むと締まらない笑みを浮かべてしまいそうで、忠から表情を捉えることができないだろう角度に体の向きを変え、もう一度カードに触れ指を滑らせた。すべすべとした、しかし温かみを感じさせる紙の質感。いいものだと思う。字を打ち込み送信すれば、秒で終わってしまうメールやメッセージなどのデジタルとは違う。

アナログ媒体ゆえの手順がある。まず、相手の顔を思い浮かべながらふさわしいカードを選び、購入し、自分の心と向き合う。何を伝えたいのか、想いを文章にまとめないといけない。そしてペンを手に取り、何度か下書きをして清書する。

だからこそ、その手間と、彼の心を受け止めることに大きな喜びを感じた。開封したその瞬間、確かに彼の想いが届いたのだ。気のせいだなんて誰にも言わせない。

「アダムへ いつもありがとう」

たったこれだけの短い文。だが、ここに至るまで、彼は間違いなく愛抱夢のことを思ってくれているのだ。愛之介はそのことを胸に刻み目を閉じた。

《了》

## 楽園へ至る道【R18】

「……ということなんだ。僕たちは、長い長い時間を経て再び交わるために俗世への転生を繰り返した。そしてこうして今やつと出会えたんだ」

水色の髪を指で梳きながら唇を寄せた。

「壮大な〈bedtime story〉……ふむ」

ランガは興味なさそうな様子でゴロリと愛之介に背を向けた。

ベッドのスプリングが小さく軋んだ。

ことの発端は、ランガがふとした疑問を口にしたことにある。

なぜ愛之介が愛抱夢と名乗りランガのことをイヴだと思ったのか、そう彼は訊いてきた。すぐく気になっていたわけではないんだけどね、と断りを入れて。今までそんなことを気に留める様子など見られなかった彼が、いったいどういう風の吹き回しだろうか。

それならばと、アダムとイヴ、そしてふたりに瓜二つの外見を持ったルシファーとリリスのスペクタクル大ロマンを急遽創作し寝物語として話し聞かせたのに、この態度だ。

「おや？ 感動してくれないの？」

「だいたいその設定無理ありすぎ。最初のヒトが男ふたりだったら、子孫はつくれない」

「これは、裏アダムとイヴの物語なんだ」

「裏？」

「表があるってこと。男女のアダムとイヴはちゃんというから心配しないで」

「別に心配しているわけじゃない。随分とご都合主義のこじつけ設定だと思って」

「ん？ それを言い出したら、聖書の人類創生話がそもそもこじつけだよ。だいたいアダムとイヴを最初の人類とか言っているのキリスト教だけだ。ユダヤ教は旧約聖書ベースにしているけどアダムとイヴは最初の人類じゃない。最初のユダヤ人でしかないんだ。中にはアダムとイヴはメタファであり個人を指すものではなく国家、ユダヤの民のこと。その建国と亡国のことだという説もあるくらいだ。さらに創世記の記述から冷静に計算していくとアダムとイヴは今から六千年くらい前に生まれている。ところが沖縄で最初に見つかった縄文人である港川人の骨なんて二万年前のものだと鑑定されているんだ。沖縄の人の祖先は、アダムとイヴよりずっと昔からいたってことだよ」

「へえ、沖縄すごいな」

いや、そこ、棒読みで感心するところではない。

「沖縄だけではなく六千年前くらいでは、ぼちぼち世界各地で文明が起き始めた頃だ。まあそれは置いておいて、君がさっき言った通り、これは〈bedtime story〉——僕と君の物語だ。聖書という原作に僕が新しい解釈を付け加えた……いわば、僕らのためのおとぎ話——〈fairy tale〉だよ。そのつもりでもっと話を聞く気ある？ 質問があつたら答えよう。もつとも退屈だつたらこの話はやめる」

「一応、聞くよ。質問だけど、あなたの中でこの男同士のアダムとイヴにどういう存在意義が？」

「生殖ではなく愛のためだけにセックスをした最初のヒトってことだよ」

「はあ？ 無理やりすぎて意味わからないけど。まあ元が無理やりだからいいのか。アダムがあなたにイヴが俺に生まれ変わったという設定はいいとして、ルシファーとリリスはそのあとどうなったの？」

「アダムとルシファ、イヴとリリス。どちらも不完全な半身だったんだ。それで一つになる必要があつた。僕はアダムでありルシファーでもある。君はイヴでありリリスなんだ」

「じゃあ、なんであなたはルシファーではなくアダムって名乗つたの？」

そこは、普通引つかかるところではないだろう。まあいい。瞬時に思考を巡らせた。

「それは簡単な話さ。ルシファーとリリスではあまりにも認知度が低すぎて、ギャラリーはボカーンだろ？ わかりやすくが僕のモットーだ」

背を向けていたランガは、ゴロリと体勢を戻し仰向け愛之介を見た。目が合う。

「そういうこと？ もう、あなたの話を少しでも真面目に聞こうとしていた俺が馬鹿みたいだ」

ヨイシヨと上半身を起こそうとするランガの肩を支える。彼は愛之介の裸の胸に片頬を押し付けた。熱い吐息が胸を掠り、ぞくりとしたものが背を駆け上がる。そして、彼が瞬きするたびに長いまつ毛が、肌を擦る。さわつさわつと。なんともこそばゆい。

「それにアダム漢字当て字はすぐに思いついたけど、ルシファーのしっくりする漢字なんて見つからないと思うんだよ。どうやっても〈愛〉という漢字を入れ込むのは難しい」

「え？ 漢字って、アダムって漢字があつたの？」

身体を少し離し、顔を上げたランガは目をパチクリさせている。

「おや？ 知らなかったのかな？」

と口にしてから、はたと気づく。

待てよ？ 考えてみれば当然か。冷静になればS参加者たちのほとんどは知らない可能性すらあった。いつも〈アダム〉と口頭で名乗っているだけだったし、トーナメントのよ  
うに文字で記載する必要があるときは、誰であつてもSネームはアルファベット表記で統  
一していた。当然愛抱夢は〈Adam〉だったのだから。

「実はこういう当て字だったんだよ」とサイドテーブルの引き出しからメモを取り出し、  
書いてみせた。「愛抱夢」と。

「これで、アダムって読めるんだ。日本語って、漢字ってすごい」

今更こんな説明をすると、らしくもなく小つ恥ずかしいかもしれない。

ランガは〈愛〉の漢字を指差し「これは〈love〉だね」と言い、次に〈抱〉を「これ  
は……〈hug〉？」と顔を上げた。

「他にも〈Embrace〉〈uddle〉〈snuggle〉とか、前後の文脈によつて〈make love〉  
という意味になったりもするね」

「ふーん、で……」

ランガは〈夢〉に指を押し付け「〈dream〉？」と訊いた。

「そうだね」

「愛抱夢らしいな」

「らしい？」

「うん、とても」

ランガはニコツと笑った。それは嘲笑的な印象のない純粹な笑顔だった。

正直、この当て字は当時かなり真剣に悩んだ末に思いついたものだ。それなのに笑ったやつ——ジョーはまだしもチェリーなんてSネームも大概だと思うが——はいたし、呆れたのか絶句したやつ——スネークだって恥ずかしいだろう！ 某ゲームのプレイヤーだったとも聞いたが——もいた。

「君は笑ったり呆れたりしないのかな」

彼は、きょとした顔で首を傾げた。

「どうして？ だってあなたは、いつでも一生懸命で真剣だったから。俺まだ日本語よく理解していないと思うけど、この漢字の一字ずつの意味は、あなたの探していたものなんだなって思った」

日本語を母語にしていない彼の方が、むしろ面白おかしく捉えたりせず、素直に当時の愛抱夢の心情に寄り添ってくれている。この子にとって、それが自然体なのだろう。

そんな真っ直ぐな眼差しを向けられると、泣きたい気分になる。本当に君の言葉は、心にストンと落ちる。

ランガがここにくれる幸運に心から感謝しよう。

「まあ、ザコに笑われたところで痛くも痒くもなかったしね」

「愛抱夢つてさ、すぐくこだわっていたよね。アダムとイヴとエデンに。トーナメントタイトルもホワイトエデンだったし。しかもサブタイトルが——」

ランガは言いづらそうに口をへの字に曲げた。

「僕は本気だったよ」

「それも理解している。冗談だったとは思わないよ」

「ありがとう」

「ねえ、あそこは俺には何もない何も感じない楽しくない世界だったけど、あなたのエデンだった？」

あそこ——ゾーンと呼ばれるあの世界のことだ。ランガをうまく誘い込むことができた。ランガもあの素晴らしい世界に夢中になるだろうと疑わなかった。しかしこの子はイヴになることを拒んだ。

ここは楽しくないと。

「そうだね。あそこは僕を縛るものは何もない。スケートのことだけを考えていればいい世界。自由だった。俗世のこと全てを忘れられたんだ。はじめてあそこに入り込んだ瞬間もう夢中になった。すべての重圧から解き放たれる悩みのない理想郷、間違いなくアダムが帰りがったエデンだったんだ」

「でもひとりぼっちだった？ だから俺を連れて行こうとしたんでしょ？」

「エデンに至れるのはアダムとイヴだけなんだ。アダムにはイヴがどうしても必要だった。それだけだよ」

アダムはイヴによってしか癒されない。

ランガは愛抱夢の首に腕を巻きつかせた。

「寂しかったんだね」

そうだ。寂しかったのだろう。でもまだ、君の前でも認めない。

「どうだったかな」

「今でも、あそこがエデンだと思っている？」

「ああ、もちろんあそこはエデンだよ。でも、エデンに君と共に閉じこもることだけがお

まえの幸せか、と問われれば、そうではないのだろうくらい今では思えるようにはなっているよ。俗世でこうして君という。それでこんなにも満たされる」

「そう、よかった。あなたがまたひとりであそこへ行こうとしたらどうしようかと思っていた」

「君を置いて行くはずなんてないさ。いくらエデンでも、イヴがいなければ何の価値もない」

「じゃあさあ、今のあなたにとつてのエデン——ゾーンはどんな価値があるの？」

「まあ、その……敢えて言えばリゾート地……かな？」

「リゾート地？」

「気分転換にときどき行くのも悪くないと思っている。もちろん君とね」

あの世界へ、ともに辿り着くことのできる才能を持ったスケーター——イヴを探した。君が僕の前に現れるまで八年もの間待ち続けた。長かった。

あの場所は俗世のあれやこれや、鬱陶しい押し付けや縛り、全てを忘れることができる。スケートのことだけ考えていればいい、悩みや苦しみのない世界だった。でも……あの風景の中には自分しかなかった。しかも思い出したくもないあの準決勝で、赤毛に足

をすくわれたあの瞬間まで孤独の自覚はなかった。

愛之介はランガの腰を掴み抱き寄せ、首に唇を押しつけ手のひらを胸の上で滑らせる。ランガは首をすくめながら、自分の胸をまさぐる男の手首を掴んだ。

「今夜はもう無理だからね」

抗議しつつも乱れはじめた息に、ふふふ……と笑みが溢れた。

「君がその気にならなかつたら潔く諦めよう。もちろん無理はさせないから安心して」

耳に息を吹きかけ、舐め上げれば「ひつ……」と、ランガは背を震わせた。指の腹が乳首を掠めるたびに、身を振るが、抵抗は形ばかりになっていく。

そんなランガの反応に、愛之介は愛撫を続けながら楽しそうに目を細めた。

「ねえ、ランガくん、僕はさつきからずっと悩んでいたんだ」

「ん……悩むって、……なにを？」

浅く乱れた呼吸の中、途切れ途切れの声が訊いてくる。

すでにツンと立ち上がっている胸の突起を押し込むようにして小刻みに揺らしてやれば、甲高い悲鳴を上げ愛撫から逃れようと身を振った。そんな彼をきつく抱きしめ抵抗を封じた。

「君をどうやって、その気にさせようかって、さつきからずっと悩んでいた」

「え？」

「実は、前々から、ちよくちよく悩むことあったんだ。君は気が付かなかったみたいだけれど。だいたい勝率は三、四割程度かな。だからこそ、次はどうしてやろうかと考える。

そんな悩みがなくなったら面白くもなんともない……だろう？」

「意味が、わからない」

「つまり悩みのない世界なんて、退屈なだけの偽物だってことなんだ」

「なるほど」

変に感心する彼を、そつとベッドの上に横たえ頬に手のひらをあて見下ろした。

「今夜は僕の勝ちみたいだね」

自分の口から出た軽率な一言に少しばかり焦る。勝敗を持ち出すと、この子はムキになる傾向がある。ところが……

「なんか、むかつく」と言ったきり、ランガは否定しなかった。

潤んだ青が、ただ愛之介を見つめていた。

いつ見ても、ランガの顔も身体もため息が出るほど美しい。白く透きとおるような肌。

繊細な顔立ち。綺麗な筋肉が無駄なくついたアスリートらしい身体。それなのに自分の容姿に対して、とことん無頓着だ。

やがてランガは指を伸ばし愛之介の頬に触れた。輪郭をなぞりながら、桜色の唇が僅かに開き白い歯が覗く。その風情はクラクラするほど扇情的なものとして映り、脳髓を刺激した。

綺麗な形の唇が動いた。

「キスしようよ」

「どのようなキスがいいのかな？」

「うんと甘いのがいい。甘くて激しいやつ」

「かわいなおねだりには、誠意を持って応えないとね」

脚と脚が絡み擦れ合う。それから腹、胸へと重石をしていくように体重をかけながら覆いかぶさっていった。汗ばんだ肌と肌がピタリと吸いつき、胸で響き合う鼓動を聞く。

頬に軽く触れるだけのキスしてから、唇を重ねた。

甘くて激しいキスを、君が望むままに。

# バニラフレーバー【R18】

ランガはコンドームにうるさい。それは臭いからやダ、あれは変な味がした。これいいかも……と。そこまでうるさいのは、オーラルセックスで使用する頻度が高いからなので、当然口の中を刺激する殺精子剤配合のゼリー付きなど論外だ。

そうなると、とにかく舌触りと味。他には口腔内の温度が伝わりやすい熱伝導が高い素材かつ薄いコンドームを選ぶことになる。

最終的には、その手の問題をクリアしたオーラル専用のコンドームと、通常の挿入時使用のコンドームを使い分けることになった。

はじめて、口でしてくれたとき、当たり前のようにコンドームを使おうとしたことに驚いた。彼は「オーラルだろうが、同性間だろうが、つけるべきと教わった」と主張する。やはりこの子は性的にも幼いように見えて、北米で性教育を受けているのだ。

小学校低学年くらいのころ、父親の何億とある精子の中からたった一つ選ばれ母親の卵子と結合して自分が生まれたことを学校で教わって感動したという。自分はすごいんだと思ったと話してくれた。性とエロが感覚的に結びつく前だからこそ、いやらしい想像を巡

らすことなく純粋に感動することができたのだろう。少し羨ましかった。

もちろん性感症の観点からコンドーム使用は当然のことなのだが、ナマの方が気持ちいいとか、多分自分は大丈夫などという正常性バイアスがかかり、実際使おうとする輩は少ないだろう。

そういう愛之介だって、その発想はなかった所詮日本人だ。性的なものに一切触れさせない純潔教育を是非としていた伯母どもに育てられたということが入ってくるのは正確な性知識ではない友人間でやり取りされる真偽の怪しいただのエロ知識のみだった。

それが、ひとり放り出されたアメリカ留学で、日本人留学生の男女がらみのトラブルを目の当たりにしたことで戦々恐々となり遅れ馳せながら情報収集し独学で知識を得た。

それをさらつと自分よりかなり年下の少年から指摘されてしまったのは、政治家の性さがということで許してほしい。

さて話を戻そう。そのとき手元にはラテックス製のコンドームしかなく、その臭いからランガはオエツとなった。まあ無理もない。

そこから、色々試行錯誤の末、今のコンドームと食品成分からだけで作られている潤滑剤——ローションを併用することで落ち着いた。

どのようなフレーバーのローションがいいのかと一応訊いてみれば、「プーティン」などと寝ぼけたことを大真面目な顔をして言ってきた。あるわけないだろうが。そんなマイナーなフレーバーつくるくらいなら、豚骨スープ味とかガリックスパイス味とかのほうがまだポピュラーだ。調べてはいないが、いずれにしろ果てしなく需要はないだろう。

結論としてランガは甘いフレーバーを好んだ。ハチミツ、メープルシロップはお気に入りでだった。実際、自分が舐めても甘くて美味しいと思えた。もつともいくら美味しくてもフォンダンショコラ味なんてあれば、かえって集中できなさそうで、それは避けたい。あるわけないが。

その夜、封を開けたローションはバニラだった。はじめてのフレーバーだ。バスルームで、お互い相手の全身に塗りたいくらい、飽きることなくマッサージしたり舐めたりを繰り返した。手のひらで温めペニスを愛撫したりされたりするのも気持ちよかった。

ぬるぬるになった肌と肌を密着させ、ローションをたっぷり塗ったペニスとペニスを擦

り合わせ……って、まあただイチャイチャとじゃあつていただけなのだろう。

やがてランガは、フェラチオ専用コンドームを要求し、熱い舌を這わせそのまま愛之介をいかせてくれた。

次はお返しとばかりに、彼の後ろに指を持っていきアヌスをマッサージしほぐしながら指を挿入した。前立腺を刺激しながら胸に唇を這わせ、ペニスを揉みしただけ、彼は白い精を吐き出した。

ぐつたりと弛緩したランガを腕の中にしばらく抱きしめていた。

ドクンドクンという鼓動が響き合い、目を閉じ相手の熱い吐息を胸に感じていた。心地よい疲労感。なんと満ち足りた気分なのだろう。

やがてランガは顔を起こし訊いてくる。

「挿れなくていいの？」と、頬を上気させ。

「君が挿れて欲しいのなら、挿れるけど、僕としてはどちらでもいいよ。もう十分すぎるくらい……」

彼の桜色の唇をそつと指で押さえた。

「ここでもらったしね。君はどうなの？」

「俺は……あなたに触られるのが好き。あちこち触ってくれて、気持ち良くしてくれるの。俺もあなたを気持ち良くしたいと思うし、気持ち良くなってくれば嬉しい。抱き合ってキスするのがすごく好き。インサートされるより気持ちいいかもしれない。だから今は満足しているんだと思う。でも……」

「でも？」

彼は首を傾げた。

「でも、ずっとそうだったら寂しいような気がする。快感ではなくて、たとえ痛かったり辛かったりしても、たまには……」

そこで言葉を見失ったようにランガは黙り込んでしまう。でも、わかってしまった。

「ふふふ……。僕も同じだよ。たまには君とひとつになりたいと思うんだ」

「そう、きつとそれだ。俺もそうなんだと思う。でも今日はまだ大丈夫かなって」

「この前挿ればかりだからね。そう頻繁にやるほどのものではない。受け入れる側の負担が大きすぎるんだ。無理はさせたくない」

ランガは愛之介の首に腕を絡ませ唇にキスをしてきた。唇を離して微笑む。

「これ、味も匂いも甘いね」

「バニラフレーバーだから」

「メープルも良かったけど、これも好きだな」

「君もね。同じくらい甘くて、まるでバニラのように……」

「え？」

微妙な表情になった。

アナルセックスをを好まないゲイをバニラと呼ぶ。挿入して、いくことより、キスをしたり抱き合ったり、手を握り合ったり、寄り添い体温を感じるほうがずっといい。ならば、彼も自分もバニラ寄りなのかもしれないと愛之介は思う。いくだけなら自分の手で十分だ。

とはいえ、一般的に「君ってバニラだね」などというのは「君って退屈だね」と同義だ。バニラアイスクリームがそうであるように、どこにでもある平凡でつまらないフレーバーと考えられている。

誤解を解いておこう。

「悪い意味じゃなくて、ただ甘いってことだよ。甘くて甘くて、僕はいつも君の中で蕩けそうになる」

ランガはほつとしたように息を吐いた。

バニラか……。

彼を片腕で抱いたままバルブを開いた。彼の頭からシャワーをあて、ベタついた身体からローションを洗い落としていく。床に散った白濁もろともすべての痕跡が排水溝に流されていった。

「なんかバニラアイスクリームが食べたくなった」

ランガはぼつりと言った。

「あるよ」

「え？」

「なんとなくなね。ローションがバニラだなと思ったら、つい買ってきてしまった。マダガスカル産のバニラビーンズが入ったアイスクリーム。合成バニラと違って優しい香りなんだ。食べるだろう？」

「もちろん」

ランガの青い瞳がキラキラと輝いている。

やれやれ。やはり食いが優先か。でもそんな彼が愛おしくてたまらない。

《了》

## 正しい誕生日プレゼントの選びかた

### ランガの課題

ふと顔を上げれば壁に下げられたカレンダーが目に残った。

そうか。もう四月も半ばだ。

春分からゴールデンウィーク直後にある梅雨入り前の、気候的に一年で一番快適なその時期を「へうりずん」と沖縄では呼ぶ。今はちょうどそんな季節だという。

月末になればゴールデンウィークに突入する。学生も社会人も、祝日が集中しているその辺りに、旅行やレジャーを楽しんだりする。

そうは言ってもランガの母親は、仕事柄その手の休みとはあまり縁がない。母子揃ってまとめて休みを取ることは難しい。

そしてゴールデンウィーク明けあたりから鬱陶しい梅雨に突入し、ランガのもっとも苦

手とする高温多湿の沖縄の夏と格闘することになる。想像しただけでうんざりする。

暦はゴールデンウィークの間、家族親族行事で忙しいとのことだったが、ハーリーを見物しに行こうとランガを誘ってくれた。ハーリーは沖縄伝統行事で海の安全を祈るレガッタに似たボート競技の祭りだ。

まあ沖縄に住んでいるんだから、一度くらい話のタネに見ておいてもいいんじゃない？と暦は言った。五月三日から五日の三日間にわたって開催されるから都合のいい日を連絡してくれるという。

五月か、五月……。あれ？何か肝心なことを忘れているのではないだろうか。

そこで、ランガは減多に確認したりしないスマホのカレンダーアプリを慌ててチェックした。

五月一日の欄にケーキのスタンプ。

あ……。

そうだった。

五月一日は、あの人の——愛抱夢の誕生日だ。

愛抱夢の誕生日には何かをプレゼントする予定だったのだが、ぼんやりしているうちに、誕生日はすぐそこに迫っていた。

今まで愛抱夢から一方的にもらっているばかりだった。それは花とか小物だったり、物ではなく食事やなんらかのイベントだったこともある。お礼をした方がいいだろうかと悩んでいたら、母親である菜々子が感謝の気持ちを込めてグリーティングカードを送ることを提案してくれランガはそれに従った。

そんなカード一枚に、あの人は大喜びしてくれた。なぜそんなに感激していたのか、とても不思議だったのだが、何ごとにつけ基本オーバーアクションな人だからで、あまり考えないことにした。

ただ、菜々子はこの助言もつけ足していた。  
「カードだけではなく、誕生日とか特別なイベントのときは、そんな高価でないものを贈っておいたら」と。

母親のアドバイスはともてありがたかったのだが、いざ何かプレゼントを探すとなると、どのようなものを選んでいいかわからない。

三日ほど悩んで、本人にさりげなく「誕生日に何か欲しいものある？」と訊いてみたのだが、とても自分にはプレゼントできないようなものを要求された。速攻で「無理」と返したら、「冗談だよ。君がくれるものなら、たとえ浜辺に落ちていた貝殻ひとつでも嬉しい」などと言いつつ始末。きつと揶揄われているのだろう。

訊かなきゃよかったと後悔した。

そうやって何も決められないまま、その日はどんどん近づいてくる。

まさか、こんなに大変なこととは。

ランガは、ショッピングサイトで色々物色してみたりもした。

〈男性がもらって嬉しい誕生日プレゼント〉などというキーワードで検索し、アンケートランキングを参考にすることを試みたが、どれもこれもそれなりに収入がある社会人が、恋人や親族に贈る逸品という印象だった。

時計とか財布とか——多分、安いものなら買える。でも、あの人は高級ブランド品ばかり持っている。もちろん安物を贈ってしまったても喜んでくれるだろうことはわかっている。

どうしたらいいんだろう。まさかバースデーカードのみって訳には、いかないだろう

し、まだ学生の自分が使える金額は高々知れる。

ランガは途方に暮れた。

誕生日プレゼントを選ぶなんて簡単なことだろうと高をくくっていた。完全に甘くみていた。

ランガはブンブンブンと首を強く振った。

何を難しく考えているのだろう。えいっ！　って決めてしまえばいい。なぜならあの人はたとえ何をあげても喜ぶのだろうから。浜辺に落ちていた貝殻ひとつでもいいと言っていたではないか。金額ではない。気持ちだ、気持ち……と自分に言い聞かせてみた。

それでも……と思う。

趣味が悪いと思われたくない。なんでこんなものを？　などと呆れられるのはいやだった。もし変なものをあげてしまつて、ほんの少しでも幻滅させてしまつたらどうしよう。がっかりさせたくない。

どうしたんだろう。今までこんなこと——誰かにどう思われるかなんて気にしたことなかったのに。

堂々巡りの思考の中、ランガはテーブルに突つ伏して頭を抱えた。

頭がぐるぐるする。

### 菜々子のアドバイス

鍵を開け玄関に足を踏み入れた瞬間、食欲をそそる匂いがした。

そういえば息子が夕食の準備をしてくれると言っていたことを多い出す。

「ただいま」

「おかえり、母さん」

「いい匂いね。チキン焼いたのかしら？」

「うん。ソースはレトルトだけど」

「十分よ。ランガは先に食べてくれた？」

「食べた。母さん座っていて、温めてくる」

菜々子は椅子に座りテーブルに並べられたランガの手料理に目を輝かせた。チキンもサ

ラダも味噌汁もととても丁寧に盛りつけられている。

チキンを口に運べば思わず笑みが溢れた。

「ジューシーだし皮もパリパリして香ばしくて美味しいわ。ランガもだんだん料理の腕が上がつていくわね。昔はオムレッツくらいしか作れなかったのにね」

「少しづつ慣れてはきたけど、もう少しレパトリーを広げたいなと思ってしている」  
微笑みながら菜々子は食事を食べ進めていった。

「ご馳走様」

出された料理を綺麗に平らげ、口元を拭きながら顔を上げればランガと目が合った。表情が暗い。何かあったのだろうか。

「浮かない顔ね」

「あ、うん」

「悩みごとでもあるの？ 無理に話さなくていいけど」

「別に話しても構わないよ。もうすぐ誕生日の人がいてプレゼントが決まらなくて。あま

り日にちないのにつて焦っている」

「誕生日の人？ いつもお花とか色々くださる方かしら？」

「そう。母さんに言われたようにカードは送っていたんだけど、五月一日が誕生日なんだ。そこで、その日くらい何かプレゼントしたいと思ったけど、何を選べば良いのか、見当もつかないんだ。なんでも持っているような人で、それも全部高そうなものばかりだし。俺が今更あげたところでもつと良いもの持っているだろうしって思っちゃうんだ」

菜々子は「どんなものでも喜んでくださるかたでしょうけど。そうね……」と首を少し傾げた。

確かに息子にしてみれば、かなりの難問だろう。お祝いのプレゼントはそのものに価値があるのではなく、ものに込められた気持ちだ。相手を思いやる心と幸せを願う思いが伝わればいい。

「それなら、お花にしたら？」

「花？」

「そうよ。今までランガに花を贈ってくれた方なんでしょう？ それならお花が好きなんじゃないかしら」

「そっか、確かに。その発想はなかった」

「お花なら予算に合わせそれなりの見栄えにしてもらえる。あと、できればわざわざ花瓶に生けるなんて手間かけさせないよう、そのまま飾れるタイプのアレンジメントにしたらいいと思うわよ」

「アレンジメント？」

「ええ、花瓶がなくても大丈夫で元々籠とか容器に入っていて、そのまま飾れるブーケとこのかしら。最初から見栄え良く生けられていて、結構長持ちするのよ」

「えーと」

想像できないのかランガは眉を寄せ難しい顔になった。口ではうまく伝えられない。実際に見た方が早いと菜々子はスマホを取り出し、検索して写真を見せた。

「こんな感じよ。花瓶にわざわざ移さなくても、そのまま飾れるから受け取った方も楽よ」

「へえ、これいいね。フラワーショップに注文すれば作ってくれるのかな」

「予算を言えばその範囲でね。でも花はあなたが決めないとダメよ。せっかく差しあげるのですもの、あなたがその人のことを思つてどの花がふさわしいかイメージして、きちんと選んであげて。その気持ちは伝わるから」

「うん、そうする」

「誕生日はいつなの？」

「五月一日」

「あら、スズランの日ね。確かその日の誕生花はスズランだったはず」

「スズラン？」

「〈lily of the valley〉のいっよ。世話になった人にすずらんを送るって、フランス系のかたが言っていたわね」

「へえ、じゃあスズラン入れておいた方がいいかな？」

「あればね。でも無ければ無いでいいのよ。今の季節らしい花にすれば」

「ありがとう。母さんに相談してよかった」

ランガはすっきりした笑顔を見せテーブルの上を片づけはじめた。

菜々子は食器を洗う息子の後ろ姿を見つめる。

なんだかんだ言って成長したとを感じる。

人とコミュニケーションを取ることが苦手だった息子。カナダでは家族以外の他人と親

しく接することはできなかった。沖縄に来て、暦くんと無二の親友となりスケートという新しい趣味に夢になって、それをきっかけに多くのスケート仲間と親交を持てたという。

その中に、ランガを特別気にかけて、よく花やプレゼントをくれる人がいる。スケート仲間であるのは間違いないらしい。それでも、どういう関係なのか今ひとつ理解しにくい。特に秘密にしようという感じはないのだから、後ろめたいことはないのだろう。それに、ポイントポイントで息子は相談してくれるのだから大丈夫だと思えた。

自分はまだ息子に信頼されている。母子の関係は悪くはない。それならばあまり詮索はしない方がいいだろう。

それでも、その人に会ってみたいと思う気持ちがないと言えば嘘になる。

食器を洗い終えたランガが振り向きエプロンを脱ぎながら言った。

「ねえ母さん。その人、母さんに会いたいって言っているんだ。色々仕事もあつて今すぐは難しいけどって」

「母さんもちょうど会いたいと思っていたわ」

「うん、必ず」

### シャドウのプロ意識

「いつもありがとうございます。お気をつけてお帰りくださいね」

店先で客を見送る。一時的に客は途切れ店内は静かになった。

地元民に愛されている花屋『チューリップ』。スタッフの比嘉広海ことシャドウは、客がいらないタイミングで、生花や鉢植えのメンテナンスをこまめに行う。しゃがんで冷蔵ショーケースを覗き花や葉が傷んでいないかチェックしていた。

来客の気配に振り向いた。

「いらつしや……え？」

そこに珍しい客が立っていた。いや客ではないかもしれないが。

「こんにちは、シャドウ」

「ランガか。どうでもいいが店の中でシャドウはやめてくれ。俺ひとりだからいいような

ものだが」

「つい癖で、ごめん」

「今日はひとりか？ 相手はどうした」

「暦ならこれから会う約束をしている。それより誕生日に贈る花が欲しいんだ」

「暦の誕生日なのか？」

「違うよ。誕生日は別の人。花が欲しいのは五月一日で、夕方取りに来ようと思っているんだ」

「どんなのが欲しいんだ？」

えつと、と言いながら彼はスマホを取り出し何かを確認している。

「花瓶に生けなくても、そのまま飾れるブーケ？ つて母さんが言っていたかな」

母親から頼まれたというところだろうか。

「アレンジメントかスタンディングブーケだな。手間がかからないし殺菌剤や栄養分の入ったゼリー状のものに生けられているから意外に長持ちもする。五月一日に用意しておけばいいんだな」

「うん、お願い。予算は……このくらいのボリュームで、このくらい？」

と、通販サイトのブーケをスマホで見せてきた。

「まあ、そんだけあればもつと見栄えがいいものができるぜ。花はこっちで見繕えばいいのか？」

どうせ花には興味ないだろうと気を効かせたつもりだったのだが、ランガは首を横に振った。そして意外な言葉が返ってきた。

「俺が選ぶ」

「おまえがか？」

「うん」

こいつに花を愛でる感性があるのか？ と疑問に思う。

初めて愛抱夢とビーフしたとき、あの当店自慢の最高級豪華赤バラの花束を受け取っても、表情ひとつ動かさなかったやつだ。淡々と「どうも」だけとは。うちで作った花束なんだぞ。誰が手渡そうが花に罪はない。その迫力と美しさに心動かされないなんておかしいだろう。

でも、まあアドバイスくらいはしてやつてもいい。

「ひととおり見て、気に入った花があればそれをメインにするから言ってくれ。ブーケや

アレンジメントに適しているかどうか教えてやる」

「わかった。そうだ、スズランは入れたいんだけど」

「なるほど。確か五月一日の誕生日だったな。了解した」

ランガはひとつひとつ、じっくりと花を見て回っている。青い瞳が真剣な光を帯びていた。

おや？ これはビーフ前のこれから真剣勝負に挑もうというときの目つきに似ている。シャドウは接客で多くの客を観察してきた。それゆえ知っている。花に対して特別の思い入れのない、義理や女性受けがいいからという軽薄な理由でブーケをプレゼントしようという連中は、そこまでの熱心さはない。真摯に花と向き合っている人は、見ればわかる。今のランガはそれだと思えた。

少し見直してやらないでもない。

ひとつずつ丁寧に店内の花を見ていき、やがてある花の前で立ち止まる。目を逸らすことなく、しばしその花を凝視していた。

ややあつて彼は「この花……バラ？ とは違うよね？」と質問してきた。

「それはシャクヤクだ」

「シャクヤク？」

「気になるみたいだな」

「すごく綺麗。なんだろう。他の花と違って見えるんだ」

こいつ、ひよつとすると花の美しさを受け止める感受性は少しくらい持っているのかもしれない。いいところに目をつけていやがる。

ちょうどシャクヤクが旬を迎えていた。日本全国津々浦々、花屋のこのシーズンいち押しはシャクヤクだと言つても過言ではない。花びらは幾重にも重なり艶やか、それでいて光を透かしてしまいそうに薄くレースのように繊細。

魅入られたように花を見つめるランガにシャドウは、目を細めた。

ウインドウから差し込む光に白い頬が透ける。白いシャクヤクの花びらとイメージが重なった。雪色の少年——いや、少年というには失礼か。暦もだが最近ふたりともめつきり大人びてきていた。もつとも喋らせれば、ランガも暦まだまだガキだが。

シャクヤクから目を離そうとしないランガに声をかけた。

「どうやら一目惚れってやつだな。その感覚は大切だぞ。おまえ花を見る目案外あるのかもな」

ランガは顔をシャドウに向けた。

「そうなの？」

「ああ、そのシャクヤクは入荷したばかりの初物だ。一年中あるバラと違って、四月の終わりから六月の頭くらいまでしか店頭に並ばない、季節限定の花だからな」

「それって、今の季節らしい花ってこと？　そういう花を選ぶようにって言われていたからちようどいいのかな」

「ああ、シャクヤクもスズランも今の季節だけだ。ちなみにスズランの花言葉は『再び幸せがおとずれる』でシャクヤクは『恥じらい』『慎ましさ』だ。俺たちスケーターには似合わない言葉だろ？」

ランガはクスリと笑った。

「そうだね。それと、とてもいい匂いだ」

ランガは再びシャクヤクに視線を戻した。決まりだ。

「そうだろうさ。香りの良さも売りだ。今ちようど店頭にはないがスズランも香りが良くて有名だ」

「そうなんだ」

「それではスズランとシャクヤクでアレンジメントかスタンディングブーケ作るでいいな」

「できそう？」

「ああ、問題ない。スズランは白だが、シャクヤクの色はどうする？ 赤、ピンク、淡いピンク、白があるぞ」

「花の色で何か特別な意味とかある？」

「意味というか、心理効果が違うと言われている」

「へえ、シャドウって詳しいね」

「花のプロなんだから当然だ。それよりシャドウはやめてくれて言っているだろうが」  
「そうだった。ごめん」

「簡単に説明すると、赤は元気になる色だ。少し目を覚まさせ興奮させる。ビーフ前に最適だ。ピンクの花は部屋に置くとリラックスできて優しい気持ちになるからストレスの多

い人向けだ。白は、色々なしがらみをまっさらにリセットしてくれて、正直な気持ちになる……と言われている」

「それなら」と、ランガは一輪一輪、指差した。

「これとこれとこれがいいかな」

明るいピンクとごく淡いピンクと純白のシャクヤクをランガは指定してきた。

「理由は？」

「なんとなく。ストレス多そうな人だから、部屋に飾るのなら赤よりピンクかなって思った。これでカッコよくできるかな？」

「おう任せておけ！ 今更だがシャクヤクは花開かせるタイミングが難しいんだ。硬い蕾の状態で出荷され、店内で開かせちゃうといい頃合いで店に並べる」

「え？ そんな難しいの大丈夫？」

「もちろん問題ない。久々に俺さまの腕が鳴るぜ」

シャドウは腕を持ち上げると、グイッと肘を曲げ力こぶを作って見せた。

「色々アドバイスしてくれてありがとう。助かったよ」

ランガはほつとしたように微笑んだ。

シャドウから比嘉広海に切り替え、仰々しく頭を下げ、締めることにした。

「それでは、お客さま、五月一日のご来店をお待ちしております」

「ありがとう、シャドウ。楽しみにしている」

「だから、Sネームで呼ぶのやめろと言っただろうが」

一瞬でシャドウに戻ってしまった。

「いけない。暦との約束に遅刻する。俺行くね。じゃあ」

ランガは出口に向かい手を振った。

通りを走って行くランガの背中を見送って、シャドウは壁に掛けられた時計を確認す

る。そろそろ店長が戻る時間だ。

それにしても誰の誕生日なのか。最初は、ランガの母親に頼まれ注文してきたと思い込んでいた。それが会話を進めていくうちにランガが自分でプレゼントするのだろうかという気がついた。あくまでも自分で花を選ぶことにこだわったのだから。

花と向き合うランガの面持ちは真剣そのものだった。相手を深く思い、どのような花を贈ればいいのか、イメージの中で一生懸命探したのだろう。なんというか、いじらしい。

今まで知ることのなかったランガの一面を見たような気がした。

では、誰に？ と気にならない訳ではないが、自分はプロのフラワーショップのスタッフだ。客のプライバシーを詮索するような、ど素人ではない。そのうちわかる 때가来るだろう。今は「ご注文ありがとうございます」で十分だ。

## 愛抱夢の誕生日

五月一日は愛之介の誕生日だ。

愛之介がまだ初等教育を終える前まで、忙しい父に代わって誕生日パーティーなるものを伯母たちが主催していた。多くの客が招待されたが、あれは伯母どもが自分の作品を見せびらかし自慢するためのものだった。

自分達が教育し躰けてきた神道愛之介が。いかに優秀に育ち、神道家の跡取りとして相應しいかをただひけらかすためのだけの。

バイオリンやピアノの演奏や英語でのスピーチを披露する。礼儀正しい挨拶と綺麗な言

葉遣いと優雅な食事のマナーをそつなくこなす優秀な子供に、皆が感嘆する。

招待客たちは口々に伯母たちを賞賛した。

「なんて優秀に育つたのでしょうか。将来が楽しみです。やはりお父様の跡を継がれることになるのでしょうか。これも叔母君お三方の教育が素晴らしかったからです。」

「まあ、お上手ね。私たちの力なんて。愛之介さんがもとと優秀で才能豊かだったのよ。」

伯母たちは一応謙遜していたが明らかにポーズだけだ。

「お誕生日おめでとうございます」と招待客たちは次々と祝いの言葉と齒の浮くようなお世辞とともにプレゼントを差し出してきた。愛之介も礼儀正しく感謝の言葉を口にして笑顔でプレゼントを受け取った。多分高価なものだったのだろう。ところが、まったく言っていないほど記憶には、残らなかった。

パーティの翌日、「お誕生日おめでとう」と忠がこつそり渡してくれたスケートグローブは、嬉しくて嬉しくて、その色からあしらわれたデザインポイントまで今でも鮮明に覚えていたのに。

子供心に理解していた。このパーティの主役は神道愛之介ではなく、三人の伯母たちだということ。

「愛抱夢の誕生日を祝いたい。会える？　誕生日当日が無理だったら、あなたの都合の良い日に」

ランガからの嬉しい申し出に、五月一日の夜なら会えるよと、返事をした。

できればもつと早い時間から会えればよかったのだが、当日の昼に知り合いの結婚式に招待されていた。しかも結婚式場のホテルは東京。幸い午前中スタートだということで、何らかのアクシデントからの遅延がなければ夕方には那覇空港に到着できるはずだ。

神道愛之介の誕生日に結婚式を挙げるとは、無粋なカップルだとは思わが仕方ない。披露宴の時間帯が午後でなかっただけ良しとしよう。

幸いにもフライトは順調で定刻通り那覇空港に着陸してくれた。

愛之介は、国内線ターミナルにあるタクシー乗り場へ足早に向かう。忠にはランガを迎

えに行くよう言いつけてある。そろそろ別荘に着いている時間だろう。安心させようとタクシーの中からメッセージを送った。

「もう別荘かな？　今、那覇空港からタクシーに乗った。あと少しで到着するから安心して。お腹空いたら何かあるものつまんでいて」

——〈今着いたばかり。待っている〉

タクシーが別荘の前に停車した。支払いを済ませるまでの時間すらもどかしい。玄関まで走りドアを開ければ、ランガが出迎えてくれた。

「お帰りなさい。お疲れ様」

「ただいま。ようこそランガくん」

顔を合わせるなり、ランガは訝しげに愛之介の頭のとっぺんから足のつま先まで視線を流していった。

「ん？　何か変かな？」

「その格好と、その荷物は？」

「ああ、日本の結婚式は大抵こんな感じだよ。礼服なんだ。男はほぼ全員同じ格好をして

いる」

「ふーん、制服みたいなもの？」

「確かにそんな感じかな。日本は同調圧力が強くてね。あとこの荷物は〈引き出物〉だよ」

「フキデモノ？」

「いや、〈フ〉じゃなくて〈ヒ〉だ。〈ヒキデモノ〉。結婚式の招待客に配られるお土産みたいなもの。こっちの箱はバームクーヘンらしい。あとは無難な食器や小物などが配られるんだけど、最近はカタログで渡される」

会話を続けながら靴を脱ぎ部屋に入っていく。

清々しく優しい香りがした。使用人がルームフレグランスでも置いたのか？ それにしてはわざとらしくない自然な匂いだ

「へえ、日本の結婚式って面白いね」

礼服を脱ぎハンガーに掛けた。

「こっちは面白くも何ともない。悪いけど先に汗を流してくる。全身ベタベタなんだ。食事はそれからいいかな？」

「大丈夫」

シャワーを浴びてさっぱりしたらやつと気分が落ち着いた。ラフな服に着替え、部屋に戻れば、巨大なブーケを抱えたランガが立っていた。

「愛抱夢。お誕生日おめでとう」

「ありがとう。ランガくん」

受け取れば爽やかな芳香がふわりと立ち上がった。部屋に入ったとき感じた香りの正体はこれだったのか。

「なんて美しいんだ。豪華で素敵なブーケだ」

ランガはほっと安堵したような笑顔を見せた。

「本当はね、花ではないプレゼントを用意しようと思ったんだけど、何にしていいいかわからなくて。愛抱夢って欲しいものは何でも持っていそうだし。それで母さんに相談したら、そういうときは花にしたらいって言われて。なんか工夫がなくてごめん」

「そんなことはない。こんな嬉しいプレゼントは生まれて初めてだよ」

「大袈裟だな。それ花瓶に移さなくてもそのまま飾っておけるよ」

「それは助かるよ。気が利くね」

「俺じゃなくて母さんがアドバイスしてくれた。あ、でも花はちゃんと俺が選んだ。ほんとうだよ」

ランガは身を乗り出しムキになって、自分が選んだ花だということを主張した。

ブーケに目を戻した。シャクヤクとスズランだ。この花を選んだのはランガなのか。思わず目尻が下がり口元が綻んだ。第三者から見ればとんでもなく締まらない顔をしていたに違いない。

「そうか。君の見立てなんだね。見事な大輪のシャクヤクだ。本当に君は素敵なセンス

——〈great taste〉の持ち主だね」

ランガは、はにかんだように微笑んだ。

「愛抱夢、花の名前知っていたんだね。俺は知らなかった。フラワーショップにある花、どれがいいか、ひとつひとつ全部チェックした。それで、その花がどうしても気になって目が離せなかったんだ。最初バラかと思ったんだけど、よく見たら違っていて、シャドウがシャクヤクという花だって教えてくれたんだ。バラは一年中店にあるけど、この花は短い間しか売っていない今の季節らしい花だって、シャドウからもすすめられた。あなたの

誕生日の短い間しか咲かないのなら、どうしてもこの花をあなたに届けたいなって」

「そうだったんだ。それと、この可愛らしい白い花はスズラン——〈lily of the valley〉だね？」

「うん、それも今のシーズンだけで、五月一日の誕生日の花だって母さんが教えてくれたんだ。それで入れてもらった」

ブーケは、明るいピンクと淡いピンクと白いシャクヤク、そのシャクヤクとシャクヤクの間から可憐なスズランが覗く。スズランは五月一日の誕生花、つまり愛之介の誕生花だ。それは知っていたのだが、この清楚な印象と自分のイメージがあまりにもかけ離れていると我ながら思う。

「おっと、つい話し込んでしまつて悪かった。食事にはいりましょうか。お腹すいただろう？」

「うん、すごく」

タイミングがタイミングなので豪勢なディナーというわけにはいかなかった。カジュアルなメニューだったがランガは満足してくれたようだ。

食事をしながらお互いの近況報告など他愛もない雑談をした。

ランガはゴールデンウィーク中に赤毛とハリーを見物しに行くのが楽しみだという。あと彼の母親が愛之介に会いたがっているとも。

ランガの母親には、色々——状況的にも自分の気持ち的にも——整理をしてから会いに行こうと本気で考えている。

デザートを彼と自分の前に置いたとき、ランガがふと言った。

「あなたは、俺が何をあげても、きつと同じように喜ぶよね」

何か引つかかるものがあつたのだろう。

「そうかもしれないね。金で買えるものなら、欲しければいくらでも自分で手に入れることができる。プレゼントは何であつても君が僕のために一生懸命、考え悩んでくれたんだって思うと、その時間がたまらなく愛おしい。その時間は金で買えるものではないんだ。だからそんな顔をしないで」

「俺、変な顔していた？」

「まあね。それでも、これ以上考えられないくらい最高のプレゼントを君は選んでくれたんだ。意図せずにシャクヤクとスズランという特別なものをね。君は僕を悦ばせる天才かも

しれないな」

「どういうこと？」

「スズランは僕の誕生花だって君はお母さんから聞いて知っていたよね？　ではシャクヤクはどうか？　シャクヤクって、二月八日——君の誕生花なんだよ」

ランガは驚いたように目を丸くした。

「嘘。知らなかった」

「何も知らない君が、無意識に僕の誕生花と君の誕生花を選んできました。運命を感じるよね。ところでシャクヤクの花言葉知っている？」

「シャドウが教えてくれたかな。なんかスケーターに縁がない言葉だとか言っていた」  
確かに、そうかもしれない。

「なるほどね。『恥じらい』『慎ましさ』だよ」

「愛抱夢って、びっくりするくらい花言葉詳しいよね」

「そこまでは詳しくないよ。君のことだからと、ひととおり調べたから知っていたに過ぎない。そうでなかったら調べようとも思わなかったさ」

当然だ。他の連中の誕生花、以前に誕生日だって知らないし興味はない。

「シャクヤクの花言葉は、俺の誕生花だったから気になって調べたってこと？」

「もちろん。それでもっと詳しく調べている。シャクヤクの色ごとにそれぞれ花言葉があるんだ」

「え？ そうだったの？」

「ピンクは、はにかみ」

「はにかみ？」

「内気な感じで恥ずかしがったり照れたりすることかな」

「日本語難しい。じゃあ白は？」

唇の端がニツと吊り上がる。

「秘密」

「何それ？ 教えてよ」

「教えない」

ランガはムツと口を尖らせスマホを持ち出した。ここで調べようというのか。今はさせない。

腕を伸ばし、さっとそのスマホを取り上げた。

「ちよつと！」

ランガは指を伸ばすが届かない。

「せっかくの誕生日。ふたりきりで過ごしているのにスマホいじりかい？　野暮はダメだよ」

椅子から立ち上がったランガは、愛之介の前に歩み寄り「返して」とスマホを取り返そうとするが当然死守した。諦めが悪い。

「明日の朝には返してあげる。それまで預かっておくよ」

彼の腰に手をまわし、グイッと引き寄せる。密着した身体を片腕で固定し、スマホを背後にあるチェスト引き出しに入れダイヤルを回しロックした。「あー」と不満げな声が聞こえた。

そのままランガをぎゅつと抱きしめる。

しばらくジタバタしていたが諦めたのかランガの手が背中にもわされた。

話題を変えよう。

「ねえ、ランガくん、覚えている？　君、誕生日のプレゼントに何が欲しいかと僕に訊いてきたよね」

「訊いたけどさ。あのときは本当に何にしているかわからなくて困っていたんだ。それなのに、あの返事だ。訊かなきゃよかったと本気で後悔した。絶対に無理なものの要求してくるんだから。俺を子供扱いして揶揄ったよね」

どうやら根に持っているらしいのだが、それは誤解だ。

「とんでもない。子供扱いもしていなかったし揶揄ったつもりもなかったんだけどな。うん、まあ君なら半分くらいは、そう受け取ってしまうだろうと想定はしていたけどね。僕は本気だったんだよ」

そうだ。あのときランガに「欲しいものある？」と訊かれて『プレゼントは君がいい。僕のものになって』と答えた。瞬時に「無理」と、あまりにも迷いなく返され、少しへこんだ。戸惑いながらも「どういう意味？」などと確認くらいしてくれるかと期待していたのだが甘かった。結局「君のくれるものなら貝殻ひとつでも嬉しい」などと誤魔化すしかなかった。

ランガは少し身体を離して愛之介の深紅の虹彩を覗き込んだ。

「本気だったの？　ちよつと待って」と混乱を隠せず、青い瞳が左右に揺れ動いていた。程なくして「どう考えても無理でしょう？　だって俺は俺のものなんだから誰のものにも

ならないよ。それは生まれてから死ぬまで変わらない。それとも俺、また日本語よくわかつていなかった？」

困惑と不安が入り混じったような眼差しを愛之介に向け、ランガは答えを待っている。吸い込まれそうな氷の青。この子は本当に真っ直ぐだなと思う。

「いや、何も間違っていないよ。君の言うとおりだ」

ランガの言ったことは正論で大前提だ。

「なのに本気だった？」

「そうだね」

ん？ とランガは首を傾げ。それからしばらく黙ったまま考え込んでいるようだった。やがて何らかの落としどころが見つかったのか、顔を上げ愛之介を真っ直ぐ見据えて言った。

「なんだかよくわからなかったけど。今日は愛抱夢の誕生日で特別の日だから、いいよ。一日だけなら」

思いがけない申し出に頬が緩む。

「では、今夜だけ君は僕のものだ」

「あのさ、それっていつものやることと違うようになるの？」

「ん？ いや何も変わらないかな」

「え？」

「気持ちの問題だよ気持ちのね」

自分のものであれば永遠に手の届くところに置いておくことができる。そんな子供じみた理屈で言ってみただけだ。ただそれだけ。

「何それ？」と呆れ顔でランガは目をしばたかせた。やがて諦めたのか、ため息をひとつ落として「仕方ないな」と愛之介の首にするりと腕をまわした。

唇に熱く湿った吐息がかかる。軽く触れるだけのキスをして彼は微笑んだ。

「改めて。〈Happy birthday, Adam.〉」

「ありがとう、ランガくん。君からのプレゼントは遠慮なくもらっておくよ」

彼を抱く腕に力を込め、より身体を密着させ目を閉じる。布地越しに伝わる穏やかな体温を、腕の中に閉じ込めた筋肉の弾力と柔らかなさを、唇をくすぐる水色の髪の毛の感触を、しばし堪能した。

いつもと変わらない、どころかいつも以上に大したことはしなかった。

明日の夜のビーフが楽しみなどというスケート談義で盛り上がり、ただベッドの上でじやれあつて遊んだ。まるで二匹の仔猫のように。

そうこうしているうちに、このところ睡眠不足が続いていた愛之介は、珍しく睡魔に襲われ、当然ランガも一日の生活リズムに逆らうことなく、さつさと瞼を閉じようとしていた。どちらが先に眠りについたかなんてわからない。おそらくほぼ同時のタイミングだったのだろう。

まあ、そんなものだ。

それでも自分よりほんの少しだけ小柄なランガを腕の中にすっぽりと包み込めば、何とも言えない多幸福感に全身が満たされる。そして安らぎの中で深い眠りへと落ちていった。

久々の熟睡だった。夜明け前にうつすらと目が覚めた。空は白みはじめているのだらう。カーテンから薄ぼんやりとした光が漏れていた。かたわらのランガはまだ夢の中だ。そのあどけない寝顔に愛おしさが胸が熱くなる。

ふと甘く涼やかな香りが鼻腔をくすぐるのを感じた。目を凝らせば薄明かりの中スタン

ディングブルーのシルエットが視界にあった。

シャクヤクとスズランが放つ香気は、出しゃばることなく綺麗で透明感がある。

そういえば、シャドウが氣を利かせてシャクヤクの品種名のメモを入れてくれていた。中でも純白のシャクヤクの名前が印象的だった。メモには〈深山の雪〉と書かれていた。

〈深山の雪〉——雪か。

目が覚めスマホを取り返したランガは、白いシャクヤクの花言葉を調べるのだらう。花言葉を知ったとき彼は、どんな反応を見せてくれるのだろうか。それは少し怖くもあり、とても楽しみでもある。

ランガの水色の髪を撫で、そつと口づけた。

ねえ、ランガくん。白いシャクヤクの花言葉はね。

——『幸せな結婚』——

《了》

## 君は脱ぐとすごい

慌ただしかったランチタイムが終わり、ドアプレートを〈open〉から〈closed〉へとひっくり返して店内に戻れば、スケーター仲間たちがまだ居座っていた。この時間帯は本来<sup>シアラール・チェ</sup>Sala Iceの休憩時間。それでも六人全員揃うなんてことは滅多にないのだ。大目に見てやろう。

「そう言えばさあ、次の次のSだけど」

アイスカフェラテのストローを咥えた唇が唇を尖らせ切り出した。

それに応じてシャドウが渋い顔で腕を組んだ。

「ああ、あれだろ？」

言いたいことは理解した。多分ここにいるスケーター皆同じ不満を抱えているだろう。

「ハロウインの悪夢再びだな。残りもののコーヒーだけど飲むか？」

訊けば「はい」と全員が手を上げた。

真っ先にコーヒークップを差し出した薫ことチェリーが苦々しげに吐き捨てた。

「ふん、あいつ壊れっぱなしだな。誰かさんのせいで」

誰かさん——全員の視線がランガに集中した。

ランガは、俺の顔に何かついている？　と言いたげな表情で頬を触り首を傾げただけだった。まったくわかっていないのは彼らしいといえばらしい。

実也は携帯ゲーム機から目を離そうとしない。

「でさ、みんなどうするの？　僕はもちろん不参加。つき合ってらんない」

「行くわけねーだろ！」

ほぼ全員が声を揃えた。ただひとりランガを除いて。

ハロウィンイベントのSでは、なんでもいいから仮装することが参加条件だった。このときは本人申告の仮装であれば問題なかった。普段から仮装衣装みたいなシャドウ、チェリー、実也、ジョーはいつもどおりのコスチュームでこれは仮装だと言い張った。

ところが、今度のSはメイドの日にちなので、参加者全員メイドコスプレをすることが条件になるという。誰もが呆れた。バカバカしくて突っ込む気にもならない。おそらく参加者などひとりもいるわけない。いたとしても悪ノリするごく一部のガールズスケーターくらいだ。

「大体メイド服なんて用意できるわけねーだろ。ランガ、お前も行かないだろ？」

「え？　せっかくSで滑れるのに。俺行きたいんだけど。暦も行こうよ」

「何バカ言っているんだよ！　お前わかつてんのか？　メイド服だぜ。メイド服を着ていないと参加できねーって言うんだぞ。お前メイド服ってなんだか知ってんのか？」

暦は唾を飛ばし大声を張り上げると、ランガの両肩を掴んでゆさゆさと揺すった。ランガはムツと唇を曲げ暦を睨む。

「バカにするな。そのくらい知っているよ。メイド喫茶という日本の伝統文化についても勉強したし」

「いや、そんなの伝統じゃねーし。勉強したって役に立たんし……って、そうじゃない。わかつているのに参加したいとお前頭大丈夫か？　だいたいメイド服なんて持つてねー……だろう……が……」

声徐徐に小さくなっていく。途中で何かに気がついたのだろう。やがて黙り込むと、ランガの顔をまじまじと覗き込んだ。

「まさか、またあいつが？」

「うん愛抱夢からメイド服が届いたんだ。これを着てくれば参加できるって。暦も一緒に滑ろうよ」

なんだそりゃ？ メイド服が届いただと？ 大人三人は何のリアクションも起こせず、口をあんぐり開けた。やはりハロウィンの悪夢の再来だ。

不参加を決めている実也は、ふたりのやりとりを無視して涼しい顔でゲームに集中している。

「いや、無理だから。そもそも俺はメイド服なんて持つてねーし」

「あるよ」

「へ？」

「俺の分と一緒に、暦と実也の分だつて三着用意してくれたんだ。ふたりに届けて欲しいって」

実也が反射的に携帯ゲーム機から顔を上げ何度も目を瞬かせた。

さすがに驚いたらしい。

「ええ？ 僕のものもあるの？」

「うん。ふたりとも帰りに俺の家寄つて。そのとき渡すから」

「俺と実也の分も用意するとか、あいつ何を企んでいやがるんだ」

「きつと気を利かせてくれたんじゃないかな？ 俺たち学生だからさ、買うのも大変だろ

うって。ただの親切心だと思う」

「「んなわけないだろ！」」

暦と実也に突っ込まれてもランガは「どうして？」ときよとん顔という間抜けヅラを晒している。

「いや、だからっ！」とそこから、喧々囂々の話し合いというか言い争いが始まったのが収束するのだろうか。

さて、そんな少年たちを横目に大人三人組。

「そもそもヤツの目的はランガだろうが。なぜ暦や実也の分まで送りつけてきたんだ？」

チェリーとシャドウのカップにコーヒーを継ぎ足しながらジョーが疑問を口にした。

コーヒーにミルクを垂らしシャドウが顔を上げる。

「ランガのせいで頭おかしくなったんじゃねえのか？ それしか考えられねえな」

一通りコーヒを注ぎ終え、ジョーはチェリーの隣に腰掛けた。

「ランガのせいかな。前みたいにな人を巻き込んでの無茶な滑りは見られなくなったし、何よりも楽しそうに滑るようになったんだから悪いことばかりじゃなかったけどな。そう思う

だろ？ 薫

目を閉じ腕を組んでいたチェリーが顔を上げ、頷いた。

「なるほど。読めたぞ」

「何がだ？」

「おそらくだが、ヤツはもちろんランガにメイド衣装を着せたいのだろう。他は多分興味ない」

シャドウが頬杖をつきコーヒーをすすった。

「じゃあ、なんで暦や実也の衣装まで用意したんだ？」

「念の為だろう」

「念の為って、どういう意味だ？」

「ランガひとりのメイド衣装だけを用意してみろ。間違はなく暦も実也も不参加になるだろうな。その場合、ランガがひとりでも参加するかどうか怪しいと踏んだんだ。その確率を上げるために暦と実也、ふたりの衣装も用意した」

シャドウが苦々しげな表情で吐き捨てた。

「なるほど。納得したぜ。したくはなかったがな！」

三人は、あーでもないこーでもないと言い合う子供たちをチラリと見てため息をついた。やがて話がまとまったのか、チェリー、ジョー、シャドウの座るテーブル席へ、暦がやってきた。

「話はまとまったのか？」と、ジョーが尋ねた。

浮かない表情で、暦は後頭部をバリバリと掻いている。

「うん、まあ」

「しけたツラしているな」

「参加することになった。押し切られたんだ。二対一じゃ分が悪すぎてさ」

「二対一つて、まさか実也も乗り気なのか？」

「あいつ『メイド服着るのなら、可愛い今が最後のチャンスだよ』とかなんとか。わけわかんねーだろ！ ランガと実也のふたりだけというのも何か心配だし。当日ジョーたちは来ないんだろ？」

「そのつもりだが」

「俺、実也より年上だしランガよりS歴長いから一応、面倒見てやらないとって。だからつき合うことにした」

「まあ頑張れよ。そんでもってせっかくなんだから、楽しんでこい！」

気乗りしていなさそうな曆の背中をバシッと叩き根拠のない激励の言葉を押しつけた。

そんなふたりの様子を横目で見ていたチェリーが「ふん」と鼻を鳴らしてカップをソーサに置いた。

「これまでのところ、すべてヤツの思惑通りだな」

頬杖をついてジョーも同意した。

「そうだな」

「え？」とシャドウが、ふたりの顔を交互に見て、やつと気づく。

「そうか、そういうことなのか。そりや、あつたまくるな」

「ああ、本当つにむかつ腹の立つ」

ジョーとチェリーの声が綺麗にハモった。

「珍しく気が合ったな、薫。このまま、ヤツの思い通りにさせてやるつもりか？」

チェリーは口元を扇で隠し、横目でじろつとジョーを見た。

「冗談ではない」

それに応えてジョーもニヤリとした笑みを浮かべ、シャドウもうんうんと何度も首を縦

に振った。

「だな！」

意見は一致した。

## S

さて当日のメイドS（仮）。着替えの時間も考えた方がいいとかなり早い到着になった。自分達以外まだ誰も来ていない。もっとも他に来るやつがいるのかどうか怪しいが。

「へえ……」

なぜか感心しているランガをよそに、暦と実也はお腹を抱え、ゲラゲラと笑い転げている。

実也はともかく、暦、お前が笑える立場か！

「く、苦しい……笑い死ぬ！」

「触っていい？」と断りを入れ、ランガはジョーとシャドウの三角筋から上腕二頭筋を撫でる。

「すごいね、ジョー。シャドウもだけど、いつも以上に、筋肉が目立つよ」

ジョーやシャドウが身につけているメイド服についての言及は一言もなく、スケート絡みの筋肉にしか興味を示さないこいつは変わっている。というか生粋のスケートバカだ。やつと落ち着いた暦が、息を整えて顔を上げた。

「まさかジョーたちが参加するとは思わなかったよ。チェリーは……いつもの袴に、新しいのは白いフリルのエプロンだけだよな？」

チェリーは黒っぽい普段着の和服を選び、豪華なフリルつき白エプロンを足しただけの手抜きだ。

「和装メイドなるものがあることを知って、これが一番楽だという結論になった。こんなアホなイベントに手間かけてられん」

「ジョーとシャドウのメイドコス、すごい破壊力だね。どこで手に入れたの？」と実也。

筋肉を見せびらかしつつジョーが解説した。

「調べたら通販で男性用メイド衣装というのがあって、そんな高くなかったしな。モデルは髭ヅラのおっさんだったから、俺たちでも大丈夫だろうと考えた。お前たちだけでは心

配だったから思い切って参加することにした」

そして、メイドコスの少年たち三人を頭のでっぺんから足のつま先まであらためてじっくりと観察した。要は品定めだ。

この中で、女の子に見えるのは……実也くらいだ。まだ男女差の少ない子供骨格の実也は微妙なバランスでボーイッシュな女の子に見えないこともない。おそらく化粧をすれば完璧だ。

「可愛い今が最後のチャンス」か。こいつは自分をよく知っていやがる。アピールポイントもだ。あと数年、高校生になるころにはガラッと体つきも変わっていくのだろうから今のうちなのは確かだ。

だが暦とランガは、流石に無理がある。誰がどう見ても女には見えない。こんなゴツい女がいるか！ 肉づきの問題ではなく、この歳にもなれば男女で骨格が違いすぎる。

暦は細めとは思っていたが、筋肉が不足している。スケーターとして技術を上げるのならもつと筋肉をつけた方がいい。でないと怪我をしやすくなる。ランガはしつかりとした骨格と無駄なく綺麗についた筋肉。恵まれたアスリートとしての肉体だ。これも才能のうちなのだろう。

注目されていると感じたのか、実也がいきなりクルリとターンをした。ミニスカートがフワッと広がる。

「どう？ やっぱ僕が一番可愛いよね！」

暦が頭を抱える。

「俺、可愛いなんて言われたくねーし。そういうば、意外にもランガがちつとも女に見えないんだよなあ」

「意外って、なんだよ。暦」

「ん、いやお前ってキレイ系の顔だろ？ だからもう少し女に見えるのになって」

確かにランガは化粧をして首から上だけを見れば、絶世の美女に見えるだろう。だが、首の下がどうやつても男だ。多分だが、今の実也くらいの年齢だったころなら、完璧な美少女に見えただろう。見てみたい気がしないでもない。

さてこんなランガを見て、愛抱夢<sup>あいづむ</sup>がどういった顔をしてくれるのか、見ものだ。

と、いきなり降ってきた声に振り返った。

「おや？ 早いね。それにしても意外な人たちも参加するようだ。もちろん歓迎しよう」赤いマタドール衣装の男がボードを滑らせ近づいて来る。噂をすればなんとかだ。噂を

したのは心の中だが。

チェリーが眉をひそめた。

「お前はいつも通りの格好か」

「僕はここを運営する神だからね。何を着ようが自由さ」

「勝手なことを」

「それより、ランガくん！」

愛抱夢はランガの周りをクルクルと滑りながら、ランガの全身をねっとりとした視線でなぞつていく。

「実にラブリーだよ！ 素晴らしい。僕の見立て通りだ。しっかりとした骨格と筋肉にメイド衣装が相まって実に美しい。君は本当に脱ぐとすごいタイプだつて僕は知っているからね」

「どうも」

ニコリともせずランガは応えた。

「脱ぐとすごい？」

シャドウが反応した。

「なぜ、あいつがそんなこと知っている？」

チェリーも続いて首を傾げた。

「ふたりとも、深く考えるのは、やめよう。今はまだな」

言えば、チェリーもシャドウもげんなりした様子で嘆息した。

愛抱夢は、ランガから実也に目を向けた。

「実也。君はあと数年待った方が良さそうだ。今だと女の子に見えてしまう」

女装させておいて、女の子に見えてしまうことがマイナスポイントだと？　やはりこいつの頭の中はさっぱりわからん。

「愛抱夢が何を言おうと、僕が一番可愛いのは事実さ」

実也はあくまでも強気だ。

「もちろん君が一番可愛いのは認めるよ。だが僕はそんな可愛さを求めてはいないんだ。

実也くん」

実也は思いつきり嫌そうな顔をした。

「げっ！　愛抱夢なんかに求められてたまるか！」

最後に愛抱夢は唇をチラリと見て言った。

「あー、よく来たね。赤毛くん。まあ君のメイド姿はどうでもいい」

「ああー？」飛びかかりそうになつてゐる暦の肩をつかんだ。

「ムキになるな」

「わかつてらあ。こつちは着たくて着てゐるわけじゃないのに、すっぱームカつく」

「大丈夫だよ。暦は十分可愛いと俺は思う」

「ランガ……それ、ぜんっぜんフオローになつてねーから！」

ふと気がつくと、周囲に人だかりができていた。なんと多くのむさ苦しいメイドスケーターたちがいつの間に集まつてゐるではないか。これは想像でしなかつた。いや、集まつたスケーター皆が皆そう思つてゐるに違ひない。

愛抱夢のやつ、ざまあみろというものだ。ランガとくつついてくるおまけだけで悠々と滑れると思つていただろうが、そうはさせるか。

周囲をぐるりと見回して愛抱夢が口を開いた。

「ほう……。これは想定外。だが、皆が参加してくれて嬉しいよ！ 僕はね……」

言いながら、愛抱夢はランガの手を両手で包むように握り顔をぬつと寄せた。

「君がいてくれれば、あとは誰もいなくても、大勢いても関係ないんだ」

「愛抱夢？」

ランガはいきなり手を握られ目をパチクリさせている。

「さあ僕と滑ろう。ランガくん！ 他の皆は僕たちの後に続くんのだ。追いつけるかな？」

「ウオー！！」

集まったメイドたちから地鳴りのような歓声が轟いた。

そのままグイッとランガの手を引き、愛抱夢はスタート地点へと駆け出した。ランガも迷うことなく一緒に走っていく。

「勝負だ、愛抱夢。俺、負けない！」

「僕もだよ。ランガくん」

結局、愛抱夢をただ喜ばせるだけだったようで俺たちの苦労はいったい？ と頭を抱えつつ、こうなった以上、徹底的に楽しんでやろうと発想を転換したのは皆同じだろう。

見れば、チェリーもシャドウも暦も実也も、全身に闘志をみなぎらせている。ジョーも負けじと、ダッシュでスタート地点へと急いだ。

《了》